

刈谷市制施行70周年記念事業

かけがえのない“わたし”を生きる
～ものづくりのまちから発信～



日本女性会議 2020 あいち刈谷

Japan Women's Conference
2020 in Aichi KARIYA

ミライク会議

報告書

2020
11/13(金)14(土)15(日)

主催：日本女性会議2020あいち刈谷実行委員会、刈谷市



日本女性会議 2020 あいち刈谷

Japan Women's Conference 2020 in Aichi KARIYA

大会テーマ

かけがえのない“わたし”を生きる ～ものづくりのまちから発信～

日本女性会議2020あいち刈谷は、性別だけでなく、年齢、国籍、働き方、障がいの有無など、様々な立場にいる人々が、それぞれ「かけがえのない存在」として尊重される社会の実現を目指す「みんなの会議」です。

3つのコンセプト

「生活と仕事の調和」の創造

長い人生を視野に入れ、地域や家庭での日々の生活を豊かにおくることを基礎においた「生活と仕事の調和」(ライフ・ワーク・バランス)のあり方を考え、提案します。

多様性の尊重

人の多様なあり方、生き方が尊重される社会のあり方を考えていきます。性別や年齢、国籍、障がいの有無などを問わず、誰でも参加できます。

世代をつなぐ

男女共同参画社会の実現に向けた取組を積み重ねてきた世代と、子どもたちを含む若い世代がともに学び、交流することで、男女共同参画の課題への取組を次世代へ受け継いでいきます。若い世代の主體的な参画を応援します。

大会シンボルマーク



刈谷市の花である「カキツバタ」をシンボルのモチーフに採用し、広がり
の会であることを花で表現しています。
花の中央に人が集結したイメージを配
しています。

大会ニックネーム

ミライク(MeLike)会議

- ★みんなの^らい^くを集めて、^未来^のら^いふを^クリ^エイト!
- ★「自分らしさ」が大切にされ、それぞれが自分の「好き」を実践できる
選択肢の多い未来を目指す。

※『ミライク』は、学生ボランティアの皆さんが中心となって考えた、あいち刈谷大会の愛称です。



大会宣言

私たちは、「ものづくりのまち刈谷」から「かけがえのない“わたし”を生きる」をテーマに掲げ、性別だけでなく、年齢、国籍、働き方、障がいの有無などにかかわらず、一人ひとりが大切にされる社会を目指す「みんなの会議」として議論を重ねてきました。

1975年の国際婦人年以降のジェンダー平等社会実現に向けた世界的潮流の中、1984年に名古屋市で第1回日本女性会議が開催されました。2020年、刈谷市での開催となった今日までの間、男女共同参画社会の実現に向けた法整備と施策は着実に進められてきました。しかし、依然として女性の地位、生活を大事にした働き方の実現、人生を支える社会の仕組み、多様性の尊重など、更に前進させるべき課題があります。

これらの課題について、次代を担う若者たちとともに考え、すべての人が「自分ごと」として捉えられるようにしていくことが大切です。

また、新型コロナウイルス感染症をめぐる事態は、ジェンダーに関しても、私たちが生きる社会の弱さを表面化させました。その一方で、新しい生活と仕事のあり方や人のつながり方に気づきを与え、日本女性会議オンライン開催の実現など、新たな挑戦に希望を見出すことができます。

ここに、私たちは宣言します。

- 1 私たちは、一人ひとりが「かけがえのない“わたし”を生きる」ことができる社会の実現に向けて、「それぞれの立ち位置で今、できること」を大切に、あらゆる課題に取り組みます。
- 1 私たちは、長い人生を視野に入れ、「生活と仕事の調和」(ライフ・ワーク・バランス)が実現できる社会を目指し、職場・行政・市民が協働して取り組みます。
- 1 私たちは、ジェンダー平等と人の多様なあり方、考え方が尊重される地域社会の実現に向けて、世代を超えて人々がつながり、語りあうことができる環境をつくります。

ものづくりのまち刈谷からの発信が、大会に参加された皆さまの人生に刻まれること、更に新たなネットワークづくりにつながることを願っています。

令和2年11月14日

日本女性会議2020あいち刈谷



目次

CONTENTS

主催者あいさつ	8
大会日程	10
全体会	
基調講演（講師：上野 千鶴子氏）	12
記念講演（講師：大谷 貴子氏）	22
記念シンポジウム（シンポジスト：宮嶋 泰子氏ほか）	30
分科会・エキシビション	
分科会 A [高齢社会]	49
分科会 B [多文化共生]	51
分科会 C [DV]	53
分科会 D [防災]	55
分科会 E [男性にとっての男女共同参画]	57
分科会 F [ライフ・ワーク・バランス]	59
分科会 G [性の多様性]	61
分科会 H [女性が輝けば地域も輝く]	63
分科会 I [子ども・子育て]	65
エキシビション [ミライク若者会議]	67
あゆみ&まとめ	
あゆみ	70
PR広報物	76
関係記事掲載新聞等	77
申込者集計	85
参加者アンケート	87
関係者アンケート	114
後援・実行委員会等	119
協賛	121

写真で見る ミライク会議

配信拠点準備

ミライク会議の様子をオンラインで全国の参加者にお届けするため、大会前日に、配信の拠点となるスタジオなどを設営しました。



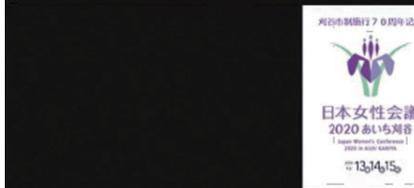
オープニング

華々しい映像とともにスタートしたオープニングでは、大会長（刈谷市長）、実行委員長からのあいさつと、前回残念ながら中止となった「日本女性会議2019さの」大会長（佐野市長）のご挨拶、そしてさの大会実行委員長からバトンを受け取りました。



基調講演

ジェンダー研究の第一人者である上野千鶴子氏による基調講演では、『コロナ禍とジェンダー』と題したご講演と、ミライク会議に学生ボランティアとして関わっていた地元大学生との質疑応答も実施しました。



分科会

1日目の午後と2日目の午前中にかけて、3セッション、合計9つのテーマの分科会を開催。講演やパネルディスカッションなどのほか、オンライン上でグループワークをする参加型の企画などオンラインならではのプログラムとなりました。

分科会A 【高齢社会】



分科会B 【多文化共生】



分科会C 【DV】



分科会D 【防災】



分科会E 【男性にとっての男女共同参画】



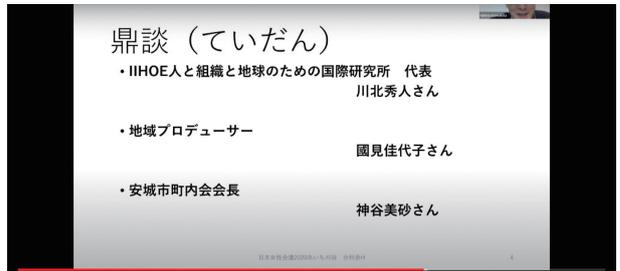
分科会F 【ライフ・ワーク・バランス】



分科会G 【性の多様性】



分科会H 【女性が輝けば地域も輝く】



分科会I 【子ども・子育て】



記念講演

記念講演では、骨髄バンク設立の立役者である大谷貴子氏による講演『女性が社会を動かすときー日本骨髄バンクのケースから』を実施しました。



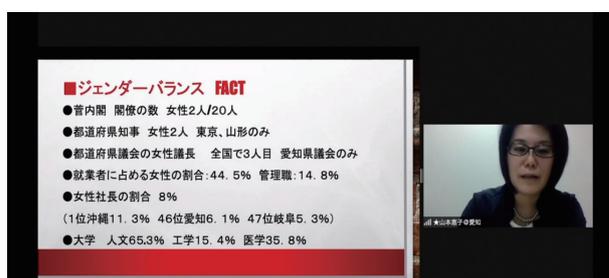
記念シンポジウム

スポーツ文化ジャーナリストの宮嶋泰子氏による講演の後、様々な立場でスポーツに関わるシンポジストも交えた議論が交わされました。



エキシビション

『ミライク若者会議』と題したエキシビションでは、講師2人からのミニ講演の後、パネルディスカッションと感想の共有のための「放課後タイム」を設け、参加者同士の交流が図られました。



エンディング

エンディングでは、実行委員長による大会総括が行われ、大会長から大会宣言が発信されました。そして、ミライク会議の想いは次期開催地・山梨県甲府市へとバトンの形で託され、大会史上初めてのオンライン実施となった「日本女性会議2020あいち刈谷」は幕を閉じました。



主催者あいさつ

大会長

稲垣 武 (いながき たけし)

刈谷市長



大会史上初のオンライン開催となりました「日本女性会議2020あいち刈谷」、ミライク会議は、全国各地から多くの方にご参加いただき、盛会のうちに終了することができました。これもひとえに皆様のご支援、ご協力によるものでございます。心から感謝申し上げます。

昨年の3月は、新型コロナウイルス感染症がまさに拡大し始め、市が主催するイベントにも少しずつ影響が出始めた、そんな状況でした。当時はまだ、世の中が一変するこれほどの状況になるとは思ってもよらず、その後続くコロナ禍は、私たちの想像をはるかに超えるものでした。世界中に甚大な影響を与え、東京オリンピック・パラリンピックの延期を始め、本市におきましても万燈祭りやわんさか祭りなど市民の皆様が楽しみにしている伝統行事、恒例行事、数々のイベントが次々と中止となり、地域活動や経済活動など社会活動の多くが自粛を余儀なくされました。

そのような中で「モノづくりのまち刈谷」から「今だからこそ」のメッセージを発信していきたいという想いで、6月にオンラインでの開催を決断し、急激な舵取りで方向転換をいたしました。実行委員会をはじめとする大会関係者はもちろんのこと、参加者の皆様、ご協賛、ご後援いただいた皆様など多くの皆様のご理解、ご協力なくしては実現できませんでした。

おかげさまでミライク会議は、2,300人を超える参加者が、男女共同参画に関する諸課題について様々な視点から、世代を超えて議論を深め、共に語り合うことができました。コロナ禍の現状を踏まえた議論も展開され、「今だからこそ」の内容で、モノづくりのまち刈谷ならではのチャレンジが全国へ発信できたことを大変意義深く感じています。

ミライク会議で得た知識や経験、ネットワークを生かして、一人ひとりが「それぞれの立ち位置で今、できること」を、今後も一つ一つ着実に積み重ねて、次の世代につないでいくことが第37回目の日本女性会議を受け継いだ本市の責務だと考えています。

本市では現在、第3次刈谷市男女共同参画プランの策定に向けて準備を進めています。ミライク会議での大会宣言を、国際的な目標であるSDGsとともに第3次プランにおいて重要な視点として位置づけ、本市における男女共同参画のより一層の推進を図ってまいります。

また、来年度は、ミライク会議の後継事業として「ミライク推進事業」の実施を計画しています。ミライクに込められた「自分の“好き”を实践できる選択肢の多い未来を目指す」という想いのもと、世代を超えて人々がつながり、語り合うことができる、ミライク会議の成果を今後も受け継いでまいります。

結びに、ミライク会議にご参加いただいた全国の皆様、ご支援、ご協力いただきました企業・団体の皆様、ご尽力いただきました実行委員会関係者及びサポータークラブの皆様、約3年間の活動の中で関わっていただいた全ての皆様に改めて深く感謝申し上げますとともに、“かけがえのない”一人ひとりが尊重される社会の実現に向けた引き続きのご協力をお願いし、私の挨拶といたします。



主催者あいさつ

実行委員長

山根 真理 (やまね まり)

刈谷市男女共同参画審議会 委員長
愛知教育大学 教授



昨年11月に開催しました「日本女性会議2020あいち刈谷」に、全国から多くの方々にご参加いただき、誠にありがとうございました。実行委員一同、心よりお礼申し上げます。

2020年3月以降の新型コロナウイルス禍のなか、6月の時点でオンライン会議に切り替える決断をし、直前まで試行錯誤しながら開催にこぎつけました。プログラム構成は当初の計画を受け継ぐ形で、基調講演、9つの分科会、記念講演、記念シンポジウムが行われ、最終日にはエキシビションとして「ミライク若者会議」が開催されました。上野千鶴子氏による記念講演は「コロナ禍とジェンダー」にテーマを変更し、100年に一度と言われるバンデミックのなかで、わたしたちが直面している事態をジェンダーの視点で読み解く講演の後、大学生との交流がなされました。お陰さまで盛会となり、合計2,301人（うち学生311人、男性415人）の方々にご参加いただきました。会議の実現のためにご支援、ご協力いただきました皆様に、あらためましてお礼を申し上げます。

会議ではそれぞれのプログラムに「かけがえのない“わたし”を生きる ～ものづくりのまちから発信」のテーマが共有され、『『生活と仕事の調和』の創造』『多様性の尊重』『世代をつなぐ』の三つのコンセプトを受けとめて展開されました。会議を終えてあらためて、男女共同参画の基本は「人権」であり、性別、性的指向、性自認、国籍、年齢、障がいの有無などを問わず、一人ひとりのかけがえのない“わたし”が大切にされ尊重されることが根本にあることを確認しました。ジェンダー平等は性別、年齢等を問わず全ての人が自分自身の人生を豊かにする土台です。

また会議を通して、ライフとワークの新しい関係、地域での繋がり方、生活を中心にすえた防災のあり方、多様性尊重を可能にする環境を創ることなど、新しい共生の形を創造する道筋が見えてきたことも大きな収穫でした。

第37回日本女性会議2020あいち刈谷をファーストステップに、ジェンダー平等と人の多様なあり方、考え方が尊重される地域社会の実現に向けた「まちづくり」とネットワークの構築を、SDGsによって展開される多様な取り組みとも連帯しながら、すすめていきます。その思いをこめて、日本女性会議のバトンを甲府市に引き継ぎました。

最後になりますが、「日本女性会議2020あいち刈谷」に連なる全ての皆様の、今後のいっそうのご活躍をお祈りするとともに、この報告書がジェンダー平等社会の実現への一助となることを願い、ご挨拶とさせていただきます。



大会日程

月 日	時 間	内 容
1日目 11月13日(金)	10:00-10:30	オープニング
	10:30-11:30	基調講演
	13:00-14:30	分科会 セクション1 (A~C)
	15:00-16:30	分科会 セクション2 (D・E)
2日目 11月14日(土)	10:00-11:30	分科会 セクション3 (F~I)
	13:00-14:00	記念講演
	14:15-15:55	記念シンポジウム
	16:00-16:30	エンディング
3日目 11月15日(日)	10:00-13:00	エキシビション

分科会一覧

分科会	テーマ
分科会A 高齢社会	人生100年時代 ~高齢者のつながりづくり~
分科会B 多文化共生	多様性を活かした地域づくり ~“多文化”を地域の魅力に!~
分科会C DV	だまっとれん! コロナ禍でもDVを生み出さない社会へ
分科会D 防災	生き抜く防災withコロナ ~アウトドアから学ぶ新しい知恵~
分科会E 男性にとっての 男女共同参画	みんなで語ろう リモート座談会
分科会F ライフ・ワーク・ バランス	一人一人が輝く未来 ~モノづくりの愛知から~
分科会G 性の多様性	生と性の多様性をみとめあうために ~教育・企業・行政の立場から~
分科会H 女性が輝けば 地域も輝く	わたしが元気に活躍する地域づくり
分科会I 子ども・子育て	子どもたちの未来をプロデュースする ~今やるべきこと、今できることをみんなで考えよう~



全体会

- 基調講演
- 記念講演
- 記念シンポジウム

基調講演

コロナ禍とジェンダー

■日時：11月13日(金) 10:30~11:30



菅野勝男撮影

<講師>

上野 千鶴子

社会学者／東京大学名誉教授

認定NPO法人ウィメンズアクションネットワーク (WAN) 理事長

<質問者 (学生ボランティア) >

安藤 もも香

椋山女学園大学4年

稲垣 明里

愛知教育大学4年

山本 真帆

南山大学4年

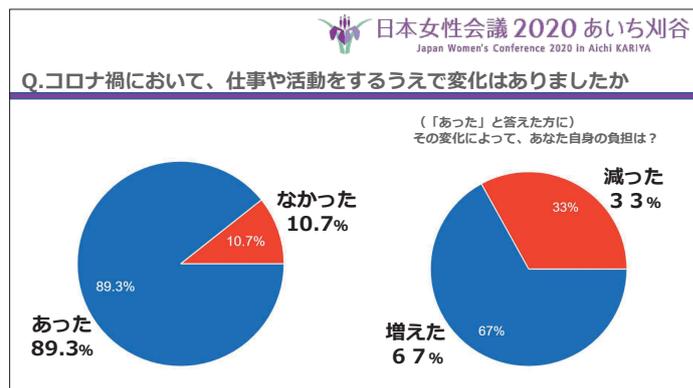
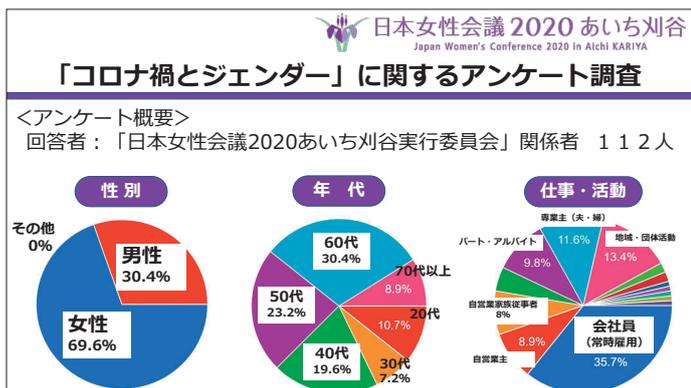
(上野) おはようございます。本日はよろしく申し上げます。日本女性会議は1984年に始まって36年続いているとのこと。去年、中止になったというのは、災害のためですから無理もないのですが、本当にすごいですね。また、先ほどご挨拶なさった佐野市の市長さんも大会長さんも、原稿を読み上げておられないことに、本当に感動しました。

今年は中止しないでオンラインでの開催となりましたが、いろいろなテクノロジーがあるお陰で、どこにいても移動しなくても、車椅子でも寝たきりでも参加できる、そして外国にいても参加できるというのは、すごいことだなと思います。もちろん、皆さんと直接お会いしたいですけども、もしこれが大きな会場だったら、たぶん上野の顔はこの親指くらいにしか見えないでしょう。こういう風にお目にかかれたのは本当に嬉しいと思います。では早速、始めたいと思います。

(司会) では、まず初めにこちらのジェンダーに関するアンケート資料をご覧ください。こちらのアンケートは、ミライク会議の関係者112人が回答したものです。回答者の属性は女性がおおよそ7割、年代は40代から60代が7割強となっています。また、仕事や主な活動の比率といたしましては、ご覧のとおりとなっています。そして「コロナ禍において、仕事や活動するうえで変化はありましたか」との問いに対しては、9割近くの方が「変化があった」と答えています。その内、7割弱の方が、「負担が増えた」と答えていらっしゃいます。

変化の内容については、コロナ禍の中で仕事や活動がなくなり、物理的、時間的負担は減ったものの、コロナ対策などで神経を使い、精神的な負担は増えているなどの声が多く聞かれました。

また、「家庭面での変化はありましたか」との問いに対しましては、64.3%の人が「あった」と答え、そのうち83%が「負担は増えた」と答えています。変化の内容につきましては、ご覧のとおりです。コロナ禍で、学校の休校や在宅ワークによって、家庭内での負担が激増していることに対するストレスを訴える声が多かった一方で、生活を見直す



日本女性会議 2020 あいち刈谷
Japan Women's Conference 2020 in Aichi KARIYA

Q.変化の内容について、自由回答 (原文まま)

- ・集まりが出来なくなった分、安否確認がとりにくくなり、かえって負担が増えた(肉体的にも精神的にも)
- ・活動団体の催しがなくなった分、準備などに掛ける時間が減った。
- ・オンライン、オンデマンドと対面を併用することが大変です。時間的に「できてしまう」ために仕事をし続けてしまいます。そして、仕事がたまっていきます。
- ・気を遣うことが増えた。神経質にならざるを得なくなった。
- ・現在も週の半分は在宅勤務になり、通勤の負担が減った

日本女性会議 2020 あいち刈谷
Japan Women's Conference 2020 in Aichi KARIYA

Q.コロナ禍において、家庭面での変化はありましたか

(「あった」と答えた方に) その変化によって、あなた自身の負担は？

変化の有無	割合
あった	64.3%
なかった	35.7%

負担の変化	割合
増えた	83.1%
減った	16.9%

日本女性会議 2020 あいち刈谷
Japan Women's Conference 2020 in Aichi KARIYA

Q.変化の内容について、自由回答 (原文まま)

- ・旦那の休みは増えたものの特に負担が減るということにはなかった。むしろ子供をみないといけない時間が増えたので気がおかしくなりそうだった。
- ・子供達の休学中や主人の在宅で時には昼食の準備をする為、自分の時間が拘束される。掃除の時間も音がうるさいと言われる為、思うように家事が進まない。自分の自由時間がなくなる。
- ・夫がほぼ在宅勤務になり、仕事の合間に私の苦手な家事をしてくれるようになった。
- ・過去は忙しくて着手できなかった家の中の仕事を隙間時間でできるようになり、負担は増えたが、ライフワークバランス的にはプラスである

日本女性会議 2020 あいち刈谷
Japan Women's Conference 2020 in Aichi KARIYA

Q.コロナ禍のジェンダートピックのうち、気になったものは？ (複数回答可)

ジェンダートピック	件数	割合
DVの深刻化・顕在化	64	57.1%
児童虐待の増加	61	54.5%
ジェンダー格差の広がり	21	18.8%
孤立	47	42%
貧困問題	55	49.1%
在宅勤務による家事負担増	53	47.3%
LGBT等への配慮	9	8%
働き方の改革	83	74.1%
いじめ	17	15.2%
いじめ	17	15.2%
誹謗中傷	2	1.8%
誹謗中傷	1	0.9%
閉塞感に由来する排他的な風潮	1	0.9%
閉塞感に由来する排他的な風潮	1	0.9%
閉塞感に由来する排他的な風潮	1	0.9%

N=112

きっかけとなったことを前向きにとらえる声もありました。

最後に「コロナ禍で話題になったジェンダートピックで気になったもの」としては、ご覧のものが挙げられています。働き方改革、DVの深刻化・顕在化、児童虐待の増加、加えて貧困問題、在宅勤務による家事負担増、こういったものに多く関心が集まったようです。皆様、ご参考になりましたでしょうか。それでは上野先生にご講演をいただきます。上野先生、引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

(上野) 何の話をしめようかと実行委員会の方にご相談したら、一番新しい話を聞きたいと。意欲的です。ですから、やはりコロナに触れることにしました。

「危機だ、危機だ、もうコロナの前には帰れない」とおっしゃいますが、危機の時には平常時の矛盾が拡大増幅して現れます。見たことも聞いたこともないことが起きるわけではありません。なんで日本ではこんなにPCR検査数が少ないのかといいますと、日本はSARS、MERSで大きな被害を受けなかったの、そのための準備ができていなかったからです。それから保健所はなぜこんなに疲弊しているのかといいますと、行政改革で半分ぐらいに(人員を)減らしてしまったとか、そういうことが次々と明らかになってきました。

コロナ禍のもとでジェンダーの視点から見たら、どういうことが起きたかということを考えてみたいと思います。最初の大きな影響は、突然の全国一律休校要請でした。専門家会議に諮りもしませんでした。春休みが明けるまで休校すると。では、学校へ行かない子どもの世話を誰がするのかといえば、働いている女の人たちです。もう日本女性の7割が働いていますから。誰が休まなければいけないかといいますと、父親でなく母親が休むことになります。仕事を休んだらお金が入らない、どうするのかということで、休業補償金が出ました。その休業補償金を、当初、風俗業に従事する女性には出さないといいましたが、関係団体が抗議をすることで、後から出すようになったりと、紆余曲折がいろいろありました。

コロナ対策の事後検証が民間臨調で始まっていますが、あの休校要請というのは、専門家が裏付けたものでもなければ、本当にやる必要があったのかどうかもよくわからない、と言われていました。休校要請のおかげで女性の仕事に大きなしわ寄せがきました。仕事を辞めなければいけないお母さんたちも増えました。

それから先ほどのアンケートにも出ましたが、お家にいてもやることがいっぱいあるわけです。落合恵美子さんという社会学者が、『家にいる』のはタダじゃない—家族や身近な人が担うケアの可視化と支援—というエッセイを書いておられます。誰が子どもや年寄りの世話をするのかという、今まで見えなかったものが見える化した、というのが大きな変化でした。

落合さんたちが直ちに緊急オンラインアンケートをやってわかったことは、女の人たちの家事の負担が、ひとしなみに増えたということです。皆さん方が取ってくださったアンケートと同じ結果です。しわ寄せが来たのはとりわけ非正



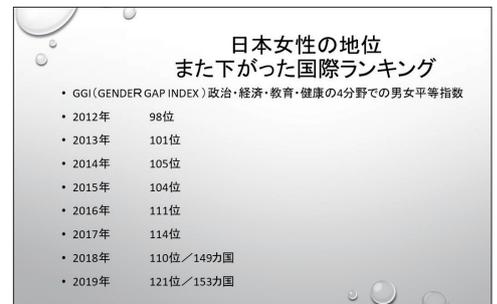
規雇用者でした。女性の非正規雇用が、もともとのすごく多いということがわかっていました。しかも非正規の契約期間が3年から1年へ、更に1年から6か月、3か月へと短くなってきているので、ちょうど派遣の契約打ち切りと重なる6月危機、9月危機が指摘され、次は12月危機が来るだろうと予測されています。

データを見ますと、2月から徐々に雇用減少が始まりましたが、7月までの間に116万人の非正規雇用の労働力が減少しています。7月には1か月で前年同月比120万、8月に123万の減。これから先も、もっと深刻になるかもしれません。その7割が女性です。

ご存知でしょうが、政権は、「202030」を掲げていました。2020年までに、あらゆる分野における指導的地位に占める女性の割合を3割にという数値目標ですが、これを聞いた時の私が最初の感想は、「なんで202050ではないのか」というものでした。というのは、女性は半分いるのですから50%は当然です。しかし30%という数字に意味があるのは、ある集団における少数者が3割を超えると、少数者は少数者でなくなり、組織文化が変わると言われている、その分岐点だからです。

「202030」が本当に可能なのかと、今問題になっている日本学術会議で検討しました。学術会議は宣伝が下手ですが、いいことをいっぱいやっています。2020年まであと3年余りの2016年に、本当にできるのかということ、行政、政治、企業、メディア、理系など、いろいろな分野の専門家に集ってもらい、実態と可能性を検討してもらいました。わかったことは、全ての分野で共通の答えは、「インポシブル（不可能）、だということでした。現状があまりにひどすぎて、達成できるとは思えないということです。

日本のジェンダーギャップ指数の世界ランキングは、年々下がっています。しかし日本がどんどん悪くなっているというわけではないのです。日本があまりに「変化が遅い」からです。夫婦別姓選択制さえ実現できない現状です。夫婦別姓選択制をやるのに、税金はまったくかかりません。それなのに、それすらできないという状態で全く変わらないままに、諸外国がジェンダー平等を努力して推進したために、どんどん取り残されたというのが、この世界ランキング121位の背景です。



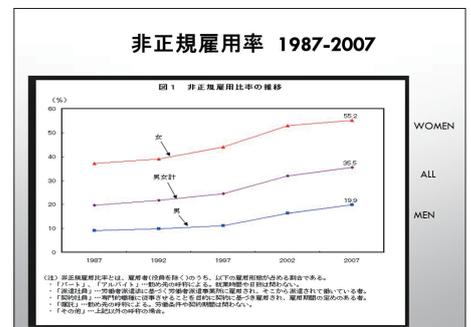
ジェンダーギャップ指数には4つの指標があり、「健康」「教育」分野は悪くありません。「政治」と「経済」分野がひどいのです。特に「政治」が最低です。国会議員（衆議院）で女性の占める割合は10%に足りません。今の菅内閣も、閣僚20人中2人です。

一方、日本学術会議、これがすごいのです。平成17年頃に改革をしまして、女性比率を20%に増やしました。私はこの時にこの20%の中に入りました。さらに増やして3割を超えています。日本学術会議は「202030」を達成しています。委員の選考方法を変えたからです。これだけのことをやっていることを、菅さんという人はちっとも認識していないようです。

もう一つの理由は「経済」ですが、何とんでも女性が稼げない、女性の稼ぎで暮らしていけないということが大問題です。特に非正規の賃金が正規に比べて非常に低いのです。男女間の賃金格差が大きい順に並べると、日本より格差が大きいのはエストニアと韓国ぐらいで、これは、OECDの中ではボトムラインです。

その理由は非正規雇用の多さです。今日本の非正規雇用率は全体の約4割ですが、全非正規者の約7割が女性です。そして男性の2割、女性はなんと6割近くが非正規労働者なのです。なぜこんなことが起きたのかといえば、犯人がいます。歴史を振り返ってみましょう。

「国連女性の十年」（1975年）からの約40年の変化をみてみますと、日本はそれなりの法律の整備をやってきました。99年には男女共同参画社会基本法ができて、「我が国21世紀社会における最重要課題の一つが男女共同参画」だと前文にあり、国策にすなりました。実は同じ90年代に労働法制の規制緩和が起きています。85年に雇用機会均等法ができました。でも、この恩恵を被ったのは総合職になれた、ほんの一部の女性でした。あとの大半の女性たちは一般職で、一般職もやがて派遣社員やパートなどの非正規雇用置き換えられていきました。こういう一連の規制緩和を「労働のビックバン」と言います。この影響を一番大きく被ったのが女性です。



犯人は誰か。法律ですから誰かが作ったんです。これについて、日本学術会議では『雇用崩壊とジェンダー』と題したシンポジウムをやりました。雇用を壊したのは誰かといえば、ちゃんと犯人がいます。それは政界、財界、官界のオジさんたちが、これから先、雇用の規制緩和をしてもいい、そこに女性と若者を突っ込んでもいいと、就職超氷河期の時に合意してゴーサインを出したからです。考えてみれば、この30年間の間に私たちは格差社会を作ってしまった。ですから、現在の格差社会は、人災といってもよいと思います。

少し宣伝しておきます。日本学術会議の女性会員たちは、象牙の塔に籠っているとされるかもしれませんが、岡崎



地裁の「性暴力事件」の無罪判決の際も、迅速に立ち上がりました。ちょうど去年の今頃です。実父からずっと性暴力を受けていた19歳の娘さんが告訴したところ、その実父が無罪になったということで、「まさか」とびっくり仰天して怒った法曹関係の女性たちが、急遽シンポジウムを開催したのです。こういう動きが今の刑法改正に結びついています。

コロナ禍で一番大きな打撃を受けたのはシングルマザーです。このところ、離婚率が増えて、3組に1組になりました。もはや結婚は一生涯ものではありません。おめでとうと言っても、いつまで続くかしらと心配になる時代です。

コロナ禍のもとで子ども食堂が、危機に陥りました。子どもたちが集まって食事するのは危ないということで閉鎖を余儀なくされるなど大打撃を受けたために、子ども食堂に支援をしようというキャンペーンが全国で起きました。しかし、子どもの貧困の原因は、当たり前ですが親の貧困です。子どもの貧困というと、誰もが大変だ、支援しようといいますが、親の貧困という原因は離婚だったりしますので、自己責任と言われてしまいます。女性の貧困には同情が集まらず、子どもの貧困には支援が集まるというのも変なものなのです。

「認定NPO法人しんぐるまざあず・ふぉーらむ」が「新型コロナウイルスの影響を受けて深刻化する母子世帯の暮らし」ということで、1,800人を対象に調査をしました。これが最新データです。皆さん方にご紹介したいので、お見せします。

「仕事や収入に影響があったか」という問いに対しては、7割ぐらいが「あった」と答えています。どんな影響かという、「仕事が減った」「収入が減った」など。「就労収入がゼロになった」という割合について、正規雇用と比べて、非正規雇用の人たちは雇い止めなどで、簡単に収入がゼロになってしまいます。ゼロになったら、一体どうやって食べていけばいいのでしょうか。夫婦が揃っているところなら、一斉休校でも片方が休んで、片方が仕事に行けるかもしれませんが、一人親では、仕事もしなければいけない、子どもの世話もしなければいけない。しかし子どもが病気だったり、虚弱児だったりしたら、子どもを優先せざるを得ません。一斉休校で仕事に影響があった人たちが、5割ほどいます。

何といっても胸をつかれたのは、自由回答です。「子どもに持病があったので自主休業したが、自己都合なので補償がない」、「勤め先がスーパーで三密。高齢の母の世話をしているから、感染のリスクを恐れて休業した」、「正社員はテレワークをしているのに派遣社員は出社を強制された」、「給食がなくなり食費が上がった」など。深刻なのは、「自分は1日2食に減らしたが、子どものおやつまで手が回らない」、「子どもに1日2食で我慢してもらい、自分は2日に1食で、子どもも私も体重が激減した」など。今時、こんな貧困や飢餓があるのかというような、悲痛な回答が集まってきました。

そうした大きなしわ寄せが女性たちにきている影響は、DVや虐待が増えたことにも表れています。性暴力は阪神淡路大震災でも、3.11でも増えました。男が家に閉じこめられて、ずっと一緒にいると、鬱々としたはげ口を求め弱い者いじめをする…。何と男らしいのでしょうかと思います。電話相談したくても、夫がいるから電話がかけられないということで、政府は「チャット相談窓口」を開設しました。夫の目を盗んでチャットで相談を入力している女の人の姿を想像すると、本当に胸が痛みます。

配偶者暴力センターの相談件数は、前年比6割増というデータが出ています。データはすごく大事です。でない、こういう危機の時に、一体現場で何が起きているのかがわかりません。きちんと記録を残しておくというのはものすごく大事です。

もう一つ大きな問題は、特別定額給付金一人10万円の世帯主給付でした。くれるのは良かったけれど、「うちは、家族4人だから40万円だ」と思ったお金は、全額世帯主にいきました。実は、3.11の時にも東電や政府から出た補償金が世帯主のところにいきました。世帯主給付の問題は、既に2011年の時から指摘されていたにもかかわらず、何も変わっていませんでした。

世帯主のところにお金がいくとどういことが起きるかということ、男性は家族の利益よりも自己利益の方を優先する傾向があるということが、残念ながらこれもデータでわかっています。お酒やギャンブルに使う傾向があります。もと

公断シンポジウム
岡崎「性暴力事件」から見えてきたもの
— 学術に何が出来るか —

2019年4月、名古屋地裁岡崎支部でひとつの無罪判決が下され、また、当時未成年だった女性が、実父からの性暴力を受け続けてきたという事件に対するものです。
この結果には、広範な人々から疑問や議論が提起されました。本シンポジウムでは、この「性暴力事件」を多様な視点から検討することにより、日本社会に潜む性暴力の深層に迫りつつ「学術に何が出来るか」を本邦します。

日時：2019年10月20日（日）13:00～17:00
(12:30開場)

場所：日本学術会議講堂（行政棟9F大ホール西口、徒歩9分）

● 参加費無料・申込不要
● プログラムは募集までご覧ください。

主催：日本学術会議
社会政策委員会・ジェンダー研究分科会
社会政策委員会・フロンティア研究分科会
社会政策委員会・ジェンダー研究分科会
社会政策委員会・ジェンダー研究分科会
社会政策委員会・ジェンダー研究分科会

新型コロナウイルス
深刻化する母子世帯の暮らし
～1800人の実態調査・速報～

2020年8月28日
認定NPO法人しんぐるまざあず・ふぉーらむ
& シングルマザー調査プロジェクト

その他・自由回答

- 子どもに持病があったので自主休業したが、自己都合なので何の補償もない。
- 勤め先がスーパーなので三密。高齢の母と同居するため、感染リスクを怖れて休業した
- 子どもの病気で何度か欠勤したら解雇された
- 正社員はテレワークをしているのに、派遣は出社を強制された
- 給食がなくなって食費が月に1万円増加した
- 自分は1日に2食に減らしたが、子どものおやつは買えない
- 子どもには1日2食で我慢してもらい、自分は2日に1食、子どもも私も体重が激減した
- 仕事がなく、外出も自粛して、孤立した。子どもと閉じこもっていると、自分まで変になりそう。
- PCもWiFi環境もないため、子どもがオンライン授業を受けられない。いじめにあうのでは、と心配。

もとあった社会保障の世帯単位制の欠陥が、3.11の時に露わになっていたにもかかわらず、9年経っても変化がないまま、現状を固定してしまっているということが、やはり見える化しました。

DVとか虐待とか、今コロナの下で起きている問題をどこに相談すればいいのか、という人たちのために、政府もホームページを作って相談窓口を案内していますがなかなか必要な人たちに届きません。私が理事長を務めるWAN（ウィメンズ アクション ネットワーク）ではサイトを作り、ここにいったら相談できますとか、定額給付金のもらい方はこうです、別居していても、こういう簡略な手続きでもらえますなど、政府が次々特例を作りましたから、そういう情報提供をしました。

コロナ禍でありがたかったのは、エッセンシャルワーカーと言われる人たちです。医療と介護の方たちには本当にご苦労をおかけいたしました。感謝の言葉もありません。それと私がすごいと思ったのは、宅配便の配達の人たちです。品物が届く度に手を合わせたい思いでした。ゴミ収集が止まらなかったということも、やはりすごいことでした。こうやってエッセンシャルワーカーと言われる人たち、つまりどうしてもオンライン化できない仕事があるということがわかり、見えない労働が見える化しました。

その中で医療には賞賛と感謝が集まりましたが、介護には注目が集まりませんでした。感染予防の情報もいらないし、資材や設備も十分ではない中で、介護現場の方たちは大変な思いをされました。にもかかわらず、今また介護保険が改悪されようとしています。このまま放っておいたら、どうなるかわからないと私と樋口恵子さんが危機感を抱いて、コロナ禍直前の1月に「介護保険が危ない!」という緊急集会を開催しました。



このようにこれまで目に見えなかったものが見える化する一方で、変化も起きました。その変化の1つにIT化の促進があります。その中で、日本はIT化に本当に立ち遅れているということがわかりました。

びっくりしたのが、リモート授業を始めた大学で、パソコンを持たない大学生、Wi-Fi環境がない大学生がいるということです。これではオンライン授業を受けられません。それから小中学校でも、シングルマザー世帯では、スマホだけはあるけどタブレットもパソコンもない、というような人たちがいて、eラーニングをやろうにも対応できないということがわかりました。コロナ禍のもとでオンライン化できる仕事をしている人とそうでない人、パソコンやWi-Fi環境を整備できる人とそうでない人との間に情報格差が生まれ、それがいずれ経済格差につながるだろうということも、予測されています。

しかし、テレワークを始めた人たちから面白いことを聞きました。私は今自宅から参加していて、おひとりさまですから誰も邪魔が入りませんが、テレワークしようにも一人になれる場所がないとか、夫のテレワークが優先で、妻は台所の片隅に追いやられるとか、自分がテレワークをしている最中に子どもや家事で寸断されるとか、そういう声が聞かれました。その一方、長い時間、夫が家にいることで、子どもが何をやっているとか、家で一体どういうことが起きているかということを経験し、そのことにより夫婦間の仕事の分担の再調整が起きるということも聞きました。

もしかしたら、これは面白い変化かもしれないと思ったのは、これまで職場は仕事の場、家庭は安らぎの場、休息の場と言われてきましたが、家庭も仕事の場になってきました。そうすると、あの通勤って一体何だったのかとなります。通勤とは職住分離があるからこそ、その間をつなぐものです。前近代には職住一致、一家総出でお家で働いていたわけですから、もしかしたら職住分離で通勤のあった時代というのは、近代のごくわずかな期間だったかもしれません。ポスト近代になって再び、職住一致に変わっていくかもしれない。そうなったら、男性にも女性にも新しい働き方が始まるかもしれません。

これまで男性は100%の生産者で、女性は100%の再生産者（これをケアワークとも言います）でした。これが性別役割分担と言われているものだったのですが、これからは男性も女性もいくばくか生産者であり、いくばくか再生産者であるという、こういう組み合わせが登場してきつつあるのかもしれない。

コロナは国境を閉ざしました。そうすると、国ごとのリーダーの違いがよくわかるようになりました。情けないリーダーを持った国の災厄を、私たちは目の当たりにしました。その中で、女性リーダーが、コロナ対策のパフォーマンスがいいことを示しています。

全世界の国家リーダーで、選挙で選ばれた国に限りますと、女性比率は何と7%。もう“初の”とか“唯一の”ではなくて、統計的な比較ができる程度の数があるということがわかります。ドイツのメルケル首相、ニュージーランドのアーダーン首相、台湾の蔡英文のような人たちです。この7%を占める女性リーダーのいる国が、コロナ対策のパフォーマンスのよい国トップ10の中に4つ入っています。ということは、統計的に優位な差があると言えます。なぜ女性リーダーのいる国のコロナ対策のパフォーマンスがいいのかと考えると、別に女性だから誰でもいいというわけではない。これま



で女性のリーダーシップというのは「共感力」や「コミュニケーション力」で、男性的リーダーシップは強い「決断力」だと言われてきましたが、ちょっと待てよと。この女性リーダーたちがはっきり示したことは、「共感力やコミュニケーション力と、決断力や科学性は少しも矛盾しない」ということでした。

では、そういう女性リーダーが生まれる条件は何か。この人たちは何も女性だからという理由でリーダーに選んでもらったわけではありません。いろいろな説明がありますが、私が一番納得したのはこれです。リーダーに性別を問わない程度に民主主義が成熟した社会だということです。私は、政治というのもしかしたら女性向きの仕事ではないかと思っています。なぜかという、政治は企業と違って金儲けのためにやるわけではないですから。能力に応じて税金を払い、必要に応じて支援を受け取る、というのが福祉ですから、そういう再分配を機能させるためのリーダーは、もしかしたら女性向きではないでしょうか。

一方で日本ではどうか。クォータ制を作ろうということで、実は日本は、「候補者男女均等法(政治分野における男女共同参画の推進に関する法律)(2019.5)」という法律を、国会で全会派満場一致で作りました。にもかかわらず、実態は、直後の2019年7月参院選では、政権与党の女性候補者比率が低いままでした。結果は、選挙の前後で、全く女性議員の数が変わりませんでした。ということは、この法律には実効性がなかったということです。これまででわかっていることは、「強制力のあるクォータ制抜きで男女平等を達成した社会はほとんどない」ということです。日本の候補者均等法の大きな欠陥は、ペナルティが全然ないことです。女性候補者比率を達成しなかった政党に政党助成金を減額するとか、そのぐらいやらないと、政党はこの法律に従わないでしょう。

最後に申し上げたいことがあります。「女性を増やしたい、女性を増やせ」は、今や国策です。これは、女性の過少代表性、人口比に見合わない比率を人口比に見合うぐらいに増やせということですが、増やせばそれでいいのでしょうか。そのためにクォータ制を導入したらいいのか、女性なら誰でもいいのか、女性を増やしてどうしたいのかということを考えてみたいと思います。

私たち、日本学術会議では、「男女共同参画は学問を変えるか?」という公開シンポジウムを行いました(2014)。女性が増えると学問が変わるのでしょうか。この「学問」のところを“地域”とか“政治”とか“企業”とか“教育”とか、何でも好きなものを入れてみてください。今、女性を増やせ、リケジョを増やせというのは国策ですから、この掛け声に表向き反対する人は誰もいません。しかし増やせばそれでいいのか、増やすこと自体でゴールを達成したとっていいのか、増やせば一体何が起こるのかを考えてみましょう。女性を増やす目的として、3つぐらいの回の可能性があります。それは①社会的公正(フェアネス)のため、②社会の効率性を上げるため、そして③社会を変えたいからというものです。

このフェアネスには公平な競争という含意があります。男女雇用機会均等法には、機会均等とあります。フェアな競争に男女が平等に参加して、勝ち抜いた人が、その成果にふさわしい報酬を受け取る。これがフェアネスです。こういう考え方は能力主義とすごく相性がいいのです。確かに女に頑張って競争で勝ち抜けというフェミニズムもないわけではありません。しかし私は女の子に、歯を食いしばって頑張って競争に勝ち抜けというのがフェミニズムではないと、ずっと感じてきました。

2つ目の解が、社会の効率性を上げるということです。これは簡単に言うと、企業の経営者たちに、「女性を使うと儲かりますよ」ということです。確かに実証研究の結果、女性を活用した企業の利益率が高いとか、業績が上がるとかいろいろなデータが出ていますから、確かに企業は儲かります。しかし女性を増やすのは、企業がもっと金儲けをするためかという、これもどうかと思います。

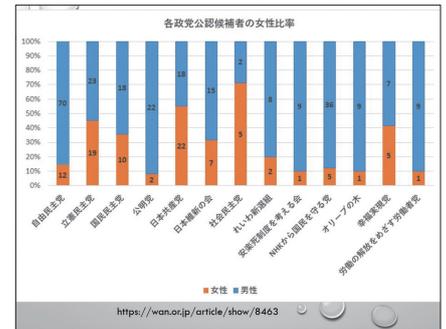
最後の解が、社会は変化すべきだし、変化してほしい、ということです。女性を増やすのは手段であって、目的ではありません。しかし、どんな方向に変わってほしいのかということを考えてみたいのです。

私は東京大学のスピーチでこんなことを言いました。フェミニズムとは、弱者が弱者のまま尊重されることを求める思想だと。そうしたら、そんなフェミニズムの定義は初めて聞いた、と言われました。フェミニズムとは、男性並みに強くなりたいとか、男性に勝ち抜きたいという思想だと思っていた人たちがいっぱいいるみたいなのです。男性たちは、「男女平等」についてそういう短絡的な理解をしがちです。「君たちは僕らみたいになりたいのか、それなら女性を捨てて、かかってこい」と言われてきました。けれど、私たちは決して男性のようにになりたいわけではありません。

また、あのスピーチの中で私はこういうことを言いました。「あなたの恵まれた環境と能力を、恵まれない人を貶めるためにではなく、恵まれない人々を助けるために使ってください」これを聞いて、「それってノブレス・オブリージュ

女性リーダーが生まれる条件

- 人口小国で政治と国民の距離が近い BUT ドイツは大国
- 「女性だから」リーダーに選ばれたわけではない
- 答＝リーダーに性別を問わない程度に民主主義が成熟した社会
- 政治は女向きの仕事?
- 再分配＝「能力に応じて貢献し、必要に応じて受けとる」(COMMUNE-ISM)





のことだね」と、短絡的に理解する人がいました。ノブレス・オブリージュとは高貴な人の義務、つまり余裕のある人が余裕のない人に手を貸し出すということです。

しかし、ちょっと待ってください。この直後に、私はもう一行を付け加えました。そこまで引用してくれる人がめったにいません。何と言ったかといいますと、「そして強がらず、弱さを認め、支え合って生きてください」と。なぜならば、強者はずっと強者のままではいられないからです。人は弱者として生まれ、いつかは必ず弱者になっていきます。強者であるのは一時のことです。とうとう最後まで強者にならない人もいます。わけても暴力というのは強者の振るう問答無用の権力、最も剥き出しの野蛮な権力です。国家の振るう暴力もそうですし、家庭の中の暴力、DVもそうです。

ハラスメントとは「権力の濫用」と定義されています。権力の濫用は、やっている人にはたぶん気持ちがいいのだと思います。DV男性もDVをやっている最中は、快感を感じていることでしょう。私は、権力の濫用は、男性だけがやるとは思っていません。女性もやると思っています。女性が人生最大の権力者になる時、それは親になった時です。ケアの関係、世話する／世話されるという関係は、圧倒的に非対称な関係ですから、強者と弱者がはっきりします。その時、強者は弱者を自分の思うようにしたいと思いがちです。そのように上司は部下を自分の思うようにしたいと思ひ、親は子どもを自分の思うようにしたいと思うものです。

私の友人に介護職の人がいますが、この人が面白いことを言っていました。「介護職も年寄りを思うようにしたいものよ」と。年寄りが思うようにならないと、キレるのだそうです。キレたら虐待をします。その権力の濫用の誘惑に抗して、非暴力を長い間実践してきたお陰で、ようやく子どもが無事に育ちあがる。子どもをベランダから投げ落とさなかったから、この子は今生きているのだと思うお母さんたちは多いのではないかと思います。ですから、私は女の人が経験してきたケアというのは、非暴力を学ぶ実践だと思っています。

何も暴力はDNAやホルモンで決まっているわけではありません。非暴力もそうです。男性が暴力を学ぶならば、そして女性が非暴力を学ぶならば、暴力も非暴力も学ぼうと思えば学べるはずで、だとしたら、男性にも非暴力を学んでほしいと思う。というのは、この世で男性にも女性にも、加害者にも被害者にもなってほしくないからです。

伊藤詩織さんが性暴力を告発した後で、世の中の風向きが変わったと思ったことがあります。年長の女性たちが、ごめんなさいを言い始めました。「もし私たちの世代がきちんと声をあげていれば、社会も少しは変わっていたかもしれない。詩織さんが一人で頑張らなければいけない状況にしていまい、本当に申し訳ない」と年長の女性たちが言いました。これまで年長の女性は、年少の女性に「セクハラを申し立てると、あなたのためにならない」「それをいなすのが大人の女性の知恵というもの」「あなたに隙があったのではないか」と言ってきたのですが、女性が我慢してきたことで、次の誰かにその我慢を強いることとなります。あなたが被害者であり続けることで、次の誰かに対して加害者になります。それをごめんなさいと年長の女性たちが言い出しました。大きな変化でした。

男の子の育て方を問題にするお母さんたちも出てきました。男の子の「乱暴で粗野でおバカで」という、あの「あるある」を放っておかないように、と。なぜか。男の子はそうやっていつかは加害者になるかもしれません。加害者にも被害者にもならないようにというのが、男の子にとっても女の子にとっても本当に大事です。そのためには、無理に強がる必要もないですし、弱さを恥じる必要もないということです。

最後に、熊谷晋一郎さんの著書『みんなの当事者研究』を紹介して終わりたいと思います。「当事者研究」が今ブームです。当事者というのは、障がい者とか高齢者とか社会的弱者の人たちのことをさします。自分自身の研究をやることで、その経験から生まれた知恵が生まれました。当事者の経験知です。熊谷晋一郎さんは脳性麻痺の車椅子生活者で、東京大学初の車椅子医学生として進学し、卒業後小児科医になった人ですが、彼が素晴らしい言葉を言いました。「自立とは依存先の分散である」。彼は小さい時からお母さんにお世話を受けてきましたが、そうすると「お母さんがいないと、僕は生きていけない」となります。お母さんはお母さんで「私がないと、この子は生きていけない」と思います。誰かひとりに深く依存しているという状態のことを「依存」というとしたら、その大黒柱がなくなったらアウトです。しかし、大きな大黒柱一つではなく、つかい棒がたくさんあったら、その筋交いの二つや三つがなくなってもOKだということです。この人は、「自立とは、誰か一人に深く依存していると思わないですむ状態であり、決して依存していないことではありません」と言いました。当事者の経験知ってすごいな、と本当に感心しました。

そういうことがとりわけ大事なものは、これからの日本の社会はどう考えても、超高齢社会だからです。うんと若い人も、いずれ年寄りになります。私ももう高齢者ですが、今人生100年時代ですから、まだこれから20～30年ぐらい生きなければならないかもしれません。そういう時に、下り坂を下がっていくわたしを受け入れて、誰かに助けてと言え社会をつくりたい。助けてといった時に、助けてくれる人がいないと悲しいです。そういう社会を私達は作っていき

2019.4
東大入学式祝辞

「フェミニズムとは
弱者が弱者のまま
尊重される思想」



たいと思います。

これまで、生き延びる知恵とは、どこでもいつでも生きていけるように能力やスキルを身につけなさいということだと思ひ、そうやって学生や子どもたちを育ててきました。しかしちょっと待ってと。能力やスキルがあなたになくても、自分が無力でも、能力のある人を調達する能力を身につけることができれば、世界中どこでも生きていけます。これを「受援力」といいますが、この力を身につければ、もしかしたら、そういう助けを求める「弱さ」というのは、逆説的な「力」かもしれません。そのために大事なことは、困った、助けてと安心して弱音が吐ける場を作ることです。かけがえのない「わたし」を生きるというのは、そういうことだと思います。

私たちは超高齢社会を迎えています。加齢とは、昨日できたことが今日できなくなり、今日できたことが明日できなくなります。ある意味、誰もが中途障がい者になるようなものです。私が障がい者と付き合って、とても安心したのは、目が見えなくなっても、こんなに楽しみがある、耳が聞こえなくても、こういうコミュニケーションの仕方があるということを知ったからです。そうすると、年を取るの嫌だとか、要介護になるの嫌だと思わなくても済みます。

最後に私が言いたいのは、これです。「女性を増やして、社会を変えたい」と私は思います。それは何のためかといいますと、安心して弱者になれる社会、安心して要介護になれる社会、安心して認知症になれる社会、そして障がい者になっても殺されない社会がほしいからです。

時間がきましたので、私の話はこれで終わります。今日は地元の学生さんとやり取りできるそうで、楽しみにしています。どうもありがとうございました。

(司会) 上野先生、ありがとうございました。そうなのです。今日は本当に若い世代にも、たくさん参加していただいておりますので、ここからは大学生ボランティアにも参加してもらい、上野先生に質問をぶつけていただきたいと思ひます。それでは大学生の皆さん、準備はよろしいですか。こんにちは。

(学生の皆さん) こんにちは。

(司会) では早速ですが、何か先生にお聞きしたいことはありますか。



(学生・山本) 南山大学4年の山本真帆です。よろしくお願いします。性暴力のお話が少しあったと思ひますが、日本では性交について学習指導要領に載っておらず、子どもたちが正しい知識というものを身につけることが難しいという課題があると思ひます。実際に私たちがこれから親になった時に、正しい知識を子どもに身につけてもらいたいと考えているのですが、教育の場で習わないとなると、私たちが家庭で教える場合に、どのようなことに注意して教えればよいでしょうか。

(上野) すごいですね。もう自分が親になって、子どもに性教育をすることを考えているのですね。あなたは親から性教育を受けましたか。

(学生・山本) 特に何も受けていません。

(上野) 親が子どもに性教育するのは難しいですね。きちんと学校でやってくれるといいのですが。中学校の指導要領で性交を教えないと決めたのは2000年代に入ってからです。はっきり言いますと、安倍政権になってからです。安倍政権は寝た子を起こしたくないのです。子どもたちは、とっくに起きていますけどね。避妊も教えないということになってしまいました。アメリカでも同じことが起きて、トランプさんは全米で性教育の予算をカットしました。だからトランプさんがバイデンさんに代われば、アメリカの性教育も変わるかもしれません。つまり、政治が変われば学校教育は変わります。

あなたに対する一番簡単な答えは、政権を変えたらいいと思ひます。それまで待てないと思ったら、親も子どもにきちんと性教育をしてあげたらいいと思ひます。しかし一番大事なことは、お父さんとお母さんがいるから、あなたが生まれたのだと。お父さんとお母さんが愛し合っ、触り合っ、抱き合っ、こんなに好き合っているから、あなたが生まれたのだという、パパとママの関係を子どもに見せるのが、一番大事なことです。セックスはそうやって愛し合っった男女が子どもを作る行為で、あなたは私たちが望んで生まれてきた子どもだということを子どもに伝えることです。山本さんは親にそう言ってもらいましたか。性教育で一番大事なことは、それです。私たちが本当に好き合っ、好き



だと、こうやって触りたくもなるし、抱きつきたくもなるしとスキンシップを子どもの目の前で見せてくれましたか。

(学生・山本) そうですね。仲良くしています。

(上野) いい親ですね。あなたもそういうご両親のところで育ったのであれば、きっとそういうカップルになれると思います。

それと大事なのは、セックスは子どもを作る行為ですが、子作りする時だけにセックスをするわけではないから、避妊はとても大事です。本当は避妊教育を学校できちんとやってくれたらいいのです。私の知っているスウェーデンの親は、きちんとコンドームを見せて、避妊教育をしています。息子に対してだけではなくて、娘にも、これを持って歩きなさいと。何かあれば、ちょっと待ってと。「これを使って」と出すという、そのぐらいのことは、親はきちんと教えてもいいと思います。

(学生・山本) ありがとうございます。

(上野) あなたのバッグに、生理用品と一緒に避妊具も入っていますか？

(学生・山本) 入っていません。

(上野) 入れておいた方がいいと思います。

(学生・山本) はい。ありがとうございました。

(司会) ありがとうございます。では続いての学生さん、お願いします。

(学生・稲垣) 愛知教育大学4年生の稲垣明里です。よろしくお願いします。私からは、女性のワーク・ライフ・バランスについて、質問をさせていただきたいと思います。コロナ禍で女性が子どもや高齢者のケアとか家事などにより、自分の時間や仕事に十分時間を持つことができないといったことや、また仕事のために家庭の時間を持つことができないといったことが改めて問題視されるようになったと思うのですが、日本のより多くの女性が仕事面と家庭面、両方で自己実現することが可能になるには、あとのぐらいの時間が必要だと思われますか？上野先生のお考えや、こうなってほしいというご希望があれば教えていただきたいです。



(上野) 稲垣さん、厳しい質問ですね。私の目が黒い内には無理だろうと思います。私の人生はあと残り少ないですから。稲垣さんが生きている間にも無理かもしれない…といったら、ガックリですよ。しかし、そんなことは言いたくありません。皆が皆、同じように変化できるとは限らないですが、世の中が変化する時には、いろいろな人がそれぞれその人なりに変わっていきますので、先に行く人も後からついて行く人もあります。

現在でも、あなたの言う通り、仕事と家庭の両方で自己実現できている人はいます。恵まれた条件を持った人たちですが。私たちの世代は、女性が仕事をしたら家庭は持てず、家庭を持ったら仕事ができないような選択しかなかった時代なので、上野はご覧の通り、おおひとりさまですが、次の世代はもうそうではなくなりました。次の世代は結婚も出産もした後に、割の悪い仕事に就かなければなりません。しかし、もう今は均等法ができてから、第一世代、第二世代、第三世代までできています。少しずつ変わってきていて、あなたたちはもう第四世代か第五世代になるのでしょうか。第三世代は今30代ぐらいですが、仕事も結婚も当たり前です。女性が働くのが当たり前だから会社のルールを変えようというところにきています。それは女性を使わないとソンだとわかったからです。

今コロナ禍のもとで、女性にしわ寄せがきているという時に大事なことは、「夫に対する交渉力を持つ」ということです。男性を変えるのは、男性が一番愛する人です。愛する人でないと、男性は変えられません。最初から、つごうのいい男性はめったにいませんから、あなたの力で変えてください。私の世代はどうだったかというと、夫を変えるために女性は悪戦苦闘しました。そのうちのごく一部の人は、夫を変えることに成功し、夫を変えることに失敗した人たちは、結婚をキャンセルしました。ですから、私の周りでは離婚率がものすごく高いです(笑)。もう結婚も就職も一生ものではありませんから、結婚しても妻に捨てられます。夫と妻がお互いに捨てられないように愛し合って生きるためには、協力して努力しなければいけないですよ。文句や不満があれば、きちんと相手と交渉して、自分も変わる、相手も変わる、というようにして行ってください。そして、あなたが後から来る人のロールモデルになってください。そ

れならできます。

(学生・稲垣) はい。ありがとうございます。

(司会) では最後、もうお一方、お願いします。

(学生・安藤) 椋山女学園大学4年生の安藤もも香と申します。誰が子どもをケアするのかのお話がありましたが、休校要請が出た際に、ニュースの街頭インタビューとかで、「お仕事が休めないの困っています」と映されていたのは女性ばかりだった印象です。性別役割分業の表れだと思いながらそういったニュースを見ていたのですが、今回テレワークが増えた影響で、普段あまり育児に参加していない人たちも家にいる時間が長くなったと思います。そこで東京都が、テレワークで介護・育児ができるというようなポスターを作ったことが批判されて話題になったりしたのを見ましたが、実際コロナ禍になってから、育児とか介護とかの分担は以前よりも変わったのでしょうか。データや、上野先生のお考えなどがあれば、お聞きしたいと思います。よろしくお願いします。



(上野) 質問をありがとう。稲垣さんに対して答えたことととても似ています。答えはイエス&ノーです。もっぱら女性に負担が増えたケースもあれば、男性との役割分担が変わったケースもあります。テレワークで育児・介護ができるというのは、これに『テレワークで男性も介護・育児ができる』になっていたらよかったですね。男性も家にいるのですから。

テレワークについては、いろいろな話を聞きました。子どもが小さくて泣くので、夫のオンラインのミーティングに差し障りがあるからといって、子どもをその間、外に連れて出たとか。なぜかという、夫婦の間できちんとした交渉をしていないからです。それ以前からワンオペで、妻が何もかも抱え込んでいるから、男性がそれにつけこんで、当然だと思う。そういう夫婦関係が出来上がってしまっているんですね。負担が増えても、もっぱら女性のところにばかりくる、そんな夫を選ばないでください。夫も家にいるということになれば、きちんと分担を見直そうと交渉してください。男性は自分から進んでは変わりません。ですから、きちんと要求して交渉して変えていく力を女性が持っていれば、夫婦関係は必ず変わります。身近な人を変えられなくては、社会は変えられません。そうやって少しずつ自分の身の回りから変えていけば、きちんと育児休暇を取ってくれるような夫とか、家事や育児をワンオペでしないですむような男性とか、最初からそんな男性はいないでしょうから変えていけばよいのです。

実際に変化は起きています。今のところマクロデータで見れば、女性の負担が増えたというデータしか出ていませんが、もう少し長期で見れば、おそらく夫婦がリモートワークをしているところで、夫婦の分担が変わったというデータがもうじき出てくるだろうと私は期待しています。質問をありがとう。

(学生・安藤) ありがとうございます。

(司会) 山本さん、稲垣さん、安藤さん、3人から質問をいただきました。ありがとうございます。

さて、本日はチャット機能も活用しております、チャットルームにもご意見・ご質問をたくさん頂戴しております。一つだけご質問がありますので、こちらで紹介させていただきます。

「配偶者自身が専業主婦で暮らすことを望んでいて、お互いにそれで幸せだと感じているのであれば、それでも良いのでしょうか」というご質問が来ております。最後の質問にも少し重なってくるのかと感じますが、先生、どのようにお感じになれますか。

(上野) もちろん、ご本人の選択ですから、それでいいんです。不満を抱えたままの状態にいれば、働いていても働いていなくても、悲しいと思います。幸せならそれでいいんですが、人生は長いんです。本当に長いんです。100年死ねませんから。そうすると、今の幸せがずっと続くかどうかということはわかりません。今は仕事をしていなくて幸せかもしれないけれども、そのうちまた何かしたくなるかもしれません。仕事ではなくても、外に出たくなるかもしれません。いろいろな変化が起きますから、その変化を柔軟に受け入れていくことができればいいですよ。しかし、その時の「基本のき」は、「自分に正直」だということです。自分に嘘をつかないということです。嫌なことは嫌と言う、やりたいことはやりたいと言える。専業主婦だろうが何だろうが、それが言えたら、私は女性は幸せだと思います。

(司会) 本当にそうですね。今日は本当にありがとうございました。

| 記念講演 |

女性が社会を動かすとき

—日本骨髄バンクのケースから

■日時：11月14日(土) 13:00~14:00



< 講師 >

大谷 貴子

NPO法人全国骨髄バンク推進連絡協議会 顧問

(大谷) 本来ならば皆さんとお目にかかってお話しする予定でしたが、コロナの一件で本当に社会が変わってしまいました。ですが、逆にたくさんの方々にご視聴いただけるということで大変嬉しく思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

さて、今ご紹介いただきましたとおり、骨髄バンクを設立するにあたり、多くの人たちと協力してまいりました。そのような社会活動の一つということで、今日私に声を掛けていただいたと伺っております。本当は骨髄バンクの話がたくさんしたいところなんです、時間が限られていますし、今日はいくつかテーマを持ってきましたので、もしかしたら少し端折ってしまうかもしれません。骨髄バンクそのものについては、申し訳ないですけどもネットで見ていただくとありがたく思います。私に関わってきた経緯などを中心に、骨髄バンクの組織云々ではなく、そのような話を中心にさせていただきたいと思っております。

先ほども司会の方からお話がありましたように、私自身が25歳で白血病を患いました。あれから34年ですから今年で59歳、来年には還暦を迎えます。34年もよく生きているなあと、つくづく思います。34年生かされた命と思っておりますが、34年前はまさか自分がそのような病に侵されるなど思いもせず、大学院生活を謳歌しておりました。しかしながら、病気になって、逃げる事ができません。

あの当時はがんを告知されない時代でしたから、「がんを告知されて強いね」「偉いわ」「すごい」などとよく言われましたが、実は告知をされずに闘っている人の方がすごいと、あの当時は思いました。大量の抗がん剤を投与されると辛いですし、髪の毛も抜け、体調不良になります。ただ、私の場合はがんを告知されて闘病していたので、この治療が終わればバラ色の人生が待っていると思いき、頑張ることができました。

その中で、私は“助かる可能性がある唯一の手段”として、当時「骨髄移植」を提示されました。骨髄移植についてもネットで調べてくださいと言うのは申し訳ないですが、時間がないので、骨髄移植という治療があるということを、皆さんの小耳に…ということでとどめさせていただきます。

私の場合、その骨髄移植という治療法が世の中にあるということがわかっているのに、私はその治療法を受けることができないという事実と直面しました。今から思うと、そこから私はいろいろな社会活動に目覚めていったのではないかと思います。骨髄バンクを作るのは、決して人のためや、今困っておられる方のためなど、そんな格好いい話ではありません。ただただ自分が助かりたいがために、骨髄を提供してくれる人を探す。自力では探せないの、そんな組織があれば、つまり探してくれる組織があれば楽なのに…。なぜアメリカではその組織があって、日本にはないのか、というところから始まりました。



私だけのことでなく他の患者さんのために…、と思われたのかとよく質問されます。「はい」と言うと格好いいものの、実はそうではなく、私さえ助かればというのが正直なところでした。もう自分さえ助かればと必死でした。そのために何をするかと考えたわけです。骨髄バンクという組織云々よりも、社会を動かすとか、国に動いてもらうとか、私が国を動かすとか…、そのようなことは全く考えたことのない25歳でした。しかし、自分が助かるためには、全国規模の骨髄バンクを作ってもらわなければ私は助かりませんでした。

唯一、今の厚生労働省に質問をしたのは、「私たちみたいな下々の者に、何ができますか」ということでした。その答えは何と「“100万人署名”をされたらいかがですか」というものでした。100万人ぐらいの署名を集めれば、この国は動くということです。半信半疑でした。100万人の人の名前を集めて国が動くのかと。例えば100億円持ってこい、100兆円持ってこいなど、それも寒々しい話ですが、その方がリアリティがありました。人の名前を集めて、この国は動くのかと。しかし、質問をしたら答えが署名活動をするのでした。実はそれしか方法がなく、半信半疑ではありますが、私はその方法に走り出します。

署名活動をするというのは街角でするだけではなく、メディアの人の力を借りたりしなければなりませんから、結果的には署名活動そのものに加え、社会に対し「白血病の患者さんは骨髄移植が必要で、骨髄バンクがアメリカにはあるが日本にない」ことを知らしめるきっかけになりました。そしてそれを知らしめるきっかけとなる状況の中、私は一筋の光をもらいます。

メディアを通じて、「私には骨髄提供者がいません」と必死になって叫んでいる時、医者ではない骨髄移植の専門家から、「とても稀だが、日本人は島国に住んでいるため、アメリカや欧米諸国と違い、どちらかといえば、皆、民族が近いので、両親と子どもとの間で骨髄の形が合う場合がある」と言われました。これは非常に低い確率です。両親と子どもとが同じデータを持って生まれているということはありません。半分半分です。親から半分ずつもらって人間が形成されているため、半分しか何もかも合わないと言われている中で、何を言われているかもわかりませんでした。もう藁にもすがれる気持ちで、私は両親の検査に挑みます。すぐにわかったことは、母と骨髄移植ができるということでした。両親との間で骨髄が合うということは非常に稀でしたが、これは本当にありがたいことというか、なぜ私だけ、こんなに幸運で良いのかと思いました。もうその頃には、多くの患者さんたちと知り合っていました。皆、親はいますが、親は子どもを助けられない状況の中で、私だけがこんなに幸せでいいのかと思ったことを覚えています。

ですから、その後、骨髄移植を終えて元気になって退院した時、まず思ったことは、皆さんに平等に生きるチャンスが与えられること、いろいろな選択肢が与えられること。この患者さんはイエスで、この患者さんはノーということではなく、等しく日本に生きている時、等しく世界の中で生きている時に、同じチャンスが同じ状態で与えられないとおかしいと思いました。今度は本当の意味で、社会活動として骨髄バンクを作っていくというところへのめり込んでいきます。

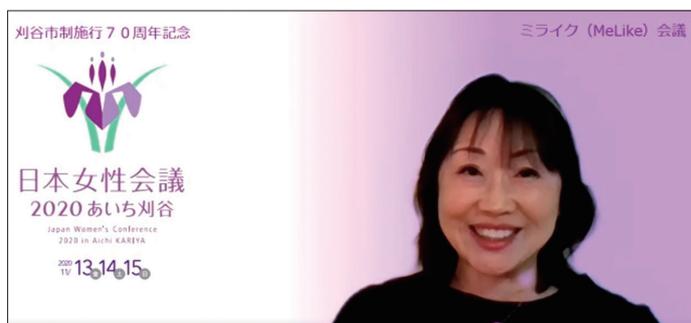
今から思いますと、自分は助かりましたが、助からない患者さんはいますし、入院していて何もできない人たちが大勢います。しかし皆、助かりたい、小学校に戻りたい、中学校に戻りたい、高校生になりたいという、ただそれだけのことなのに、それすらもできない人たちがいるという気持ちだったと思います。ですから、私が今できることをやろうと思いました。

100万人の署名には、多くの方々のご協力をいただきました。署名活動を続けていく中で、同時に医者や、厚生労働省や、あちらこちらに行きましたし、またメディアの力も借りたりしながら120万人の署名ができました。3年ぐらいで到達したと思います。そして骨髄バンクが立ち上がります。

私は、実は骨髄バンクができたなら、もうすべて一線を退くつもりでした。私の目標はそれでしたし、ちょうど28歳ぐらいでしたから、これから恋愛して結婚して幸せに赤ちゃんを産んで…と思っている時でしたので、「骨髄バンクはできたし、国がやってくれるし。もういいかな」というぐらいでした。

しかし、ちょうどその頃、私はあることに気づきます。「あれ？私って子どもができない身体になった？」と。生理があれば子どもが産めると何となく思っていました。もちろん、医学的には必ずしもそうではないのですが、28歳で

生理が止まり、私は子どもができないのだと気づきます。医者を確認したところ、抗がん剤の副作用で、もしくは放射線治療の副作用で子どもができなくなる人がほぼ大半だということを知ります。「知らなかった！なぜ先に教えてくれないのか」と思いました。しかし、言ってももうそれは仕方がないことです。3年前の私に戻るとしたら、白血病の私に戻るとしかありません。今こんなに元気に過ごしているのですから、子どもができないぐらい我慢しろと言われた時には反発しましたが、よくよく落ち着いて考えてみれば、死んでいたかもしれない命を、とりあえず3年永らえさせてい





ただいています。悔しいですが元へは戻れない。それなら、骨髄バンクで骨髄移植を受けることができた同年代の若い患者さんが、後に子どもができないと悩むのはあり得ません。白血病の患者さんだけでなく、乳がん、子宮がん、精巣がん、卵巣がんなど若い患者さんたちががんになる時代で、その人たち全員が、子どもを授かることができなくなってしまうとなれば、何のためのがん治療なのかと思いました。ならば、不妊対策として、抗がん剤を投与される前に、精子や卵子を保存しておき、子どもを作りましょうというキャンペーンを2000年から始めました。

私が骨髄移植を受けたのが1988年です。そこから何年か経ち、2000年によくお医者さんたちの理解も得られ始め、ちょうどその頃はインターネットが台頭してきた時期でしたので、治療を始めようとする方など多くの患者さんたちとつながることができました。しかもその当時、2000年ぐらいになりますと、白血病です、子宮がんです、乳がんですなど、がんを告知される時代でしたので、皆さんはネットですぐに病気を調べます。病気を調べて、“不妊”という文字が出てきますと、どんどん私にアクセスが来るようになりました。

実はがん治療をしている先生方は、不妊対策をしてあげようと思ってくださいますが、その不妊対策は、主に生殖医療の先生がしなければなりません。産婦人科とも違いますが、赤ちゃんを作るという生殖医療の先生とつないでいかなければなりません。しかし残念ながら、日本では、内科、外科、整形外科、婦人科など全部科に分かれていて縦割りなのです。その横のつながりを作るということは、こんなに大変なことかと思いましたが、そこは医者でもない一患者ですから、厚かましく「先生、聞いて！」という感じでつないでいきました。しかし、なかなか理解を得られることはありませんでした。

といいますのは、患者さんたちが欲していても、時期尚早と言われます。がん患者さんにとってはがん治療も待てないのに、しかもがん治療が始まってしまえば不妊になるのに、何が時期尚早かと、よく怒ったものでした。それでも患者さんの強い希望、それから一部の先生方の熱い気持ちで、どんどん患者さんたちに、抗がん剤治療前に精子や卵子を保存していけるということができました。2000年から始めて2017年には、日本癌治療学会というところが、すべての患者さんに等しく、抗がん剤投与後の不妊については話をしなければならないというところまで指針を出してくださいました。

これでまた仕事の一つ終わったと思っていました。ただ、実は不妊治療というのは自費なのです。自費でお金がないから治療ができないという人がたくさん増えてきました。若いですから、がん治療だけでも大変なのに、自費で不妊対策までやっていられないだろうということがありましたので、昨年度、流行りのクラウドファンディングをさせていただき、皆さんから、約2か月で1,000万円の温かいご支援をいただいて、クラウドファンディングを達成することができました。そして患者さんたちにプレゼントをしようと考えていました。

実はその時もそうですが、クラウドファンディングでお金をいただくだけではなく、社会に周知徹底させると、きっと議員さんやいろいろな有識者の方が見てくださり、「困っているのであれば国レベル、市町村レベルでの何か応援ができるのではないかと」思ってくださることを狙ってやりました。しかし、実はなかなか進みませんでした。1,000万円あるし、少しずつ患者さんたちにプレゼントしていければいいと思いながら、直接患者さんたちに30万円ずつ、10万円ずつなど、必要な方々に必要なお金を届ける活動をしています。

実は、粛々とした活動をしているのには理由があります。患者さんにとって、がんになっただけでもあまりにも辛いのに、不妊というレッテルを貼られるのは嫌だから、言わないでほしいという声も届いていましたので、あまり公にすることでもないかと。ですから、患者さんが必要としていることを粛々で行いました。

そこで私の仕事は少し落ち着いた状況でした。そうしたところ、実は去年の10月、私のとても身近な、夫の32歳の姪がスキルス性胃がんという、逸見政孝さんがなられたものと同じがんを発症していることがわかりました。姪は4歳の双子の女の子がいます。とてもおしゃまで可愛い女の子が二人います。そこで初めて気づいたのです。私は25歳で白血病になり、子どもが生まれませんでした。子どもが欲しいと思っていました。ですから、その欲しいと思っている患者さんのために不妊対策を始めました。これが上手くいけば、すべてのがん患者さんがバラ色になると思っていました。しかし、若い世代でがんになるということは、子どもを残して亡くなっていく人がいるのだという現実には、私は愕然とします。しかもそれが可愛い姪でした。毎日、姪の闘いを見ていく日々が始まります。それと同時に、4歳の双子がママがいないという生活を送らなければなりません。残念ながら、もしかしたら1か月後ぐらいに、ママはこの世からいなくなるという事実と直面しなければなりません。

そんな時、姪の母親、つまり私の義理の姉ですが、絞り出すような声で、「娘を病院に任せるのではなく、私在家で最期まで看たい」と言いました。娘を手元に置いておきたいという気持ちは、そうだろうと思いましたが。孫の世話をし、孫にご飯を食べさせなければなりませんから、母親は病院に付き添うこともできません。どちらも心配です。病院に付き添えば、孫にご飯はどうしているかしらと心配します。

早速、私は、家で患者である姪を看られる情報を集めようと思いました。一般的に、高齢者に対して在宅で最期を看るといって在宅看護を知っていましたので、年齢を問わず、そういう行政の支援があると思込んでいました。“ない”な

どとは思ってもいなかったです。家に訪問看護師さんやドクターら呼んで治療を受けられると思っていました。すぐに調べましたが、20歳から39歳までの方に対しては、一切そういう支援が抜け落ちていることに気づきます。小児を対象とした支援はあるのです。小児のがんの患者さんと、40歳以上で介護保険を払っている年代の方々には、制度があります。(20~39歳の) その世代には、全く助成制度がないことに気づきます。

しかし調べますと、姪が住んでいる横浜市、他には神戸市、久留米市など、全国的にいくつかの自治体では、市町村レベルで、20歳から39歳までの方々に支援をする公的助成があることを知ります。横浜に住んでいて良かったと思いました。早速、横浜市に連絡を取り、姪が入院していた病院から家にスムーズに帰ってこられるように準備を進めます。すぐに派遣されたお医者さんは小児科出身の緩和ケア、最期を看取る先生でした。なぜ小児科出身の方が派遣されたのかといいますと、家に4歳の双子がいるからです。双子にとって怖いおじさん先生が来たら泣くでしょうと。ですから、子どもが大好きな小児科出身の先生を派遣してくださるといふ、優しい横浜市の支援制度でした。

そしてすぐに輸血が必要な状況になり、点滴も必要になります。どうするのかな、と見ていたら、カーテンレールに輸血の先をぶら下げるのです。カーテンレールの下に姪が寝ており、点滴や輸血をしていただく。そして調子のいい時は幼稚園のお迎えと見送りもできました。そんなことをしながら、お陰様で、というには少し短かったですが、3か月の闘病で今年の1月23日、家族に見守られ、朝ご飯の最中に、子どもたちをしっかりと見て静かに目を閉じました。

それまでの3か月間はバタバタしておりましたが、私は亡くなったその日にすぐ、知り合いの埼玉市議に連絡を取りました。埼玉市という大きなところが、このような公的助成制度がないのはおかしいのではないかという意見を伝えました。担当者は驚かれ、すぐに調べられましたが、やはりないと言われ、私が住む、埼玉県加須市というところでも支援制度の充実を求めることを頼みました。

当然のことながら、一朝一夕にはできません。ただ、意外と調べてみますと、少ない人数の患者さんがそれを必要としており、それほど予算が要るわけではありません。しかし、その少ない人は確実に目の前に死が迫っています。その年代の方々皆さん、小さなお子さんがいらっしゃるんです。小さなお子さんと1日でも家にいたいものです。病院にいれば、夜はバイバイしなければなりません。本当に必要な助成制度だと気づいてくださり、今はあちらこちらの市町村レベルで動きが始まっています。私が意見を申し上げた新聞記事が、こちらです。

これは私が新聞に投稿させていただき、公的支援の充実をお願いします、という内容を書かせていただきました。そうしましたところ、来年度にはもう埼玉市で動くことがわかりましたし、私の住む町でも今動きがございいます。また他の地域、東北や九州の地域などでも、来年度には動きまますとご連絡をいただいています。これは、それほど私が何かロビー活動をしたわけではありませんが、こういうことが起こっているのなら、今苦しんでおられる方、そして残念ながら目の前で命が消えてしまおうとしている方々に、非常に必要な支援なのだということをお話させていただいています。

私はこのように活動をしてまいりました。今、新聞記事を出ささせていただきましたが、こうして社会に訴えていくことで、いろいろな方々がご援助して下さることを嬉しく思い、そして私に何が出来るかといつも考えています。

そうこうしている時に、皆さんご存知のように、菅総理がいきなり「僕が総理大臣になったら、不妊対策をやりまます」ということを、あれはまだ石破さんなどと競争



若年がん患者の支援

在宅医療の公的助成が不足



日本骨髄バンク評議員
大谷 貴子

私は33年前に白血病になり、骨髄移植を受けた。当時「骨髄バンクは、期が来たら」と言っていた。私、私も設立運動に参加し、以来、多くの白血病患者と家族の相談に乗ってきた。ただ、20、30代の患者が在宅で治療を受けるための公的支援制度の不足についてはよく知らなかった。白血病ではないが難治性がんのために先日、32歳だった姪を私は亡くした。その経験を、支援制度の重要性を痛感した。

姪は夫と4歳の双子の娘がいる。医師から厳しい見通しの説明があったとき、姪の母親は「ずっとそ

ばに居て、どんな助けもしたい。最期が来たら」と言っていた。「家で過ごしながら治療も受けたい」という姪の希望をかなえるために、私たちは費用や制度を調べ、せき込みがひどく、ベッドを起こした状態でも眠れないので、電動の介護用のベッドが必要だった。すぐに思い浮かんだのは介護保険だ。が、保険料の納付対象でない40歳未満はサービスマンも受けられないという。あきらめかけたが、姪の住む横浜市には「若年者の在宅ターミナルケア支援助成」という制度があり、

ベッドやポータブルトイレ、床ずれ防止の体位交換機などの用具を1割負担で借りることができた。この制度は、できるだけ家で過ごそうという決断の背中を押してくれた。

発熱や腰の痛み、貧血などの在宅医療ケアには、医師の往診で対処してもらった。いつでも相談でき、駆けつけてくれる医療支援があること、大きな安心材料だった。

何より大きかったのは、娘たちへの影響だ。姪は痛みを緩和してもらったおかげで、2か月前を家族と笑顔で過ごすことができた。デイスリランド、買い物、外食に行き、幼稚園のお弁当を作った。亡くなる1か月前にはケーキも手作りし、クリスマスを楽しんだ。娘たちと川の字で寝ることもできた。いよいよ眠る時間が長くなる。2階にお風呂を

組み立ててもらい、3人の専門スタッフの介助で入浴した。娘も人もかかいていく足を洗っていった。

最後の日。姪は母親の呼びかけに応じて目をしっかりと開き、近くに来た娘たちを見つめ、静かに目を閉じた。葬儀の翌朝、娘の一人が「ママが立って笑っていらした姿をみた」とにこやかに言った。「ママ」の口にはなく「笑ってるママ」の記憶が残ったのだと思う。

もちろん、公的支援があっても自宅でも介護する人はかりではないし、病院を覗く人もいます。しかし、選択肢を増やしてくれるのは限定的な。20、30歳の人を対象とした終末期の在宅支援制度はまだ限られた自治体しかない。AYA(思春期や若年)世代のがん患者への様々な支援が広がってほしいと願う。



している時に、突然「私は不妊治療に力を注ぎます」と言われたので、とても驚きました。今までどれだけ頑張ってきたかという状況でした。ただ確かに不妊治療に力を入れていることはわかっています。それは、現在不妊の患者さんであって、私たちみたいに抗がん剤を投与される時には不妊でないかもしれないけれども、投与されることになろうとした時に将来的不妊になる人は対象外とずっとと言われていました。ですから、実は市町村レベルでは、がん患者さんのための不妊対策費用は少しずつ導入してもらっていました。実は一番早くに導入されたのは、埼玉県や岐阜県でして、それもお医者さんたちが、患者さんたちの「お金がない」という声に心を痛めて動いてくださった結果でした。

ただ、埼玉県や岐阜県でがんになったらラッキーで、大阪府でがんになったらアンラッキー、それはおかしいと思い、国レベルでぜひ助成金制度を作ってほしいと考えました。実は厚生労働省のがん対策の機関にいても、「人間ドックと同様、将来不妊になるかもしれないという、わからないことに費用は出せません。人間ドックも病気があるかどうかわからないから自費なのです」などと言われて追い返されました。

しかし、菅総理がそのようなことを言ってくださった時、今がチャンスだと思いました。このチャンスをもものにするにはどうしたらいいのかと考えました。先ほど2000年からこの活動をしていると申し上げましたが、そこに糸口があったのです。

私は2000年よりもっと前から、たまたまですが野田聖子さんと懇意にさせていただいていました。野田聖子さんがまだ国会議員になられる前でした。野田さんは岐阜出身で、岐阜高校のバレーボール部で活躍されていました。その岐阜高校バレーボール部のOBで、野田さんからすれば、後輩になるかと思いますが、その方が白血病になられ、必死で提供者を探していました。骨髄バンクができたものの、ドナーが見つからず、それこそあちらこちら走り回って探していました。その彼は航空会社の社員でしたので、飛行機に乗るのは無料だと笑いながら、北海道や九州に行ったりして、自分のドナー探しを一生懸命していました。

岐阜高校バレー部が彼を応援しようということで、ある集会を開いた時に私は野田さんと知り合います。「私が当選して国会議員になったら私は何でもするから、今から言ってください」とおっしゃいました。私は失礼なことに「そんなことを言っても、国会議員になって守ってくれた人を知らない」と言ってしまいました。野田さんのことを知らなかったというのがありますし、国会議員は言ったところでやってくれないと思っていました。その頃、何を斜に構えていたのかわかりませんが、そんなことを面と向かって本人に言っていました。本人はグサツときたそうです。そのグサツときたことを覚えてくださっていて、当選した直後にご連絡をいただき、骨髄バンクを盛り上げるために、骨髄バンクを支援する国会議員の会や議連を作ってくださいたり、こういうところに話しに行けば動くということもいろいろ教えてくださったり、その内に仲良くなっていきました。

当然のことながら、私の不妊のこともご存知でしたし、野田聖子さんも不妊で苦しまれて、海外の卵子提供で真輝くんという赤ちゃんを出産されました。そんな経緯もあり、野田さんはがん治療と不妊についても、私からの苦しみを聞いてくださっていたので、わかっていました。

いきなりの菅総理の発言で、そして蓋を開けてみたら、菅総理のほぼ側近みたいな仕事を野田さんがすることになり、もう本当に“棚からぼた餅”感があります。「これを菅さんに伝える」と言ってくださいました。今までの努力は何だったのかというぐらいの棚からぼた餅感でしたが、人に言わせれば、言い続けてきたからですよ。自分の不妊のことを隠さないで言い続けてきたこと、そして精子や卵子を保存するためにどんな必要があり、どれだけお金がかかるのかということを書いてきたからだと慰めてもらいました。

今日が14日ですが、12日に新聞に載りました。こんなにタイムリーな話があるのかと思いましたが、共有画面で見せてください。これです。

甘利明さんと野田聖子さんが菅さんに会いに行くところです。この前日だったと思いますが議連がありまして、私もそれに出席しました。その時にお医者さんなどが出てくださり、がんと不妊についてスピーチがありました。また私たちにもいろいろ質問がありました。

議連が立ち上がり、これを菅さんに提案するというのは、ある意味出来レースらしく、ここで提案をして、そのままいくらの費用を患者さんにつけてくださるかはわかりませんが、努力が実った瞬間でした。今まで多くの患者さんたちが苦しんできた費用の面について、ここで一つ解決しますし、まだ（クラウドファンディングの）1,000万円も残っていますので、それも使わせていただきます。実際、ここで菅さんがOKされたとしても、第三次補正予算ということですから来年度の話です。しかし今、患者さんは待たないです。今の患者さんには私たちがクラウドファンディングで皆さんからのご厚志でいただいたものを、プレゼン

若年がん患者への不妊治療支援を 自民議連が首相に要望

2020年11月12日 11時40分 (共同通信)



首相官邸で取材に応じる、不妊治療への支援拡充を目指す自民党議員連盟の甘利明会長（左）と野田聖子幹事長（12日午前）

不妊治療への支援拡充を目指す自民党の議員連盟（会長・甘利明党税制調査会長）は12日、菅義偉首相を官邸に訪ね、若い世代のがん患者への不妊治療に関する経済支援を要望した。2020年度第3次補正予算案への反映を目指す。

抗がん剤治療などにより生殖機能が低下し、不妊リスクが生じる場合がある。精子や卵子を凍結保存する費用などの助成制度を設けている自治体もあり、議連は国としての経済的な支援が必要だと訴えた。

議連幹事長の野田聖子元総務相は、菅首相と面会后、支援充実に「妊娠が不可能だった人たちが、治った後に親になれるという新しい社会が見えてくる」と強調した。

東京新聞 Web 令和2年11月12日付 (共同通信社配信) 写真:共同通信社



トしていきたいと思っています。タイムリーにも、この講演をする直前にこんなに嬉しいニュースが入ってまいりましたので、皆さんに共有させていただきました。

こんな風にいきますと、何でもかんでも思ったことを形にしているようですが、本当にありがたいことに一人の力ではありません。たくさんの人たちが私の言うことを聞いてくださり、それを形にしてくださいました。私は主治医にこんなことを言われます。「君は言っているだけなんだけどね。点々と物を置いていき、他の人がその点を拾い集めながら線にし、その線を誰かが面にして、立体にして、それで形になっている。その努力をわかっている？」と。確かにそうです。

“思いついたこと”というよりも、“気づいた”ことですね。自分が病気になるまで骨髄バンクが必要と思ったこともありません。そして子どもができなくなった時に、子どもができない苦しみや、それが薬の副作用だなどと、そんなことも体験しないとわからないことです。姪を亡くしましたので、この体験は決して良かったとは思いませんが、姪を亡くすことになった去年の10月9日から今年の1月23日までの体験を、絶対何かどこかに返していかないと、姪も何のために亡くなったのかと思っているかもしれません。そう思うことで背中を押してもらっているのかもしれないし、姪の二人の子どもたちが大人になった時に、こんな社会になったよ、ということ伝えてあげたいという気持ちもあり、私は相変わらず言い続けているわけです。

そして、また次の点を見つけてしまったのです。これは形になるかどうか、いえ、形にしてみせますが、最後にこの話を皆さんと共有したいと思います。皆さん、どう思われますでしょうか。これは皆さんのお力もお借りすることになるかもしれませんので、聞いていただけると嬉しいと思います。

今日のオンライン配信はコロナの影響ですよね。コロナに感染して入院をする、またはたとえ自分がコロナでなくても、コロナ禍で怪我をした、病気になった、入院をしなければならない状況がないわけではありません。そして今、皆さんはオンライン配信で見えていますので、たいいていの方々はご自宅にいらっしゃると思います。Wi-Fiがしっかりつながっていないと、この長い講演を聞くことはできません。プチプチと途中で切れてしまいます。

入院して、入院した部屋に無料Wi-Fiが繋がっていないということを考えたことはありますか？ファミリーレストランでもファーストフード店でも電車もJRも、たいいていの場合、無料Wi-Fiが繋がっています。そうしますと、オンラインで仕事ができたり、皆さんが友人とつながることが自由にできます。

そう思って生活できると思っている若い人たちが骨折をしました。救急に入院します。パソコンだけ抱えて入院します。開いてみるとWi-Fiが繋がりません。骨折したけども、仕事は病院でできると思っていたのに…、という状況に陥ります。例えばモデムやルーター、それからスマホでしたらギガ数を大きくするかすればいいではないか、という意見もあります。お金の余裕のある方は、どうぞそうしてください。しかしギガ数を増やしたり、Wi-Fiをつなげるためのテザリングをしようとしたりすると、それだけお金がかかります。どんどんと毎月かかるわけです。それどころか、緊急に入院した人は、大体その物を持ってこない人がいます。ご家族にWi-Fiのルーターを買ってきてと言っても、何それ？みたいなご家族もいらっしゃるでしょうし、全くオンラインが繋がらなくなってしまう状況が、実は今あります。

お年を召した方々が入院された場合、家族と全く面会ができないこのコロナ禍で、1週間でも2週間でも入院していたら、認知機能の低下が進んでしまいます。もとの病気が治ったとしても、自宅に帰ったら認知症の症状が進んでいたなどとなれば本末転倒です。家族にも会えない、家族と交流もできない、そんな患者さんがいます。

一方、最近ものすごく切実なお話を聞きました。小児病棟です。小児がんの半分は白血病で、急に発症し、病院に連れて来られます。病院に行くということだけでも、小学生や幼稚園児はもう恐怖でたまりません。「今日から入院です」となってもコロナのため、両親は付き添えず、帰されます。もう「ママー、パパー」と泣きわめきます。それでも無理やり病室へ連れて行かれて、治療が始まります。日頃、スマホで遊んでいる子どもたちですが、それはたいいてい親のスマホですので、親はスマホを持って帰ります。そうすると、子どもたちは一切パパやママの顔が見えなくなります。どんどん心が荒れてくるそうです。先生方も困ってしまい、どうしようかと思っている時、私がWi-Fiを院内でつけたらいいのではないかと言いました。コロナで受診控えの人が増えていて、東京にある大手の小児医療センターですが、20億円の赤字を抱えていたので、Wi-Fiをつけてくれなどと、どこに言うのかと言われました。

そうか、と思い、早急に調べてみました。言われてみれば、姪が1か月だけ入院していた時も、Wi-Fiが繋がっていませんでした。姪はタブレットを持ってきていましたが、Wi-Fiが繋がっていないため、私が用事で行くと、「貴子さん、携帯貸して」と、私の携帯で子どもたちとつないでいました。私のものを貸せばいいというぐらいで、その時に私は気づきませんでした。貸せない人たちもいっぱいいました。そしてこのコロナ禍で、多くの方たちが家族と会えなくなっています。ですから大病院でもWi-Fiが繋がっていない、もしくは有料個室なら繋がっているところもありますが、無料だと繋がっていません。それから新病棟を建てたところにはWi-Fiをつなげたけれども、もともとの

旧病棟にはつながっていません。

しかし看護師さんたちは皆、電子カルテを持っています。今100%、入院施設は電子カルテです。Wi-Fiがつながっていない病院はどこにもありません。逆に言えば、患者さんが入院してきた時に、Wi-Fiを切っているということです。患者さんたちにつながれないように何か操作をしているということです。その方が費用がかかるのではと私は思いますが…。そうになっているのには、理由がありました。患者さんには寝ていてほしいとか、今まではサービスだった、そんなサービスにいちいち目くじらをたてなくても、と言われました。

しかし、このコロナ禍でオンラインがつながらないということは死活問題の方も大勢いらっしゃいます。今、病院の入院施設でWi-Fiがつながることはサービスではなく、ライフラインだと私は思います。ですから、今院内Wi-Fiを取り上げて、コロナ禍の予算として取り上げてほしいと思います。幸いにもデジタル庁ができましたから、早速デジタル庁の方が香川県出身の議員さんらしいのですが、その辺りの方々とつながり始めていますので、直接お話しすることが間もなくできそうです。たまたま知り合った方ということもありますが、まだ本人とは会っていません。これもオンラインでつながる予定です。

皆さん、もしご自分をご病気になられて入院をしても、これをご視聴いただいている方は日頃、普通にWi-Fiをつないだ生活をされていると思います。それがパタッと途切れるということを想像していただくと、ありがたいと思います。それも私は気づかなかっただけなのです。お医者さんたちも気づきませんでした。医者に、「本当だね。病院の中にWi-Fiつながっているのに、患者さんにはつながっていない、ごめんね」と言われました。気づかなかったということです。

骨髄バンクも不妊対策もがん治療の在宅治療もそうですが、私は決して国を動かそうとか、そんなことを考えたわけではありません。“気づいたことを発信してきた”だけでした。それを点にし、線にして、それを面にして立体にしてくださいって、社会に戻していく…。どうか皆様方におかれましては、その“点”を発信し、それを“線”にすること。そのようなお手伝いをこれからも一緒にしていただけると嬉しく思います。ちょうど時間になりましたので、これにて講演は終了します。質疑応答を受け付けますので、どうぞよろしく願いいたします。皆さん、ご清聴ありがとうございました。

(司会) 大谷さん、ありがとうございました。ずっとお話しを聞いていまして、本当に大谷さんはパワーがありますね。

(大谷) おそらく発信していくことが大好きなのです。

(司会) オーラもパワーもありますし、画面を通してでも、とても圧倒される迫力を感じました。ご自分が経験して気づいたことを周りに働きかけ、一つ一つ実現しているとおっしゃっていましたが、チャットルームにもいろいろな意見をいただいています。「大谷さんの伝える力や行動力を強く感じました」。また「相手の立場を当事者の立場で考え、行動していく姿勢に感動しました」。



(大谷) ありがとうございます。

(司会) こういった質問もいただいていますので、ご紹介します。「何か始めたいと思った時に、なかなかすぐには動けないのですが、大谷さんにとっての一番の原動力は何でしょうか」。

(大谷) “怒り”だと思います。実はこの質問はとても多いので、すぐ答えられます。私が発病した時、「なんでアメリカには骨髄バンクがあんのに、日本にはないねん！」と思ったのです。怒ると大阪弁がすごく出てきます。そして3年経ち、「こんなに元気になったのに、なんで子どもができひんねん！」と思いました。そして、姪の時も、「なんで姪は4歳の子と1日でもいたいのに、そんな普通のことが叶えられへんのか！」と思いました。また、もし私が入院した時に、Wi-Fiがつながっていなかったらどうしよう、月々のお金が大変だと思ったわけです。たぶん“怒り”だと思います。

25歳までは、他力本願で生きてきました。怒りを怒っているだけで…。でも、たまたま命と向き合ったので、怒りを怒っているだけでは間に合わないと気づいたのだと思います。何か行動するなど考えていませんが、怒りを喋らないと気が済まないのでしょうか。なぜでしょう。そんな感じで怒りです。

(司会) その怒りの先に、すべていろいろと思ったことを実現されています。



(大谷) 私一人でしたことではありません。本当に点を線にし、その線を面にしてくださる人がいるからです。

(司会) 周りの人を巻き込む言葉の力がすごくあると思いました。そこでこういった質問もきています。「偶然の出会いが縁になっていくことを体現されていらっしゃる大谷さんですが、ご自分の思いを周りに伝える際に心掛けていることや気を付けていることはありますか」。

(大谷) はい。先ほども少し言いましたが、私は不妊になって悔しくて、他の多くの人たちも悔しがっているだろう、だから何か形にしたいと思い、ワーと騒いだ時がありました。しかし、「そっとしておいてほしい」と言われました。「あなたはそれでいいけれども、私は嫌だ」と言われたり、「そういうレッテルを貼られるのが嫌だ」など、自分がいいと思ってもそうではない、ということを言われたことがすごく心に残りました。私自身がカウンセラーの資格を取ろうと思って勉強に行った時にも、同じようなことを言われました。「あなたは乗り越えられて、他の人も乗り越えられると思っているかもしれないけど、そんな人ばかりではない。だから常に一步引いた目で行動した方がいい」と教えてもらいました。今、一步引いてやれているかわかりませんが、常に聞くこと、特に一対一で喋る場合や相談を受けた場合は、とにかく環境を聞いたりして、社会に物を申す時は一般論として喋るようにも心掛けていますし、悔しい気持ちを同じように、できる限り必死で聞いて、その悔しい気持ちが共有できた時に、何か行動を起こそうと考えています。つつい先走ってしまう性格ですので、これでも、できる限り、一呼吸おいて…と気をつけています。

(司会) 怒りが原動力というお話がありました。25歳の時に活動を始めてから34年間とおっしゃいましたが、この活動を通じて得た喜びは何ですか？

(大谷) “人”財産でしょうか。本当に多くの方々と知り合えたことが私の財産です。怒ってくださる方も共感してくださる方もいるし、もしかしたら嫌だと思われているのかもしれないですが、どんな方とでも生きているから知り合えたので、生きていることの感謝と、プラス、そこで行動したことによって知り合えた方々との縁です。“人”財産は何ものにも代えがたいものがあります。

(司会) そういった大谷さんだからこそ、おそらく周りの方も大谷さんのために動こうかと思えるのでしょうか。

(大谷) そう言っていただけると嬉しいです。うるさいから付いて行ってやろうという人もいるかもしれませんが、皆さん、よろしくお願いします。

| 記念シンポジウム |

スポーツから変える世界と未来

■日時：11月14日(土) 14:15~15:55



<講演者・シンポジスト>

宮嶋 泰子

スポーツ文化ジャーナリスト
(一社)カルティベータ代表理事

<コーディネーター>

來田 享子

中京大学スポーツ科学部教授
同大学院体育学研究科研究科長

<シンポジスト>

兼松 由香

2016年リオデジャネイロ五輪
ラグビー日本代表

堀田 崇

NPO法人LOVELEDGE理事長／弁護士

村木 真紀

認定NPO法人虹色ダイバーシティ代表

(來田) 皆さん、こんにちは。今ご紹介いただきました、來田享子です。どうぞよろしくお願いいたします。このシンポジウムのテーマは、「スポーツから変える世界と未来」ということで、本来は2020東京大会から2ヵ月というところで皆さんと一緒にすることになっていりましたが、残念ながらそうなりません。しかし、今日は「スポーツには社会を変える力がある」ということ、スポーツの力をどのように活かせるかということについて、大会が延期になり、コロナ禍にある社会の中で、皆さんとともに考えたいと思います。

このシンポジウムでは、最初に宮嶋泰子さんにご登壇をいただき、基調講演を行っていただきます。その後、合計4人の先生と一緒にパネルディスカッションを展開していくという形で進めていきます。参加者の皆さんはオンラインの画面で私たちを見ていただいておりますが、ご質問等あれば、チャットにどんどん送っていただき、後半では、いただいたご質問の中から、一部を取り上げて共有したいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。それでは最初に宮嶋さんから基調講演をお願いします。宮嶋さん、どうぞよろしくお願いいたします。

(宮嶋) よろしくお願ひします。宮嶋泰子と申します。私はテレビ朝日にずっと勤めていました。今年1月に、正式に退職をしたのですが、43年間、ほとんどスポーツフィールドでした。私は体育大学でスポーツの勉強をしたわけではありませんので、取材を通して毎回、スポーツの意義や力とは何なのだろうと考える日々でした。そうしたものから今日は皆さんに何かお話しができたと思います。

さて、全体的なテーマは「スポーツから変える世界と未来」ですが、私自身は本当に43年間を振り返って、スポーツの意義、スポーツが持つ力とは、を考え続けてきましたので、そのお話しをして、未来への一步を考えるという構成にしたいと思っています。

現在、私はスポーツ文化ジャーナリストとして活動しています。「カルティベータ」という一般社団法人を立ち上げ、その代表理事をしています。今日の柱は8本立てました。

1. 「仕事としてスポーツと出会う」
2. 「1980年モスクワオリンピック」
3. 「東京国際女子マラソン」
4. 「アナウンサー兼ディレクターとして」
5. 「障がい者のスポーツ・パラリンピック」
6. 「難民とスポーツ」
7. 「イスラム国家の女性たち」
8. 「日本のスポーツ界における問題点」としました。

まず1番目ですが、本当に私は仕事に恵まれ、様々な方と出会い、インタビューをし、世界中へ行くことができました。その中からいろいろ得た経験はあるのですが、もともとは1977年にアナウンサーとしてテレビ朝日に入社しました。希望は報道系で、外国と日本の違いを考える番組などをやりたいという思いはあったのですが、現実的にはスポーツ担

当を命じられ、本当にショックでした。

といいますのも、大学で学んだのはフランス文学で、人間の生き方や哲学でした。子どもの頃からお転婆で、運動部活動をしていたというだけで、スポーツについて何か深く勉強したという経験がほとんどありませんでした。テレビ界を見ても、スポーツを担当する女性はディレクターでもほとんどなく、唯一、庶務の女性がいたというぐらいで、他局を見てもどなたもいらっしゃいませんでした。そんなことから本当にショックでした。

実は、1980年に開催され、日本が出場できなかったモスクワオリンピックの独占中継権をテレビ朝日が獲得したため、そのための要員ということで、私が担当することになり、モスクワに向けて私は様々な取材をしました。海外から日本に来て、国際ジュニア体操に出場するハンガリーの選手にインタビューをした時、はたと気づいたのです。ハンガリーは当時、社会主義国家ですし、なかなか状況を知ることができない国です。それが選手と話している内に、細かいところからいろいろなものが見えてきました。そこで「スポーツという穴を通して、世界の在り様が見えるのかもしれない」と思い、俄然、このスポーツという穴から世界を見ることに興味を持ち始めました。



そして2番目にあります1980年のモスクワオリンピックです。ここで私は、“政治とスポーツ”というものすごい大波にあらわれるものに激突しました。これは、80か国が参加した少し寂しいオリンピックの開会式の様子です。当時、山下泰裕さんは、出場すれば絶対金メダルは間違いなしと言われ、瀬古利彦さんも同様でした。JOCの現会長の山下さん、それからマラソンリーダーの瀬古さん。この二人が今東京に向けて牽引してくれていますが、本当に彼らにとっては大変辛いオリンピックでした。

ちょうどこのモスクワオリンピックが行われる半年ほど前の1979年12月に、ソビエトがアフガニスタンに侵攻します。これをもってアメリカのカーター大統領が西側諸国にボイコットを呼びかけました。日本政府からはJOCに通達があり、日本はボイコットを決めるわけです。政治に利用され、政治の波にのまれていくスポーツというのを目の当たりにしました。

当時の日本のスポーツ界を牛耳っていたのは99%男性です。私がモスクワに行きますと、イギリスは、政府が駄目といったにもかかわらずイギリスオリンピック委員会が独自に選手を派遣し、更にフランス、イタリア、オランダ、ベルギー、ポルトガル、スペインもオリンピックに参加していました。またオーストラリア、ニュージーランドというオセアニアの2か国も参加しました。国旗の代わりにオリンピック旗、またはNOCの旗を使用しての入場行進でした。スポーツは、国の政府の判断を超えて、独自の判断を下せるものでもあることをここで知ったわけです。しかしながら、日本、西ドイツ、韓国、イスラム諸国、反共的立場の強い諸国50か国はボイコットしました。国旗を持って入場したのが65か国、オリンピック旗が14か国、そしてNOC旗が2か国でした。しかし、ここで私は、“国によってスポーツの持つ価値が異なるのだ”ということも同時に知るわけです。

続いて3番目の「東京国際女子マラソン」です。世界中から本当に素晴らしい女性たちが来ました。私は彼女たちから、多くを学びました。テレビ朝日の中継したこともあり、私はこの1979年開催の“世界初の女子マラソン”である東京国際女子マラソンで、リポーターやインタビュアー、実況ということもやらせていただきました。

第一回目のレースで、ジョイス・スミスさんがハンカチを持ってずっと走っていました。当時は“スミス婦人”と言われていたスミスさんに、「なぜハンカチを持って走っていたのか」とインタビューしたところ、「道路に唾を吐くのははしたないので、こうやってハンカチで唾や痰を取っていました」とおっしゃいました。翌日の新聞では、「実にレディらしい」というような表現がされていました。

実はスミスさんというのは、もともと3,000メートルの世界記録保持者でもあり、ミュンヘンオリンピックでは1,500メートルにも出場していました。世界にはこういったアスリートがもう既に存在していたわけです。しかしながら日本には、当時42.195キロを走る女性がいませんでした。日本陸上連盟は、急遽合宿を組み、大学で3,000メートルを走っている学生や趣味でジョギングをしている女性を集めました。この第一回の大会で、村本みのるさんという、新聞配達をして36歳でジョギングを開始した女性が7位に入りました。こんなスポーツの時代でした。

このマラソンがきっかけとなり、その5年後、1984年のロサンゼルスオリンピックに女子マラソンが入ることになりました。実は女性も42.195キロを走れるということがわかったことにより、むしろ長距離は男性よりも女性の方が向いているのではないかと、というような研究発表をされた方もいらっしゃいます。

女性は長い距離を走れないと言われた時代がありました。この写真は、人見絹枝さんです。1928年のアムステルダムオリンピック、女子800メートルで人見さんは銀メダルを獲得しました。しかしゴール後、全員倒れてしまったため、「女子には200メートルより長い距離は体力的に無理である」と国際陸連が判断しました。以後、800メートルが復活



したのは、その32年後、1960年のローマオリンピックの時でした。42.195キロを東京国際女子マラソンで走れることが実証され、オリンピックにマラソンが入ったという流れです。

時代的に見ますと、このアムステルダムオリンピック、女子の陸上競技が初めてオリンピックに入った大会です。歴史を見ますと、イギリスではその10年前に女性に投票権が認められ、かつ、アメリカの婦人参政権は1920年なのです。その8年後にアムステルダムで女子の陸上競技がオリンピックにりました。

これは女性の参政権がなかった時代のポスターですが、文句を見てみますと、女性が「そろそろここから出ていい時期なのに。鍵はどこにあるのでしょうか 犯罪者、狂人、そして女性たちは国会選挙に投票できない」と書いてあります。いずれにしても、スポーツと時代の出来事はリンクするというのを、ここで私は知りました。ちなみに日本の婦人参政権は1946年、第二次世界大戦が終了してからのこととなります。

さて、東京国際女子マラソンで驚いたことの一つをご紹介します。この左側の写真は当時ソビエトから来たツフロさんで、途中で足が痙攣しました。そうしたら、なんと、胸のゼッケンを留めていた安全ピンを外して、自分の太ももに刺して痙攣を止めようとしてました。これを見て男性は、「女は何をやるかわからない、たくましい」と言いました。

私をもっと驚いたのは、ツフロさんと一緒に来たイワノワさんです。イワノワさんはこの大会で優勝しますが、実はイワノワさん、あとでわかったことですが、この時、妊娠していました。その翌々年来日した時、イワノワさんが「今、子どもがいて」と言うので、「いつ生まれたのですか」とこうやって計算していたら、「これは、前回お走りになった時、妊娠していらしたということですか」「そうなのよ」と顔を真っ赤にしました。

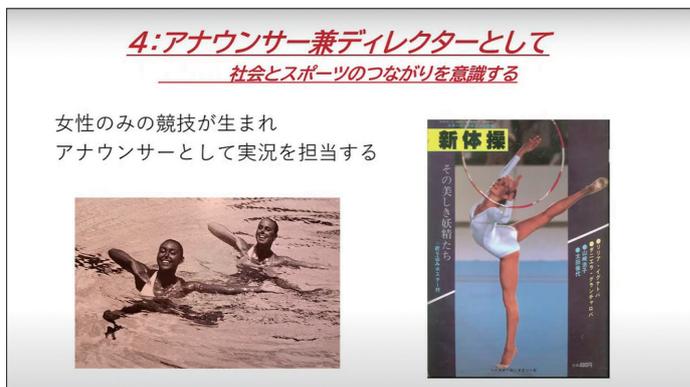
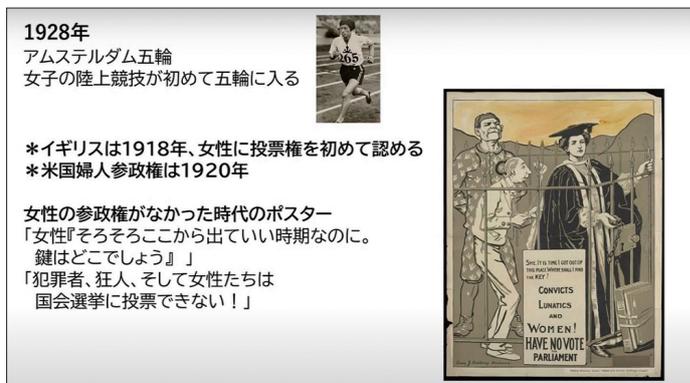
当時、共産圏では、妊娠すると、女性がホルモンの関係ですごく強くなるという研究をしていた方がいるということを知っていました。その研究では、妊娠して、その後墮胎してしまうというようなケースが報告されていたので、彼女にそれを聞こうかと思ったのですが、顔を真っ赤にして「本当に知らなかった。あとでびっくりした」ということでしたので、彼女はそのケースではなかったのかもしれないと思いました。いずれにしても、女性の体というのは、本当にまだまだ未知数という時代でした。

次にこの写真をご覧ください、女性マラソンランナーで、ご主人とお子さんがいます。1980年代にマラソンブームがやってきますが、ノルウェーのイングリッド・クリスチャンセンという選手です。元クロスカントリーのヨーロッパジュニアチャンピオンでしたが、マラソンに転向し、何と世界最高記録を出しました。そして出産して尚、記録を更新するという素晴らしい選手が誕生しました。海外の選手は、試合で知り合ったり、お互いに電話したりして、「あなた、妊娠した時はどんなトレーニングをしたの」「出産した後はどうやってリカバリーしていったの」など、情報交換をしていました。ところが、そういう意味で言うと、日本は遠く、言葉の問題もあったため、著しくそういった情報から閉ざされてしまっていました。

実は私は、2012年にスピードスケートの岡崎朋美さんが妊娠した時、いろいろと婦人科の先生に聞いてみましたが、「日本にはまだ何のデータもない、トレーニングに関する事も何もわかっていない」と言われました。これが当時、産婦人科医のナンバーワンの先生からの答えでした。

さて次に、私はアナウンサー兼ディレクターとして仕事を始めるわけですが、ここでは社会とスポーツのつながりを意識するようになりました。ちょうど1984年のロサンゼルスオリンピックで、女性だけの二つの種目が採用されました。シンクロナイズドスイミングと新体操です。こうした種目に関して、アナウンサーとして実況を担当するようになりました。この時、男性アナウンサーが「僕は女性が足を上げたり広げたりしているのを、どう喋っていいかわからないから、やって」と頼まれ、私が引き受けてやることになりました。

それから、同時に夜のスポーツ番組でスポーツニュースキャスターを担当するようになりましたが、これは当時、私が初めてでした。今は、ほとんどどこを見ても、スポーツニュースは女性が伝えています。当時女性がスポーツやニュースを伝えるというのはまずありませんでした。「この日、江川がナイスピッチング」と言えば、「選手の名前を呼び捨て



にするんじゃない」というような苦情や抗議電話がきました。そんな時代でしたので、江川さんがとか、江川ピッチャーが、などという言い方をしていました。

たまたまこの時、報道局仕切りのニュース番組でしたので、プロデューサーからは、「スポーツも一つの社会現象として扱うように。単なる結果だけでなく、それが社会的にどのような意味を持つのか考えるようにしなさい」と言われ、そのお陰でいろいろなことがわかり始めました。

1983年、「テレビスタジオ」という番組で野村克也さんとご一緒し、私がこの番組のキャスターになりました。私は当時、バレーボールの日本リーグに全部ついて中継のリポーターをしていましたので、プロデューサーから「バレーボールに詳しいのだから、自分でこの企画を作ったらどう？」と聞かれました。「では、やってみます」と担当し、いきなり20分の企画を制作しました。ここでは自分で番組を作る面白さに目覚めました。

その後は、土日の夕方の「スポーツリーダー」のキャスターをし、その中の3分コーナー企画を2年間にわたって、自分一人で企画、取材ロケ、編集、原稿書き、ナレーションを担当し、本番の放送をしました。これはとても大変です。当時、他のニュースもいろいろ入ってくる中で、自分の企画を編集するため編集室に入り、「そこ、はい、カット。」などと言いながら、そこで本番用のメイクをし、その他のニュース原稿のチェック、リハーサルもしてというような、地獄のような時間でしたが、楽しかったです。それで地力はついたかなと思います。

「ニュースステーション」という番組が始まって、ディレクター兼リポーターとなり、年間15本の特集を作り始めました。これは33年間続く仕事となります。ここに橋本聖子さんの写真を入れてありますが、橋本聖子シリーズは15本作りました。当時は女子アスリートを多角的に長期間捉えたものは少なかったということもあり、ニュースステーションそのものが大体20%の視聴率を誇るものでしたので、そこでもう22~23%は当たり前、30%に近い視聴率を取るという形で、「女性のスポーツ」というものに初めてスポットが当たり始めたと思います。

最初は、なぜこんなことをするのか、一体何があったのかというような、選手の心の中を覗いてみようと思いました。私はフランス文学を学びましたので、こういうことに対しては非常に興味があったのです。

ところが、これが何作か続けていくうちに、橋本聖子さんが25歳の時、周囲から、「そろそろやめたら」と肩を叩かれるようになってきました。これは、彼女が富士急行に入社して7年目のことです。当時、実はOLも25歳ぐらいで肩を叩かれる現象があった、ということです。要するに社会一般で女性が直面している問題とスポーツ選手が抱えている問題というのは非常に似ている、同じだということに気づきはじめました。私はそれ以降、女性アスリートを意識的に取り上げるようになり、更に社会問題とリンクさせるようになりました。

続いては、「障がい者のスポーツ、パラリンピック」についてです。“今あるものを数える。”「ニュースステーション」というのは、私の場合、最終的にプロデューサーの許可があれば、自分で企画を立てることができたので、他の人がやらないことをやろうと思っていました。アナウンサーの新人時代から日本点字図書館で朗読ボランティアをしていましたので、障がいを持った人のスポーツは一体どうなっているのかということに非常に興味を持ったわけです。

1992年バルセロナパラリンピックを目指す車いすレースの選手たちを取材し、初めて見ましたら、これが大変で、これは取材をして皆に知ってもらって価値が十分にあると思った次第です。

例えば車いすと言いますが、脊髄損傷と頸椎損傷の二つがあります。頸椎損傷というのは首、ここを損傷してしまった場合、まず体温調節ができず、汗をかくことができません。手首の力もないというような形で、一般に言う脊髄損傷よりもいろいろな症状が重くなります。彼らが陸上競技のトラックで走った時、本来であればこれだけ運動すれば汗が出るはずですが、ところが体温が上がっていても、彼らの機能として汗が出ないわけです。そこへマネージャーやコーチが走っていき、ジョウロから水をザーとかけたり、霧吹きで汗の代わりに彼らの身体に撒いて彼らの体温を下げるというようなことをしていました。なぜそこまでしてスポーツをするのか。そこにも実に興味を持ちました。

「ニュースステーション」ではアトランタのパラリンピック、更には長野のパラリンピックで連日速報、更にシドニーのパラリンピックも連日速報を入れました。これらにより、かなり当時としては、障がい者もスポーツを楽しむ時代になったと、皆さんは感じられたのではないかと思います。

この障がい者のスポーツの生みの親と言われるのがグッドマン博士という方ですが、「失ったものを数えるより、今あるものを数えよ」という言葉を皆さんに贈っていました。これも私は今とても大切にしていることの一つです。

アメリカの障がい者のアスリートを通して、環境の違いを知る番組も作りました。アメリカの車いすバスケットボールの第一人者、ランディ・スノーという選手は一人で生活をしていました。彼は自宅から車を運転して、空港に行きます。次の空港に着いた時にレンタカーを借りて試合

ニュースステーション

- ・アトランタパラリンピック特集 18分 視聴率21%
- ・長野パラリンピック連日速報 + 年末特集 +1時間特番
- ・シドニーパラリンピック連日速報 + 1時間特番

<失ったものを数えるより、今あるものを数えよ>
グッドマン博士の言葉





会場に行きますが、車いすなのですね。車いすの人は今ここに写真があるような、こういったものを持っています。これをアクセルとブレーキに付けることにより、手でコントロールすることができるわけです。これさえあれば、レンタカーを借りられる。しかし日本には、これは許可されていませんので、日本の人たちはこういうことができないのだということを知りました。

さて、長野パラリンピックは日本で行われたということで、ロールモデルが現れました。アイススレッジレースの二人の選手、一人は金メダル2つ銀メダル2つを取った土田和歌子さんです。もう一人が松江美季さん、金メダル3つ銀メダル1つでした。この二人はその後、全く違う形でパラリンピックに貢献していきます。

土田和歌子さんをご存知のとおり、その後、4年ごとのパラリンピックに全て出場しています。そして、2020年東京大会では、パラのトライアスロンに挑戦することにしています。ここに写真を載せていますが、出産もされました。帝王切開をしたらと勧められるお医者さんに、「自然分娩で産みます」と、見事に男の子を産みました。右の写真は旦那さんです。旦那さんが赤ちゃんを抱えています。当時としては本当に珍しかったのです。彼がコーチ、マネジメント、全てのアシスタントをして、ここまで土田和歌子さんは成長してきたわけです。

それからもう一人のマセソン（松江）美季さんは、東京学芸大学を卒業した後、イリノイ大学に入学しました。そして、カナダのアイススレッジホッケー選手で、長野大会にも参加したパラリンピアンと結婚しました。今は二人の男の子のお母さんです。実は松江さんは学芸大学に入った時から、学校の先生になりたかったのですが、事故に遭い、車いすの生活になりました。日本では、車いすでは学校の先生は無理だと諦めていたわけです。カナダに行った時、「本当は先生になりたいけど無理よね」と言ったら、「なぜ無理なの？」と周りの人に聞かれたそうです。「だって車いすだもの」「なぜ車いすだったら先生になれないの？やればいい」と後押しをされ、彼女は小学校の教員として7年間勤めました。

日本の現状もカナダの現状も知るマセソン美季さんは、今IOC国際オリンピック委員会、及びIPC国際パラリンピック委員会の教育委員を務めています。何をしているかといいますと、教材を作りました。両国の違いを知ることがありますから、こういう風にすれば障がいを持った人でも、きちんと生活をし、楽しくスポーツができるのだ、というような教材です。IMPOSSIBLEという言葉にアポストロフィーを付ければ“I'M POSSIBLE”となります。“I'M POSSIBLE”という言葉は造語ですが、「私はできる」という意味にもなります。世界中を回り、世界中の学校の先生にこの教材を説明し、どういう授業をすればいいかということも教えています。勿論、日本でもこれを行っています。

しかし当時、私がこうやっていち早く障がい者のスポーツ取材している中で、こういったことを全く理解しない人もいました。特にショックだったのは、91年に障がい者のスポーツ取材し始めた頃、アナウンス部の男性に「障がい者を見世物にして、どういふつもりなんですか。あなたもその内に因果応報で障がいを持つようになります」と言われ、がっかりしました。ある意味まだまだ日本の中には古い因習が存在することを認識し、これを変えていくことが私のミッションだと思いました。

この辺りから、私は女性選手のロールモデルを番組で提示していくことを始めます。平昌オリンピック、スケート金メダリストの小平奈緒さんも、中学生の時に「宮嶋さん、将来宮嶋さんに番組を作ってもらえるようになります」と言っていたのですが、実にまさにそんな選手になりました。

大学時代も自分でバイオメカニクスの動作解析をして卒論を書きました。そのようにやはり自分で研究しながら、スポーツとして活かしていく。そういう選手が私は理想だと思いますので、そういう例を番組で紹介したりもしました。

何が選手やコーチの理想形かということに関しては、私は本当にいろいろな大学の先生方に感謝しなければいけません。といいますのは、いろいろな審議会やいろいろな勉強会にたくさん入れていただき、皆さんがどういう方向性に向かって研究されているかということをお陰だと思っています。ですから、会社で番組だけを作っていたのではわからないことを様々することができ、これがとても大きかったと思います。

そして「難民とスポーツ」です。“人はパンのみにて生きるにあらず。”私はアフリカとネパール、3回の難民キャンプ取材をしています。一回目は2007年にネパールにあるダマク難民キャンプに、1976年のモントリオールのバレーボールで金メダルを取った人たちと一緒に、早稲田大学の学生を連れて行きました。白井貴子さん、矢野広美さん、金坂克子さんの3人ですが、驚いたことに、「金メダルが役に立ったと思ったことは、これまで一度もない」とネパールのUNHCR国連難民高等弁務官事務所の責任者の方に話していました。地方で生活していると、「金メダリストのくせに…」と指をさされることの方が多いということでした。

ここで難民キャンプの生活をご紹介します。国連難民高等弁務官事務所の下、守られ、食事や生活の家はあるものの、籠の中の鳥のようだというのでストレスがたまり、密造アルコールを作って中毒になったり、DV（ドメスティックバイオレンス）、婦女暴行などが増加するというのが一般的な難民キャンプでの生活でした。

女性は子どもの頃から宗教的な理由もあり、仕事を手伝われ、遊びやスポーツをしたことがありません。私たちが行った3日間は、練習したり試合をしたりしたのですが、「こんなに自由に遊んだのは初めて。全くこんなに開放され



ることはなかった」というような話をしてくれました。

私はその後、番組を作るために3か月後、再び取材で同じ難民キャンプを訪れました。そうしましたら、若者の組織で自主的に定期的にバレーボール大会が開かれていました。それも、円でパスの練習をしている子どもたちは、男女が一緒になってやっているという、これまでキャンプの中では全く考えられないようなことが起こっていました。一緒に行った3人のメダリストにとっても、「初めて人の役に立った、金メダルを取って良かった」と初めて思ったということでした。難民の女性たちは自らの身体で自由に遊ぶ経験を積み、メダリストたちは自分たちが弱者の役に立つ存在だと認識した瞬間でした。

実はいろいろな写真がありますが、この右の一番下の写真は人ばかりです。スポーツが既存の障壁を崩すという、歴史的な出来事が起きました。難民キャンプというのは、周りの村と、とかく対立していることが多く仲が悪いのです。といいますのは、難民キャンプにはいろいろな物資が運ばれてきますが、周りの村は貧しい人たちが構成されています。時には燃やす薪をめぐる殺人事件も起きるぐらいです。それが、オリンピックのバレーボール選手たちがやって来たということを知りつけ、30年以上のこの難民キャンプの歴史の中で、初めて、「試合に僕たちも出させてほしい」と村人がやって来たのです。ここで初めて交流が行われ、本当に感動的でした。最初、握手から始まり、村人も難民も合わせてのバレーボール大会になりました。スポーツが本当に壁を壊した瞬間でした。

さて、毎回私たちがネパールに行くわけにもいかないのです、これをきっかけに、日本に45年程前にやってきたインドシナ難民を中心とした、アジアスポーツフェスタを行いました。場所は、私が卒業した神奈川県立外国語短大付属高校が合併してできた、横浜国際高校です。多くの方にお手伝いいただいて実施しました。多くの方、特に女性にご参加いただくように促しました。女性が存分にプレーを楽しんでもらうため、子どもたちはこうやって別の部屋で、東海大学の女子の体操部の人たちに面倒を見てもらって下で遊び、女性は上で思い切りバレーボールをするというような形にして、最後には、皆で障害物たすきリレーをするというような構成にしました。

難民として来た女性たちは勿論、故国ではスポーツをするという機会はありませんでしたし、日本に来てからは生きるのに必死で、こんなスポーツをするなんていう経験もほとんどない方ばかりでしたので、これは年に一度でしたが、彼女たちにとっても大変いい経験になっています。

文化理解をするため、左はカンボジアの踊りの方ですが、これは見世物の踊りではないのです。王室古典舞踊学院で子どもの頃から教え込まれた方で、こうした踊り子たちの90%がポルポト政権によって狙われ殺されてしまいました。ですから、いの一番に逃げてきたということで、彼女が皆さんのために、「おばちゃんになってしまったけど、これは若い女の子のものなのよ」と言いながら伝統舞踊をしてくださいました。

そして右の写真の真ん中にいらっしゃるのはラオスからの難民です。プンサワットさん、お料理が大好きで上手です。周りにいらっしゃるのPTAのお母さん方です。学校のPTAのお母さん方にお料理を教え、それを皆でお昼にいただきます。こういうことから文化の理解も進みました。

アジアスポーツフェスタを10年間続けて何がわかったかということ、最初はベトナム、カンボジア、これはもう敵同士で銃口を向け合った相手ですから、敵対心剥き出しだったのです。それが7年目でビックリしました。人数が足りないということでベトナムとカンボジアの合同チームを作っていました。これには私は本当に驚きました。また、食を通してインドシナの民族文化に高校生が理解を示しました。本当にスポーツを通してのダイバーシティ&インクルージョンが進んだと思わずにはいられません。

それから私は、瀬古さんとイカンガーと一緒にアフリカのタンザニアのキャンプにも行きましたが、ここはRIGHT TO PLAYというカナダの組織がいろいろとお手伝いしてくれました。難民の子どもたちに重要で必要なことは、「あなたはコミュニティの中の大切な一人なんだよ」ということを、スポーツを通じて教えるということだったそうです。これも勉強になりました。

リオオリンピックの際に難民選手団が初めて参加し、東京にも選手団がきます。この難民選手団を率いるのは、テグラ・ローペです。ローペさんはご存知のとおり、マラソンの女王で、素晴らしい優勝経験を持っています。そして彼女に取材を行ったことがあります。たくさんいる兄弟のお世話をし、大学に出したり、病気になった時には手術費用なども全部みたりとか、そういうことも全部する彼女の優しさが、今難民の選手に走り方を教え、選手団となっています。「真に強き者は弱き者を助け、生きる希望を与える」。これは昨日の基調講演で上野千鶴子さんがお話しをしてくださったことですが、やはりこういう精神がアスリートにもあるということです。





ここからは「イスラム国家の女性たち」です。2012年ロンドンオリンピックから、すべての国が女子選手を派遣するようになりました。ヒジャブを被ったりして参加していますが、その中で私が取材をしたのは、2004年アテネオリンピックの時に柔道の代表として出たフリバ・ラザイーです。彼女は柔道をしたのですが、お母さんは大反対で、唯一、お父さんとお兄さんは理解を示してくれました。しかし、アフガニスタンの女性に求められているのは、10代で結婚し主婦となり子どもを産むことです。彼女は初めてインドに大会に出かける時、兄弟の一人から、「飛行機が墜落しますように。お前のような伝統的でないアフガニスタンの少女は、家族にとっても隣人にとってもコミュニティにとっても邪魔で恥だ」と言われたそうです。本来、守ってくれるはずの家族からも、このように言われるのです。彼女はオリンピックでは残念ながら1回戦で敗れました。世界チャンピオンに4回なったスペインの選手に敗れましたが、家に電話をすると、お父さんは「大丈夫だ。月への一歩のようなもの。歴史を作ったじゃないか。アフガニスタンにいる他の女性たちのために道を切り開いた」と言ってくれたそうです。

これでホッとしたのも束の間、実はオリンピックの出場はメディアにも取り上げられました。オリンピックの試合で頭にヒジャブを被っていなかったということで、隣人やコミュニティから脅迫を受け、その後10年間、身を隠さざるを得ませんでした。難民申請を出して、現在はカナダに住んでいます。第三国定住をして、ブリティッシュコロンビア大学で学位を取得し、現在Girls of Afghan Leadを設立し、アフガニスタンのスポーツをする少女たちを支援しているということです。今年の1月に東海大学に来たのですが、その時に驚いたのは、アフガニスタンから来た選手の一人が、「4日間連続で殴られずに朝起きたのは初めて」と言うのです。アフガニスタンで柔道をしていると、毎朝兄弟から殴られていたそうです。しかし、日本から帰った後は堂々としていたということもあり、兄弟たちは殴らなくなったそうです。そして今、アフガニスタンの女子たちの間で、非常に武術、柔道が盛んになっています。暴行が行われる日常で自己防衛に役立つということ、そして、自分の人生と身体をコントロールするのに柔道はとても役立つということです。スポーツは人生を切り開く武器となるということです。

最後に「日本のスポーツ界における問題点」をお話しします。私は体育会系と呼ばれるシステムからの脱却を、是非してほしいと思っています。実は今から7年前、「暴力根絶宣言」というのが行われました。「殴る、蹴る、突き飛ばすなどの身体制裁、言葉や態度による人格の否定、脅迫、威圧、いじめや嫌がらせ、更にセクシャルハラスメントなど、これらの暴力行為は、スポーツの価値を否定し、私たちのスポーツそのものを危機にさらす」とあったのですが、実はこの“セクシャルハラスメント”は最初入っていませんでした。これは850人ほどが集まったの会議でしたが、この宣言にどうしても入れてほしいと拳手し、「多くの選手たちを見てきたけれども、セクシャルハラスメントを是非入れてほしい」と提案し、入れていただきました。

この体育会系というのは軍隊的なヒエラルキー、理不尽な忍耐、年功序列、上意下達、無意識の男尊女卑、自己犠牲の強要、同調圧力などがあります。勿論、体育会系でいい関係を築いている方もいないわけではありません。いいところがあるのも確かにわかりますが、こういう悪いところの方が多いと思います。こうしたものはハラスメントの温床になります。実際にハラスメントを訴えても、組織の体面が第一で、上層部がもみ消してしまうという競技団体も存在するほどです。そういうことではなく、一人ひとりが尊重されるスポーツの環境、これが整った時に初めて、私はスポーツで変える世界と未来が生まれるのではないかと強く思います。

今は13人に一人がLGBTQと言われる現代社会です。そして年齢や性別にとらわれず、好きなスポーツをする権利が、誰にでもあります。シンクロも男女のミックスができるようになりました。よりすべての人の参加により、新しいスポーツの価値が創造されること。「より速く、高く、強く」という、こうした成長神話だけでなく、「より美しく、しなやかに、よりリズムカルに」更には、“より人間らしく”という価値も加えて、私はスポーツが変わってほしい、そして人間社会も変わってほしいと強く願っております。以上、ご清聴ありがとうございました。1分41秒、オーバーでした。

(来田) ありがとうございます。さすがアナウンサーとして鍛えたトークで、時間を最小限に上手く調整していただきました。本当にありがとうございます。

宮嶋さんからは、スポーツという穴から宮嶋さんがご覧になった世界、女性たちが乗り越えてきた壁を、歴史的なものも含めて紹介していただくとともに、それを多くの人に伝えるために、宮嶋さんご自身が乗り越えてきた壁ですね。そしてどんな変化が起きたのか。スポーツで世界を変え、より良い未来を作っていくため、これからどんなことを解決していかなければならないのか、ということまでを課題を含めてお話しをいただきました。本当にどうもありがとうございました。

それではこの宮嶋さんの基調講演を受けまして、今度は3名のパネラーの方を加えて、パネルディスカッションに入ります。最初にパネルディスカッションにご参加いただく方をご紹介します。宮嶋さんにつきましては、このままパネルにお入りいただきます。よろしくお願ひします。そして兼松さん、堀田さん、村木さん、3人の方それぞれに、私がご紹介するよりもご自身で自己紹介をしていただいた方がわかりやすいと思いますので、それぞれにご紹介をいただき

ます。それでは最初に兼松さん、お願いできますか。

(兼松) 兼松由香です。自己紹介をさせていただきます。私は2016年リオデジャネイロオリンピックに、7人制ラグビー女子日本代表選手として出場しました。現在は日本ラグビー協会女子7人制ラグビーのコーチを務めています。また中京大学大学院に在学中です。

私は、5歳の時に一宮ラグビースクールでラグビーに出会い、小学校6年生まで続けました。小学校ではサッカー、ミニバスケットボール、陸上部に所属し、中学、高校ではソフトボール部に所属していました。とにかく身体を動かすことが大好きな子どもで、市内のちびっ子相撲大会にも参加していました。19歳の時に15人制ラグビーワールドカップに出場し、結婚、出産を経て、34歳の時にリオオリンピックに出場しました。詳しくは後ほどのディスカッションで改めてお話しさせていただきます。

リオ五輪後に大学院に進学し、現在はコーディネーターの来田享子教授の下で、女子ラグビーの歴史研究を行っています。また、将来オリンピックを目指す選手たちの育成や、ラグビーを通して、様々な活動にも取り組んでいます。本日はどうぞよろしくお願い致します。

(来田) ありがとうございます。2016年リオ五輪ラグビー代表の兼松さんにご紹介いただきました。それでは次に堀田さん、お願いできますか。

(堀田) よろしく申し上げます。堀田崇と言います。私は愛知県弁護士会に所属する弁護士です。平成12年の4月に名古屋弁護士会、現在の愛知県弁護士会に弁護士登録をし、今年で弁護士生活21年目になります。普段は名古屋市中区の事務所で、企業の顧問として、様々なご相談を受けたり、例えば一般の民事事件、債権の回収や、労働問題、交通事故、相続などの問題、こうした多種多様な問題を取り扱っています。

私自身も、兼松さんのように子どもの頃から身体を動かすのが本当に好きで、中でも特にサッカーが好きでのめり込み、現在、この年でも、いまだに社会人リーグ、シニアリーグと、年代に合わせた自分のフィールドを見つけてプレーをしています。

サッカーを通じたご縁で、女子サッカークラブであるNGUラブブリッジ名古屋というクラブに関わり始めました。以前は名古屋FCレディースという名称でしたが、現在はNGUラブブリッジ名古屋というクラブになっています。

最初、関わり始めたきっかけと言いますのは、私が“サッカー好き弁護士”であるということで、クラブ内で生じる様々な問題、後々触れますが、先ほど宮嶋先生のお話にあった様々なハラスメントの問題や、いろいろなものをこの世界からなくしていきたいということに関わり始めることになりました。

当時は東海リーグという地域リーグでプレーをしているクラブでしたが、それを日本女子サッカーリーグに昇格させるということも、一つの目標として掲げていましたので、そのお手伝いもしていました。現在は日本女子サッカーリーグに昇格し、日本女子サッカーリーグ、通称「なでしこリーグ」の3部に所属しております。

私自身は平成28年6月から、運営法人である「特定非営利活動法人LOVELEDGE」で理事長を務め、現在に至っています。ちなみにこのLOVELEDGEという名称は、愛知の愛と知、LOVEとKNOWLEDGEを掛け合わせた造語です。本日はどうぞよろしくお願い致します。

(来田) ありがとうございます。堀田さんに自己紹介していただきました。それでは最後に村木さん、お願いします。

(村木) 皆さん、こんにちは。虹色ダイバーシティ代表の村木です。私たちは、大阪にあるスタッフが4人の小さなNPO法人です。LGBTなどの性的マイノリティ、また「SOGI」という好きになる相手の性別や自認している性別によって格差が生じているのですが、その格差がない社会作りのための活動をしています。詳しくは『虹色チェンジメーカー』



特定非営利活動法人LOVELEDGE 理事長 弁護士 堀田 崇

平成12年4月 名古屋弁護士会(現愛知県弁護士会)に弁護士登録
平成28年6月 特定非営利活動法人LOVELEDGE 理事長就任

 NGUラブブリッジ名古屋
(愛LOVE 知KNOWLEDGE)

日本女子サッカーリーグ(なでしこリーグ)3部所属





という本を出していますので、是非、ご覧ください。

どういう格差かといいますと、学校や職場で、LGBTの子どもたちはマイノリティですから、どうしても疎外感を抱きがちです。学校の制服、スポーツのユニフォームもそうです。男女で分かれているということで、特にトランスジェンダーの子たちは学校にいづらくなってしまう。「男らしくない男の子」というのは、よくいじめの対象になります。こうしたことが原因で、学歴が低くなってしまい、それが原因でまた非正規雇用が多くなったり、貧困の問題が生じたりしています。メンタルヘルスも悪く、自死をされる方も多いという状態です。

先ほど、宮嶋さんからスポーツが社会を変えるというお話がありました。実は東京オリンピックで大きく変わるはずだったのです。オリンピック憲章の差別禁止規定の中で、“性的指向”という一文が入りました。これにより東京都は、オリンピック開催都市として新しく条例を制定しています。「オリンピック憲章に謳われる人権尊重の理念の実現を目指す条例」です。ここで、「都、都民及び事業者は、性的指向、性自認を理由として不当な差別をしてはならない」と明記されました。これは私たちにとって非常に大きなことでした。

今年の10月11日、東京の新宿に「プライドハウス東京」という場所ができています。これはLGBTに関する情報発信ステーションです。今ホームページもありますので、是非ご覧ください。

来田先生と一緒に、スポーツとLGBTに関する冊子も出しています。スポーツの現場でも、誰が好きとか、自分がどんな性別かによって、疎外される子どもたちがたくさんいます。是非その子どもたちがスポーツを諦めなくて済むようにサポートしてくださいということを書いています。

昨年、虹色ダイバーシティは、大阪マラソンに団体として20人のランナーを出しました。とても面白かったのですが、マラソン大会に登録して気づいたことがあります。登録したら、性別の情報が必須だということです。ランナーの位置情報がわかるアプリがありますが、あれも男女別になっているのです。これは特にトランスジェンダーにとっては大きなリスクですので、改善するよう要望書を出しています。

宮嶋さんの話でも世界での話がたくさん出てきました。LGBTであることで、実は死刑になる国もあります。オリンピックの期間に、もしかしたら“難民”として見える化するかもしれないと、個人的には思っています。私はこうした問題を解決していきたいと思います。今日はよろしくお願ひします。

(来田) ありがとうございます。今、自己紹介をしていただきました3人の方、そして基調講演をご担当いただいた宮嶋さんと私とで、このパネルディスカッションを進めていきます。

全員が全然違う世界を生きてきています。ジャーナリズムの世界、それからオリンピックアンとして、あるいは生涯スポーツ場面での支援者として、そしてスポーツを通してLGBTの人々の権利を考える活動をしている方、という、こういうメンバーです。全員に共通するのは、何らかの形でスポーツに関わっている、ということですね。

先ほどの宮嶋さんの講演では、政治、人種、宗教、言語、文化、その他の様々な差別や排除につながるというお話がありました。もちろん、この会議がテーマとしている性、性別や性的指向に関わる壁もあります。この壁をスポーツだから越えられる場合がある、という、そういう事例を宮嶋さんのお話では示していただきました。その先には、多様な人々がお互いを尊重し、ともに生きる社会がきっと訪れるんだらうと思いますが、それは一体、どんな社会なのだろう、そのビジョンはどういう風にして自分たちは掴んでいるんだらう、ということテーマに、それぞれの立場から提示していただいて、共有できたらと思います。このテーマについて、堀田さんからお願ひしてもよろしいでしょうか。

(堀田) 先ほど申し上げた通り、普段は弁護士として活動しています。弁護士の傍ら、このNGUラブリッジ名古屋という女子サッカークラブの経営、運営に携わっています。

このクラブは、ここにありますが、大きく分けて4つの年代に分かれています。主に社会人選手で構成するトップチーム、その下にアカデミーとしましてユースチーム（高校生年代）、ジュニアユースチーム（中学生年代）、ジュニアチーム（小学生年代）、この各カテゴリーで普段は活動しています。





このNGUラブブリッジ名古屋というクラブは、愛知県内で唯一、日本女子サッカーリーグ、通称なでしこリーグに所属しているクラブです。私たちはこのあらゆる年代で選手を育成し、ゆくゆくはトップチームで活躍するということを期待して、昔から、選手の育成には非常に力を入れて活動しています。では、なぜこのクラブが存在をするのか。そしてなぜ私がこのクラブに関わるようになったのかという点について、少しお話をします。

このラブブリッジの理念というものがあります。まずは①愛知県的女子サッカー界の発展、②女子サッカーを通じて、女性アスリートの地位を向上させ、女性アスリートが活躍できる環境を創出する、③女子サッカーを通じて、男女共同参画社会の実現に寄与するという、この3つになります。

私がこのクラブに関わるようになったのは、この理念に共感したということがスタートです。私がクラブに関わり始めた7年ほど前には、女子サッカー界には様々な問題がありました。先ほど、宮嶋先生からもあったような、本当に大きな問題があると実感しています。例えば、指導者による選手に対しての暴言、特に男性の指導者から女子選手への暴言が、非常に多く目につきました。それが正直、当たり前のようにある世界を変えていかないといけないのではないかとということも、一つの大きな動機としてありました。

私たちがこういった理念を掲げて活動していく中で、少しずつではありますが、関わっていただいた皆さんの努力もあり、少しずついい方向に向いてきたのではないかと実感しています。サッカーを含めたスポーツには、まだまだいろいろな可能性があるのではないかと、このクラブに関わりながら思っています。

後ほど、兼松さんのお話にも出てくるのかもしれませんが、本日見ていただいている方の中にも、「女性がサッカーをするのか」と思われる方がいらっしゃると思います。しかし、サッカーもラグビーも、男性だけのスポーツではないはずだと思います。もっと言えば、健常者だけのスポーツでもないと思います。あらゆる多様な人々が、それぞれの形、レベルでスポーツを楽しむことは必ずできるはずだと思います。

女子サッカーの世界では、来年から大きく変わります。女子プロサッカーリーグ、WEリーグというものができます。WEリーグは11クラブでスタートすることが、先日発表されました。私たちラブブリッジ名古屋は、加盟の申請をしませんでした。ただ将来的には、このWEリーグ、女子プロサッカーリーグへの加盟を目指し、いろいろな環境整備をしようと考えています。

少し偉そうな言い方になりますが、WEリーグへの加盟は、それ自体が目的ではなく、私たちの理念を実現するための一つの手段であり、この理念を実現していくために、WEリーグに加盟するということが重要な手段になるという考え方をしています。

WEリーグは、11クラブの中で8クラブがJリーグに所属するクラブになります。Jリーグというのは男子のプロサッカーリーグで、現在Jリーグには56のクラブが所属しています。56のクラブの内、女子プロサッカーリーグに加盟したのが8クラブ、女子のプロクラブを作ったJリーグのクラブが、56分の8ということになります。これが多いのか、少ないのか。正直なところ、私は少ないと思います。本当にざっくりした言い方をすれば、人口の半分は女性です。女性でサッカーをプレーしたり、サッカーに関わる方が増えれば、その分サッカーに関心を持つ方が増え、ファンが増えていくはずだと思います。

女性がサッカーに関わる環境を整備していくことは、男子のサッカーにもいい影響を必ず与えると思いますので、サッカー界全体の発展にもつながっていくということを私は考えています。もっともっと男子のクラブが女子にも力を入れて、性別も関係なく、もっと言えば、障がいも健常も関係なく、サッカーをプレーする人をどんどん増やしていくことが、サッカーを発展させ、スポーツ界を発展させていく大きな要素になるのではないかと思います。

サッカーの世界では“リスペクト”という言葉が非常に大切にされています。(ここにありますように、)サッカーを取り巻くあらゆるものを大切にしようという考え方は、私も指導に関わることがありますが、その中で、つつい昔の癖で対戦相手のことを「敵がこうきたら…」という言葉を使わず使ってしまうことがありますが、敵ではなく、一緒にゲームを作り上げる“仲間”ですから、敵と言っただけではいけないということを、自分にも普段から戒めとしています。ですから、「相手」がこうきたら」という言葉を意識的に使うようにしています。

こういった精神は選手の人格の育成にも非常に大切なことだと思いますので、私自身からも、クラブに所属する、あらゆる年代の選手に「リスペクトするということが大事だ」と、指導者にも、都度、選手にはこういったことを教えてほしいということで、常に私たちも大切にしています。

互いを尊重する共生社会は非常に壮大で、私自身もそれがどうしたら実現できるのかと考えますと、なかなか難しいのですが、このクラブでの活動を通じて、まずはネガティブなところを取り除くところから始まってはいますが、やはり選手一人ひとりが自立をし、自分で物事を考えて、他人を尊重するという考え方を養っていけるようなことを第一にしています。そして先ほどの理念を実現していくことが互いを尊重する「共生社会」につながっていくと考え、今行動しています。以上です。ありがとうございました。



(來田) ありがとうございます。とても身近な社会でのスポーツ活動の中で、ちょっとしたことを心掛けていくことで、きっと変わっていく共生社会があるのではないかということをお伝えいただいたかと思います。それではオリンピックとして、オリンピックの世界も見てこられた兼松さんの立場からはどうでしょうか。共生社会は、どういうものとして受け止めることができるでしょうか。兼松さん、お願いします。

(兼松) よろしく申し上げます。私の考える「互いを尊重する共生社会」について、私自身のこれまでのラグビー人生を振り返りながら、お話しさせていただきます。

先ほども申し上げましたように、私は5歳からラグビーを始めました。5歳上の兄が先にラグビーを始め、その練習の送り迎えについて行っていた妹の私も、一緒にラグビーをやったらどうかと指導者の方に誘われたことがきっかけです。

両親はスポーツ経験がほとんどなく、ラグビーのことは全く知りませんでした。私は他のスポーツを男の子と一緒にするようにラグビーをしていましたので、ラグビーが男性のスポーツだと思ったことはありませんでした。しかし、他のラグビースクールと試合をした時、相手チームの選手から「女だ」と言われたことがありました。また知らない男性に、「ラグビーをする女の子なんて恐ろしい」と言われたこともありました。一番悲しかったのは、試合が終わって両チームで握手をする時に、相手チームの選手が私を避けて、握手をしてくれなかったことです。女子はラグビーをしてはいけないのだろうか、髪の毛を短くし、女子だとバレなければ握手してもらえないかもしれないと思ったこともありました。そんなある日、自ら握手をしに来てくれた相手チームの選手がいました。あの時の大阪弁のありがたいの響きを今でも忘れません。ラグビーの仲間として認められたと思えた瞬間でした。

このように男女一緒にラグビーをすることが当たり前だった私が、小学校6年生の時に一度だけ女子ラグビーチームでプレーをしたことがありました。それが、現在私が所属している名古屋レディースというチームです。当時、このチームには日本代表選手が多数在籍し、小学6年生の私にとって、お姉さんたちはまさにヒーローでした。いつか私もこのチームに入り、日本代表選手になりたいと思いました。

中学・高校時代は学校の部活動に専念し、大学入学と同時に名古屋レディースでラグビーを再開しました。このチームには学生だけでなく、様々な職業を持った社会人、そして外国人選手も在籍していました。皆、ラグビーが大好きな女性たちでした。

19歳の時にワールドカップに出場し、海外の女子ラグビー選手たちと初めて交流しました。日本にはない文化にもっと触れたいと思い、翌年ニュージーランドにラグビー留学をする決意をしました。そこで見たのは、子どもを連れて練習や試合に来るお母さん選手たちの姿でした。子どもたちに見せる優しい母親の姿とラグビーをする格好いい選手の姿を目の当たりにし、私もこういう女性になりたいと強く思い、帰国しました。その後、ママさんラガーとしてリオ五輪まで競技を続けてきました。時には代表合宿で長期間家を離れることに対し、育児放棄だと非難されたこともあります。それでも家族に支えられ、続けることができました。

リオ五輪アジア予選後に嬉しかったことは、長年ずっと戦ってきたカザフスタン代表選手の中に、何人ものママさんラガーの存在があったことを知ったことです。お互いに母親であることを知らずに、10年以上ともに真剣勝負をしてきました。このように女性たちが大好きなスポーツを続けられる社会は、互いを尊重する共生社会に欠かせないと思います。

近年の国内における女子ラグビーの状況は、30年前と比べ、随分変わりました。小中学校の体育の授業で、タックルのない「タグラグビー」が導入されたこと、中学校のラグビー部で女子選手がプレーする姿が多く見られるようになったこと、全国各地の学校で、女子ラグビー部が新設されるようになったこと、中学・高校生の女子ラグビーの大会が開催されるようになったこと、そして全国から選出された中学・高校生の女子選手を育成するアカデミーが設置されたことです。このような変化により、ラグビースクールでラグビーをしていた女の子たちが、中学・高校でもラグビーを続けることができるようになりました。最も難しいと考えられるのは、中学校のラグビー部で、女子選手がラグビーを続けることです。そこで、このような好事例を紹介します。

右の写真は私の娘です。中学からラグビー部でラグビーを始め、現在女子部員は娘一人です。入部当初は女子更衣室がありませんでしたが、顧問の先生の呼びかけにより、部員全員で長年使用されてこなかった部屋を掃除し、ラグビー部女子の部室を用意してくれました。娘はラグビーを始めて半年になりますが、ラグビー部の仲間たちとラグビーをすることが、学校生活の中で一番楽しいと言っています。このようにスポーツを通して子どもたちの多様性を育む教育が浸透することにより、互いを尊重する共生社会の実現につながると私は考えています。以上になります。ありがとうございました。



(来田) ありがとうございます。オリンピックとしての経験だけでなく、例えば身近なところで、スポーツで今まで認められていなかったり、あるいは、そんなことは普通ないと思っていたことを少し変えていこうとするだけで、どんどん変わっていく。そういう事例を、ラグビーというスポーツを通して見せていただいたかと思います。それでは次にLGBT支援の立場からということで、村木さんをお願いできますでしょうか。

(村木) ありがとうございます。お二人の話は、とても興味深かったです。私はレズビアンですが、やはり子どもの時、サッカーがしたくてもできなくて悔しい思いをした記憶があります。

今LGBTの子どもたちは、自分が思うスポーツがなかなかできずにいます。例えば、先ほど柔道の話が出てきましたが、柔道で男子は胸がはだけてしまうのです。それが嫌でTシャツを着ていいかというと駄目なのです。スポーツはルールがまずあって、それを皆で守るという形になっているのですが、そのルールが決められた時に、私たちLGBTの存在は想定されていなかったはずで、多様性を尊重する、お互いに尊重するという場合に、今尊重されていない人たちがいるのだということは是非知っておいていただき、そのルールが絶対だというのではなく、異論が言えるようにしてほしいのです。こうした方がいい、こうしてほしいのだという声を皆で聞いてほしいと思います。“調和”という言葉も出てきていますが、調和というのは異論がないことではなく、個々にきちんと意見を言って尊重してもらえると形であればいいと思います。私からは以上になります。

(来田) ありがとうございます。そうですね。スポーツのルールは長い歴史の中で作られてきたので、これが当たり前だ、とみんなが思ってしまうことが結構多くて、これを変えようとする、国際的な組織まで伝わらないと、なかなか変わらない。そう思っている場合は多いと思うのですが、考えてみれば、私たちが普段楽しむスポーツなら、別に自由に変えてもいいですよ。どんどん変えて、より多くの人と一緒にできるようになるということのほうが、ずっと素敵かもしれないです。ありがとうございました。それでは宮嶋さん、いかがでしょうか。

(宮嶋) 私は本当に恥ずかしいのですが、テレビ業界、放送業界というのは男性が圧倒的に力を持つというか、入社して、制作をして、下積みの時代は男女それぞれ仕事をするわけですが、管理職になるにつれて、どんどん男性ばかりになっていくという。気がついたら、全てタバコを吸う部屋で決まっているの？みたいな状況が生まれています。

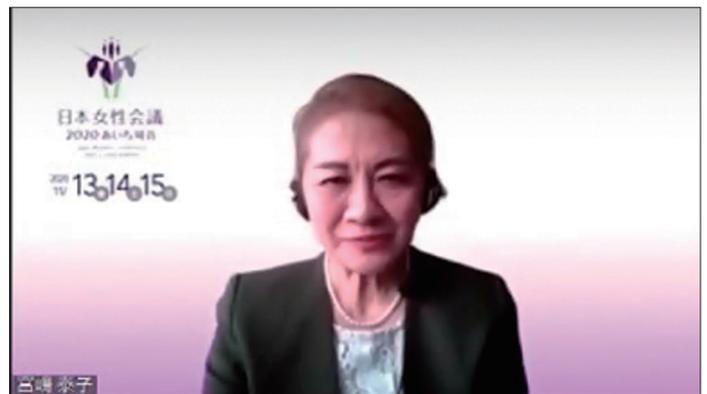
ただ、私は若い人たちがいろいろな番組を作る時に、やはり10人いると10人の良さが出て、その番組ということが作られるということは感じています。たまたま私の場合は、本当にいろいろな先生方や大学の研究員の方や、そういう人たちの方向性であるとか、アスリートやコーチの人たちが何をどう求めているかということで、自分なりのものを作ってきましたが、またそうではない、母親としてのアスリートに非常に密着している者などいろいろいるわけで、ディレクターの素養は番組の内容に表れるものだと思います。

互いを尊重する共生社会ということで、私がいつも思うのは、金子みすゞさんの詩です。『私と小鳥と鈴と みんなちがって みんないい お空はちっとも飛べないが 飛べる小鳥は私のように、地面を速くは走れない。きれいな音は出ないけど、あの鳴る鈴は私のように たくさんな唄は知らないよ。鈴と、小鳥と、それから私、みんなちがって、みんないい。』

要するに、「これはできないかもしれないけれど、これはできる」という発想が、私はとても重要だと思います。ですから、若い子には必ずこれを渡して、自分はどうかということ客観的に考えてみてと言います。こういうことからダイバーシティを学んでくれればと思います。こういうことを知ると、他人に対する尊敬や尊重も生まれてくると思います。

それと昨日の基調講演でも上野千鶴子さんがおっしゃいましたが、これは有名な、東京大学の入学式で行った祝辞です。「入学おめでとうございます」から始まりますが、「あなたたちのがんばりを、どうぞ自分が勝ち抜くためだけに使わないでください。恵まれた環境と恵まれた能力とを、恵まれたいひとびとを貶めるためにではなく、そういうひとびとを助けるために使ってください。そして強がらず、自分の弱さを認め、支え合って生きてください。女性学を生んだのはフェミニズムという女性運動ですが、フェミニズムは決して女も男のようにふるまいたいとか、弱者が強者になりたいという思想ではありません。フェミニズムは弱者が弱者のまま尊重されることを求める思想です」。

昨日、上野さんがおっしゃっていたのは、この前段の「恵まれたい人々のために使ってください」というところだけ、よくフィーチャーされるけれども、実はその下にこういうことを言っているのよ、ということをおっしゃっていたので





すね。これはとても重要だと思います。

それともう一つ、今、「鬼滅の刃」が大流行しています。この中で、こんな言葉が出てきます。「なぜ自分が人よりも強く生まれたのか わかりますか 弱き人を助けるためです 生まれついて 人よりも多くの才に恵まれた者は その力を 世のため人のために 使わねばなりません 天から賜りし力で 人を傷つけること 私腹を肥やすことは 許されません 弱き人を助けることは 強く生まれた者の責務です 責任を持って 果たさなければならない 使命なのです 決して 忘れることなきように」。

この言葉が出てくると、皆、大人は見えていてウルウルとくるのだそうです。これが今大流行しているというのは、実にいいことだと思います。要するに、差別や、いろいろ虐げられてしまった人々というのは世の中にどうしても弱者として存在するわけで、強者と言うのは、ただ上に上っていくことだけを目指して生きていくというのが、現代社会のように思われがちですが、ここでこういう言葉をもらって、子どもたちがこの言葉の真意が理解できるようになっていくと、私は、世の中は少しずつ変わっていくのだらうと思います。これはスポーツから変えていくという意味ではないのですが、こういう社会現象、アニメという社会現象を通して変わっていくことはできるのだと、今強く感じております。

(来田) ありがとうございます。「鬼滅の刃」、いま人気がありますが、それは多くの響く何かがあるのだと思います。スポーツは、とにかく自分の弱さを認めるのが苦手な文化というか、強いことの方にどうしても価値をおきがちなので、弱さみたいなものを認めづらいということがあります。そこに対して、今、宮嶋さんが言ってくださったこと、弱さを認めるけれども、その弱さを他の人に補ってもらい、一緒に作っていく社会、みたいなものが、共生社会の一つのあり方としてあっていいのではないかと。加えて、強い人が、この強さには権力も含まれますが、権力は民主主義的な社会の中では、人から預け託されたものに他ならないわけで、それを誰のために使うのか、ということも忘れてはいけません。そういうことも伝えていただいたように思います。

今、皆さんのお話を聞くと、スポーツには課題ももちろんありますが、希望もあることが伝わってきます。そしてその希望のようなものを可能な限り使っていきたい。特にオリンピック・パラリンピックが日本で開催されようとする中で、いわゆるイベントとしての大会だけではなくて、スポーツの価値のようなものが浸透する、といったようなことがあれば、社会はいい方向に向かっていくのではないかと、そういうことも期待できるのではないのでしょうか。残念なことに、COVID-19という新型コロナウイルスによる感染症は非常に厄介で、いわゆるスポーツの場面でお互いに触れ合ったり、仲良くなったりするというのが、とても難しくなる感染症です。実質的には、今までどおりのスポーツはなかなか難しい。そうして、できなくなって初めて、私たちが気づくこともあると思います。

こうなって改めて、スポーツのこういうところが大切だ、大事だ、ということにも、皆さんお気づきになったのではないのでしょうか。そこで、コロナ禍の中で気づいたスポーツの可能性はどのようなことか、今、スポーツと私たちにできることは何だろう、ということについて、一言ずつ話していただけたらと思うのですが、どうでしょうか。なかなか大きなテーマではあるのですが、宮嶋さんからお願いしてよろしいですか。

(宮嶋) スポーツにできることということですが、当たり前に行っていたことをできなくなって振り返ることができるということ、これはとても大きいと思います。スポーツというのは自らの生活にとって何なのか。それからスポーツで得られたものの価値をどうやって補っていくのかという、こういう基本的なことを、アスリートも、普段エンジョイでプレーしていた人も考えていければと思います。

何よりも現代社会というのは、どうしてもAIやインターネットなどの発達により、人間の身体性が希薄になっています。そういうところで、こうやって身体を動かさないと、本当にどんどん弱っていくとお感じになった方はとても多いと思います。慌てて、何か家でできることはないかと、それから散歩に少し早歩きで行こうとか、そういう風に身体性を取り戻すために気づきを与えてくれたのが、私はCOVID-19だと思います。

それはアスリートにとってもそうで、オリンピックをやるか、やらないか、まだわからないけれども、いずれにしても1年後に延期になってしまって、目標がもうブレブレだという人たちがたくさんいます。こんな時だからこそ、自分がやってきた何十年、小さな頃からやってきたスポーツが自分にとって何なのかということを考えるきっかけになると思います。それはコーチや親との関係。それから食事もそうだと思います。どういう食事をするのが自分の身体を作っているのかということ、いつもなら忙しくてNTC＝ナショナルトレーニングセンターで食べてしまう食事が、自分で作ってみると、こんなに栄養のことを勉強しなければいけないのかとか、そういう基本の基から学べるということが、この期間なのだと思います。

そして、日本のスポーツ環境の問題点を考える時間だと思います。私は先ほど、体育会系的システムが非常によろしくないのではないかと言いました。これは、たまたま日独ハーフとご自分でおっしゃっている、(ハーフという言葉はあまり使いたくなかったのですが)、サンドラ・ヘフェリンさんという方の著書で、『体育会系～日本を蝕む病』という



本を読んだ時に、なるほどと思ったのですが、やはり、日本が持っている外から見ると変だという“体育会系”というのは、はっきり言って日本にスポーツが入ってきた、軍隊的訓練そのままにまだ残っているシステムだと思いますので、そういったものを変えていくことが重要ではないかと思えます。

例えば、大坂なおみさんが日本の中でもし部活に入っていたとしたら、まずローラーで地面をならすことから始めて、「テニスは上手だけど、本当にそれでいいと思っているの？」などといじめにあうかもしれないし、どうなのかと。こういうことを考えてほしいと思えます。今のように大坂さんがしっかり意見を言えるように育つことが、日本のスポーツ環境の中でできるのだろうか、こういうことを考える時間にしてほしいと、私はそのためにコロナがきたと思っているぐらいです。

常に「失ったものを数えるより、今あるものを数えよ」という障がい者スポーツの原点ですが、それは、今回コロナで私たち一般の人たちにも当てはまると思えます。何々がなくなった、失ってしまった、もう駄目だ、こんなについていない人はいない、と考えるのではなく、こんな時だからこそ、今あるものを数えて、もっと遅く育っていきたい。こう考えていったらいいかと思えます。以上です。

(来田) ありがとうございます。与えられた条件をどれだけ活かせるか、ということに勝負を賭けていくのもスポーツの良さですね。トップアスリートは皆さん、そうしていると思えます。困難さもありますが、それは誰にもあり得る困難さで、それをどうやって上手く、ポジティブに活かせたか、ということが、実はパフォーマンスの結果になって表れてくる。そういう話をよくアスリートの方から聞きます。そういうことと言えば、今、宮嶋さんがおっしゃったことは、そのとおりだなと思えます。これができない、あれができないという「ないない」の発想ではなく、何かそれを「あるある」の発想にしていけば、力になっていきます。そして、スポーツに関わる人たちは、それを上手に活かしている、ということで、参考になるところかと思えます。ありがとうございます。それでは、村木さん、いかがでしょうか。

(村木) 今とても聞きながらお聞きしていました。今日本では、体育会系の問題があると聞きましたが、LGBTの子どもたち、「男らしくない男の子」をいじめる子どもたちが誰なのかということ、やんちゃな男の子であるケースが多いのです。そのやんちゃな男の子が誰に憧れているのかということ、スポーツ選手です。スポーツ選手が子どもたちに、「いじめはいけない」ということをしっかり発信していくこと。それはすごく大事だと思います。

LGBTの人口は大体3%から8%と言われており、若い人の間ではもっと多く、10%という数字が出ている調査もあります。しかしその人たちがカミングアウトして、スポーツを続けられる状況でしょうか。カミングアウトしている人はほとんどいないということは、とても言えるような状況ではないということを目指していると思えます。

その中で、昨年ラグビーのワールドカップがありました。実はラグビーの選手協会がプライドハウスと協力して、アスリートからメッセージビデオを出してくれました。それにはすごく励まされました。そういった形で、このコロナ禍で部屋に籠って、しんどい思いをしている子どもたち、特にLGBTの子どもたちは、理解のない親とのステイホームを強いられ、非常にしんどい状況におかれています。そういう子どもたちにしっかり届くメッセージを、スポーツをすることで届けられるのではないかと思います。

大阪マラソンから引き続いて、私もランニングが趣味になってしまい、ちょこちょこ走っていますが、先日、オンラインでのマラソン大会、「レインボーマラソン」というチャレンジもプライドハウスでやりました。これはランニングアプリがあり、そこに登録し、そのアプリで記録を計測して提出するという形です。男女の登録は必要ありません。趣味で走っているものですから、公式記録にする必要はないわけです。虹色がLGBTのシンボルカラーなので、好きな色を登録して、その色の中で順位付けをするということをやりました。なかなかつながりにくい状況にはなりましたが、こういった形でつながるのも面白いと思えます。

LGBTは法整備が日本も海外もまだまだです。しかし法整備をするためには、一般の方の7割以上の支持が必要です。そういう意味では、出会ったことがない人ではなくて、一緒にスポーツをする人として、一緒に私たちの権利獲得について応援してくれる人が増えればいいと思えます。ありがとうございました。

(来田) ありがとうございます。カミングアウトがなかなかできない、本当の自分を伝えられない…スポーツですらそれができないという、その状況を変えていきたいですね。このパネルを聞いていただいたことで、ちょっと立ち止まって考えて、変えていくことができたなら、すごくいいと思いました。ありがとうございます。それでは堀田さん、いかがでしょうか。

(堀田) 私もこのコロナ禍で、本当にいろいろなことを考えさせられました。私がこのクラブに関わるようになるまでは、それほど“スポーツとは”ということに関しては、さほど深く考えたことはありませんでしたが、クラブに関わるようになり、本当にいろいろ考えるようになりました。

スポーツとは何だろうと考えると、まずは誰でも子どもの頃から走ったり飛んだり跳ねたり、身体を動かすという喜びを感じたり、それによって身体が鍛えられたりという身体的・肉体的成長の部分。そして協調性や努力をすることの大切さ、一つ一つの積み重ねが成長につながっているという実感であったり、達成感、それから相手を尊重するということを学んでいくという、精神的・人間的な成長につながっていくという部分。こうしたことは誰も経験したことがあることではないかと思えます。それから勝ち負けにとどまらず、スポーツを通じて、人と人とのつながりができていく、コミュニティが形成されていくという面もあると思えます。またプロスポーツを見て、勝負に一喜一憂したり、一流の選手同士の名勝負に感動したり、選手が成長していく姿に自分を重ね合わせたり、いろんな面で観戦をすることも、スポーツの大きな魅力と思えます。そしてもう一つが、興行、ビジネスとしての側面で、私たちのクラブを考えた時に、このすべてが複雑に絡み合っていると感じています。

私もこのクラブに関わるようになってから、こういうことを考え始めただけでして、普通に生きている分には考えたこともありませんでした。こういったスポーツの価値というものを、もっと正面から考え認識していくことが重要だと、改めて今回思っています。私たちのクラブは興行・ビジネスという面もやはり避けて通れないところで、これは私たちの大きな反省点の一つではありますが、ボランティアのスタッフに支えられている部分がやはりあります。本来であれば、きっちり報酬としてお支払いしなければいけない部分もあるでしょうし、支えてくださる皆さんの厚意に甘えているという部分は正直ありますので、私たちのクラブの課題としては、ビジネスとしてやはり成立させていかないと長続きしないということがあると思えます。

今回コロナにより、あらゆるスポーツの活動が停止しました。プロ野球、Jリーグは勿論、私たちが所属している日本女子サッカーリーグのリーグ戦も、4か月延期になりました。その間、何か月も選手たちと一緒に練習ができませんでした。サッカー選手としては、サッカーができないということは本当にもう人生を奪われたぐらいの感覚に陥ってしまいますので、メンタルの部分でもかなり配慮が必要だったと、振り返って思えます。

ただその中で、私たちのチームのコーチ陣も、本当にいろんなことをしてくれて、選手に事前に課題を与え、ある一定の時間に皆がZoomで集まり、それぞれできた課題や、できなかった課題を披露し合うなど、そういうことをしてくれました。コロナで本当に孤独な中だと思えますが、そういったつながりを何とか維持する努力をしてくれて、選手たちの励みになったのではないかと思います。

私自身はこのコロナにより、サッカーがない日常を経験し、サッカーのない週末がどれほど味気ないものなのかを実感しました。特に子どもたちは、そういったつながりが保てたととしても、各種の大会が軒並み中止になってしまい、目標を失ってしまったことは、やはり非常に大きなダメージだったのではないかと考えています。目標を持って頑張ることが、どれほど尊いことなのか、目標がない状態で一人で練習することが、どれほど辛いことなのかというのは、本当にクラブに関わる皆が実感したと思えます。

このコロナの問題に関して、とかく経済を回すことも重要だという話もされますが、先ほど話したようにスポーツもビジネスという面がありますので、経済という面からすれば、早く観客を入れて試合を再開することも必要だと思えます。ただスポーツのこういった価値そのものが、やはりこのコロナにより奪われている。経済だけではなく、スポーツの価値そのものが、大きくコロナにより毀損された反面で、その重要性にまた気づくチャンスになったのではないかと私自身は感じています。コロナ禍で実感したこうしたスポーツの尊さや価値を、もう一度社会で認識し、これを大事にしていくということも、スポーツやスポーツビジネスに関わる人間として追及していきたい、考えて行動していきたいと今感じています。ありがとうございました。

(来田) ありがとうございます。やはり現場でスポーツができないことは、結構、大きなダメージになってしまっているとともに、その先には希望もあることを教えていただいたと思えます。ありがとうございました。では最後に、兼松さん、お願いします。

(兼松) 私がコロナ禍で気づいたこと、改めて大切だと思ったことをお話しさせていただきます。日本のラグビーには“ノーサイド”という言葉があります。これは試合終了を意味する言葉で、海外ではフルタイムと言われています。日本では敵味方がお互いの健闘をたたえ合うことをノーサイド精神と表現されています。先ほど私がお話したラグビースクールの試合の後に握手してもらったというエピソードが、まさにノーサイドです。この握手により、試合中に感じた痛み、苦しみ、喜び、情熱、様々な思いを共感することができる気がします。



しかし、今年のコロナ禍では握手は勿論、思い切り身体をぶつけ合うラグビーは、これまでのように安心してすることができなくなりました。仲間とパスをし合うこともできない、タックルすることも、されることもできない時期があり、選手たちは不安な日々を送ったと思います。そしてその不安を共感しようと、これまで以上に別の方法で互いに歩み寄ろうとしたのではないのでしょうか。

試合をすれば強いチームが勝ち、弱いチームが負けます。しかしウイルスには強いも弱いもなく、敵も味方ありません。コロナ禍で人は誰もが同じであることを思い知らされました。これはウイルスにより生み出された、ある種のノーサイドではないのでしょうか。

私がヘッドコーチを務める女子セブンスユースアカデミーは、全国から選抜された中学・高校の女子選手たちを育成する活動です。1か月に一度、3泊4日で合宿を行います。今年は2月を最後に合宿は延期され続けています。そこで、どうやって集まらずにアカデミーを行うかを毎月スタッフで話し合い、実践してきました。Zoomを使ったオンライントレーニングや、映像を用いたプレーの分析をし、実際のラグビーをイメージしながらディスカッションをしました。また毎月スタッフと選手一人ひとりがLINE面談を行い、選手たちに寄り添うことを心掛けてきました。更にオリンピック教育の一環として、中京大学スポーツミュージアム様にご協力いただき、オンライン鑑賞を行い、普段は交流できない冬季競技のチームの選手たちと交流したりなど、オンラインならではの活動も積極的に行いました。

このように今年のアカデミーの活動を通して、離れていても心はつながることができることを学びました。その根底には、共感しようとする気持ちがあるからだと思います。コロナが収束したら元の生活に戻り、また人々は会いたい人に会い、安心して握手をすることができるようになるでしょう。しかし忘れてはならないことは、コロナ禍で誰とでも共感しようとしたノーサイド精神です。自分と同じ考えや価値観を持った人とだけ共感しようとするのではなく、違う者同士であっても共感しようとするれば、互いを尊重する共生社会の実現につながると思います。ウイルスがある種のノーサイドを生み出したのではなく、本来あるべきノーサイドがコロナ禍で気づかされたと思います。互いを尊重したノーサイドの世界が実現するために、スポーツには世界中のあらゆる人々の共感ツールになる可能性がある、私は考えています。以上です。ありがとうございました。



(来田) ありがとうございました。ふと気がつくと、時間的にもうおしまいになってしまいました。すべての質問へのお答えをホームページに掲載する形にさせていただきます。質問をしてくださった参加者の皆さん、本当にどうもありがとうございました。

普段、自由にのびのびとスポーツをする中で、私たちは何かの壁を自分自身で越えたり、誰かが壁を越える手助けができる、そういう希望を、それぞれの登壇者のお話から感じていただければ、大変嬉しく思います。例えば、刈谷市はものづくりのまちです。この町が多様化すれば、きっとどんどん新しいアイデアが生まれ、新しいものが生み出されるのではないのでしょうか。それはきっと世界を幸せにしていけることだと思います。

スポーツに限らず、何か新しいことを始めるには、エネルギーも時間も必要です。今、若い人たちに人気のあるシンガーソングライターの「あいみょん」さんの歌が私は好きで、彼女の歌にこんな歌詞があります。「余裕のある人はかっこいい でも余裕のない人生は燃える」っていう。明日から余裕のある人としてかっこいい人生を送るか、あるいは余裕のない人生で燃えるか、どちらかわかりませんが、今日のパネルが壁を越えるための新しいチャレンジを試みたいと思えるような、そのための手がかりのひとつとしてスポーツがあるかもしれない、と受け止めていただくことができればと思います。

今日は登壇者の皆さん、本当にお忙しい中ありがとうございました。そして貴重なお話を聞かせていただき、本当にありがとうございました。これにて、シンポジウムを終了します。どうもありがとうございました。お疲れ様でした。

●企画メンバー

小鹿 登美 石田 芳加 鈴木 直美 瀧澤 知子 久恒 美香

質疑応答

Q：スポーツで解決していかなければならないハラスメントには、どのようなものがあると考えられますか。差し支えない範囲で、ハラスメントの具体的な事例などもあげてください。

A：【宮嶋氏】

暴力によるハラスメント、言葉によるハラスメント、また接触するセクシャルハラスメント、意図的な行為によって相手を貶めることなど、この4つが主なハラスメントではないでしょうか。

スポーツでは「できる」「できない」がはっきりと目に見えてしまいます。その中で、できないことに腹を立てて暴力で「何でできないんだ」と制裁を加えることはもちろんやってはいけないハラスメントの筆頭でしょう。

また、言葉で「ドジ」「どんくさい」などと揶揄するような言葉をかけることもハラスメントとなるでしょう。

スポーツは軽装で行うため、体の線が出やすく、セクシャルハラスメントも起きやすくなります。指導の際に体を意図的に触ることもセクシャルハラスメントとなります。

また、「胸が大きいから走れない」などという言葉によるセクシャルハラスメントもあります。

スポーツで代表になるかならないかというときに、公正な選考方法によらず、意図的にある人を落とすというのもハラスメントに入ります。

【兼松氏】

服装に関するハラスメントがあると思います。私は子どものころ、スポーツをすることは大好きでしたが、体育の授業や運動会はあまり好きではありませんでした。その理由は、当時女子の運動着はブルマーと決まっていたからです。学校で担任の先生に毎日提出するノートに、ブルマーが嫌だと書いていたことを覚えています。一方、競技者の服装は、さまざまな目的によって、男女共に改良され続けています。目的の一つにパフォーマンス向上がありますが、ラグビーのようにランニングとコンタクトが含まれたスポーツの場合、機能を重視するがために偶発的な肌の露出を避けられないこともあります。このことから、必ずしも男女同じ服装であることがいいとは言いきれません。

以上から、男女で服装を分けることも、統一することも、ハラスメントが潜んでいる可能性があります。個人やチームが、安全を配慮した上で色やデザインを選択できることは、スポーツを通してハラスメントを解決するために大切であると考えます。

【村木氏】

8ページをご参照ください。

https://pridehouse.jp/assets/img/handbook/pdf/sports_for_everyone.pdf



◀『誰も排除しないスポーツ環境づくりのためのハンドブック SPORTS for EVERYONE (プライドハウス 東京)』

Q：LGBTの子どもたちを含め、誰もが楽しめる授業にするために、男女別に分けない体育をすることについてどう思いますか？

【宮嶋氏】

悪いことではないと思います。ルールに工夫を凝らすなどして、楽しめる身体活動は有意義だと思います。

【兼松氏】

必要だと思います。運動能力は性別に関わらず、人それぞれ異なります。それは、好きなもの、得意なことが異なることと同じです。体育の授業で大切なことは、スポーツを通して互いを高め合い、協力し合い、認め合うことだと思います。この目的を達成する過程で全ての子どもたちが楽しめる授業にするためには、教材の工夫や従来のスポーツのルールを変えることも必要だと考えます。

【堀田氏】

中学生になると、男女で筋力に大きな差が出てきます。また、男子、女子の中でも、運動能力に差が出てきます。男女別ではなく、能力的な差異、種目の得手不得手などで分けるなど、多様性を認めることは良いことだと思います。



【村木氏】

5ページをご参照ください。

https://pridehouse.jp/assets/img/handbook/pdf/sports_for_everyone.pdf

無意識に男女別になっていることについて、一つ一つ丁寧に考えていくべきかと思います。



Q：「スポーツが人生を切り拓く武器」になるようにするために、日常あるいは地域でどのような意識を持つことが大切だと思いますか。

【宮嶋氏】

スポーツが持っている「上達するための工夫や努力」「自分の体を感じてコントロールする面白さ」「作戦を立てて実行する頭脳プレー」「仲間と分かち合う共感性」「サポートし、サポートされる楽しさ」等、様々な特徴を折に触れて自分の中で反芻することが重要だと思います。

スポーツは行うだけでなく、そのあと残った記憶を自分の中で反芻したり、仲間とともに思い出しながら語り合ったりすることで、より熟成させることができ、人生を意味深いものにしてくれると思います。

Q：男性スポーツのイメージが強いサッカーやラグビーですが、サッカーの場合はプロ化が遅れたり、女性への普及が進まなかった原因はどのようなことでしょうか

【堀田氏】

テニス、卓球、バドミントン、バレーボールなどは、コートが分かれており、身体的接触がありません。

バスケットボールはコートが分かれていませんが、身体接触は禁止されています。

サッカー、ラグビーはフットボールであり、その成り立ちから身体的接触が認められており、むしろ身体的接触がその魅力の一つでもあります。

男性と違って、筋力や体の強さで劣る女性の多くは、そもそも身体的接触を伴うサッカーをやりたがらず、子どもにもやらせたくない傾向があると思います。

男子と女子は同じルールのもとでプレーしていますが、身体的接触については男子と女子でルールを分ける、もしくは適用を厳格化するなどして、女性に親しみやすいスポーツにしていくことも考えるべきではないかと思っています。

他方で、男子の中でプレーしたいという女子選手もいます。先日、永里優季選手が男子チームでプレーすることが話題になりました。

男女という枠にとらわれず、1人のアスリートとして尊重することも大切だと思います。

Q：サッカーやラグビーが「男性だけのスポーツではない」と考えたきっかけがあれば教えてください。

【兼松氏】

私は、幼少期に地元のラグビースクールでラグビーと出会いました。ラグビースクールでは、男女同じチームでプレーをします。指導者の方も、男女で指導方法や内容を分けるようなことはありませんでした。

大学生から女子ラグビーチームでラグビーを再開しましたが、ラグビーの本質的なところが男女で異なると感じたことはありません。男性的と言われるラグビーのプレーの激しさや強さの根底には優しさがあります。そのことを教えてくださいましたのは、ラグビースクール時代の指導者の方々です。男女隔たりなく大切なことを指導して下さった指導者の方々には心から感謝しています。

Q：異なる意見を持つ人と信頼関係を気づきながら、お互いの意見を主張しあうために心がけていることがあれば教えてください。

【村木氏】

相手の意見をしっかり聞くこと、背景を想像すること、必要に応じて第三者を入れること、データと事実に基づいて話すようにすること等があるかと思います。

自分の持っている「特権」を理解しておくことも対話には重要なことかと考えます。



分科会 (A~D)

エキシビション

分科会 A | 【高齢社会】 講演、対談

人生100年時代 ~高齢者のつながりづくり~

■日時：11月13日(金) 13:00~14:30



<講師>

山崎 亮

studio-L 代表/コミュニティデザイナー

<対談者>

吉田 あけみ

椋山女学園大学教授

東郷町男女共同参画審議会副会長

報告要旨

報告者：吉田 あけみ（コーディネーター/対談者）

分科会A「高齢社会」は、「人生100年時代～高齢者のつながりづくり～」と題し、高齢者の交流の場づくり、高齢者の暮らしやすい地域社会づくりについて、高齢社会の中において量的には主要なメンバーであるにもかかわらず、地域社会の意思決定場面に現状では参加する機会の少ない女性たちの意見をくみ取る工夫等を検討し、皆が暮らしやすい地域社会の創設について検討することとした。そのために、数多くの実践例を持っていらっしゃる「コミュニティデザイン」実践者の山崎亮さんにお話を伺い、ヒントを受け取ったうえで、高齢者も暮らしやすい地域社会づくり、多様な人々のニーズに答えられるような地域社会づくりについて考えていくための分科会にしたいという目的で、今回の会が企画された。

まず山崎さんから60分程度の講演があり、その後、私吉田との対談という形で進行した。山崎さんの手腕はどちらかというところワークショップ形式で、参加者の意見を引き出していき、それをもとに地域の活性化対策を皆で練り上げていくというように伺っていたので、この度のリモート開催については、大変心配をしていた。しかしながら、高齢者のみでなく若い世代も含め多くの方々に、リモートということで気軽に聞いていただくこともでき、リモートゆえのメリットもあったかと思う。



山崎さんからは事例についての報告を中心にお話いただき、地域が住民たちの取り組みで活性化していく様子を学ぶことができました。住民が主体となって、皆で考えていくという手法は、実際にことを進めていく上では遠回りのようにも思ったが、ともすると敬老会等の高齢者団体においても、まだまだ役員は男性に偏っているところが多く、その男性中心の執行部で方針が決定されがちな状況に比べれば、様々な人々の意見が反映されていくという手法は大変魅力的だと感じた。山崎さんのワークショップは、いわゆるブレインストーミングを大切にしているとのこと、そのようなやり取りの中から、思わぬアイデアが出てくることもあるとのことだった。さらにそういった自由な発言をうながすような場所や時間づくりが大切であるということを確認できた。

ご報告がどちらかというところ農漁村部の取り組み事例が中心だったように思い、それらの農産品等がない都市部の高齢

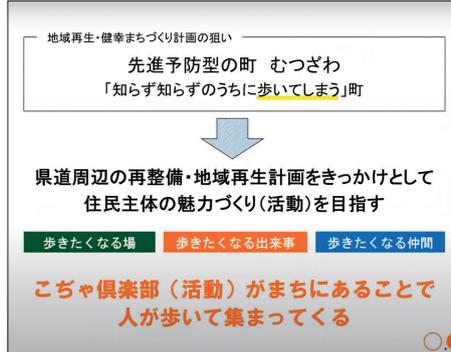
年の差フレンズができると...

後輩世代

- “親に優しくなった” (30代男性)
- “人と話すバリアがなくなった” (30代男性)
- “勇気が持てるようになった” (30代女性)

先輩世代

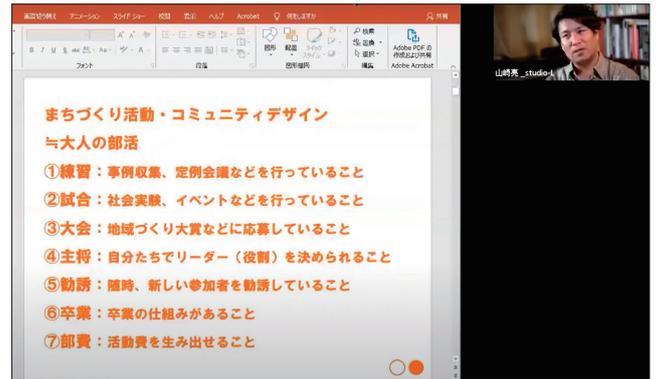
- “ちゃんとしなくちゃ、と思うようになった” (70代男性・女性)
- “終活の話をやめた” (70代女性)
- “栄養剤を飲むようなもの” (80代男性)



- ・秋田市「エイジフレンドリーシティ」
- ・健康→病気がないこと? 幸福なこと?
- ・健康づくり=病気がなく幸福な状態をつくること
- ・健康な高齢者から学ぶ「幸福な生き方」。
- ・健康な高齢者=先輩
- ・人生の先輩に学ぶ「幸福な生き方」。
- ・どう学ぶ? 書籍で学ぶ? 話を聞く? 展示を見る?
- ・先輩を取材し、まとめ、展覧会を企画し、準備し、案内し、仲間をつくる。
- ラーニングピラミッド
- ・「学びの最大化」
- ・住民参加型の展覧会づくり

社会問題についての取り組み等についても伺ったが、特にそういった製品については既存の物だけでなく、新しい製品の創造や、産品に頼らない活性化方法等も含めて皆で知恵を出し合っていけば地域は活性化できるのではないかとのことだった。確かにそういったアイデアも、ブレインストーミングの中から湧いてくるものであるのかもしれないと感じた。

様々な成功事例は大変参考になったものの、例えば山崎さんたちがかかわらなくなった後の継続性についての疑問が残ったので伺ったところ、「継続に固執することもないのではないか」とのご指摘をいただいた。確かに、社会も地域も個人も変化しているわけで、ある時代の成功が必ず今後も続くわけではなく、ある時の良い取り組みが今後もずっと社会や地域に持続していくわけでもない。メンバーの移動もあるのだから、長く続けることに重点を置くのではなく、その時々住民のニーズを基に地域の問題を解決できればいいということが理解できた。



質問に対する回答について、講師のYoutubeチャンネルから視聴することができます

◆ワークショップで意見が分かれたらどうするんですか?
<https://www.youtube.com/watch?v=tht0cECh2qo>



◆生活を多軸化すること
<https://www.youtube.com/watch?v=H9iD1t5g8no>



◆高齢者のSNS利用と成果を過度に期待しないこと
<https://www.youtube.com/watch?v=vVgkHI3aiY0>



◆プロジェクトや冊子のネーミングについて
<https://www.youtube.com/watch?v=j3P9Vhq6VXo>



◆認知症、障がい、シングルなどの特性とワークショップへの参加
<https://www.youtube.com/watch?v=q9Qfen7Gy4s>



●企画メンバー

鈴木 敦史 五十嵐香代 岩間よしゑ 榎原志のぶ 清水 久子 戸田 幸子 伴 友子

分科会 B | 【多文化共生】 講演、パネルディスカッション

多様性を活かした地域づくり
～“多文化”を地域の魅力に!～

■日時：11月13日(金) 13:00～14:30



<講師>

神田 すみれ

愛知県立大学多文化共生研究所
客員研究員

<コーディネーター>

牧野 佳奈子

一般社団法人DiVE.tv代表理事
DiVE CAFEオーナー

<ゲスト>

川口 ビバリ

フィリピン人 フィリピン人コミュニティ団体代表

西 マリ

ブラジル人 通訳/外国人支援団体スタッフ

小池 ソニア

ブラジル人 人材派遣会社勤務

田島 フェルナンダ 由美

ブラジル人 人材派遣会社勤務

報告要旨

報告者：河村 槇子（当日進行）

〔目的〕

外国人住民が増え続けている日本社会において、多様な人たちといかに共に暮らしていくか。その上で課題となること、逆にプラスとなること、多様であることの魅力について考える。さらに、日本社会における外国人の課題をジェンダーの視点からも考察する。

〔内容〕

1. 基調講演：講師 神田 すみれ 氏

世界規模で移民が増加しており、日本においても同様である。その中で、外国人の非正規雇用の固定化、日本語指導、いじめ、不登校など子どもの教育の問題、生活文化の違いから生じる問題など様々な課題がある。

ベースとしてジェンダーギャップがある日本（G7で最下位）において、海外にルーツを持つ女性は、「外国人である」ということと「女性である」ということという「二重の壁」に阻まれている。

その人が持つ力、特性を引き伸ばす環境・制度とサポートが必要であり、一人ひとりの積極的な参画によって、多様な意思決定層が形成されることが重要。



2. パネルディスカッション

要旨：〈牧野氏〉

外国人と日本人がどういうところで接点を持つか、交流できるかを分析したが、外国人の関心ごととは、仕事関係が一番多く、地域のこととなると関心は低い。一方で、外国人が主催するイベントは愛知県にはたくさんあるが、そこへの日本人の参加者は少ない。その接点となるよう、それらイベントなどの取材、動画を作って配信する取り組みを行っている。



〈小池氏〉

子育てには苦勞して、色々な制度を使ったり、学校の先生や近所の人助けを借りてやってきた。仕事の寮などで日本の生活が始まると、なかなか近所づきあいが無いが、今はその大切さを伝えるようにしている。まずはあいさつからはじめるのが一番良いと思う。外国人への情報発信については、紙ベースではなく学校でもメールやGoogleフォームなど、すぐに翻訳できるデジタル媒体を使ってもらえると多くの方が助かると思う。



〈西氏〉

保健センターで通訳として働いているが、周りに相談する人がいないということで外国人から様々な相談が寄せられる。通訳がいる地域はまだいいが、いない地域の外国人世帯はさらに苦勞していると思う。外国人の子どもの場合、日本語習得が遅いのか、発達に遅れがあるのか分かりにくく、どうしたらいいか悩んでいる親も多い。

自分も富山県から愛知県に引っ越してきて友達もいない中、子育てをしていたが、みらいJr.という外国人向けの親子サロンが地域でやっていて、そこにいくことで友達ができて助かった。



〈川口氏〉

フィリピン人のコミュニティグループを立ち上げて活動しているが、親が夜の仕事をしていることで、子どもがいじめを受けるなどの問題や、高校、大学になかなか進学できない、進学しても中退してしまうなどの問題が多い。

市役所のサポートでコミュニティグループを立ち上げることができ、学校やfacebookを通じて仲間を集め、レクリエーションや支援を行っている。



〈田島氏〉

母親は日系人ではないブラジル人で、日本語が全く分からない中、日本の子育てに、すごく苦勞していた。うつ病にもなってしまったが、病院で自分の思いを伝えることなど難しかったと思う。

現在、自分は外国人向けに仕事で使える日本語研修などの業務を行っているが、外国人は日曜日に家族と過ごす時間をとても大切にするため、研修は平日と土曜の夜間とするなど、生活習慣に配慮する工夫をしている。

〈総括・神田氏〉

海外にルーツを持つ、特に若い子育て中の女性に負荷がかかりやすく、メンタルヘルスケアの必要性も増えている。そのような中で、サポートする側にもなっていくというのはすごいこと。

田島氏の外国人の習慣に配慮した研修の仕組みなどは、日本人には思いつかない、その人の特性や経験が活かされて仕組みが作られている事例であり、これからの多文化共生社会づくりのヒントとなる。

同質性の高い、偏った属性の人たちだけで仕組みを考えていては気づかないことが多い。会社や地域で、日本人ではない人が意見を言ったときに、それは大事なことだね、やりましょうと言える雰囲気を作る。そうする中で大きなストレスが無い社会を作っていくことが大切だと感じる。

3. 運営総括

参加者からの質問も、文化習慣、教育、交流の機会など多岐にわたり、直接的に当事者の声が聞ける機会づくりの意義を感じることができた。一方で、論点が広がり、一つ一つを深く議論する時間は不足していた。今後も出演者の活動に関する情報発信や、意見交換等の機会づくりの継続も重要であると感じる。

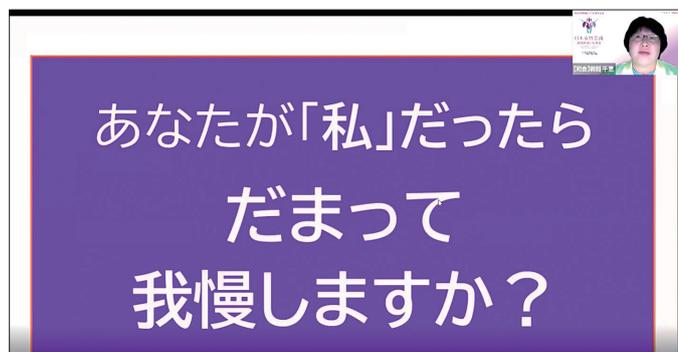
●企画メンバー

河村 慎子 板倉 恵美 加藤 美幸 佐藤 浩二 出口 志穂 内藤由美子 阪野 優香 藤中 崇矢
山口 真実

| 分科会 C | 【DV】 講演、だまっとれん座談会

だまっとれん!コロナ禍でもDVを生み出さない社会へ

■日時：11月13日(金) 13:00~14:30



<講師・コーディネーター>

須藤 八千代

愛知県立大学名誉教授
NPO法人ウィメンズ・ボイス副理事長

<講師>

増井 香名子

新見公立大学健康科学部地域福祉学科講師
大阪府立大学客員研究員

<座談会登壇者>

丹羽 聡子
弁護士

杉山 映子
浜松市男女共同参画・
文化芸術活動推進センター
(あいホール) 相談室長

杉浦 静
人権擁護委員

中根 敬子
NPO法人リネエブル・
若者セーフティネット理事

報告要旨

報告者：須藤 八千代 (コーディネーター)

分科会の構成

①動画：企画メンバーの朗読に学生のイラストを合わせ、『よくあるDVの状況』を流した。DV相談で、また身近な人の話の中でよくあるケースをわかりやすく伝えた。

②基調講演：講師 増井 香名子氏

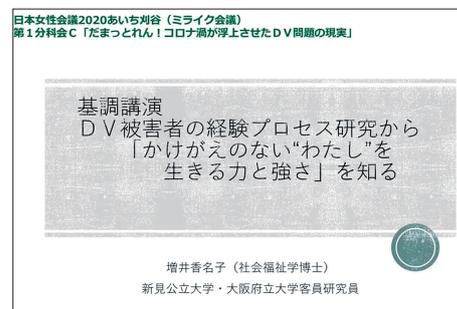
講演 『DV被害当事者の経験プロセスからかけがえのない“わたし”を生きる力と強さを知る』は、DV被害者がDV関係から「離脱」し、被害体験から回復していくプロセスを当事者のインタビューから探ったもので、2019年に刊行された研究(『DV被害からの離脱・回復を支援する一被害者の「語り」にみる経験プロセス』2019年ミネルヴァ書房)に基づく。

そのプロセスは5つに整理されている。

1. DV関係に陥るプロセス
2. 離別の決意に至るプロセス
3. 離脱の行動のプロセス
4. 生活の再生のプロセス
5. 「私」の新生のプロセス

この中で、特に離脱から生活の再生に向かう中間のプロセスについて説明された。被害者は自分の「限界ラインを押し広げ」、我慢し耐えていくことを自分もまた周囲からも求められる。しかし「もう無理だ。生きていけない。」という「決定的底打ち実感」が生まれたとき、支援者の「背中押しメッセージ」を受けて離脱行動に向かっていく。

そこには「支配・暴力・無力」というマイナスのパワーから「支援・つながり、方法、社会資源、エンパワーメント」というプラスのパワーを受けて新しい生活に向かっていく「パワー転回のスパイラル」があると語られた。続く生活の再生プロセスを、「物理的な線を引く(生活を作っていく)」「関係の線を引いていく」「心の線を引いていく」という3



つの動きに分け、それぞれ具体的な内容で説明した。

③座談会：講演を受けて、4人の登壇者に講演者も加わり行われた。

〈杉山映子〉

相談者は社会が女性に求めるケア役割を強く内面化しており、それが被害者の限界ラインを押し広げてしまう。すなわち子育て、介護、家事など家族生活のすべてにわたって女性たちはその役割と責任を引き受けている。たとえDV被害を受けたとしても簡単にその役割を手放すことはできない。そのために限界まで頑張り耐える。あいホール相談室ではその限界ラインを広げてしまわないように対応している。

また男性加害者、男性被害者からの相談もある。女性も仕事を持つようになり、これまでのようにDV被害者に単純に避難を勧めるという考え方で支援は難しい。

コロナ禍でDV相談は増えている。相談では講演で言われたような「お試し相談」の段階が多く、離脱から回復というプロセスよりも初期のレベルにとどまっている。今後は被害者臨床だけでなく加害者臨床も大切である。

〈丹羽聡子〉

法律相談でもDVは、はじめは「お試し相談」のような形であるが、問題を受け止めてくれるとわかると相談者からどっと詳しい話が語られる。午前の上野千鶴子さんの講演で、パートナーとの交渉力ということが話された。被害者の強さはその交渉力にかかっている。はじめはその交渉の舞台にも乗れていない被害者だが、弁護士と一緒に交渉の舞台に登る役割を持つ。その結果、裁判などで堂々と発言していく女性の姿を見ることが出来る。その意味で裁判は回復のプロセスでもある。

ただ、時に弁護士は法的立場から、二次被害を与えることもあると自覚している。またいつまで支援するのかということも考えておかなければならない。その際、どんな時もあなたを見放さないというメッセージを伝えることが必要である。さらにDV被害者としての子どもにも注目する必要がある。子どもの相談を受けること、子どもからDV問題を引き出すことは簡単ではないが、子どもに情報や相談の場を提供することは大切である。

〈杉浦静〉

人権擁護委員として、法務局に届く小中学生からの『SOSミニレター』に返事を書いている。学校生活のいじめ問題や家庭で居場所がない話などの相談を受けているが、家庭内でDVがあるのでと推察されるケースもある。相談者の立場に立った支援者になりたいと思う。

〈中根敬子〉

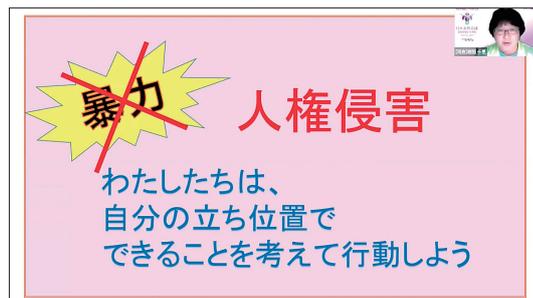
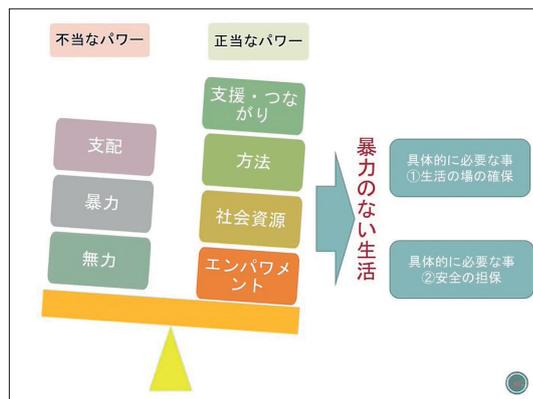
地域で仲間とDVの学習会などをする中で自分自身のコミュニケーションの問題に気づいた。自分と相手との気持ちの違いを確かめるためには、「あなたはどう思うのですか」と常に問いかけることが必要だと考えるようになった。

【所感】分科会C「だまっとれん！コロナ禍でもDVを生み出さない社会へ」を終えて

1995年の北京女性会議で「女性への暴力」が取り上げられ、わが国でも2001年にDV防止法が制定された。しかしDV問題はコロナ禍によってこれまで以上に浮上したテーマである。

これまでのDV研究は問題の所在を明らかにするために、被害体験や一時保護、保護命令の件数などに着目してきた。支援についても離別、保護、自立という支援者側の発想に沿った流れが中心であった。それに対して講演では、当事者の側から、離脱することの困難さと回復や新生に焦点があてられた。被害者の持つ弱さでなく強さに着目している。「かけがえのない自分」を守りたいという気持ちは、当事者であれ支援者であれ共有する価値観である。

短い時間とリモートという制約はあったが、後半の座談会では登壇者がそれぞれ弁護士、相談員、人権擁護委員、NPO活動家として自分の視野から真摯に語ってくれた。このようなネットワークなしにDVは解決できない。最後に分科会は企画グループの方々の丁寧な準備によって実現できたことを書き加えたい。



●企画メンバー

岩間 千恵 白谷 隆子 鈴木 恵子 外山 淳恵 中根 敬子 野久 照美 吉見 久恵

| 分科会 D | 【防災】 講演、座談会

生き抜く防災withコロナ ～アウトドアから学ぶ新しい知恵～

■日時：11月13日(金) 15:00～16:30



<講師>

あんど う りす
アウトドア防災ガイド

<進行>

高木 一恵
親子防災講師
防災ママかきつばた代表

<ゲスト>

荒木 裕子
名古屋大学減災連携研究センター

西尾 實千恵
刈谷市赤十字奉仕団委員長
健康生活支援講習指導員

北島 あや
刈谷防災ボランティア
防災ママかきつばた

永島 典子
防災士
佐野市民ボランティア

報告要旨

報告者：高木 一恵（コーディネーター）

1. 目的

幼いころからの自然体験、防災準備の実際を学ぶことなどは、いざという時にベストを尽くすために大切である。本分科会は、社会的弱者とされる女性や子どもが「いのち、をつなぐための防災知識や、クライミング脱出技・古武術を使った救出法を学ぶことができるとともに、愛知県で活動している防災団体も参加して、地域の防災にジェンダー・多様性の視点は活かされているのかについて話し合うことを通して、参加者の地域で、ここで学んだことが活かされることを目的としている。

2. 内容

(1) 開会挨拶

分科会リーダーの神谷により、分科会の目的（上記1）の説明が行われた。

(2) 講演：講師 あんど う りす氏

講師がアウトドア経験から学んだ防災や古武術を、体験も交えながらお話いただくとともに、普段の生活でも活用できる防災知識や地域の事例を紹介していただき、コロナ禍における新たな防災の知恵についての講演が行われた。

すぐ使える知識や、幅広いデータも分かりやすく解説され、防災・アウトドア・コロナ・ジェンダーと、別々にみえるテーマが実は互いに関連があることが理解できた。講演の根幹にあるメッセージ「選択の自由を前提とした自己決定が尊重されること」「一人ひとりを大切にすること」を、今回視聴された約1,000名の参加者がそれぞれの地域に持ち帰り、地域住民が互いに尊重し合いながら、地域全体で防災・命の大切さを考えてほしい、行動してほしいと思う。参加者からもチャットによるコメントで大きな共感や驚きを感じていることが伝わった。





(3) パネリストの自己紹介と取り組みの報告

4人のパネリストから自己紹介を兼ねて、活動などの取り組みの報告をしていただいた。

(4) パネルディスカッション

コーディネーターより、災害経験や地域防災の取り組みなど質問を行った。

永島さんは、昨年の台風での被災の様子、ご自身も被災されながらも支援活動を行った様子を報告していただいた。男だから、女だからではなく、それぞれの個性を活かしながら自分でできることをするということの大切さを学んだ。

実際に支援のため佐野市を訪れた西尾さんは、その時に感じた地域の素晴らしさやつながりなどについてお話しされた。地域防災の取り組みでは、あんどうりすさんの講演を聞いて、寄り添うこと、尊重し合うこと、それをみんなで共有する、できる人を増やし、共助を広げていくことをより一層取り組んでいきたい、その行動をしていくと決意表明されました。

北島さんは、防災に関する活動のほかに、プレプレーパークという防災要素も兼ねた冒険遊び場も運営しており、子育て視点での防災について報告していただいた。今の世代だけではなく、これからの世代にも防災の大切さを伝えるために取り組んでいる、「遊びを通して身につけることができる防災」を一步一步進めていきたいと決意表明されました。

荒木さんは、災害支援の経験から、私設避難所（指定避難所ではなく、独自で避難所を開設）の事例を紹介され、自分たちができること、強みを活かして助け合うことの大切さを紹介していただいた。

あんどうりすさんからは、パネリストが実際に体験した地域防災の話を受けて、防災の分野はそれぞれの強みを活かしながら、様々な世代とつながりやすい特徴があるとのアドバイスをいただいた。

また、パネリストや参加者からの質問も活発に行われた。

(5) 閉会挨拶

分科会リーダーの神谷から、災害が多い昨今、万が一に備えて、今回得た知識を活かし、一人ひとりができることを実践していくこと、それが救える命につながっていくと確信している、と閉会の挨拶が行われた。

3. 総括-講師あんどうりす氏より

災害時支援の国際基準は、例えば避難所の対応について書かれているスフィア基準などは、被災した人には「尊厳をもって人生をおくる権利」「援助を受ける権利」があり、「それにむけてあらゆる手段が尽くされるべき」としており、場当たりの対応ではなく、当事者の意見を聞くことを重視している。内閣府の避難所運営ガイドラインもこのことを「質の向上」という言葉を用いて、避難所運営にあたるとしている。ただ、日常においても被災した際も、この権利の部分が大切にされないと、災害関連死や対立が起こってしまう。避難所での性暴力、性犯罪対策において、被害者に落ち度があるような情報が蔓延し、被害にあわないように女性の行動を制限しようという対策がとられがちだったり、加害者対策や傍観者対策が進まないのも、女性の権利の保障という根底の部分が弱いからで、それは災害時の乳幼児支援で、ミルク対母乳の話になってしまう事も同じ。災害時の乳幼児栄養の国際基準では、当然の前提として、子育てをしている人の選択の自由、つまり権利の保障がある上で、物資の少ない災害時の対応をしているのだが、支援者が自分の価値観をおしつけがちになる状況がある。アウトドアではよく自己責任といわれるが、アウトドアでさえも、選択の自由がない場面では自己責任にならない。選択肢のない人に対して、自助をいうべきではない。

また、防災において家具を固定するという話があるが、現状として、賃貸の人は、原状回復義務を負っており制度的に固定することができない。ここには選択の自由がない。その場合は、原状回復義務を免除しなければならず、そこに気づいた自治体は、すでに公営関連物件については原状回復を免除している。

今回は多様な人が集まり、防災分野からの参加や男女共同参画分野からの参加、さまざまなバックグラウンドがあると思っている。それぞれの分野で、自助の前提として、女性を含め権利の保障が必須であり、その拡充をめざしてつながることが大切で、特に防災という分野はつながりやすいので、関心を持つ人が増えればと願っている。アウトドアに関心があれば、楽しく日常にも災害時にも使える事例を紹介したので、日々の生活に取り込んでもらえればと思っている。さらに、つながるためのツールとして、令和2年5月に出了された内閣府男女共同参画局のガイドラインを是非、みなさんに使いこなしてほしい。

●企画メンバー

神谷 能宏 佐藤 和江 鈴木真理子 高木 一恵 田中 淳次 塚本 好江 都筑 広子 出口 志穂
長坂 典子 西尾實千恵 丹村 恵 松原 美花 山本 幸子

分科会 E | 【男性にとっての男女共同参画】

報告会、基調講演、グループワーク

みんなで語ろう リモート座談会

■日時：11月13日(金) 15:00~16:30



<講師>

川島 高之

NPO法人ファザーリング・ジャパン理事
NPO法人コジカラ・ニッポン代表理事

報告要旨

報告者：横井 寿史（コーディネーター）

分科会E企画グループの当初の打ち合わせにおいては、テーマが「男性にとっての男女共同参画」ということで考えられる内容が非常に幅広いため、具体的にどのような内容にするかが話し合われた。

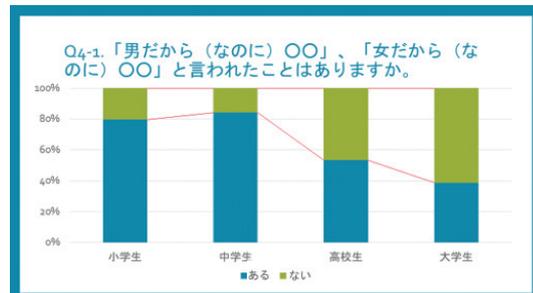
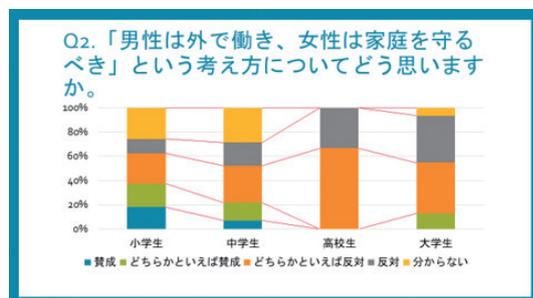
そもそも「男性にとっての男女共同参画」とはなにを指しているのか、また「男性にとっての」と冠すること自体が男女共同参画ひいてはダイバーシティという考え方に反するのではないかとといった意見が出た。そうした話し合いをしていく中で、男女間における役割分業が話題となった際に、そもそも今の若い世代においては、我々（分科会の企画メンバーを差す。概ね40代以上）が思っているほど男女差別のようなものは感じていないのではないかと、という仮説が立てられることとなった。無論、政府が行っている統計等において世代間の意識の違いは認識していたが、実際にこの日本女性会議が行われる刈谷市における若者の意見を聞き、それらを発表したら面白いのではないかとということになった。

実はこの分科会においては、日本女性会議2020あいち刈谷大会が開催される前年にプレイベントを行い、その場では多くの大学生と幅広い世代の参加者同士が意見交換をし、確かに世代による意識の違いを実感することができた。

そして実際に、刈谷市内の小中高大に通う学生を中心に、男女共同参画に関するアンケートを行った。その結果によると、『男性は外で働き、女性は家庭を守るべき』という考え方についてどう思うか』という質問に対しては、ほとんどの世代において「反対（どちらかといえば反対も含む）」が多数を占めた。

しかしながら、小学生に対するアンケート結果だけをみれば賛成と反対はかなり拮抗しており、また中学生においても賛成は2割を超えており、依然として役割分業の意識が垣間見られた。『男だから（なのに）〇〇、女だから（なのに）〇〇』と言われたことはありますか』という問いに対しては、小中学生においては大多数が「ある」と答え、高校生においても半数を超える人が「ある」と答えており、そうした価値観にさらされることで、役割分業の意識を植え付けられてしまった可能性もあるだろう。

日本女性会議の本番においては、それらのアンケート結果を発表した上で、父親の子育て支援をしている特定非営利活動法人ファザーリング・



ジャパン理事の川島高之氏による「男性にとっての男女共同参画」をテーマにした基調講演を行った。

基調講演後は、アンケート結果や基調講演を踏まえて、いくつかのグループに分かれて意見交換を行った。

参加者の意見や感想を見聞きして一番印象的だったのは、「男女の役割分業について問うのはテーマとしては古いのではないか」というものだった。

確かに男女差別を考える際には、いままでも常にテーマとして掲げられるものであったし、政府においても継続して調査している項目であって、既視感を覚えるものであったかもしれない。現代においては、男性にとっての男女共同参画ということで管理職の働き方や、人生100年時代における定年後の在り方などについて議論することも意義があっただろう。

しかしながら、若い世代に向けたアンケート結果を見て分かるように、現代においても未だに「男は男らしく、女は女らしく」といった価値観を押し付けられる社会であって、この一見古いと思われるテーマは、解決されていない。

我々の分科会で問題提起したかったのはまさにその点なのである。性別よりも個人個人の考え方が重要だとするのであれば、「男性は〇〇、女性は〇〇であるべきという考え方についてどう思うか」という問いには明確に「反対」となるはずである。しかし、アンケートの結果では明確に「反対」と答える人は、「どちらかといえば反対」と答える人より少なかった。

明確に「反対」と答える人が少ない理由はいくつか考えられるが、まだまだ性別による役割分業の意識が根付いていることが大きな理由ではないだろうか。

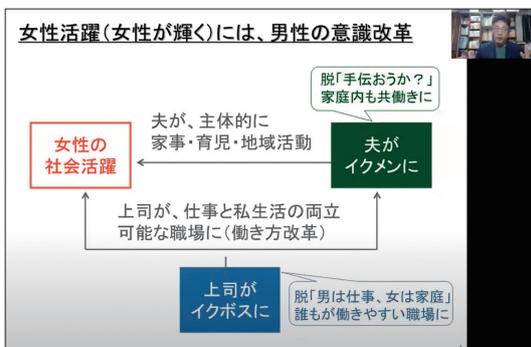
男性が当たり前家庭生活において活躍しない社会においては、女性の活躍も実現しないのである。

「賛成」「どちらかといえば賛成」

小学生・中学生	高校生・大学生
<ul style="list-style-type: none"> 男性の方がお金を稼ぎやすくなっているから 女性は育児が大変だから 女性は家事育児をしているだけで大変だから それが当たり前だから 女性の方が育児に詳しいと思うから 子供を産むのは女性だから 男は力があり、女は料理ができるから それが平等だから 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の両親がそうだったから 子育てとかがあるがガッツリ働くのは大変

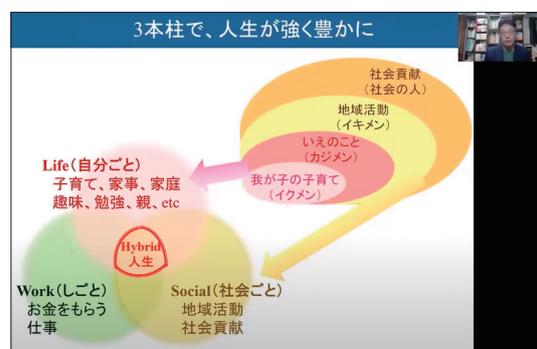
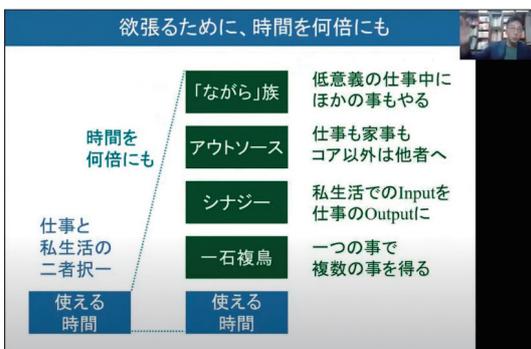
「反対」「どちらかといえば反対」

小学生・中学生	高校生・大学生
<ul style="list-style-type: none"> 男性も家事育児を体験した方がやさしくできる 男性でも家事などが得意な人もいると思うし、女性も家事が得意な人もいると思うから そうやって決めつけると働く女性が悲しそう 女性が家事をしないといけない決まりはないから 両親が働いているから 女性だけ仕事をしてはいけないはず 女性が働いたからって女性に育児をまかせっけりばよくない 	<ul style="list-style-type: none"> 今と違って、学校では男子でも女子でも家庭科、理科の習字を取らされているし、男性が家庭を守ってもよいと思う 性別で行動を制限してはいけないと思います。女性でも社会に積極的に出てほしいし、男性でも、育児に積極的に関わりましょうと思います 女性の社会進出をまたげる機会だから



話を戻すと 私生活が、仕事力を高める

Work 仕事の能力、成果	視野や人脈が広がる、生活者視点を得る、感性が磨かれる、イノベティブな人になる
UP	マネジメント能力、部下育成力、コミュニケーション能力が高まる
Life 家事、育児趣味、勉強親孝行、健康	段取り力が高まる、効率的になる主体的になる、「No」と言える
Social 地域活動ボランティアNPO	笑顔が増える、健康になる、精神の安定働く意欲が高まる、踏ん張りがきく 肩書の無い自分(の実力)を知る



●企画メンバー

横井 寿史 岡 由香 白瀧貴美子 杉野 愛 鈴木 昌子 高尾 絵美 武田 清美 橋本 淳邦
樋口 大河

分科会F | 【ライフ・ワーク・バランス】

講演、事例発表、パネルディルカッション

一人一人が輝く未来 ～モノづくりの愛知から～

■日時：11月14日(土) 10:00～11:30



<講師・パネリスト>

中根 弓佳

サイボウズ株式会社執行役員

<コーディネーター／パネルリーダー>

細見 純子

一般社団法人中部品質管理協会
経営企画室長／トヨタ自動車株式会社
認定講師（問題解決／自工程完結）

<事例発表者／パネリスト>

小森 麻希

アイシン精機株式会社人事部
AR人事企画戦略グループ担当員

光田 芽衣子

日本特殊陶業株式会社経営管理本部
労務部労務企画課

魚住 理沙

SCSK株式会社人事・総務グループ
人事部西日本・中部人事課課長

報告要旨

報告者：細見 純子（コーディネーター／リーダー）

1. 取り組む課題

誰もが社会や組織で生涯働く時代に入り、その働き方や生き方も様々なあり方が出てきて、集団より個を主体にした価値観も芽生えてきた中で、ここ愛知は製造業が集積し、社会・産業・組織においても標準化の意識が根強い。また、全国に比して「多様性を前提とした女性活躍度」や「ライフ・ワーク・バランス」の取り組み数値が低いのが現状。組織や地域における、この顕在的、そして潜在的な課題をも明確化し、その是正策を一緒に考えて、自組織に対し少しでも取り組んでみる。また、組織変革の前に、まずは自分らしく生きる、輝くというあり方を、参加メンバーと主体的に取り組む。

2. 目的

あるべき姿として「一人一人が自分らしい人生の選択ができる多様性が認められる社会、組織」を描きながら、現状とのギャップを明確化し、そこに存在する課題を研究し、是正に取り組む。この日本女性会議で、その研究した事例や取組事例の共有を図り、自分たちや身近な地域はもちろん、日本全国の課題是正に貢献する。

3. 概要

「100人100通りの働き方」をかけたユニークな組織のあり方を実践しているサイボウズ(株)の人事執行役員を招聘し、その取り組みの根底の考え方、価値観など何うととも、分科会メンバー3社から自組織の取組事例を紹介。参加者にも所要所でアンケートにて意見を聴きながら、登壇者同士で「誰もが幸せに活躍する組織、社会とは」をテーマに意見交換し、近未来の生き方、あり方を提言。

(1) 招待講演：講師 サイボウズ(株)執行役員 中根 弓佳氏

「100人100通りの働き方～ひとりひとりのワクワクこそがイノベーション～」

中根執行役員ご自身の取り組み（副業、時間・場所の選択等）を紹介いただきながら、講演テーマでもあるサイボウズの人事方針と、その具体的な施策を紹介頂く。

| 分科会 G | 【性の多様性】 講演、パネルディルカッション

生と性の多様性をみとめあうために

～教育・企業・行政の立場から～

■日時：11月14日(土) 10:00～11:30



<講師・コーディネーター>

風間 孝

中京大学教養教育研究院教授

<パネリスト>

浦田 幸奈
愛知県中学校教員

加藤 聡人
加藤精工株式会社代表取締役社長

樋口 進
豊明市役所市民協働課

報告要旨

報告者：風間 孝（コーディネーター）

1 目的

一人ひとり異なる生と性のあり方を正しく理解し、認め合える社会になるために、①LGBTをとりまく環境について正しく理解する、②日常生活における不都合を知り、暮らしやすい社会をつくる、③自分を大切に、相手の大切さも認め合える社会をつくる、の3点を目的として分科会を開催した。

2 内容

(1) 開会挨拶

分科会リーダーの早川宣子より、この分科会が11人のメンバーにより準備された経緯と分科会の目的（上記1を参照）について説明がおこなわれた。

(2) 講演：LGBTをめぐる状況～教育・企業・行政～

コーディネーターの風間孝（中京大学）が性の多様性についての基礎知識、そして教育・企業・行政におけるLGBTをとりまく状況について講演を行った。その中では、①ひとの性には身体の性に加えて、性自認、性表現、性的指向という4つの側面がある、②LGBTの生徒の7割が学校でいじめを経験しており、そのいじめはLGBTのメンタルヘルスを悪化させる要因にもなっている、③LGBTは企業における性的指向・性自認の理解不足が原因で求職時、そして就職後に困難を抱えている、④自治体が性の多様性について対応する理由として、住民には必ずLGBT等が含まれ、日常での被差別経験から行政サービスの利用に不安を抱えていることなどが報告された。

(3) パネリストの自己紹介と取り組みの報告

3人のパネリストから、自己紹介を兼ね現場での取り組みを報告してもらった。

まず浦田さんからは、生徒および全校にカミングアウトした経験、その後の転任先で女性の教員として勤務している経験が語られた。そして性だけでなく障害や国籍を含めた多様性が学校で当たり前存在することを旨とした実践の紹介があった。つぎに加藤さんからは、「個性を発揮し、組織力を上げる」ために、LGBTQについての研修の実施、同性パートナーを配偶者と認めていること、性別適合手術やホルモン治療を理由とした休暇取得を認めていることが報告された。最後に樋口さんからは、平成29年に豊明市として「LGBTとともに生きる宣言」をして以降、市民への啓発を進めつつ、一般職員、幹部職員、市議会議員等に対しても全員研修を実施してきたこと、そして令和2年よりパートナーシップ宣誓制度を開始したとの報告があった。

(3) パネルディスカッション

コーディネーターより、パネリストに対して3つの質問を行った。LGBTの取り組みがそれぞれの現場でどのように受け取られているかが最初の質問であった。浦田さんからは、職場では通称名を使用できる等の配慮をしてもらっていること、また保護者からは目立った反応はなかったが、応援していますと声をかけてもらった経験が紹介された。加藤さんからは、取り組み前からカミングアウトしていた社員がいたこともあり、取り組み自体を特別視する認識は社内になかったとの報告があった。樋口さんからは、市民からは批判的な意見は届いていないこと、そして当事者からよくやってくれたという声が届けられたとの話があった。

つぎに取り組みを始めたことによる変化について尋ねた。浦田さんからは、性的マイノリティがいて当然という考えが広がり、生徒から制服等の要望が出てきたときに備えて対応していこうという話が学校で出ているとの報告があった。加藤さんからは、取り組みを始めてカミングアウトした従業員が出てきたわけではないが、会社の考えを従業員に知ってもらうとともに、地域に伝わる中で今回の分科会に呼ばれたように地域との接点が増えたと感じている、との話があった。樋口さんからは、職員研修を通して市の職員全体として理解が高まり、書類等における不要な性別欄を順次削除する動きが生まれたことが紹介された。

最後に、取り組みを始めようと考えている人への助言を尋ねた。浦田さんからは、当事者は学校にすでにいることを認識すること、偏見を持っていないという姿勢を示すことの重要性、当事者の希望が一人ひとり異なることを踏まえたうえで、寄り添うことの大切さが語られた。加藤さんからは、トップが事実を知り、自分の課題と照らし合わせて何をすべきかを考えること、また当事者のサポートを得ながら取り組みを進めることの重要性が指摘された。樋口さんからは、市の職員だけでなく、市議会議員や民生委員、児童委員、教職員の理解を促進することの重要性が強調された。このあと参加者からの質問に答え、パネルディスカッションを終了した。

(4) 閉会挨拶

最後に分科会副リーダーの杉本浩子から、今後の取り組みとして、分科会での取り組みを活かし「日本女性会議2020あいち刈谷」を第一歩（ファーストステップ）と位置付け、性の多様性が尊重し合える環境を作っていきたいとの閉会の挨拶が行われた。

3 当日の総括

これから各地域で取り組みを始めようと考えている参加者に対して、教育・企業・行政の立場から、それぞれの取り組みのモデルと、取り組みによって肯定的な変化が生み出されることを示すことができた。また刈谷市においても、「日本女性会議2020あいち刈谷」をきっかけに、性の多様性が尊重し合える環境づくりを進めていきたいと考える。



●企画メンバー

早川 宣子 安藤もも香 石原 春代 稲生 令子 風間 孝 杉本 浩子 当麻志津香 長谷川淳子
原田ゆかり 前田 末子 山崎嘉代子

分科会 H | 【女性が輝けば地域も輝く】
講演、グループワーク

わたしが元気に活躍する地域づくり

■日時：11月14日(土) 10:00~11:30



<講師>

川北 秀人

I IHOE

「人と組織と地球のための国際研究所」代表

<コーディネーター>

岡本 一美

日本福祉大学非常勤講師

<パネリスト>

國見 佳代子 地域プロデューサー／office_923代表

神谷 美砂 安城市町内会長

報告要旨

報告者：岡本 一美（コーディネーター）

男女共同参画推進による「持続可能なまちづくり」を実践するヒントを得よう！

1. 取り組む課題

全国の地縁型組織では、参加率の低下や役員の担い手不足を抱え、持続可能性が危うい。にもかかわらず、国策「地域共生社会」は、自助互助に期待した「地域づくり」に依拠しており、このままでは次世代への重い負担がさらに大きくなる。

2. 目的

男女共同参画推進による持続可能性の拡充が期待される地縁型組織や住民自治を視野に、女性役員など地域における女性の活躍により、地域課題解決や事業型へ進化した取り組みを学び、それぞれの地域づくりに活かすことのできる具体策を得る。

3. 本大会概要

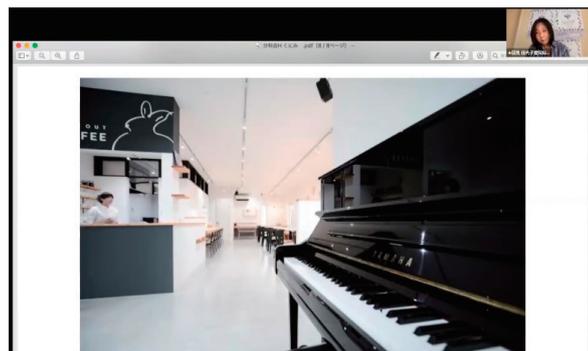
(1) 事例報告

地域プロデューサー 國見 佳代子氏

新美南吉にちなんだ映画や安城七夕まつりにかかわるミュージカルのプロデュースをはじめ、カフェの運営など、まちを大切にしたい若者文化を育む取り組みを紹介。

安城市町内会長 神谷 美砂氏

長い地域活動の経験後に町内会長就任。福祉委員会の発足や防災の取り組みをはじめ、コロナ禍における「できる活動」への柔軟なシフトなどを紹介。



(2) ミニ講義 I IHOE代表 川北 秀人氏

持続可能な地域づくりを進めるための「小規模多機能自治」を、全国各地で提唱・推進している講師が、人口・世帯構成の「これまで」と「これから」をもとに、地域づくりの主役である前期高齢者（65歳から74歳）数の推移、自治会長や防災委員に占める女性の比率などを切り口に示しながら、今すぐにでも行うべき「行事・会議・組織の棚卸し」や「中学生以上全住民調査による1人1票制」を提案した。



(3) グループワーク

①感想、②わが地域の強みと課題、③今後の取り組みについて、14のブレイクアウトルームで意見交換

(4) 質疑とまとめ

- ・自治会の運営資金調達は？
⇒経営意識を
- ・若者を参画させるためには？
⇒自治会で中学生以上のアンケート調査を
- ・多様な人の参画で柔軟な運営、持続可能なまちづくりを

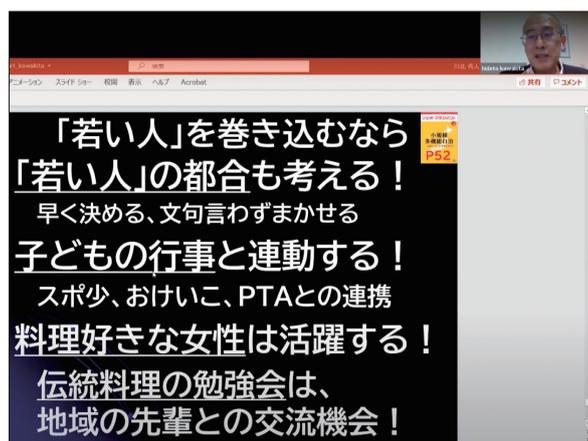
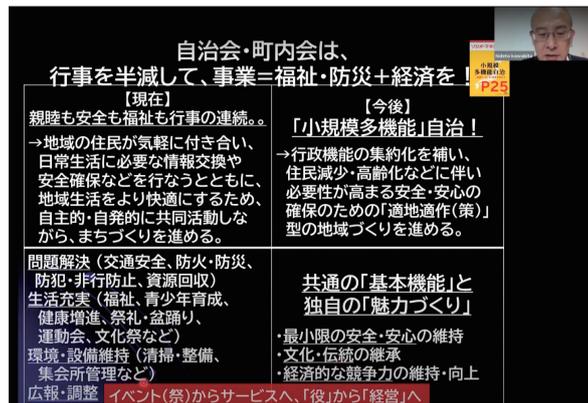
4. 成果 参加者の声

全国（北海道・石川・栃木・甲府・愛知・岐阜・滋賀・和歌山・奈良・岡山・鳥取・島根・福岡など）からの多様な属性（地域役員・行政・学生）の参加者が、それぞれの地域特性や課題を考え発言する機会となった。

- ・現状維持の町内会活動を変革するきっかけをつくりたい
- ・降雪地域なので、町内会費はイベントでなく除雪費用に使っている
- ・男性高齢者主導で、情報が届かない。雲南市の取り組みは素晴らしい
- ・下宿学生には、まちづくりへの参加のきっかけがない
- ・一人一票制に可能性を感じる
- ・若い人の参画を促すために、ITを活用したい
- ・「爺さんがダメにしている」その通りと思った
- ・人口分析から考えると、誰もが理解できると思う
- ・防災でまちづくりを推進、若者の希望でかまどベンチを購入し、楽しみながら訓練中
- ・はがき運動で住民みんなに届け意見を聞く。QRコードをつけると返信が増えるのではないかな
- ・地域の宝探しウォーキングで、地域愛をはぐくむ

5. 課題

講師や事例報告者の話をじっくり聞きたかったとの声が多く、全国でも同様に地縁型組織の運営に苦慮している実態が明確になった。「地域経営」をテーマに、継続した研修機会が必要である。



●企画メンバー

神谷 美砂 石川れい子 岡本 一美 加納多恵子 川本 道子 國見佳代子 早川 純子 船尾 恭代
森 紀代美

分科会I | 【子ども・子育て】
ワールドカフェ形式 グループワーク

子どもたちの未来をプロデュースする
～今やるべきこと、今できることをみんなで考えよう～

■日時：11月14日(土) 10:00～11:30



表1 分科会のグループワークテーマ

<コーディネーター>

永田 雅子
名古屋大学教授

<話題提供者>

塩之谷 真弓
中部大学准教授

<グループリーダー>

矢吹 勇治
株式会社デンソー
総務部IA室

遠藤 幸子
日本赤十字豊田看護大学助教
小児看護学

塚本 岳
リトルハウス主宰

特定非営利活動法人
子育て・子育てNPOスコップ

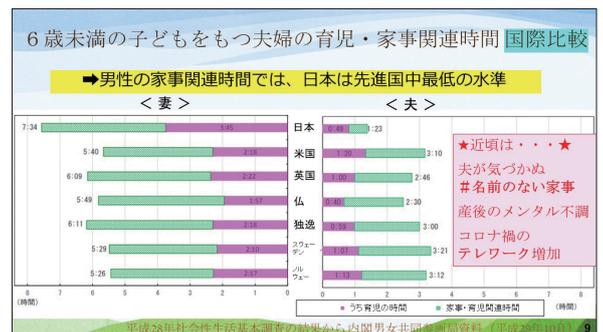
報告要旨

報告者：永田 雅子（コーディネーター）

分科会Iでは、「子ども・子育て」を土台に、“子どもたちの未来をプロデュースする—今やるべきこと、今できることをみんなで考えよう”を掲げて、参加型のワークショップを企画した。

当初、今の子どもたちは未来を描けているのか？、という素朴な疑問から始まったこの企画であったが、COVID-19の感染拡大に伴い子どもたちを取り巻く環境や生活が大きく変わり、今まで当たり前だったことが当たり前ではなくなる状況となった中での開催となった。妊娠・出産・子育ての中でサポートを得られにくくなり、子どもの遊びや活動が制限された今だからこそ、子どもの育ち・子育てを支えていくために何を大事にしていかなければならないかという本質を参加者とともに考える場になったのではないかと考えている。

この分科会では、まずコーディネーターの永田から、本分科会の企画趣旨について、子どもを取り巻く状況と子どもの権利条約と関連させるかたちで提示させていただいた後、保健師として長く活動をされてきた中部大学の塩之谷真弓氏から、家族や子育て、子どもの育ちを取り巻く状況について統計資料を提示するかたちで話題提供が行われた。そのあと、子どもの育ちを「生活や暮らし」「子どもの遊び」「コミュニティ」を切り口に9グループに分かれ、



World Cafe方式で議論を行った。セッションごとに内容の共有と方向性の提示を行い、コーディネーターの私から全体のまとめを行っていく形で進めていった。

日本女性会議の中で、“子ども”“子育て”という焦点を絞った分科会にどれだけ皆様に興味を持っていただけるのかということに不安を感じていたが、蓋をあけてみれば、様々な地域、様々な肩書や背景を持った方に集まっていたことができた。北は北海道帯広市、南は沖縄県宜野湾市から、20代から70代まで幅広い年齢層の方66名の参加となった。また、子育ての現場で活動されている方だけではなく、会社員、主婦・主夫、自治体職員など異なる背景を持った方、大学生も若い世代を代表して参加してくれており、様々な立場からの視点を共有できる機会となった。立場によって見える姿、現状は異なるものの、コロナの状況の中で、より問題が顕在化していく可能性がある状況を共有し、自分たちそれぞれが今何ができるのか、地域の資源をどう使うことができるのか、またそれ以上に、子どもや子どもを育てる家族にとって何を一番大切に支援していくことができるのかについて活発な議論が行われ、新たな問題提起につながっていった。

参加者の方からは、「皆さんとディスカッションをして話し合えたことが新鮮で嬉しかった」「いろいろな立場の方々、地域の方々とお話しができたのもとても貴重で大切な時間になった」「とても有意義な会だった」とおおむね好評な感想が寄せられた。今回オンラインとなり、グループディスカッションがうまく機能するのかなど、前日まで運営上の不安もあったが、サポートスタッフにしっかりとバックアップをいただき、あっという間の1時間半となった。コーディネーターとして、私が担当させてもらったが、会の企画・運営には、NPO法人子育て・育ちNPOスコープの代表杉浦登喜子氏はじめ、事務局スタッフに多大なる力添えをいただいた。そしてこの企画に賛同し、グループのファシリテーターやアシスタントを務めてくれた18名の仲間たちに改めて感謝を示したい。

今回の会議の“ミライク”という言葉であらわされているように、ここでできたつながりを未来につなぎ、次の世代へとしっかりとバトンを手渡せるように今後も活動をしていきたいと思っている。



●企画メンバー

杉浦登喜子 赤松 妙子 伊藤 裕佳 太田 泰雅 加古 葉子 加藤 愛子 黒木 知子 橋本由希子
樋口 大河

| エキシビジョン | 【ミライク若者会議】

U-40と考える かけがえのない“わたし”を生きる

■日時：11月15日(日) 10:00~13:00



<パネラー>

水野 翔太
名古屋わかもの会議
創設者／総合統括

晝田 浩一郎
株式会社官民連携事業研究所
チーフマネージャー

<グラフィックレコーディング>

田中 恵一
介護医療グラレコグループむす部東海

<講演者・パネラー>

山本 恵子
NHK名古屋放送局報道部副部長

松岡 宗嗣
一般社団法人fair代表理事

<モデラー>

矢上 清乃
学び舎mom株式会社代表取締役

<進行・アシスタント>

廣田 彩友美
株式会社デンソー

加藤 裕子
株式会社キャッチネットワーク

大倉 昌子
NPO法人ママライフバランス副理事

報告要旨

報告：廣田 彩友美（進行／アシスタント）

1. 松岡 宗嗣氏 「男女平等とLGBTは別問題？」

LGBT当事者の悩みも女性が感じる男女格差も「マイノリティであること」に起因することが多く、根本は同じであると事例を示しながら提示いただいた。一方で、男性で同性愛者であるご自身の経験を踏まえ、賃金格差等まだまだ男女という観点で解消すべき問題も多いことを共有いただいた。その上で、法律上の性別だけでなく、性自認、性的指向や性表現が人によって異なるため、「性のありかたは男・女だけでなく、グラデーションのように多様である」ことを説明いただき、マイノリティが抱える問題の解決にあたっては、その問題がどの枠組みで起こっているのかを正確にとらえることが必要だと提言いただいた。

2. 山本 恵子氏 「『それって問題？』身の回りの“ジェンダーバランス”ニュースの現場から」

さまざまな調査結果のファクトを示しながら、ジェンダーバランスに偏りがある際に起こる影響について共有いただいた。

まず、日本のジェンダーギャップ指数の低さや、管理職に占める女性の割合の低さ、大学の専攻ごとの男女比を共有いただいた。次に、“夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである”という考えに6割以上の方が反対しているという最新の全国意識調査結果の共有や、英BBCテレビにおいて「50:50チャレンジ」という、アナウンサーやキャスターのみならず、コメンテーターや解説員を含めたすべての出演者の男女比を50:50にするという活動が始まっていることを紹介いただいた。最後に、男だから、女だからという価値観を押し付けるのではなく、自分らしく生きることがますます重要になってきているというメッセージをいただいた。

3. パネルディスカッション 「かけがえのない“わたし”を生きるために」

U-40世代(30歳代以下)を中心とした社会人パネラーによるディスカッションを実施した。

各パネラーが「かけがえのない“わたし”」として生きるために大切にしていることや、生活の中でジェンダーギャップを感じる場面を共有して、そのギャップに対してどんなアクションを起こしているか、起こせそうかについて意見交換を実施した。

パネラーはそれぞれの立場でジェンダーギャップやアンコンシャス・バイアスに直面しているが、「当事者が声をあげることで周囲に伝播していく」といった経験談や、例えばLGBTの問題解決に向けては、当事者でなくても彼らを理解し支援する「ALLY(アライ)」という人々の存在が重要であるという事例が共有された。

また、ジェンダーに対する考え方が世代によって大きく異なる傾向がある、という話題では、「かつて天動説が信じられていた時代に、地動説が主流に置き換わったいちばんの理由は、古い考えを持つ世代が全員亡くなったからというエピソードがある。このように、待っていればいずれ今の若い世代の考え方が主流になるという考え方もある。一方で、現在困っている人もたくさんいるので、絶滅を待たなくても下の世代の考え方が広がるよう、一人ひとりが小さな行動を積み重ねて、時計の針を早く進めることが大事ではないか」という意見があった。

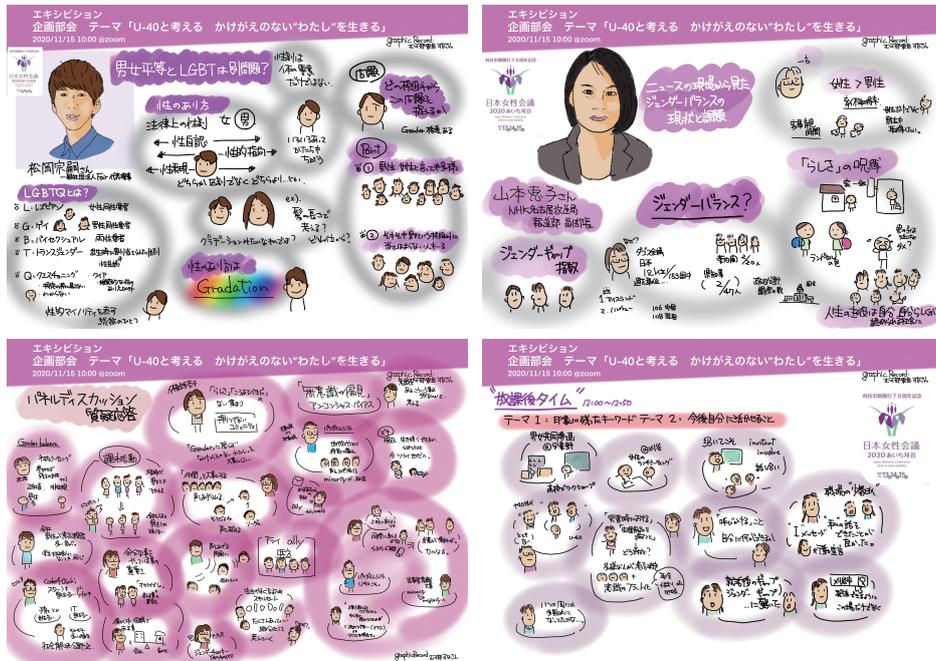
また、U-40世代にとっては古いと感じるジェンダーに対する考え方を持っている方についても、個人の責任があるわけではなく、時代背景や教育の影響を大きく受けてその考え方が形成されているのではないかという意見があった。それに対し、対立構造を作るのではなく、お互いがお互いのことを理解しようとする姿勢から対話が生まれるのではという意見が交わされた。

このように、今を生きる世代が、自分たちの想いや次の世代に向けてできることを共有できる機会となった。

4. 放課後タイム(参加者同士の感想の共有)

オンラインだと参加者間の意見交換や感想の共有が実施しづらく、学びが薄くなってしまわないかという企画チームの問題意識を背景に、参加者に対して感想共有のための放課後タイムを開催した。Zoomのブレイクアウトセッション機能を活用し、参加者とパネラーを5人程度のチームに分け、感想の共有や、自分が感じるジェンダーギャップや悩みについて意見交換を実施した。

最後は参加者全員で感想を共有する場を設け、「かけがえのない“わたし”を生きるために、“わたしは〇〇する“という、自分を主語にしたメッセージを発信していきたい」という意見や、「この場だけでなく、刈谷市でこのような議論をしたということをSNS等で発信し、次の活動へ繋げていきたい」といった意見が発表された。



【図】 グラフィックレコーディングによるまとめ

●企画メンバー

村井 弘二 安藤もも香 石川 裕高 嬉野 剛士 大倉 昌子 太田 泰雅 加藤 裕子 柴田さくら
白松 俊 情家 智也 田中 恵一 中島 祥那 南谷 真 長谷川 滉 樋口 大河 晝田浩一郎
廣田彩友美 矢上 清乃



あゆみ & まとめ

あゆみ

2016 (H28)	10月	28-29日	「日本女性会議2016秋田」参加	
2017 (H29)	3月		市内大学、企業、県内団体等に対し大会招致への賛同を依頼	
	7月	31日	平成31年度開催地である栃木県佐野市へ次期開催希望申請	
	9月	26日	「日本女性会議2019さの」実行委員会の指名により刈谷市での開催が決定	
2018 (H30)	2月	14日	第1回準備委員会	
	3月	17日	「女性をとりまく課題について語るワークショップ」①	
	5月	26日	「女性をとりまく課題について語るワークショップ」②	
	6月	9日	「女性をとりまく課題について語るワークショップ」③ 日本女性会議2020あいち刈谷サポータークラブメンバー募集開始	
	7月	20日	第2回準備委員会	
	9月	21日	日本女性会議2020あいち刈谷実行委員会発足 第1回実行委員会総会（規約、事業計画等の決定、役員選出、次期開催地の指名など）	
		29日	あいち刈谷大会PRイベント「日本女性会議ってなに？」	
	10月	12-13日	「日本女性会議2018in金沢」に参加し、あいち刈谷大会をPR	
	11月	11日	金沢大会報告会	
	12月	19日	第2回実行委員会総会（各部会正副部長選出、大会テーマ、分科会テーマ協議）	
2019 (H31)	2月	12日	第1回合同部会（各部会発足、部会員顔合わせ）	
		12日	第1回部会長会議	
	3月	28日	第3回実行委員会総会（平成31年度事業計画及び予算案、大会テーマ、分科会テーマの決定）	
	4月	12日	第1回企画部会	
		25日	第1回総務部会	
	5月		大会シンボルマーク&ロゴタイプ 決定	
		25日	第1回おもてなし部会	
	6月	11日	第2回企画部会 学生ボランティア募集	
	7月	25日	第2回総務部会（メール）	
		30日	第2回おもてなし部会	
		大会協賛金 募集活動開始		
8月	9日	第2回部会長会議		
	19日	第4回実行委員会総会（プレ大会、大会プログラム案の協議など）		
9月	19日	第3回企画部会		
10月	1日	刈谷市男女共同参画推進条例 施行		
	25-26日	「日本女性会議2019さの」参加予定 → 台風のため中止		
11月	5日	第3回おもてなし部会		
	15-17日	プレ大会「あなたとわたしのハーモニー2019」		
	9日	第4回企画部会		
12月	16日	第3回総務部会（メール）		
	25日	第3回部会長会議		



2020 (R2)	1月	1日	「ミライクNEWS」市民だより掲載開始（毎月1日号）	
		22日	第5回実行委員会総会（大会企画案の協議など）	
		28日	第5回企画部会	
	2月	21日	第6回企画部会	
		10日	第4回部会長会議	
	3月	13日	ニューズレター 発行	
		27日	第6回実行委員会総会（令和2年度事業計画及び予算案の決定、大会全体プログラム案の協議など）	
	4月	8日	第4回おもてなし部会	
		10日	愛知県緊急事態宣言（～5/31）	
		16日	緊急事態宣言（全都道府県）	
	14日	愛知県 緊急事態宣言対象区域からの解除		
	6月	16日	第5回部会長会議	
		24日	第7回実行委員会総会（オンライン開催の決定）	
		29日	ライフ・ワーク・バランス分科会イベント 「ジェンダー平等とライフ・ワーク・バランス～UN WOMEN 石川所長を迎えて～」【オンライン実施】	
		30日	オンライン開催推進チーム キックオフミーティング ①	
	7月	3日	企画部会 オンライン勉強会	
		9日	オンライン推進チームMtg ②	
		16日	オンライン推進チームMtg ③	
		17日	第5回おもてなし部会	
	8月	27日	オンライン推進チームMtg ④	
		31日	第6回部会長会議	
		1日	エキシビジョングループイベント 『ミライク若者オンライン会議 ～社会はツライよ?! 若者よ、 コロナ社会を自分らしく生き抜こう!～』【オンライン実施】	
		6日	オンライン推進チームMtg ⑤	
		17日	オンライン推進チームMtg ⑥	
		19日	愛知教育大学連携市民講座「ジェンダーで新しいわたしに出会うVol. 1 『女性作曲家と知られざる名曲～お話と演奏～』【オンライン配信（～10/16）】	
		24日	ニューズレター（参加募集パンフレット）発行	
	9月	27日	オンライン推進チームMtg ⑦	
		28日	第7回部会長会議	
		7日	参加者募集開始 オンライン推進チームMtg ⑧	
		12日	愛知教育大学連携市民講座「ジェンダーで新しいわたしに出会うVol. 2 『異文化理解とジェンダー：結婚と離婚から考える』【オンライン実施】	
10月	17日	オンライン推進チームMtg ⑨		
	23日	第8回部会長会議		
	28日	オンライン推進チームMtg ⑩		
	29日	第8回実行委員会総会（各部会からの報告、参加申込状況の確認）		
	5日	オンライン推進チームMtg ⑪		
	14日	オンライン推進チームMtg ⑫		
11月	19日	第9回部会長会議		
	22日	オンライン推進チームMtg ⑬		
	29日	オンライン推進チームMtg ⑭		
	2日	第9回実行委員会総会（各部会からの報告など）		
	3日	配信リハーサル		
2021 (R3)	2月	21日	ミライクの未来を考える会Vol.1	
		17日	ミライクの未来を考える会Vol.2	
		24日	第10回実行委員会総会（令和2年度事業報告、収支決算報告）	
3月	31日	日本女性会議2020あいち刈谷実行委員会解散		

◎女性をとりまく課題について語るワークショップ

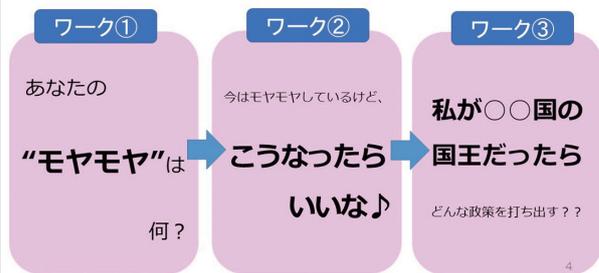


ワークショップ開催の目的

- ▶ 「日本女性会議」について知ってもらい、2020年に刈谷市で開催されることをPRするとともに、開催に向けた機運の醸成を図ること
- ▶ 刈谷（や周辺地域）に住む女性が日々の生活の中で感じている「課題」を抽出し、刈谷大会における大会テーマや分科会テーマについての意見を集約すること
- ▶ 今後、実行委員会を中心に刈谷大会を企画運営するにあたり、広く市民や市民活動団体に所属する人などの参画が必要となるが、その核となる人材を発掘またはネットワークを構築すること

2

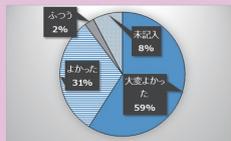
第1回ワークショップ 内容



4

第1回ワークショップ アンケートより

★ワークショップの内容について



参加者が常にいろいろなモヤモヤを持っていることがよくわかりました。またそれをどこかで発散させる場を設けることが大切であると感じました。

楽しかったが、今日の参加者と一般の人の考えとは乖離がある気がしました。

性別、世代を超えて話すことの気づきはとて大きい。こうした気づきが意識の変化、社会の変容につながっていくと思います。

自分が自分らしくできることを、まずやってみようと思いました。まわりに振り回されることなく、自己主張できる自分になりたいと思いました。

熱意はあるが恥ずかしい…。やりたい、参加したいがどうしたらよいかわからない…という人はたくさんいる。そういう力をもっと使うことが必要！

★自由記載意見（抜粋）

8

第2回ワークショップ 内容

- ▶ そもそも「男女共同参画」ってなんなんだ？

『男性も女性も、意欲に応じて、あらゆる分野で活躍できる社会』

→ 職場に活気・家庭生活の充実・地域力の向上

→ ひとりひとりの豊かな人生

まさに
社会の理想像

- ▶ ワールドカフェ方式

「気づいていない“不利益”について考よう」

指導的地位に女性が占める割合が少ないことの課題と、解決のための方策・手立ては？

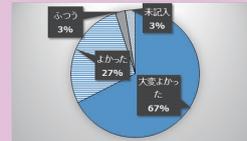
↓ 以下、7つのテーマについてワーク実施

- ①多様性、②防災、③地域、④教育、⑤メディア、⑥医療・介護、⑦家事・子育て

10

第2回ワークショップ アンケートより

★ワークショップの内容について



他市をたくさん巻き込んで、日本女性会議2020刈谷をぜひ成功させてほしいと思います

若い世代には女性会議のことはあまり知られていないのではないかと感じました。

★自由記載意見（抜粋）

ワークショップのテーマの選択刈谷らしさ（今までにない斬新さ）が出るといいなと思いました

話し合う大切さ、多世代交流の重要性が共有できて、良い時間でした

女性ばかりかと思いきや男性の方もみえ、若い女性ももっとたくさんの方に足を運んでもらえるといいなと思いました。

女性の問題をキーワードに考えていくにしても、それを含めた社会全体の課題につながると思いました。

13

第3回ワークショップ 内容

- ▶ 刈谷の特色・地域性・イメージって？

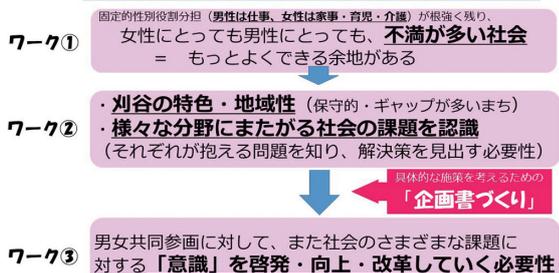
- ▶ テーマ案 意見だし

- ▶ メインワーク

『日本女性会議2020刈谷 分科会の企画書を作ろう！』

16

ワークショップ①～③まとめ



24





◎プレ大会「あなたとわたしのハーモニー2019」(令和元年11月15-17日)

日本女性会議 2020 あいち刈谷プレ大会
あなたとわたしのハーモニー2019
2019年11月15日(金)~17日(日)

11/17(日) 講演&シンポジウム
誰もが輝く社会をめざして
～スポーツ界からのメッセージ～

講演者・シンポジスト
高田 千明氏 (陸上競技女子代表)
真鍋 政義氏 (陸上競技男子代表)
小塚 崇彦氏 (フィギュアスケート)
寺田 恭子氏 (桜花学園大学)

■日時 14:00(13:00開場)
■場所 総合文化センター大ホール(自由席)

講演&シンポジウム

主催:日本女性会議2020あいち刈谷実行委員会、(一財)自治総合センター
**誰もが輝く社会をめざして
～スポーツ界からのメッセージ～**

■日時 2019年11月17日(日) 14:00～16:30
■出演者
講演者・シンポジスト 高田 千明氏 (2016年リオパラリンピック陸上競技日本代表)
シンポジスト 真鍋 政義氏 (2012年ロンドンオリンピック全日本女子バレーボール監督)
シンポジスト 小塚 崇彦氏 (2010年バンクーバーオリンピックフィギュアスケート日本代表)
シンポジスト 寺田 恭子氏 (桜花学園大学教授)

■内容
高田千明さんと夫の裕士さんによる「夢とギャップを乗り越えて」をテーマとした講演と、真鍋さん、小塚さん、寺田恭子さんとのパネルディスカッションを開催。スポーツを通して、社会の多様性や、様々な違いを乗り越えることで、誰もが輝くことができる社会が実現されることを学ぶ。

■参加者 567人

プレ分科会

「多文化共生」グループ企画

世界の音楽と料理で交流しよう

■日時 2019年11月16日(土) 14:00～16:00
■講師 音楽を演奏する外国人、料理を作る外国人
■内容 外国人が多く暮らす愛知県。音楽や料理という身近な交流を通して、異なる言葉や様々な文化を持つ人々と出会い、暮らしを豊かにするヒントを学ぶ。
■参加者 38人



「DV」グループ企画

#MeToo #With You 性暴力 無罪判決からフラワーデモへ

■日時 2019年11月16日(土) 14:00～16:00
■講師 具 ゆり氏(フェミニストカウンセラー)、岡村 晴美氏(弁護士)
■内容 娘への性的暴行の罪に問われた父親に無罪が言い渡された名古屋地裁岡崎支部の判決から、その概要や問題点を学ぶとともに、性暴力に抗議する「フラワーデモ」など世論の動きを含めた様々な声を知ることを通して、これからの社会のあり方を考える。
■参加者 60人

「男性にとっての男女共同参画」グループ企画

みんなで語ろう! ～男らしさ? 女らしさ? 当たり前って何だろう?～

■日時 2019年11月16日(土) 10:00～12:00
■講師 東村博子氏(名古屋大学教授・男女共同参画センター長)
講演タイトル 『性差ってなんだろう?性によらず全ての人が輝く』
■内容 「男だから泣くな」「女子力があるね」など、日常生活で性別によって不平等を感じる実情がある中、世代を超えた話し合いを通して、理想の社会やその実現のために何ができるのかを考える。
■参加者 28人



「女性が輝けば地域も輝く」グループ企画

女性トップは地域を変えられるか?!

■日時 2019年11月17日(日) 10:00～12:00
■出演者 コーディネーター 岡本 一美氏(日本福祉大学非常勤講師)
パネラー 前澤 このみ氏(新城市社会福祉協議会会長)、石井 久子氏(知多市南粕谷ハウス事務局長)、神谷 美砂氏(安城市相生町内会会長)
■内容 組織変革や運営改革を担ってきた女性リーダーの生の声を集め、その可能性と現状、課題を共有する。「地縁型組織の女性トップ」である3人のパネラーからの取り組み事例報告の後、「女性リーダーの可能性・課題」をテーマとした座談会を開催。
■参加者 44人





「子ども・子育て」グループ企画

親子で学ぶ「いのちの授業」

■日時 2019年11月17日(日) 10:00~11:30

■講師 お母さんたちの「いのちの授業」ここいく

■内容 「赤ちゃんはどこからくるの?」そんな子どもの素朴な疑問や、体の成長、命をつなぐ性のお話について、パネルや紙芝居、寸劇を使ってわかりやすく楽しく学ぶ。

■参加者 15組30人

「エキシビション」グループ企画

脱・日本型新しい家族のカタチ <参加型パネルディスカッション>

■日時 2019年11月16日(土) 13:30~15:30

■出演者 モデラー 晝田 浩一郎氏(岡崎市職員)
パネラー 廣田 彩友美氏(株式会社デンソー)、
矢上 清乃氏(学び舎mom株式会社代表取締役)、
白松 俊氏(名古屋工業大学准教授)、
南谷 真氏(Code for AICHIリサーチャー)



■内容 新しい家族のカタチで活躍する多彩なパネラーによる新感覚パネルディスカッション

■参加者 49人

実施の様子



▲参加者に本大会に向けてのメッセージをふせんに書いてもらい、そのふせんで大会のシンボルマークを形づくった



▲各団体等による展示物の展示



▲シンポジウム開催時に栃木県佐野市への募金とメッセージを募集



刈谷高校の▶SSH(スーパーサイエンスハイスクール)活動のポスター展示&セッションを実施



▲趣味や特技を生かした手作りマルシェ

◀ボッチャの体験コーナーも



◀中学生を対象に実施した「男女共同参画ポスターコンクール」表彰式を実施

◎ライフ・ワーク・バランス分科会プライベート

ジェンダー平等とライフ・ワーク・バランス

～UN Women石川所長を迎えて 講演とパネルディスカッション(オンライン実施)

日本女性会議 2020 あいち刈谷
Japan Women's Conference 2020 in Aichi KARIYA
第1分科会(ライフ・ワーク・バランス) プレイベント

オンライン講演会&座談会
ジェンダー平等と
ライフ・ワーク・
バランス
～UN WOMEN 石川所長を迎えて～

2020年
6/29(月) 10:00～11:30
参加費無料

UN WOMEN
日本事務所長 石川 雅恵
PROFILE
国際機関(国連)・実務経験において
20年勤務。2017より現職。

【講演内容】
世界でジェンダー問題の是正をけん引する国際機関であるUN Women
日本事務所長の石川氏を迎えて、「ライフ・ワーク・バランス」と「ジェンダー
平等」を考える機会を創出。世界におけるジェンダーの取り組み、また日
本と世界の比較などについて伺った後、分科会企画メンバーと「一人一人
が輝くには」というテーマでのディスカッションを実施。また初めて経験す
るコロナ禍での変化も共有。

【申込者数】 302人

【所感】 コロナ禍で11月の本大会がオンライン配信となることが決定後、関連イ
ベントとして初めてのオンライン配信として実施。講演者、メンバーそれぞ
れ別の場所からオンライン上で参加する形態で、メンバーにもよい経験と
なる。企画内容としても、UN Womenという、ジェンダー平等を世界で
牽引する組織からの情報提供は啓蒙が多く、メンバーは直接意見交換でき
たことで研鑽がはかれ、参加者にも参考になる視点、情報共有ができた。
また、日本女性会議としても、UN Womenとつながり、プレとはいえ招
聘イベントを実施できたことは大変意義があったと思う。また、コロナ禍
で急に始まった企業の在宅勤務や働き方改革の現状、課題等を実際の最
新情報も盛り込みながら共有。それぞれの本音に迫る意見交換ができ、参
加者からは、最後の「時間=生きること」に気づきをいただけたという意見
が多く寄せられ、参考となったようで良かったと思う。

■日時 2020年6月29日(月) 10:00～11:30

■出演者 石川 雅恵氏 (UN Women日本事務所長)、分科会メンバー

■内容 世界でジェンダー問題の是正をけん引する国際機関であるUN Women
日本事務所長の石川氏を迎えて、「ライフ・ワーク・バランス」と「ジェンダー
平等」を考える機会を創出。世界におけるジェンダーの取り組み、また日
本と世界の比較などについて伺った後、分科会企画メンバーと「一人一人
が輝くには」というテーマでのディスカッションを実施。また初めて経験す
るコロナ禍での変化も共有。

■申込者数 302人

■所感 コロナ禍で11月の本大会がオンライン配信となることが決定後、関連イ
ベントとして初めてのオンライン配信として実施。講演者、メンバーそれぞ
れ別の場所からオンライン上で参加する形態で、メンバーにもよい経験と
なる。企画内容としても、UN Womenという、ジェンダー平等を世界で
牽引する組織からの情報提供は啓蒙が多く、メンバーは直接意見交換でき
たことで研鑽がはかれ、参加者にも参考になる視点、情報共有ができた。
また、日本女性会議としても、UN Womenとつながり、プレとはいえ招
聘イベントを実施できたことは大変意義があったと思う。また、コロナ禍
で急に始まった企業の在宅勤務や働き方改革の現状、課題等を実際の最
新情報も盛り込みながら共有。それぞれの本音に迫る意見交換ができ、参
加者からは、最後の「時間=生きること」に気づきをいただけたという意見
が多く寄せられ、参考となったようで良かったと思う。

◎エキシビジョングループイベント

「ミライク若者オンライン会議～社会はツライよ?!若者よ、コロナ社会を自分らしく生き抜こう!～」(オンライン実施)

日本女性会議 2020 あいち刈谷 PreEvent
Japan Women's Conference 2020 in Aichi KARIYA

ミライク MeLine
Youth Online Meeting
若者オンライン会議

～社会はツライよ?!若者よ、コロナ社会を自分らしく生き抜こう!～

2020年
8/1(土) 10:00～11:30
参加費無料

Web会議ツール「Zoom」にて
新型コロナウイルス感染症の流行により、これまで見えにくかった問題が
顕在化したり、新たに社会問題化したりと、様々な課題が浮き彫りになっ
てきている。学生生活、学習の仕方、就職活動、働き方、子育てなど、様々
な場面で新しい対応が求められている今、どう自分らしく生きるかを、ミニ
講演とパネルディスカッションを通して考える。

【出演者】
講師 山本 恵子氏 (NHK名古屋放送局報道部副部長)
パネリスト 加藤 裕子氏 (株式会社キャッチネットワーク)
矢上 清乃氏 (学び舎mom株式会社代表取締役)
廣田 彩友美氏 (株式会社デンソー)

【申込者数】 80人

【所感】 大学生の参加者が多かったため、小・中・高は学校再開、社会人も出
社する中で自分たちだけオンライン授業が続いて登校できず、一人暮らし
で孤独を感じている、といった声や、就職活動への不安といったリアルな声
を共有できた。画面越しではあったものの、若者同士の意見交換はもちろ
ん、多世代の参加者での意見交換も行われ、「自分の子供世代が抱えている
悩みを知ることができた」という感想も頂く中で、本大会の「世代をつな
ぐ」というキーワードに繋がるイベントとなった。

■日時 2020年8月1日(土) 10:00～11:30

■出演者 講師 山本 恵子氏 (NHK名古屋放送局報道部副部長)
パネリスト 加藤 裕子氏 (株式会社キャッチネットワーク)
矢上 清乃氏 (学び舎mom株式会社代表取締役)
廣田 彩友美氏 (株式会社デンソー)

■内容 新型コロナウイルス感染症の流行により、これまで見えにくかった問題が
顕在化したり、新たに社会問題化したりと、様々な課題が浮き彫りになっ
てきている。学生生活、学習の仕方、就職活動、働き方、子育てなど、様々
な場面で新しい対応が求められている今、どう自分らしく生きるかを、ミニ
講演とパネルディスカッションを通して考える。

■申込者数 80人

■所感 大学生の参加者が多かったため、小・中・高は学校再開、社会人も出
社する中で自分たちだけオンライン授業が続いて登校できず、一人暮らし
で孤独を感じている、といった声や、就職活動への不安といったリアルな声
を共有できた。画面越しではあったものの、若者同士の意見交換はもちろ
ん、多世代の参加者での意見交換も行われ、「自分の子供世代が抱えている
悩みを知ることができた」という感想も頂く中で、本大会の「世代をつな
ぐ」というキーワードに繋がるイベントとなった。

◎愛知教育大学連携市民講座「ジェンダーで新しいわたしに出会う」

Vol.1「女性作曲家と知られざる名曲～お話と演奏～」
【オンライン配信】

■配信期間 2020年8月19日(水)～10月16日(金)

■出演者 国府 華子氏 (ピアノ・愛知教育大学教授)
金原 聡子氏 (ソプラノ・愛知教育大学准教授)

■内容 有名な作曲家というと、男性作曲家ばかりのイメージ
だが、近年は女性の作曲家たちのすばらしい作品に光
があてられるようになっていく。彼女たちの愛すべき作
品に触れるためのお話と演奏会をオンラインにて配信。

■申込者数 70人
アーカイブ再生189回

Vol.2「異文化理解とジェンダー結婚と離婚から考える」
【オンライン実施】

■日時 2020年9月12日(土) 13:30～15:00

■講師 嶺崎 寛子氏 (成蹊大学文学部准教授)

■内容 女性が抑圧されている印象の強いイスラム圏で
あるが、その実情を知る機会は少ない。ムスリム (イ
スラム教徒) 女性たちの実像を、結婚と離婚を例
として学ぶことを通じて、異文化を知り、異文化を
鏡として日本社会を振り返る。

■申込者数 75人
アーカイブ再生37回

PR広報物

開催決定チラシ

日本女性会議 2020 あいち刈谷
2020年 11月13日(金)～15日(日)

刈谷市は「わたし」を生きる～ものづくりのまちから発信～

「わたし」を生きる～ものづくりのまちから発信～

11/13 (金) 14 (土) 15 (日)

11/13 (金) 14 (土) 15 (日)

11/13 (金) 14 (土) 15 (日)

PRチラシ

日本女性会議 2020 あいち刈谷
Japan Women's Conference 2020 in Aichi KARIYA

テーマ かけがえのない「わたし」を生きる～ものづくりのまちから発信～

2020年 11月13日(金)～15日(日)

日本女性会議とは？

日本女性会議2020あいち刈谷実行委員会 刈谷市

日本女性会議2020あいち刈谷 (ミライク会議) は、多様な人々がそれぞれ「かけがえのない」存在として尊重される社会の実現を目指す「みんなの」会議です。

「生活と仕事」の両立、多様な働き方、多様な価値観、多様な生き方を尊重する社会の実現を目指す「みんなの」会議です。

2020年 11/13 (金) 14 (土) 15 (日)

日本女性会議2020あいち刈谷実行委員会 刈谷市

ニューズレター

かけがえのない「わたし」を生きる～ものづくりのまちから発信～

日本女性会議 2020 あいち刈谷
Japan Women's Conference 2020 in Aichi KARIYA

2020年 11月13日～15日

「わたし」を生きる～ものづくりのまちから発信～

公式ホームページ

日本女性会議 2020 あいち刈谷
Japan Women's Conference 2020 in Aichi KARIYA

2020年 11/13 (金)・14 (土)・15 (日)

かけがえのない「わたし」を生きる～ものづくりのまちから発信～

お申し込みはこちらから

オンライン特設サイト

オンライン特設サイト

Instagram

jwc2020aichikariya...

フォローする

日本女性会議2020あいち刈谷 (ミライク) 開催期間：令和2年11月13日(金)～15日(日)

日本女性会議2020あいち刈谷は、「みんなの会議」です。一人でも多くの皆さまが、出会い、繋がり、学びあうから、「かけがえのない」一人ひとりが大切にされる社会のあり方を一緒に考える場となることを願っています。

jwc2020aichikariya.jp

令和2年11月13日(金)・14日(土)・15日(日)開催中

日本女性会議 2020 あいち刈谷
Japan Women's Conference 2020 in Aichi KARIYA

ご視聴はこちら

全体会場

分科会場

ポスター

オンライン開催決定!!

かけがえのない「わたし」を生きる～ものづくりのまちから発信～

日本女性会議 2020 あいち刈谷
Japan Women's Conference 2020 in Aichi KARIYA

2020年 11/13・14・15

日本女性会議 2020 あいち刈谷
Japan Women's Conference 2020 in Aichi KARIYA

2020年 11/13・14・15

横断幕

日本女性会議 2020 あいち刈谷
Japan Women's Conference 2020 in Aichi KARIYA

2020.11.13 (金) ▶ 15 (日)

かけがえのない「わたし」を生きる～ものづくりのまちから発信～

募集パンフレット

日本女性会議 2020 あいち刈谷

1,000名募集

11/13 (金) 14 (土) 15 (日)

11/13 (金) 14 (土) 15 (日)

11/13 (金) 14 (土) 15 (日)

啓発Tシャツ

「かけがえのないわたし」を生きる
MONDOKURI NO MACHI KARIYA

日本女性会議 2020 あいち刈谷

啓発ブルゾン

啓発グッズ

日本女性会議 2020 あいち刈谷
Japan Women's Conference 2020 in Aichi KARIYA

日本女性会議 2020 あいち刈谷
かけがえのない「わたし」を生きる～ものづくりのまちから発信～

のぼり旗

「日本女性会議2020 あいち刈谷」実行委員 廣田彩友美さん(30)＝名古屋市



明日への一票
19 参院選

男女共同参画
全国の女性代表が一堂に集う「日本女性会議2020あいち刈谷」が来年初、刈谷市で開かれる。本業を控

違った価値観認めて

え、今秋ブレイブイベントを開催するなど、男女共同参画社会づくりへの機運を盛り上げる。刈谷市に本社を置く自動車関連企業で働く。ものづくり産業が集積するこの地域は、男女の役割について固定観念が強いとされ、社内課題について話し合う若手有志の勉強会に参加した際もそれを感じた。「男性もつらいのでは」。社外の価値観に触れたいと感じ、つながりを求めて女性会議に飛び込んだ。

2歳と4歳になる子どもを育て、夫が専業主夫を選択し、自身は半年の育児休暇を経て職場復帰した。変化を感じる、変わった価値観があることを認めたい」と思うようになった。

女性会議の目指す男女共同参画社会とは「多様性を認め合うこと」と。この価値観を政治家と広い世代の有識者にもっと知ってほしい。

【亀井和真】
随時掲載

毎日新聞 (R1.7.16)

女性会議 プレ大会開幕
刈谷 展示、講演で盛り上げ

来年十一月十三・十五日に刈谷市で開かれる男女共同参画がテーマの国内最大級イベント「日本女性会議2020あいち刈谷」をPRし、機運を高めるプレ大会が十五日、同市総合文化センターを主会場に始まった。十七日まで。

ギャラリーでは、夏休み中に市内の中学生から募集した男女共同参画がテーマのポスター九十八点のうち、入賞・入選作二十点を展示。写真、性的少数者(LGBT)の人が抱える困り事を紹介したり、各国の男性の家事・育児時間や女性の専任職の割合を比較したパネル展示もある。

十六日午後一時からは日本マクドナルドの女性役員が基調講演などがある。十七日は午後二時から、視覚障害があるパラ陸上選手で東京パラリンピック代表内定者の高田千明さんの講演や、元フィギュアスケート選手の小塚崇彦さんが登壇するシンポジウムを実施。いずれも無料で当日参加もできる。

女性会議は毎年場所を変えて開かれているが、今年の開催地の栃木県佐野市は、台風19号の影響で十月下旬に開く予定だった会議を中止した。(神谷慶)

中日新聞 (R1.11.16)

スポーツ通じて 共同参画考える
刈谷で日本女性会議プレ大会

来年十一月開催の「日本女性会議2020あいち刈谷」のプレ大会で、男女共同参画について考えるイベント「あなたとわたしのハート2019」が、刈谷市若松町の市総合文化センターで十五日から二日

講演では来年の東京パラリンピックに女子走り幅跳びで出場する高田千明さんが登壇。夫でテフリンピック陸上競技選手の裕士さんが付き添い、障害者スポーツの可能性や日常生活でのエピソードを披露した。

高田千明さんは「障害者としての個性だと思ってくれ、それが大切。日本は他国よりも障害者スポーツの支援者が少ない。選手と一緒に世界を目指して、どれる人が増えたい」と話した。来場者にメッセージを送った。(土屋あいら)

同会議は男女共同参画に関する国内最大級の会議。1984年に名古屋市で初めて開かれて以来、毎年、全国の主要都市で開催されている。今回の会議は、県センターなどを会場に開く2度目、通算37回目となる。基調報告や記念講演、シンポジウム、体験型見学会などを予定。全国から約2000人の参加を見込んでいる。イベント内容や協賛金の問い合わせは実行委員会事務局(0566・95・0002)。

中日新聞 (R1.11.18)

日本女性会議 11月刈谷で
シンポや見学会 参加2000人見込む

男女共同参画社会の実現に向けた課題を探る「日本女性会議2020あいち刈谷」が11月、刈谷市を会場に開かれる。開催を10か月後に控え、市では会議の愛称を「Melike(ミライク)」と決定、ブレイブイベントを開いたり、企業や個人の協賛協力呼びかけたり、準備に力を入れている。

ブレイブとして開かれた見学会を討議する参加者たち(昨年11月、刈谷市で)

同会議は男女共同参画に関する国内最大級の会議。1984年に名古屋市で初めて開かれて以来、毎年、全国の主要都市で開催されている。今回の会議は、県センターなどを会場に開く2度目、通算37回目となる。基調報告や記念講演、シンポジウム、体験型見学会などを予定。全国から約2000人の参加を見込んでいる。イベント内容や協賛金の問い合わせは実行委員会事務局(0566・95・0002)。

読売新聞 (R2.1.28) ※レイアウト変更

中経手帖
男女共同参画をテーマとする国内最大級の会議「日本女性会議」が、今年11月13日から15日、刈谷市で開催される。機嫌を盛り上げようとする中、市内で大会が開かれ、パネル展示も予定されている。刈谷市は、今年11月13日から15日、刈谷市で開催される。機嫌を盛り上げようとする中、市内で大会が開かれ、パネル展示も予定されている。刈谷市は、今年11月13日から15日、刈谷市で開催される。機嫌を盛り上げようとする中、市内で大会が開かれ、パネル展示も予定されている。

中部経済新聞 (R1.11.26)



刈谷市
市制70周年の節目に日本女性会議開催決定
刈谷市では1950年4月1日に市制を施行して70周年の節目を迎える。これに伴い70周年をPRする「記念事業」を実施する。あなただけに70周年、なげち未来の刈谷(カ)をキャッチフレーズに、さまざまな事業を創出する方針だ。
市制施行70周年記念「ロマーク」をこのほど作成。刈谷市のマスコットキャラクター「かつな」

中部経済新聞 (R2.1.10)



コロナ禍での生き方
オンラインで考える
日本女性会議刈谷控え
十一月に開催される男女共同参画イベント「日本女性会議2020あいち刈谷」に先立ち、新型コロナウイルスの影響にもめげず自分らしく生きるためのテーマでパネリストと若者が考

え合の「ミライイク 若者オンライン会議」が一日、ビデオ会議アプリ「Zoom (ズーム)」を活用して行われた。
話し合いは日本女性会議の実行委員会が主催。高校生や大学生を中心に三十代までの若者四十八人、パネリストとしてNHK名古屋放送局報道部の山本恵子副部長ら働く女性四人が参加し、その模様を動画投稿

中日新聞 (R2.8.3)

日本女性会議刈谷オンライン開催に
11月に予定 実行委
新型コロナウイルス感染拡大を受け、十一月十三、十五日に刈谷市で開催予定の男女共同参画をテーマにした国内最大級イベント「日本女性会議2020あいち刈谷」の実行委員会は、会議をオンラインで開催することを決めた。
会議は毎年場所を変えて開催している。全国から例年二千人が集まることから、三密状態を避けられないと判断。二十四日の実行委総会で決定した。

実行委は八月ごろまでにプログラムを練り直す。具体的には基調講演、記念講演、分科会、記念シンポジウムを軸にオンライン開催に切り替え、ウェブ会議ツールなどで配信することを検討。テレワークをはじめとする働き方、児童虐待やDVの増加、「コロナ離婚」などコロナ禍で表面化した問題も議論する予定だ。一般四千元、学生千円だった参加費は一般は二千元、学生は無料とする。

中日新聞 (R2.7.1)

ステップ

日本女性会議に参加を!

まちの人のために 刈谷 ようと自転車であちこち市役所の長寿課で働いてい 走って、まちの魅力や課題を誰かの力になれることを探して回ったのもいい思い出を思い出して、この仕事をしたいと思、この仕事に就きました。大学3年「日本女性会議2020」の時、就活のため、市民の「あいち刈谷」って知って、皆さんの声を直接聞いてみますか? 11月13、15日に

大西 翔さん (27)

男性には関係ない会議だと思っただけですが、活動を通して性別に関わらず大切なことを学べる会議だと知りました。ぜひ、いろいろな人に参加してほしいですね。お待ちしております! (27歳男性)

刈谷ホームニュース (R2.9.25)

日本女性会議の参加者募集
オンライン活用、11月に刈谷で
【刈谷】日本女性会議2日間オンライン開催の2020あいち刈谷市議員「日本女性会議2020あいち刈谷市議員」は、11月13、15日の参加者募集している。
11月13日、15日、同会議は男女共同参画社会に向けた課題解決策を採り、1984年に名古屋で初開催された。今年各地で開催されている。今年各地で開催されている。今年各地で開催されている。

中部経済新聞 (R2.9.24)



日本女性会議 2020 あいち刈谷

Japan Women's Conference 2020 in Aichi KARIYA

オンライン
開催

参加者
募集

2020
11/

13金 14土 15日

かけがえない“わたし”を生きる ～ものづくりのまちから発信～

日本女性会議とは？

男女共同参画に関する国内最大級の会議です。1984年に名古屋市でスタートした日本女性会議は、その後、全国各地で開催され、あいち刈谷大会は37回目、愛知県では2回目の開催となります。男女共同参画社会の実現に向けた課題の解決策を探るとともに、参加者相互の交流とネットワークづくりを目的としています。



日本女性会議2020あいち刈谷は、

ミライク(MeLike)会議!!

「生活と仕事の調和」の創造 / 多様性の尊重 / 世代をつなぐ
★みんなのライクを集めて、未来のライフをクリエイト！
★「自分らしさ」が大切にされ、それぞれが「自分の好き」を実践できる選択肢の多い未来を目指す

ミライク会議は、そんな社会を目指す「みんなの会議」です

参加費 一般 2,000円(税込) 学生 無料

参加申込 参加申込や内容の詳細は、公式ホームページをご覧ください

<https://jwc2020aichikariya.jp/>

※一般と学生とで申込フォームが異なります



お問合せ

日本女性会議2020あいち刈谷実行委員会事務局(刈谷市民協働課内)
TEL:0566-95-0002 E-mail:jwc2020aichikariya@city.kariya.lg.jp



▲公式HP

刈谷ホームニュース (R2.10.9)

【2】2020年(令和2年)10月23日 金曜日

刈谷ホームニュース

日本女性会議 2020 あいち刈谷

11月13日～15日 初のオンライン開催！

教えてQ&A どんどこをやるの？ 何のために開くの？



11月13日 基調講演
社会学者・東京大学名誉教授
上野千鶴子さん

「日本女性会議」が11月13日～15日、オンラインで開催されます。国内最大級の男女共同参画イベントです。が、もともと「詳しく知りたい」という声も、素朴な疑問をまわっていました。

NPO法人 全国骨髄バンク推進連絡協議会顧問
大谷貴子さん
11月14日 記念講演

「日本女性会議」って何？
男女共同参画に関する問題を社会全体で共有することを目指す。1984年に名古屋市で第1回大会が開かれ、今年で37回目。コロナ禍の視点からみなで考えるイベントです。1984年に名古屋市で第1回大会が開かれ、今年で37回目。コロナ禍の視点からみなで考えるイベントです。

働き方や家族など考えよう
「日本女性会議」って何？
男女共同参画に関する問題を社会全体で共有することを目指す。1984年に名古屋市で第1回大会が開かれ、今年で37回目。コロナ禍の視点からみなで考えるイベントです。

記念講演やシンポジウムなど
「日本女性会議」って何？
男女共同参画に関する問題を社会全体で共有することを目指す。1984年に名古屋市で第1回大会が開かれ、今年で37回目。コロナ禍の視点からみなで考えるイベントです。

複数人での視聴もOK
「日本女性会議」って何？
男女共同参画に関する問題を社会全体で共有することを目指す。1984年に名古屋市で第1回大会が開かれ、今年で37回目。コロナ禍の視点からみなで考えるイベントです。

申し込み方法
パソコンやスマートフォンから公式ホームページ(<https://jwc2020aichikariya.jp/>)のQRコードにアクセスし、画面の指示に従って申し込んでください。締め切りは11月6日。

参加費の納入
クレジットカード決済、コンビニ支払い、インターネットバンキング、ペイジー支払い、銀行振込)が確認できた人から、視聴に必要な情報(視聴テストの案内や当日の視聴方法など)をメールで送ります。

日本女性会議 2020 あいち刈谷

Japan Women's Conference 2020 in Aichi KARIYA

かけがえない“わたし”を生きる ～ものづくりのまちから発信～

オンライン会議開催にあたって 日本女性会議2020あいち刈谷実行委員会 委員長 山根 真理

「日本女性会議」は男女共同参画に関する国内最大級の会議で、男女平等社会の実現に向けた課題の解決策を探るとともに、参加者相互の交流とネットワークづくりを目的としています。第37回大会となる刈谷大会は、コロナ禍の視点から、みなで考える「働き方」「家族」「ケア」「暮らし」など、ジェンダー(社会的・文化的性別)にかかわる問題を含めて、考えや思いを共有することなどをふまえて、大会史上初となるオンラインでの開催を決定いたしました。また、でも参加できる「日本女性会議2020あいち刈谷」は、コロナ禍の今、アフターコロナの生活も含め、「かけがえない」一人ひとりが大切にされる社会のあり方を、世代を超えて一緒に考える場になっています。

13金

オープニング 10:00～
● 会長・実行委員長あいさつ
● 前回開催地(栃木県佐野市)からのパトパスセレモニー

基調講演 10:30～
● コロナ禍とジェンダー
コロナ禍の中の社会をジェンダー視点で読み解いて、コロナ後の社会におけるジェンダー平等の課題について、世代を超えて共有します。

分科会セッション1 13:00～
【高齢社会】
人生100年時代～高齢者のつながりづくり～

分科会セッション2 15:00～
【防災】
生き抜く防災withコロナ～アウトドアから学ぶ新しい知恵～

分科会セッション3 10:00～
【多文化共生】
多様性を活かした地域づくり～多文化を地域の魅力に～

記念講演 13:00～
● 女性が社会を動かすときー日本骨髄バンクのケースからー
愛知は骨髄バンクによる骨髄移植が行われた地です。日本骨髄バンクの設立や運営にあたっての苦労、工夫などについてお話させていただきます。

記念シンポジウム 14:15～
● スポーツから変える世界と未来
様々な差別の解消や、GBT支援に関する五輪開催での取り組みについて、スポーツを通して互いを尊重する社会について考えます。

エキシビジョン 10:00～13:00 ミライク若者会議
大会への参加の有無にかかわらずとも、無料で参加できます！

エンディング 16:00～
● 次期開催地(山梨県甲府市)へのパトパスセレモニー
● 大会宣言

14土

分科会セッション3 10:00～
【多文化共生】
一人一人が輝く未来～モノづくりの愛知から～

記念講演 13:00～
● 女性が社会を動かすときー日本骨髄バンクのケースからー
愛知は骨髄バンクによる骨髄移植が行われた地です。日本骨髄バンクの設立や運営にあたっての苦労、工夫などについてお話させていただきます。

記念シンポジウム 14:15～
● スポーツから変える世界と未来
様々な差別の解消や、GBT支援に関する五輪開催での取り組みについて、スポーツを通して互いを尊重する社会について考えます。

15日

エキシビジョン 10:00～13:00 ミライク若者会議
大会への参加の有無にかかわらずとも、無料で参加できます！

エンディング 16:00～
● 次期開催地(山梨県甲府市)へのパトパスセレモニー
● 大会宣言

参加費 一般 2,000円(税込) 学生 無料

参加申込 参加申込や内容の詳細は、公式ホームページをご覧ください
<https://jwc2020aichikariya.jp/>

※一般と学生とで申込フォームが異なります

お問合せ 日本女性会議2020あいち刈谷実行委員会事務局(刈谷市民協働課内)
TEL:0566-95-0002 E-mail:jwc2020aichikariya@city.kariya.lg.jp
主催:日本女性会議2020あいち刈谷実行委員会 刈谷市

刈谷ホームニュース (R2.10.23)

刈谷ホームニュース

東境町 刈谷市赤十字奉仕団委員長 西尾實千恵さん



赤いユニフォーム姿の西尾さん

「地域のことは地域で守る」

「地域のことは地域で守る。それが私たち奉仕団の役割です」今年1月に新委員長に就任。約300人の女性団員をまとめ、災害時などに必要な炊き出しや救急法などを日々勉強しています。婦人会で行っていた防災などの活動を受け、2005年に団体を発足。コロナ禍に見舞われる前までは年間100日ほど活動していました。「私たちは看護師ではありませんので、治療はできませんが、三角巾を使った止血法やAED操作など、応急手当の知識を学ぶことはできます。昨年、台風19号の被害にあった栃木県佐野市へ赴き、災害復旧ボランティアに個人で参加。「被災者の方が『頑張ります』と力強く話していたことが印象的でした」

他界した初代委員長の笠松信子さんから受け継いだ思いを胸に留めて活動しています。「笠松さんは何でも柔軟に取り入れる姿勢、活動を発信し啓発する大切さを教えてくれました」11月13・15日にオンラインで開催される「日本女性会議2020あいち刈谷」で、防災をテーマにした分科会にゲスト出演。「話を聞いてくださった皆さんが防災を考えていたように、きっかけになるようにしつかり務めたい」

刈谷ホームニュース (R2.10.9)

日本女性会議 参加募る

刈谷で13日からオンライン開催

十三、十四日はコロナ禍の中で顕在化した「働き方」「暴力」の問題をはじめ「防災」「子育て」の多様性などを語る九種の分科会がある。一部は参加者も発言できる。十四日午後四時からのエンディングで大会宣言が発表される。

参加費は一般二円、学生無料。公式ホームページから申し込める。十五日は午前十時から、申し込めば無料で視聴・参加できる特別企画「ミツバク若者会議」U-40と考える。かががえのないうたしを生きる」も開かれる。◎市市民協働課☎0566(95)0002 (神谷慶)

中日新聞 (R2.11.4)

「新しい働き方期待」

上野千鶴子さん講演 刈谷で日本女性会議

新型コロナウイルス感染拡大を受けオンラインで開催される男女共同参画イベント「日本女性会議2020あいち刈谷」(愛称「ミツバク会議」)が十三日に始まり、社会学者の上野千鶴子さんが「コロナ禍とジェンダー」と題し特設サイトで基調講演した。実行委と刈谷市主催で十五日までオンラインイベント、分科会、特別企画などが行われる。

上野さんは政治、経済、教育、健康の四分野のうち、日本では政治、経済で共同参画が進まないとの説明。「全非正規労働者の七割が女性。一九九〇年代の労働法制の規制緩和で多くの女性が一般職、ひいては派遣社員に置き換わったのが原因で、人為的に格差社会が作られた」と指摘した。

コロナ禍に普及したテレワークで職任一致が進む可能性に触れ「男は百パーセント生産者で女は百パーセントケアするというのがこれまでの性別役割分担だが、新しい働き方が始まる。県内の大学生や視聴者の質問にも答えた。

会議は一九八四年から毎年場所を変えて開催。昨年は栃木県佐野市で開催地だったが台風で中止となり、この日は佐野市から刈谷市へ画面上でバトンを渡す企画もあった。



講演後、大学生からの質問に答える上野さん(左上)

中日新聞 (R2.11.14)

「多様な生き方 尊重を」

刈谷・日本女性会議宣言

オンラインで十三日に始まった男女共同参画の催し「日本女性会議2020あいち刈谷」は十四日、多様な生き方が尊重される社会の実現などを誓う大会宣言を採択した。

職場や行政、市民がともにライフ・ワーク・バランス実現に取り組むことや、ジェンダー平等と多様な働き方が尊重される地域社会の実現に向け、世代を超えてつながり合える環境をつくることなどを宣言する内容。刈谷市の稲垣武市長が読み上げ「写真、来年の開催地の甲府市に画面上でバトンを渡した。このほか、「ライフ・ワーク・バランス」性の多様性などの分科会や記念講演もあった。

最終日の十五日は、三十代以下の若者が抱える問題意識を語り合う「ミツバク若者会議」が開かれた。



中日新聞 (R2.11.17)

ミライクNews

ミライクNewsは、ミライク会議学生ボランティアのうち「学生ジャーナリスト」グループのメンバーが、男女共同参画に関する身近な興味や疑問から、地元の企業やミライク会議に関わる人などを調査・取材し、刈谷市広報誌「かりや市民だより」用の記事にしたものです。学生らしい視点やアイデアによる企画を通して、幅広い世代に向けてミライク会議をPRしてくれました。

●学生ジャーナリストメンバー

太田 泰雅 鈴木 愛乃 鈴木 香穂 鈴木 里奈 中島 祥那 樋口 大河
不破 周子 山本 真帆

第1号 日本女性会議 2020 あいち刈谷
Date: March 1st, 2020

ミライクNews Vol.1

11月に開催された日本女性会議2020あいち刈谷(ミライク会議)に向けて、学生ジャーナリストたちが取材した内容を紹介します。今回は、性差別をなくしていくために取り組んでいる学生ボランティアの活動をご紹介します。

1 塚本信子さん

選挙委員としての活動をやっている。選挙活動で使われるポスターやチラシのデザインも担当している。選挙活動で使われるポスターやチラシのデザインも担当している。選挙活動で使われるポスターやチラシのデザインも担当している。

2 みんなで育てる農園

2008年から6年間、農業委員として活動していた塚本さん。農園の運営、農作物の収穫から販売まで、さまざまな役割を担っている。農園の運営、農作物の収穫から販売まで、さまざまな役割を担っている。

3 まずは一歩踏み出して

農園には、女性が活躍する機会が広がっていますが、男性が中心になりがちで、女性は参加しにくいという現状があります。女性が中心になりがちで、女性は参加しにくいという現状があります。

4 家庭生活との両立

農園活動は、子育てと両立させるのが難しいです。子育てと両立させるのが難しいです。子育てと両立させるのが難しいです。

取材を終えて

不破 周子

大学生が日本女性会議に関わるモットを伝える

ミライクNews

ミライク会議は、たくさんのボランティアによって成り立っています。その中、学生ジャーナリストとして活動している大学生が取材した内容を毎月15日に掲載していきます。今回は、地元の企業やミライク会議に関わる人などを調査・取材し、刈谷市広報誌「かりや市民だより」用の記事にしたものです。学生らしい視点やアイデアによる企画を通して、幅広い世代に向けてミライク会議をPRしてくれました。

1 株スギテクノ

1999年創業。市内に工場があり、主に部品の製造・販売を行っています。株スギテクノは、主に部品の製造・販売を行っています。株スギテクノは、主に部品の製造・販売を行っています。

2 働きやすい職場へ

株スギテクノは、働きやすい職場を目指しています。働きやすい職場を目指しています。働きやすい職場を目指しています。

3 福利厚生の充実

株スギテクノは、福利厚生の充実を目指しています。福利厚生の充実を目指しています。福利厚生の充実を目指しています。

4 誰もが働ける環境づくり

株スギテクノは、誰もが働ける環境づくりを目指しています。誰もが働ける環境づくりを目指しています。誰もが働ける環境づくりを目指しています。

取材を終えて

中島 祥那

大学生が日本女性会議に関わるモットを伝える

ミライクNews

11月に開催された日本女性会議2020あいち刈谷(ミライク会議)に向けて、学生ジャーナリストたちが取材した内容を紹介します。今回は、性差別をなくしていくために取り組んでいる学生ボランティアの活動をご紹介します。

1 堀川 洋さん

堀川さんは、性差別をなくしていくために取り組んでいます。性差別をなくしていくために取り組んでいます。性差別をなくしていくために取り組んでいます。

2 家事育児の大変さを実感

家事育児は大変です。家事育児は大変です。家事育児は大変です。

3 仕事の負担の軽減

仕事の負担を軽減したい。仕事の負担を軽減したい。仕事の負担を軽減したい。

4 働くを楽しむ

働くのが楽しい。働くのが楽しい。働くのが楽しい。

取材を終えて

山本 真帆

令和2年1月1日号 (Vol.1)

2月1日号 (Vol.2)

大学生が日本女性会議に関わるモットを伝える

ミライクNews

11月に開催された日本女性会議2020あいち刈谷(ミライク会議)に向けて、学生ジャーナリストたちが取材した内容を紹介します。今回は、性差別をなくしていくために取り組んでいる学生ボランティアの活動をご紹介します。

1 KATCHの働き方を取材!

KATCHは、働き方を改善しています。働き方を改善しています。働き方を改善しています。

2 みんなで助け合いながら、効率的に

みんなで助け合いながら、効率的に活動しています。みんなで助け合いながら、効率的に活動しています。

3 社内制度の有効活用

社内制度の有効活用を行っています。社内制度の有効活用を行っています。社内制度の有効活用を行っています。

4 山本真帆さん

山本真帆さんは、性差別をなくしていくために取り組んでいます。性差別をなくしていくために取り組んでいます。

取材を終えて

山本 真帆

大学生が日本女性会議に関わるモットを伝える

ミライクNews

11月に開催された日本女性会議2020あいち刈谷(ミライク会議)に向けて、学生ジャーナリストたちが取材した内容を紹介します。今回は、性差別をなくしていくために取り組んでいる学生ボランティアの活動をご紹介します。

1 「仕事は男性がするもの」

「仕事は男性がするもの」という考え方は、性差別を助長しています。性差別を助長しています。性差別を助長しています。

2 「家事や育児は女性の仕事」

「家事や育児は女性の仕事」という考え方は、女性を固定観念に押し込めています。女性を固定観念に押し込めています。

3 「生活スタイルやインフラ、環境が決め手」

生活スタイルやインフラ、環境が働きやすさや働きづらさを決め手としています。生活スタイルやインフラ、環境が働きやすさや働きづらさを決め手としています。

4 参加ではじめの一歩を踏み出そう

参加ではじめの一歩を踏み出そう。参加ではじめの一歩を踏み出そう。参加ではじめの一歩を踏み出そう。

5 学生企画・広報ボランティア募集!

学生企画・広報ボランティア募集! 学生企画・広報ボランティア募集!

取材を終えて

山本 真帆

大学生が日本女性会議に関わるモットを伝える

ミライクNews

11月に開催された日本女性会議2020あいち刈谷(ミライク会議)に向けて、学生ジャーナリストたちが取材した内容を紹介します。今回は、性差別をなくしていくために取り組んでいる学生ボランティアの活動をご紹介します。

1 学生に聞いた!

学生に聞いた! 学生に聞いた! 学生に聞いた!

2 「性別の違うによって感じるモヤモヤ」

性別の違うによって感じるモヤモヤ。性別の違うによって感じるモヤモヤ。性別の違うによって感じるモヤモヤ。

3 イマドキの学生が思う、日常のギモン

イマドキの学生が思う、日常のギモン。イマドキの学生が思う、日常のギモン。イマドキの学生が思う、日常のギモン。

4 学生のモヤモヤ

学生のモヤモヤ。学生のモヤモヤ。学生のモヤモヤ。

5 参加ではじめの一歩を踏み出そう

参加ではじめの一歩を踏み出そう。参加ではじめの一歩を踏み出そう。参加ではじめの一歩を踏み出そう。

6 学生企画・広報ボランティア募集!

学生企画・広報ボランティア募集! 学生企画・広報ボランティア募集!

取材を終えて

山本 真帆

3月1日号 (Vol.3)

4月1日号 (番外編)

ミライクNews vol.4

11月に開催される日本女性会議2020あいち刈谷(ミライク会議)に向けて、学生ジャーナリストと市民記者が連携して活動しています。今回は、学生ジャーナリストと市民記者の協働活動の報告を行います。

学生ジャーナリスト × サポーター 座談会

座談会には、学生ジャーナリストと市民記者が参加しました。

座談会では、学生ジャーナリストと市民記者の協働活動について話し合いました。

座談会の様子はこちらの動画をご覧ください。

座談会に参加した学生ジャーナリストと市民記者の皆さん、お疲れ様でした。

この続きは、ミライク会議に参加して一緒に考えましょう！

5月1日号 (Vol.4)

ミライクNews vol.5

11月に開催される日本女性会議2020あいち刈谷(ミライク会議)に向けて、学生ジャーナリストと市民記者が連携して活動しています。今回は、学生ジャーナリストと市民記者の協働活動の報告を行います。

学生ジャーナリストの活動

学生ジャーナリストは、市民記者と共に活動しています。

学生ジャーナリストは、市民記者と共に活動しています。

学生ジャーナリストは、市民記者と共に活動しています。

この続きは、ミライク会議に参加して一緒に考えましょう！

6月1日号 (Vol.5)

ミライクNews vol.6

11月に開催される日本女性会議2020あいち刈谷(ミライク会議)に向けて、学生ジャーナリストと市民記者が連携して活動しています。今回は、学生ジャーナリストと市民記者の協働活動の報告を行います。

ミライク会議公式SNSで152人に参加しています!

ミライク会議公式SNSには、152人に参加しています。

ミライク会議公式SNSには、152人に参加しています。

ミライク会議公式SNSには、152人に参加しています。

この続きは、ミライク会議に参加して一緒に考えましょう！

7月1日号 (Vol.6)

ミライクNews vol.7

11月に開催される日本女性会議2020あいち刈谷(ミライク会議)に向けて、学生ジャーナリストと市民記者が連携して活動しています。今回は、学生ジャーナリストと市民記者の協働活動の報告を行います。

身近な地域でつながろう!

身近な地域でつながろう!

身近な地域でつながろう!

身近な地域でつながろう!

この続きは、ミライク会議に参加して一緒に考えましょう!

8月1日号 (Vol.7)

ミライクNews vol.8

11月に開催される日本女性会議2020あいち刈谷(ミライク会議)に向けて、学生ジャーナリストと市民記者が連携して活動しています。今回は、学生ジャーナリストと市民記者の協働活動の報告を行います。

家族時間をもっと楽しく

家族時間をもっと楽しく

家族時間をもっと楽しく

家族時間をもっと楽しく

この続きは、ミライク会議に参加して一緒に考えましょう!

9月1日号 (Vol.8)

ミライクNews vol.9

11月に開催される日本女性会議2020あいち刈谷(ミライク会議)に向けて、学生ジャーナリストと市民記者が連携して活動しています。今回は、学生ジャーナリストと市民記者の協働活動の報告を行います。

女性ができること

女性ができること

女性ができること

女性ができること

この続きは、ミライク会議に参加して一緒に考えましょう!

10月1日号 (Vol.9)

ミライクNews vol.10

11月に開催される日本女性会議2020あいち刈谷(ミライク会議)に向けて、学生ジャーナリストと市民記者が連携して活動しています。今回は、学生ジャーナリストと市民記者の協働活動の報告を行います。

クロスワード

クロスワード

クロスワード

クロスワード

この続きは、ミライク会議に参加して一緒に考えましょう!

11月1日号 (Vol.10)

ミライクNews vol.11

11月に開催される日本女性会議2020あいち刈谷(ミライク会議)に向けて、学生ジャーナリストと市民記者が連携して活動しています。今回は、学生ジャーナリストと市民記者の協働活動の報告を行います。

学生ジャーナリストからのひとことコメント

学生ジャーナリストからのひとことコメント

学生ジャーナリストからのひとことコメント

学生ジャーナリストからのひとことコメント

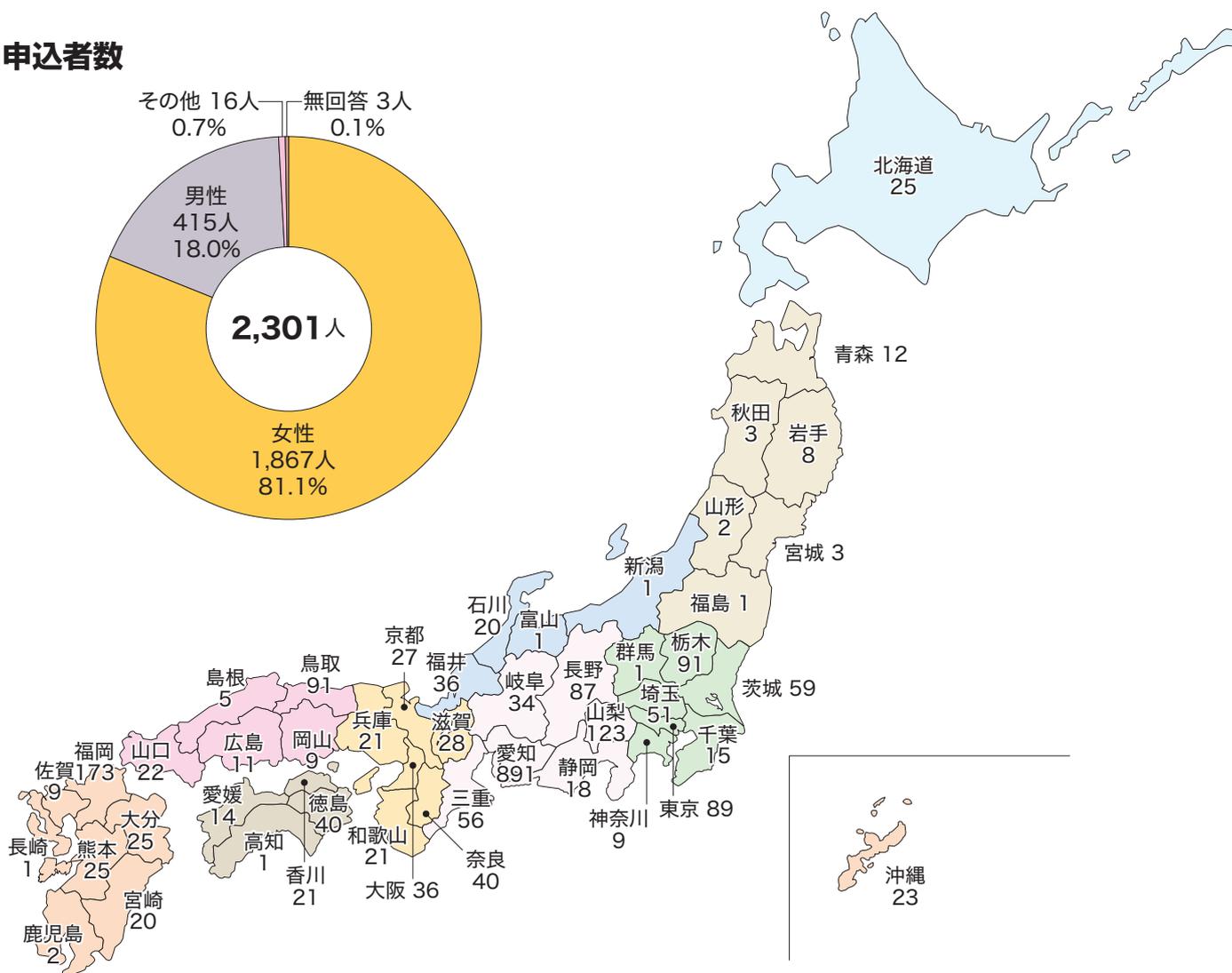
この続きは、ミライク会議に参加して一緒に考えましょう!

12月1日号 (Vol.11)

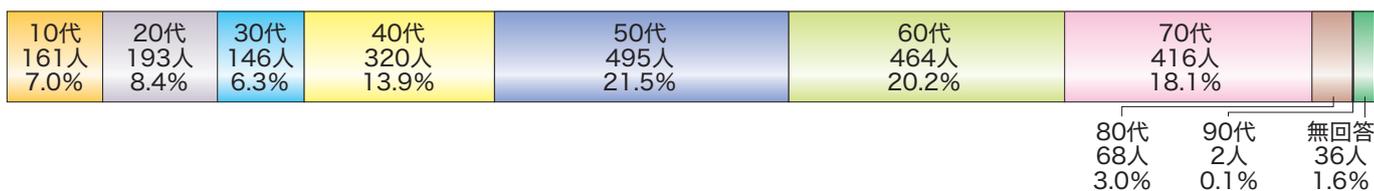
アンケート結果等

●申込者集計

■申込者数



■年代別申込者数



■プログラム別申込者数&アーカイブ視聴者数(人)

	基調講演	分科会A	分科会B	分科会C	分科会D	分科会E	分科会F	分科会G	分科会H	分科会I	講演・シンポ	エキシビジョン
合計	1,827	789	396	428	1,228	69	641	623	65	78	1,349	641
アーカイブ 視聴者数	361	207	110	47	131	103	148	138	123	77	200	54



■申込者数データ（再掲含む）

（単位：人、％）

【参加者数】

	参加者数	割合
一般	1,749	76.0
学生	311	13.5
招待(協賛)	22	1.0
スタッフ等	219	9.5
計	2,301	

【性別】

	参加者数	割合
女性	1,867	81.1
男性	415	18.0
その他	16	0.7
無回答	3	0.1
計	2,301	

【年代別】

年代	参加者数	割合
10代	161	7.0
20代	193	8.4
30代	146	6.3
40代	320	13.9
50代	495	21.5
60代	464	20.2
70代	416	18.1
80代	68	3.0
90代	2	0.1
無回答	36	1.6
計	2,301	

再掲

10-30代	500	21.7
--------	-----	------

【居住地別】

	参加者数	割合
県内	891	38.7
内刈谷市	330	14.3
県外	1,410	61.3
計	2,301	

【都道府県別】

北海道	25	滋賀県	28
青森県	12	京都府	27
岩手県	8	大阪府	36
宮城県	3	兵庫県	21
秋田県	3	奈良県	40
山形県	2	和歌山県	21
福島県	1	鳥取県	91
茨城県	59	島根県	5
栃木県	91	岡山県	9
群馬県	1	広島県	11
埼玉県	51	山口県	22
千葉県	15	徳島県	40
東京都	89	香川県	21
神奈川県	9	愛媛県	14
新潟県	1	高知県	1
富山県	1	福岡県	173
石川県	20	佐賀県	9
福井県	36	長崎県	1
山梨県	123	熊本県	25
長野県	87	大分県	25
岐阜県	34	宮崎県	20
静岡県	18	鹿児島県	2
愛知県	891	沖縄県	23
三重県	56	無回答	0
		計	2,301

【愛知県内市町村別】

名古屋市	130	豊明市	8
豊橋市	23	日進市	12
岡崎市	23	田原市	3
一宮市	8	愛西市	2
瀬戸市	2	清須市	0
半田市	9	北名古屋市	14
春日井市	7	弥富市	5
豊川市	4	みよし市	4
津島市	1	あま市	3
碧南市	9	長久手市	6
刈谷市	330	東郷町	2
豊田市	33	豊山町	1
安城市	59	大口町	4
西尾市	21	扶桑町	2
蒲郡市	9	大治町	1
犬山市	1	蟹江町	0
常滑市	3	飛島村	1
江南市	3	阿久比町	4
小牧市	5	東浦町	11
稲沢市	5	南知多町	3
新城市	18	美浜町	19
東海市	4	武豊町	3
大府市	20	幸田町	5
知多市	8	設楽町	0
知立市	18	東栄町	0
尾張旭市	5	豊根村	0
高浜市	10	無回答	8
岩倉市	2	計	891

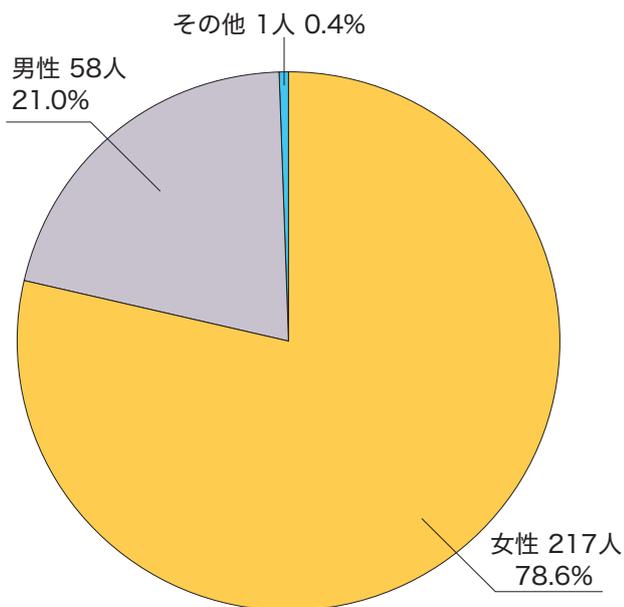
●参加者アンケート

■基調講演・記念講演・記念シンポジウム・おもてなしコンテンツなど

[回答数：276件]

回答者属性

【性別】

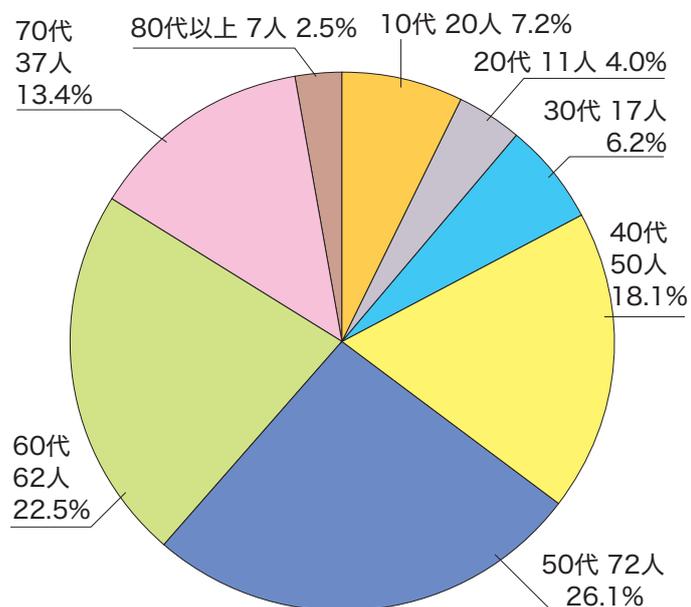


【お住まい】

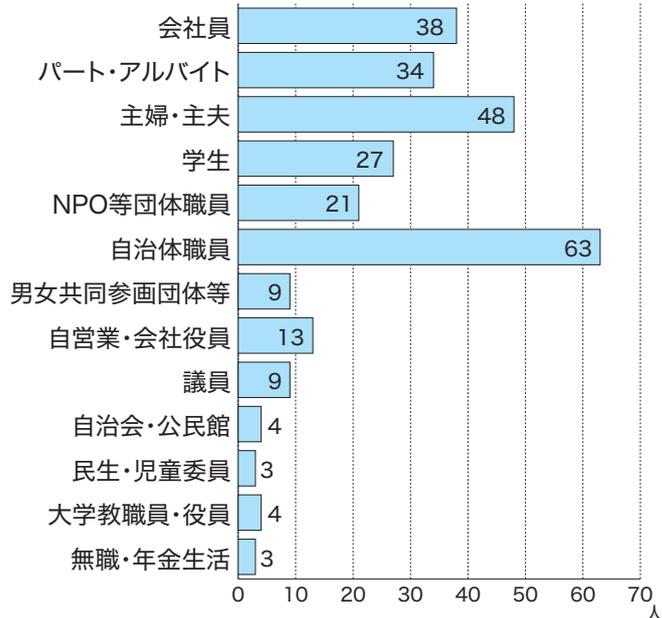
(人)

北海道	1	滋賀県	4
青森県	3	大阪府	7
岩手県	1	兵庫県	1
山形県	2	奈良県	8
茨城県	5	和歌山県	2
栃木県	17	鳥取県	7
埼玉県	5	岡山県	2
東京都	6	山口県	3
富山県	1	徳島県	4
福井県	5	香川県	7
山梨県	15	高知県	1
長野県	2	福岡県	7
岐阜県	2	佐賀県	1
静岡県	3	熊本県	2
愛知県	141	大分県	1
三重県	8	沖縄県	2

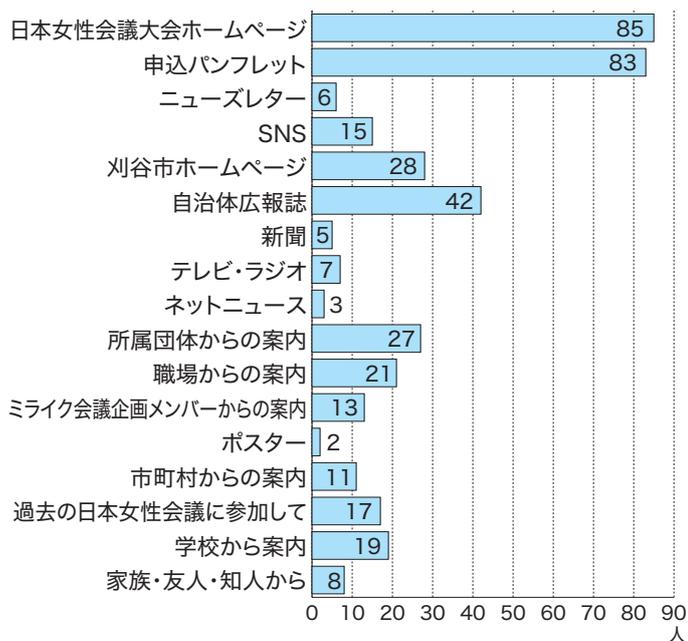
【年代】



【職業・所属】

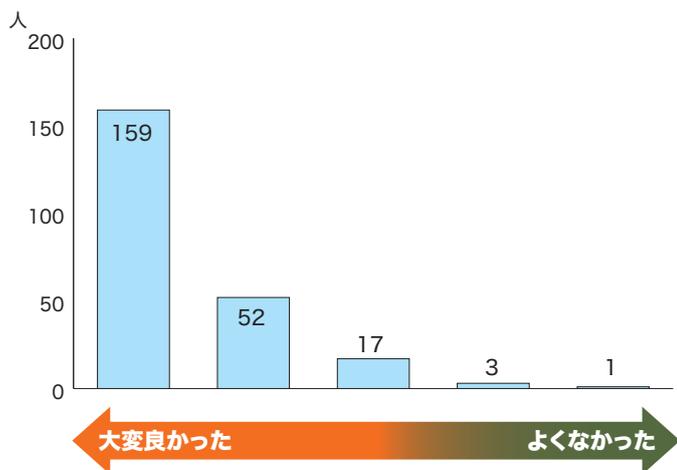


Q. 本大会をどのように知りましたか。(複数回答可)

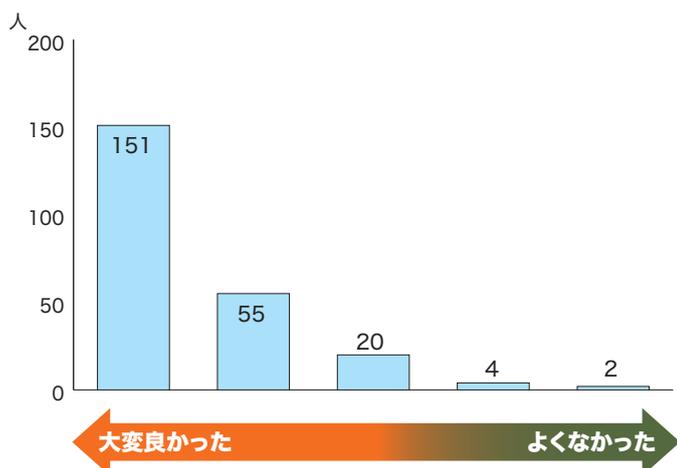


基調講演「コロナ禍とジェンダー」について

Q. 講師（上野千鶴子氏）はいかがでしたか。(n=232)



Q. 内容はいかがでしたか。(n=232)



ご意見ご感想など（一部抜粋）

- ◆常にぶれない姿勢を貫く上野さんのお話、心地よく拝聴させていただきました。
- ◆PV視聴後、感想をシェアできたことで、大変有意義な時間になりました。
- ◆しっかりとした、内容でした。ジェンダーの違う分野が見えてきました。
- ◆日本の現状について理論的に分析していただき勉強になりました。
- ◆上野先生の「弱者が弱者のまま尊重される社会」になっていくことを願う。私自身、女性の役割(家事、育児)に加えて男性のようにならないといけな(職場では男性と同等に活躍を求められる)と思っており、到底難しいと感じていた。男性は上野先生の話聞いてどう感じたのかとも興味がある。現状日本の社会を動かしている男性陣が変わらないので、日本はなかなか変わらないという実感がある。また女性も意識を変えたいと思う人がまだまだ少ないことが原因だと思える。親が変わろう、変えたいと思っていないと難しいと思うが未来のためには教育の力が大切で、そのためには教育現場の意識改革が必須だとも思った。一方でなかなか変わらない世の中でも、少しずつ変化はしているので、小さな前進かもしれないが女性会議の役割は世の中を動かすきっかけとなっているし、今後も行くと思う。
- ◆平等社会への歩みが遅々として進んでいない状況に改めて愕然とする思いです。
- ◆印象に残った言葉「リーダーに性別を問わない程度に成熟した民主主義の社会」「生き延びる知恵」「能力やスキルを身につける。能力やスキルのある人を調達する。」「身近な人を変えられなければ社会は変えられない。」
- ◆安心して弱者になれる社会の実現に向けて歩み続ける事の必要性がよくわかりました。日々の生活の中で小さな疑問をキャッチしつつ行動できるようにして行きたいと感じました。
- ◆最新の話題でジェンダーを学ぶことができたこと
- ◆つかえ棒が1本ではなく何本もあればOKということと、大学生の質問に対して「あなたが後からくる人のロールモデルとなって」と講師が答えていたことが印象に残っています。
- ◆若者からの質問は良かったが、男性も質問者に入っているともっと良かったと思う。
- ◆「オンラインを使える人と、使えない人との差が格差を生んでいる。」との言葉に、これは大変と勉強しなくてはの気持ち。
- ◆独身でなければもう少し共感できたのに！
- ◆オンラインでなかったらもっと良かったと思いました。
- ◆データを踏まえ話を聞いてよかった。成功事例などもっと話を聴きたかった。上野先生の講演が聴けてとても嬉しかった。このような講演をこれからも開催して欲しい。
- ◆家のPCの調子が悪かったのか音声が入り切れない時がありました。
- ◆大変充実した内容を講義いただいたのですが、展開がはやくていけない場面が多々あったので、画面に映し出される主な資料などを事前にメールなどで送っていただければ、手元で資料を見ることができ、さらに理解を深めることができたのではないかと思います。
- ◆上野さんの最後のメッセージ。女性を増やして、安心して弱者になれる社会、安心して認知症になれる社会、安心して障害者になっても殺されない社会、が泣けました。本大会の趣旨とは違うかも

しれないですが、質問で登壇された学生代表3名の中に男子学生が1人でもあったのが良かったのかなと感じました。25年くらいNPOで男女協働参画に携わっていて、なにも変わっていないと日々思うことがある一方で、このような基調講演にオンラインで参加できて、上野さんに女子学生が質問することは大きな進歩と感じました。

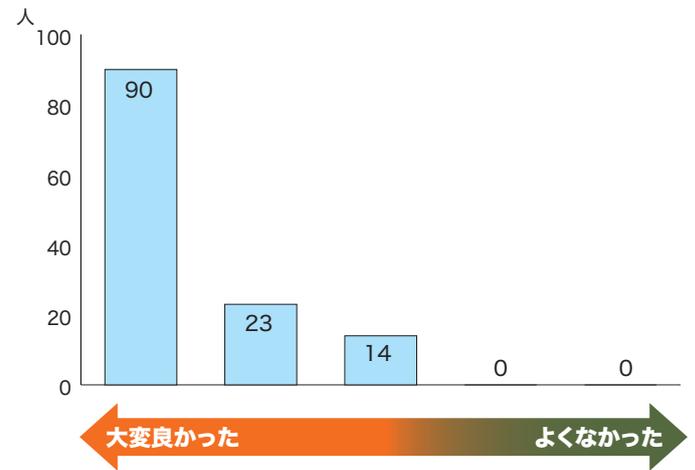
- ◆どんな立場の人でも、自分らしい生き方ができる世界になったらいいなと思った。そのためには、私たち一人ひとりが正しい知識を身につけて、行動していくことが大切だと感じた。
- ◆コロナ禍による影響、現状、課題等が分かりやすく、大変有意義だった。
- ◆「本当のフェミニズムとは、弱者が弱者のままで尊重されること」という言葉に感銘を受けました。
- ◆ZOOM参加者が学生だけだったのが残念。子育て世代の女性や非正規の女性などいろいろな女性を入れてもよかったのでは。
- ◆オンラインでよく聞こえてわかりやすかった。
- ◆コロナ禍で可視化された社会のひずみや問題を的確に指摘され、今後目指すべき社会のあり方の指針を提示していただいた。たいへん有意義なご講演でした。
- ◆コロナ禍における貧困問題やDVの課題は非常に深刻であり、その不利を受けているのが女性になっている現状は、社会課題の本質を浮き彫りにしているものと思われる。当面は直面する課題への対応となると思われるが、改めて社会構造の変革は必要だと感じている。でなければ、弱いものが認められる社会はなかなか訪れない。微力ながら、自分なりにできることをやっといこうと思う。
- ◆安心して「認知症に、要介護に、障害者に」なれる社会に少しでも近づけられるよう、交渉力を身に付け、自分の身近な世界から変えていけるようにしたいと感じました。
- ◆学生との交流などから、ウェブ開催の長所を活用できてよいイベントだと思った。
- ◆学生相手のお話のようで、働いている者には、物足りない内容でした。最初から分かっていたらよかったのですが・・・対象を絞らないのはわかりますが、それならば、もう少し具体的に講演内容を書いてくださればよかったのではないのでしょうか？
- ◆業務中で急なことが入り、オープニングや分科会など予定していたとおり視聴することができなかった部分もあり残念だったが、オンラインでも臨場感や一体感があり、大変良かった。基調講演では、お話の内容や若い世代の子からの質問からも、世代は違っても感じる事など女性として共感できることがたくさんあるんだと実感することができた。これからも頑張っていきたいと思える貴重な時間であった。
- ◆講演時間があっという間に過ぎました。女性参画というと、男性も同じようにしていかないといけないのでは、という考えが覆りました。自分で自分の生き方を選べるといこと、弱くてもそのままでもいいということなどとても気持ちのいいお話でした
- ◆上野千鶴子さんの言葉に力があり共感しました。誰もが幸せを感じ、安心出来る社会にしていく責任が今の大人たちにはあると、特に地位も権力もお金もある人たちには。そうです、強者であった男性が障害者になり、これまでの弱者への偏見が強かった人ほどもがき苦しむ姿を介護の現場で多く見て来ましたから。
- ◆対面でないためか、上野先生の日ごろの迫力が薄かったように思う。
- ◆男女共同参画はゴールでなくツールだと言い切った。そうして目指す社会は、「たすけて」と言える社会にすること、安心して年

を取る事ができる社会にすることと言われたことが、大変うれしく、心強く思いました。

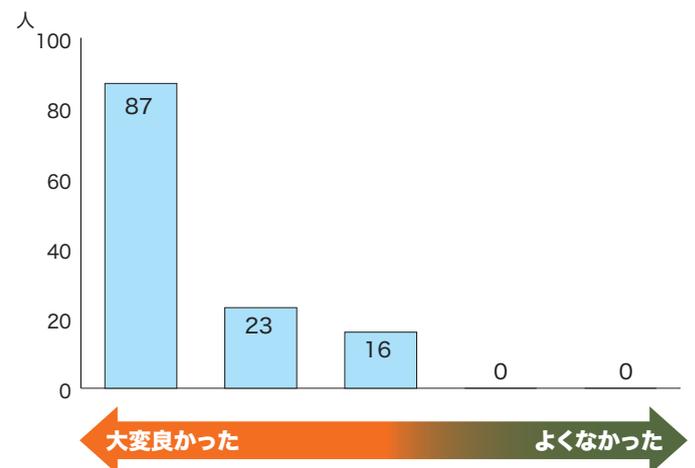
- ◆男性にも聞いてもらいたい内容だった。
- ◆男性や政治に対する非難的な発言が多く、これまでの歴史を語るの分かるが、これからどうしたらいいか、前向きな内容が欲しかった。
- ◆東大の新入生に向けた祝辞に感銘を受け是非講演を聞いてみたいと思っていたので、大満足です。コロナ禍から問題が浮上したのではなく平常時から問題や課題が一層際立ったと話されたこと、格差社会は人為的に作られたこと等々今の日本の現状を知る事が出来、様々考えるきっかけとなり、貴重な時間でした。

記念講演「女性が社会を動かすとき—日本骨髄バンクのケースから」について

Q. 講師（大谷貴子氏）はいかがでしたか。(n=127)



Q. 内容はいかがでしたか。(n=126)



Q. ご意見ご感想など（一部抜粋）

- ◆心に響くお話でした。本当の意味での心の強さを感じました。
- ◆記念講演・基調講演もう少し長くてもよかった。演者の熱気があるのすごく伝わった。話の内容もよかった。手話通訳があって話の内容をきちんと把握することができてよかった。毎日の生活をこなすことが第一で怒ったり疑問に思うことがない。もう少しゆっ

たり向き合うことが必要な？

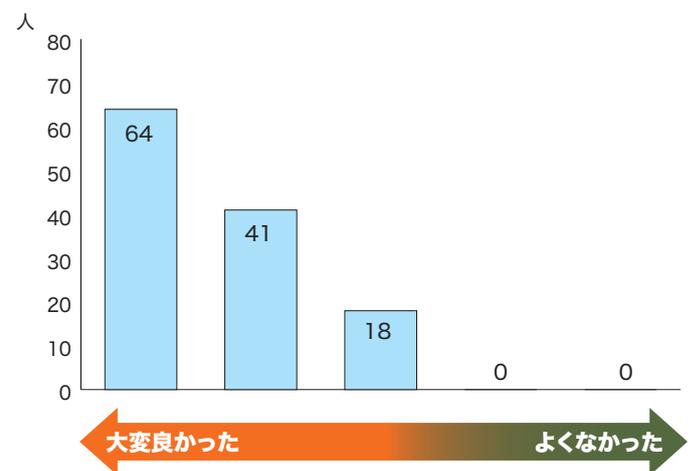
- ◆ZOOMの限界を超えて、直接お話しくださったように感動しました。
- ◆人を引き込み 巻き込む力を お話からも受け取れ、構えず ひらばの位置の大切さを学びました。
- ◆11月12日の新聞を早速読みました。活動を通じて得たものは「人は財産である」この言葉にいいね！です。「気づいたことを発信する」「言い続ける」もいいですね。ありがとうございました。
- ◆ご自身の闘病を乗り越え、その体験を生きる力として周りを巻き込む人間性に感動しました。闘病を通して沢山のひとと知り合えたこと、そしてそのご縁を大切に日々活動されておられる大谷様に心からの拍手を送りたいと思います。
- ◆自分の経験から課題を見つけて解決に向けて注力されていることが素晴らしいと思いました。次なる課題とされている病院のWi-Fi環境については、最近入院した娘がポケットWi-Fiを使用していたことから、解決すべき問題だと思えます。
- ◆発信力の強さに脱帽です。「気づいたことは発信する。」を肝に銘じます。
- ◆印象に残った言葉「皆さんに平等に生きるチャンスが与えられるということ」。原動力は、の質問に対し「怒り」と堂々と話される姿に感銘しました。嫌味がなく等身大の気持ちが伝わってきました。
- ◆これまで女性は言いたいことがあっても、言わず我慢することが美德のように育てられてきたように思います。大谷さんは気づきを発信、変革を促すことができ、とても凄いなと尊敬しましたし、自分も気づきを我慢せず発信することが大切だと感じました。
- ◆言うだけの点が、変化することにより良い社会を創ることの第一歩なんですね。その点がなければ次の社会がない。言うだけしか出来ない自分と思って黙っていたのでは進まないことに気付きました。
- ◆次々と課題に気付き、それぞれに全力で取り組んで解決していく生き様に、微力ながら活動に取り組む者として勇気をいただきました。
- ◆自分自身の問題解決を他の人へも広げ、次々と支援に繋げていった素晴らしい行動力に感心した。適当なところで引っ込んでしまう自分自身を反省した。
- ◆抗がん剤を使うと不妊になるという現実を大谷氏のご講演をうかがうまで、知りませんでした。社会を変えるには、よく身近な家庭から変えなければといわれますが、やはり内容・事柄によっては、政治から変えていかなければならないこともありますよね。もっと男性以外を政界に送らなければと考えさせられました。とても明るく前向きな大谷氏のご講演に感銘を受けました。
- ◆司会の方も仰っていましたが、言葉の力強さがオンラインでも伝わってきました。困難なことでも、発信し続け、それが繋がり、やがて形となっていった実例を聞くことができ、とても感動しました。講演を聴く機会に恵まれたことに感謝したいと思います。
- ◆点を見える化し、線に繋げる仲間を引き寄せ、面にしていく、そんなパワーを感じました。Wi-fiを院内に。これは地元でも発信していきたいと思いました。
- ◆実体験に基づいたメッセージが響きました。大谷さんの原動力「怒り」。私たち世代の活動の原点はそこにあったことを、思い出することができました。声を出し続けること、止めてはいけなかったと思いました。
- ◆私自身の「思い立ったら即行動」はいつも周囲から批判されてきましたが、間違いではなかったと、大谷様から大きなパワーを頂

きました。帰宅してすぐに、難病で苦しんでいる友人に、さっそく大谷様のお話を聞いて、回復したらあなたこそ、また誰かの力になれるよと声をかけ、その友人にもパワーをあげることができました。ありがとうございました。

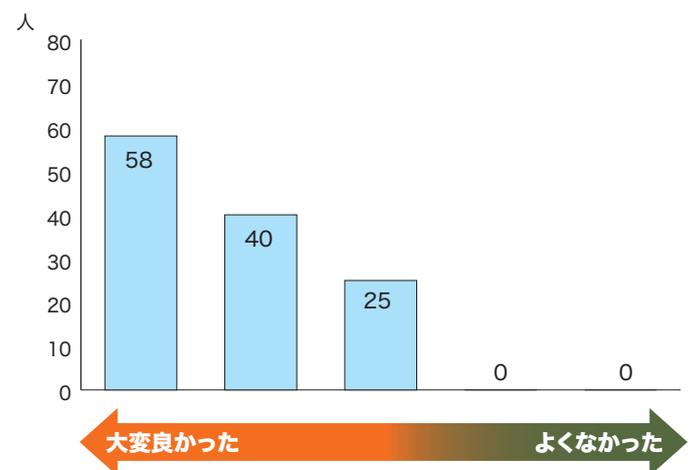
- ◆行動力、伝える力の強さを感じました。まず自分の事からでも始め、それが周りの人への事になり大きな変化をもたらすことが分かりました。
- ◆現地に出てしまうと大会参加ができるが地元にいると他の行事に追われてしまう。
- ◆「原動力は怒り」「怒っているだけでは間に合わない」に心が動きました。
- ◆不妊症の話が多すぎた

記念シンポジウム「スポーツから変える世界と未来」について

Q. 講師（宮嶋泰子氏）はいかがでしたか。(n=123)



Q. 内容はいかがでしたか。(n=123)



ご意見ご感想など（一部抜粋）

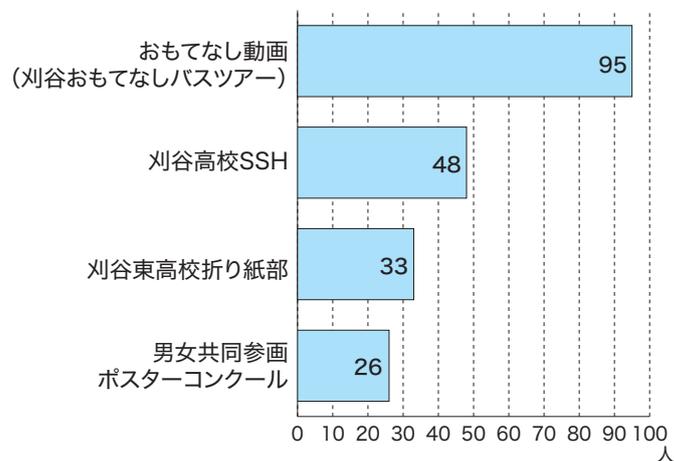
- ◆オリンピックの歴史とともに、周りの偏見などにも耐え、様々な場面で生き抜く女性アスリートの強さを感じました。また少しずつでも、アスリートを取り巻く環境が良い方向に変化していると知れてよかったです。ありがとうございました。

- ◆シンポジストの方々は、それぞれの立場や経験からお話くださり、我々が色々考える機会と材料を与えてくださいました。ただ、おひとりずつのお話時間が長く思われ、限られた時間の中ではありませんが、もう少し多くのテーマについてそれぞれの方のお話が聞ければよかったと思いました。
- ◆スポーツオンチなのでそんなに興味がなかったのですが、宮嶋さんや女性アスリートの苦勞、セクハラがよくわかり、それを乗り越え参加しているのに感動しました。応援したジェンダー平等になるよう声を出していきましょう。
- ◆スポーツがこれほどまでに歴史や社会現象と関わりがあることに驚いた。スポーツやスポーツをする人は、新たな時代を切り開いていくのだなとおもった。東京五輪を通して、どんな人でもスポーツを楽しみ、互いを理解し合う世界、時代になったらいいなと思う。
- ◆スポーツに関しての知見のみならず、配慮の届く構成に時間を忘れました。
- ◆スポーツを続けている私にとって、楽しい時間でした。トップクラスの選手ばかりでなく、好きだから続けていたから80歳を過ぎてても元気であることに感謝です。時代の流れに沿ってのお話には一つ一つなづきました。大坂なおみさんの話題には実感です。日本のスポーツ界における問題点はまだまだ・・・ですね。
- ◆スポーツを通して互いを尊重する社会について考える、大賛成です。シンポジウムを通して金子みすずの詩「みんなちがって みんないい」の心が伝わってまいりました。
- ◆スポーツ界で選手が自由にものを言えること、パワハラ・セクハラ等がなくなること等改革すべき課題は多いと思います。そのためがんばっている方を知ることが出来てよかったです。スポーツ界には一般社会から見てありえない事象もあり、ひとりひとりが尊重され、みんながスポーツを楽しめる社会を実現したいと思います。「体育会系」的な考えがスポーツの発展を阻害していますね。
- ◆マラソンにしても、ラグビーにしても女性の活躍は切り開いていった人の努力があってこそ現状だということ。我々の世代は常に応援していきたい。
- ◆印象に残った言葉「スポーツは人生を切り拓く武器」伝えたいことが山ほどある、といった前向きな気持ちに共感が持てました。昔の「珍しい、無理」といったイメージが今の当たり前に進化していると実感できます。50年後には全てのスポーツが男女の区別無しで実施されているかもしれませんね。オールノーサイド！シンポジウムは少なくともあと1時間は見ていたかったです。内容に興味を惹かれ、今後のスポーツへの取り組み方が変わります。
- ◆元アナウンサーの方なのでとても聞きやすく拝聴させていただきました。スポーツから変える世界と未来・・・学生の頃はスポーツを頑張っていました、スポーツによりけがや慢性的な疾患等により社会人になってからはほとんど運動をすることがありませんでした。なので、スポーツ観戦も特に興味を持ってなかったと思います。しかし、今日の講演を聞いて、スポーツをしなくてもできることはあると思いました。本当に、いろいろな人が、女性の立場、障がい者の立場を理解してもらい、生きやすい世の中に変えていく努力をしてきたことで変わってきていることに感謝の気持ちでいっぱいになりました。これから自分ができること、何ができるのか、できることは実行していこうと思いました。ありがとうございました。
- ◆講演にカタカナ用語が多く、わからないから調べようという意欲が出た。

- ◆講演の中で、ダイバーシティ&インクルージョンの話しが出ていたことが興味深かったです。
- ◆今年開催される予定であったオリンピックを踏まえてのシンポジウムということであったが、開催されなかったからこそ、歩いて様々なことを知り、考えるきっかけになったと思う。様々な立場の方のお話が聞けて良かった。
- ◆司会の方がうまく全体を回していたと思います。スポーツに焦点をあてることでどうかな、と最初は思いましたが、どんな分野にも共通の課題があることがわかり勉強になりました。
- ◆私もサッカーは男性のスポーツ！という時代に育ったので、ラグビーをはじめいろいろなスポーツを、性別を問わず子供たちが体験し、活躍する土壌があることは素晴らしいしうらやましいと思います。
- ◆失った数を数えるより、今あるものを数えよ。(グッドマン)パラリンピックの話がよかった。
- ◆展開がスムーズでわかりやすかった。
- ◆普段考えてこなかったテーマだった。
- ◆スポーツから変えるという方向には同感できたが、しかし大変難しいと思う。しっかりした計画をみんなが共有して同じ方向を向くむずかしさを強く感じた。
- ◆「大坂なおみさんが、日本のスポーツ環境の中で能力を発揮できたか?!」には日本のスポーツ界の抱える問題として、うなずいてしまいました。

おもてなしコンテンツについて

Q. おもてなしコンテンツの中で、よかったものをお選びください(複数回答可)。(n=110)



Q. 大会全体について、ご感想・お気づきの点がありましたらご記入ください。(一部抜粋)

- ◆とても充実した時間を過ごせました。準備等お疲れさまでした。ありがとうございました。
- ◆オンライン開催をされるにあたり、携われた皆様はご苦勞も多かったかと思います。勉強をさせていただきました。
- ◆良く考えられたプログラムでした。初めての挑戦でここまで出来れば素晴らしい！
- ◆分科会は一カ所で間隔を取り仕切り・マウスシールドなどを使用して一緒に部屋で出席者全員で見ながら話しもらうことで視聴する側が一体感になれる気がしました。
- ◆すべてみることができなかったので残念です。おもてなしコンテ

ンツの配信予定が事前に知られているとよかったかな？日本を代表する講師の話の聞ける。こんな機会はめったにありませんから。

- ◆準備・運営にあたられた皆様、ほんとうにお疲れさまでした。現地に行かなくても参加させていただけたことに感謝です。少し厚かましいことを言わせていただければ、各講演のレジュメ等を事前にいただくことができれば、もっとゆったりとお話が聞けたと思います。メモを取るのが少々大変でしたので。でも、静かな環境で講師の方をひとりじめできた満足感は、オンラインならではのようです。また、オンライン開催は、大きな会場を持たなかったり、多くの人員の配置が難しい自治体でも開催できる可能性を感じさせてくれました。ほんとうに貴重な機会をありがとうございました。
- ◆全国大会のオンライン開催なのでうまく行くのか参加者も心配していましたが、素晴らしい運営で大成功でした。いろいろと配慮され、ディスカッションにも参加でき意見が言えたことはうれいす。家で居て参加できたとは私にとっては良かったです。
- ◆初めてオンライン会議に参加した。思いの外、聞きやすく、充実した時間を過ごさせてもらった。たくさんたくさんのご苦労があったことと思う。企画や準備に携わられた方々に、お礼申し上げます。
- ◆長い間の綿密な準備ありがとうございました。オンライン会議となり一層大変だったと思います。素晴らしい大会でした。
- ◆コロナの中で出来ることを考え、「ミライク会議」を成功された皆様に感謝します。どんな状況でも、力を合わせれば出来ることを教えていただきました。
- ◆オンライン実施という新しい方向性を果敢に実践されたことに心から感服いたします。本当にお疲れ様でした。
- ◆現地に行けず残念でしたが、オンライン開催でもかなりのことが出来るというのが終わってみての感想です。講演などに集中でき、質問も出せたので満足しています。リアルの場合は気後れして質問も出せなかったかとも思います。
- ◆コロナ禍で全国の活動家と交流できる交流会がなかったのが残念でしたが、仲間と情報を共有でき、今後の取組みに活かせると思いました。コロナにめげず、オンライン会議を開催した決断にエールを贈ります。歴史に残る大会でした！！
- ◆オンライン開催で時間のない、全国の女性が、参加できる機会がある新しい女性会議であったと思う。PRにより、全国で参加する方が増えるといいと思った。音声の乱れが少しあったので、今後改善されると良いと思った。
- ◆これまで遠距離のため参加できなかった場所でも参加できるという点では新たな可能性を切り開いていく事で楽しみでもあります。ただ、開催地の経済効果を考えるとき、これから手を挙げる都市が続くかと心配でもあります。コロナが終息したら刈谷市を訪れたいと思います。
- ◆初めてのZOOMの視聴もできるようになり、世界が広がりました。ただ、ネット環境のない人や苦手な人を、どのようにフォローしたらいいかを早くから相談し、3密を避けながら工夫を凝らして、まとまったの視聴も実現でき、満足しています。
- ◆オンライン開催のメリット／デメリットを体感した。その他の意見としては、理解を深めるためにはレジュメ等の資料が手元にあると効果的である。
- ◆ここまでの大会に仕上げるまでのご努力に敬意を表します。講演、シンポジウム、分科会、どれをとってもすばらしかった。人選や構成などオンライン開催ならではの苦労があったと推察します

が、運営に関わった皆様の熱意が高知にいても伝わってきました。もしかすると実際に出席する以上の感動なのかもしれません(^^)二日間参加をすると、終了後はオンラインなのに、なんだか実際に参加して帰ってきたようなリアリティを感じたことも新鮮な驚きでした。おもてなしのチカラですね。

- ◆オンラインへの変更にあたり大変なご尽力があったものと感じ取れる内容でした。オンラインならではの参加人数。よかったと思います。個人的には参加型の分科会が1番楽しく感じました。やはり何かを生み出すには対面でディスカッションが1番いいと感じるのは私がそう言う世代だからなのかも。今時の方々はかえってオンラインで話す方がいいと感じるのかもしれないね。分科会の内容の感想ですが、このコロナ禍での変化が、子どもの発達成長にどのような影響があるのか、なんて悩みも10年後にはオンライン、ソーシャルディスタンス、マスクが当たり前になっていて問題視されていないかも。もしくはコロナ前に戻っていて、コミュニケーションがネット上でしかとれない人が増加し、社会がリアルとバーチャルに分かれてしまうのか。。それはそれで新しいダイバーシティが築けているのかも、と想像しています。
- ◆オンライン開催をしていただいたため、コロナ禍の今日でも大会に参加出来、勉強させていただけたので良かった。仮にコロナが無くても、地方からの参加は日程上難しいこともあるので、オンライン開催はありがたかった。来年以降も現地での開催に加え、オンライン参加も選択肢に入れていただけると参加しやすいと思う。
- ◆とても素晴らしい学びの場で、また、心尽くしのおもてなしで感激しました。関係者の皆様、どうもありがとうございました。一点、折角のWEB開催でしたので、大会宣言は読み上げるだけでなく、画面にも表示していただけるとわかりやすかったかと思えます。出来れば、今後公式サイトに掲載していただけると有り難いです。
- ◆リモート開催であったからこそほぼ全てに参加でき、学ぶことができた。次年度からも選択肢として残して欲しいと思う
- ◆大会コンセプトに「生活と仕事の調和」「多様性の尊重」「世代をつなぐ」を掲げられ、子ども、高校生、大学生、高齢者などさまざまな年代の方が、参画されていて素晴らしいです。特に「仕事と生活の調和」ではなく「生活と仕事の調和」とライフが先にきており、時代の流れをきちんとキャッチされているコンセプトだと思いました。今大会は、次世代につながっていくきっかけとなる会議になったのではと思います。
- ◆初めて女性会議に参加しましたが、とても有意義な内容でした。私自身、知らない・考えたこともないことばかりで、もっと知りたくなったので、女性会議の申込者だけでなく、多くの方に見ていただきたいと思いました。無償でもよいのでは…。あとは、「女性会議」という名前だと、興味を持つ人が限られてしまうのでは？と思いました。
- ◆オンラインで家にいながら参加できるのは楽かなと思っていましたが、家にいると、日常をこなしながらの参加になるので、思ったより時間のやりくりが難しく、予期せぬ邪魔も入るので、とても疲れました。開催地に行って、日常を忘れて大会に参加できるのは楽しいことであったと実感いたしました。
- ◆企画がよく練られており、充実していたと思います。ダイバーシティに関する話題が多く、特徴が良く出ていた印象です。また若い方が沢山登場していたことも本会議の今後を考えるうえで、とてもよかったのではないかと思います。オンライン会議のせいか参加者が思いのほか増えず、高齢化がその一因かもしれないな、

と個人的には思い、本会議の今後に向けての検討課題と捉えさせていただきました。本当にお疲れ様でした。

- ◆残念ながら、高校生の発表Vは見逃してしまいました。ごめんなさい。大会全般にわたって、初めてのオンライン開催ということもありますが、スタッフみなさん方のご苦勞が伝わってきて、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。2000円で大丈夫なんですか？と心配になってしまいます。まだ、今後映像配信や大会誌の作成などやるのがいっぱいありますが、どうぞ最後までお体をいたわりながら進めてくださいね。防災の分科会Dでは、佐野市のゲストさんが加わったことで、佐野市開催が中止になった無念さがやわらいだような気がします。お心遣いに感謝です。本当は、刈谷市をお訪ねしたかったけれど、今回はおもてなしバスツアーで楽しみました、本当にありがとうございました。
- ◆映像という形に出演者が慣れていない為でしょうか、顔の照明、声の届け方、原稿への目線などいくつか気になることがありました。大会開催につきましては充分楽しませていただきました。ありがとうございました。
- ◆遠い地にいながら女性会議に参加することができ、貴重な学びの機会を得ました。
- ◆大きな会場では味わえない臨場感があり、コロナ禍の中初めてのオンライン視聴ができました。充実した2日間でした。若いパネラーの発言は、これからの未来を支えながら、少しずつ意識を変えていってくれそうな勢いを感じました。複数で参加できたこと、昨年の中止を踏まえた上でのオンラインでの実施もありがたかったと思います。
- ◆内容が豊富で多岐に亘る分野から構成されていて驚きました。ミライク会議とのネーミングの通り未来志向で希望に溢れた大会でした。
- ◆男女共同参画ネットワークの方のみでは高齢でありオンライン研修は難しそうといった声もあり、自治体にて全面的にサポートし、申込、場所の確保、オンライン研修の設備を準備し、研修室にてスクリーンへ投影し視聴する形式となりました。自治体でも長時間のオンライン研修を受講する環境は準備しておらず、FreeWi-Fiは1日に使用できる時間制限もあり、また受講中は映像が止まる不具合も発生してしまいました。自治体としても今後のオンライン研修の課題も発見する機会となりました。
- ◆初めてのオンライン開催は大変なことだったと思います。知人の中でも関心が高かったのですが、申込サイトが複雑でわかりにくいとか、事前の質問情報が多すぎて、意欲を削ぐといったご意見もいただきました。
- ◆参加型の分科会で、ほとんどの人がビデオにせず顔が見られなかったのが残念でした。全員顔が見える設定で進めていただいた方がいいと思いました。
- ◆オンライン開催素晴らしかったです。随所にみられるムービーなど、とてもよかったです。
- ◆いろんな年齢層に向けてはわかりませんが、幅を広げすぎて、薄い感じになっていると思われそうです。オンラインの割には値段設定も高いのでは・・・
- ◆分科会のアンケートのリンクが表示される時間が短く、不便だった。大会のHPなどからいつでもアクセスできるようにしていただけるとありがたいです。
- ◆私は刈谷市の一市民ですが市民に対する広報が足りないと思った。市民センターで申し込みの仕方のパンフレットを偶然手に入れることができたから、参加できたが、自ら動かなかつたら知らないままで終わってしまったかもしれないのは残念だと思う。オ

ンラインで行うということも、初め知らずにいた。私はそれができる環境があったけど、オンラインが不可能という人も多いと思う。最後のエキシビションは途中でzoomに変更がうまくできないまま終わったのは残念！！

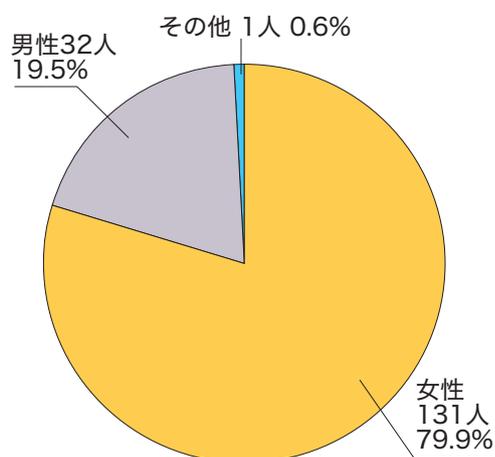
- ◆女性会議という名前ですが、男性にも女性の考えや思いを知ってほしいので男性も参加しやすくしてほしいと思う。
- ◆他の方のコメントが見れるというんな人の考えを知ることが出来るので良かったです。
- ◆オンラインで、質問をして回答を得られ参加した実感があった。
- ◆オンラインで2000円の会費は高いと思う。
- ◆オンライン会議をこれほど長く参加したのは初めてです。自身のスマートフォンで、視聴しましたが、見やすい画面構成でした。分割画面では、音声が遅れる、他画面との明暗の差など、多少気になることもありましたが、スケジュールどおりに進行了。司会の方と講師の方とのやり取りも良かったと思います。エンディング、バトンパス、事務局の皆さんの映像が流れましたが、その表情が素晴らしかった。アーカイブも楽しみにしています。
- ◆大きな企業が有る刈谷市、ちょっぴりうらやましく思う。大企業も大学もない我市が、少子高齢化の中どう生きぬくか、心配でもありたのしみでもある。65歳をすぎた私に何ができるか、考えさせられた2日間でした。
- ◆オンライン開催だったことで、参加することができました。とても勉強になる素敵な大会でした。ありがとうございました！エンディングで、老若男女、多様な人が画面に映っておられて良かったと思います。行政職員として、オンライン開催のノウハウを教えてもらいたいと思って見させてもらっていました。
- ◆現場に参加した時の記憶と今回のオンラインを比べると、前者に比べ、今回は温度差が多かったと感じました。
- ◆オンラインによる会議と決まってからのスタッフの皆さん方の努力に対し、敬意しかありません。今後繋がる大会になったと思います。

分科会A（高齢社会） 人生100年時代 ～高齢者のつながりづくり～

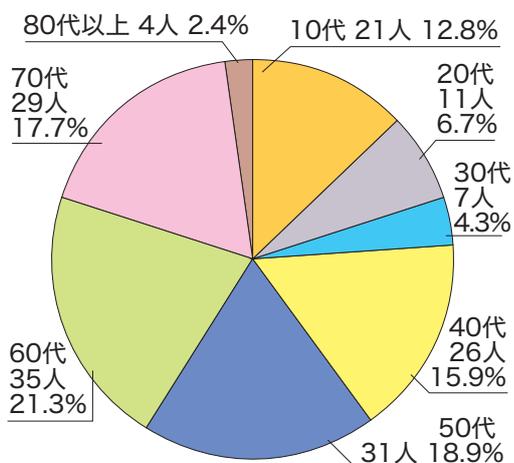
[回答数：164件]

回答者属性

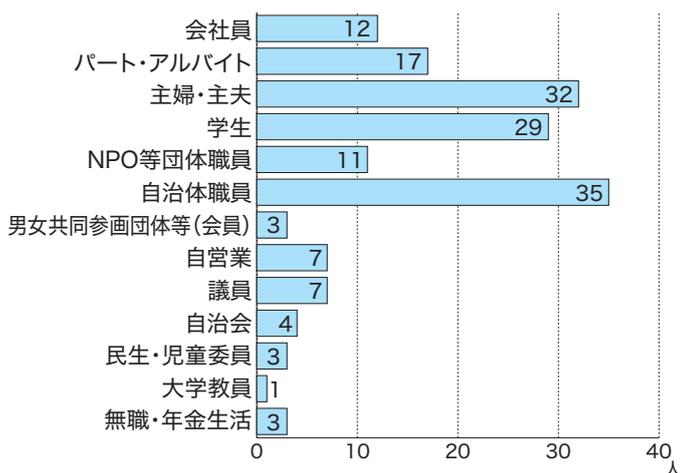
【性別】



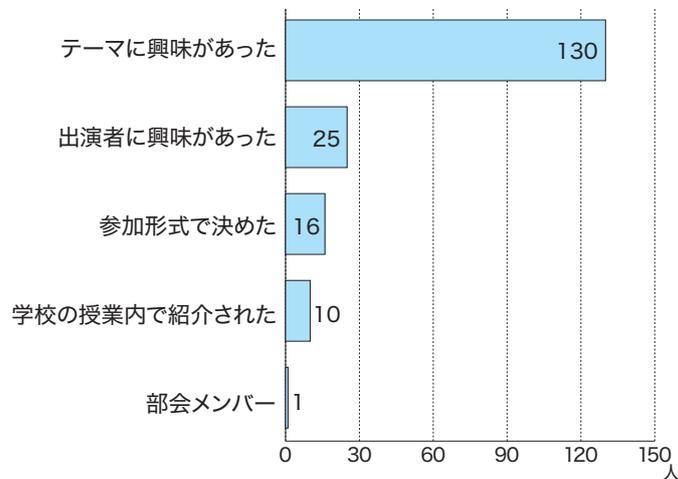
【年代】



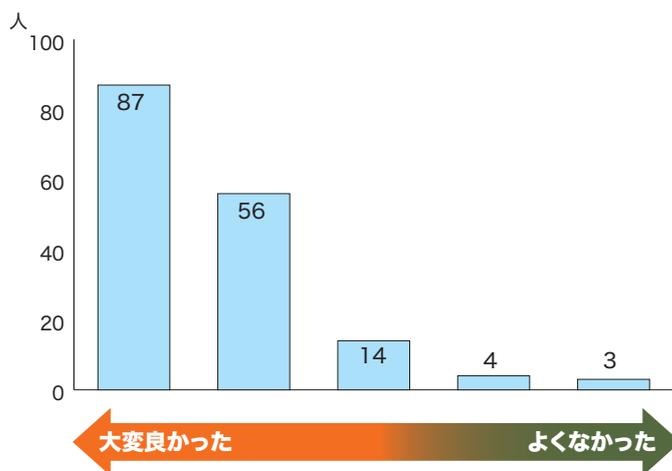
【職業・所属】



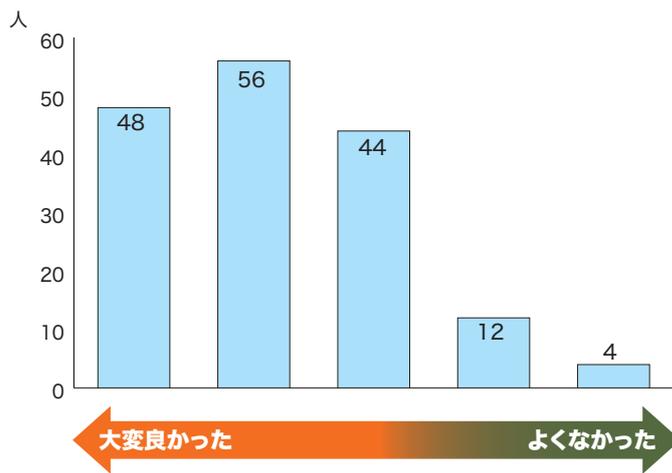
Q. この分科会を選んだ理由についてお答えください。（複数回答可）



Q. 山崎さんの講演はいかがでしたか。



Q. 山崎さんと吉田さんの対談はいかがでしたか。



Q. 分科会全体についてのご感想、お気づきの点がありましたらご記入ください。

- ◆継続することが良い今後につながるよとばかり考えていましたが、継続につながるようなそれまでの過程を乗り越えた人たちがその人たちだけで乗り越えた経験を所有するのではなくそれを新たな種火にすることで更に拡大した活性化につながるのだという意見は初めて伺ったのでとても良い考え方だと思った。
- ◆「楽しさ」をメインとした活動事例（秋田）のケースがよかったです。
- ◆婦人会に所属しているが高齢化して活動が進まないことがあります。今回の分科会でヒントを得ました。
- ◆継続ばかりでなく、解散して一から始めるという考えも学びました。
- ◆人生100年、他人との交流がたいせつであること改めて確認できました。
- ◆コロナ禍で人とのつながりが希薄の中オンラインで人とつながることで笑顔のなり、笑顔になることが大切だと思います。
- ◆まちづくりはおじおばさんの力が必要ということと、「年の差フレンズ」というキーワードを新しくいただけてよかったです。
- ◆町づくりおける7つの秘訣が面白かったです。正しい話よりも楽しいを第一に考えてまちづくりをしていくことが、先輩方の元気や健康の元にもつながり、地域の幅広い年齢の人が繋がれるという事はとても素晴らしいことだと感じました。
- ◆地域でのコミュニケーションの取り方の参考となりました。また、オンラインでのつながりの必要性も感じました。
- ◆地域のコミュニティ作りの中で解散期の在り方がとても参考になりました。
- ◆山崎さんの進めるプロジェクトは興味深いものがありました。予算がある活動と手出しで部活のように楽しい活動が混在していましたが、自分の楽しみは自分で見つけて責任を持つことの大切さ、プロジェクトの始りと卒業期があることの発想は必要なことだと感じました。
- ◆活動している人と研究している人との差を感じました。
- ◆受講者のコメント投稿が活発で面白かったです。
- ◆「楽しい」ことをやろうと思うと自然と人が集まる、がメインのお話であったため、地域づくりという観点では興味深いお話でしたが、男女共同参画の視点をもっと取り入れてほしかったと感じます。
- ◆山崎さんの話のなかで、グループを作り分裂・分解をして広げていく。リーダーは、ながく同じところにはいないで新しいグループを作るとお話しされていました。確かに新しいメンバーが入ってこないと悩んでいる自分には衝撃でした。刺激をいただきました。
- ◆数々の事例とお話をお聞きして、男女共同参画社会自体の考え方や実際の活動における工夫点など非常に多くのことを勉強させていただきました。人と人との繋がりが地域づくりになるのだと強く感じました。
- ◆地域の活動の中で続いてきたことの継承ではなく、自分が良いと思うこと、楽しいと思えることを少しでもやっていきたいと思った。
- ◆この時期にマッチした内容で大変参考になりました。女性性のある会議、たのしいコミュニティが継続するポイントだと感じました。男性性のグループが結論だけで終わる現実に参加していて、そのとおりだと参加した皆が話しています。沖縄県から複数人参加しています。大変よかったです。感謝です。
- ◆山崎さんの対談でのお話、自身反省しました。会合での同性の行動にイライラしている自分を。寛容の大切なこと。これからお聞

きたことを心に留め活動します。

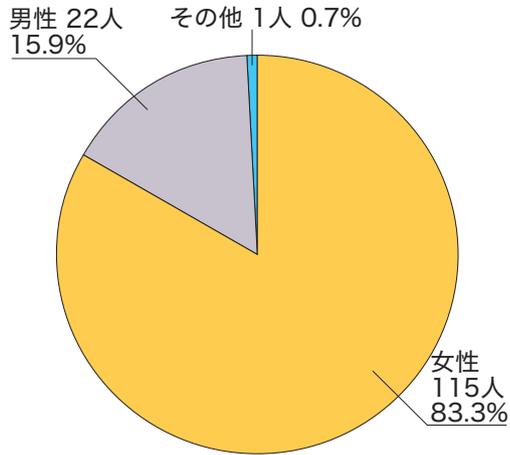
- ◆コミュニティをどのように進めていくのか、とても面白く聞かせていただきました。ついつい正論を言ってしまう自分は、ダメなんだなあと思うと同時に、少くく適当で面白い人は大切なんだとも思いました。
- ◆高齢者にとって住みよい地域はとても大切です。そしてどうゆう生き方をしたいか・何をしたいか自分の意思・目標を持つことが大切だと思いました。
- ◆高齢化社会において自分の出来る社会貢献…年の差フレンズ、作りたいと思いました。
- ◆地域づくりでの男性を引っ張り出すことが課題であったが事例から参考になったこと。山崎氏のコミュニティーデザイナーとして卓越した高齢者理解力と高齢者の行動力を後押しして実践につなげる力には感動しました。コロナ禍のオンラインはできない方に出向いて教えるくらいは必要ということ、「人と人との繋がりを種火のように残す」そのとおりと思いました。
- ◆山崎さんの、関わった多くの事例から導き出されたお話には、なるほどそうだと大いに共感できました。特に、『コミュニケーションには正論は要らない⇒面白い！の共有が肝要』『コミュニティの発展段階の分析』。
- ◆高齢者はオンラインなど厳しいから無理と決めつけないで！と言う視点も非常に良いお話で参考になります。ありがとうございます。
- ◆とても興味深い話でした。終わりを決めて、始める大切さが沁みました。話のテンポが速くて、ついていくのが精いっぱいでした。山崎さんの本を読み直し、閉会後の録画でゆっくり聞き返したいと思います。
- ◆山崎先生と吉田先生のもう少し踏み込んだやりとりが聞けるとよかったです。
農村部と都市部については、自分たちで手の加えられるものがあるかないかという点かとも思う。手の加えられる土地や建物（空き家）等が今自分のいる街には、あるかということ、そのような環境下にはない。全国で課題となっている高齢化、空き家対策、移住支援等の状況は、自分の感覚では違っている。地域住民は、地域のことを自分たちで考える感覚に慣れていない。まだ1年生でこれから学習していく必要がある。そのための、楽しい仕掛けをしていける人を育て、どれだけ仕掛けられるかがとても重要だと思う。
- ◆私は、大学でまちづくり、地域活性化及び高齢社会について学んでいます。高齢社会について考える際に、人と人の繋がりが少なくなったり、なくなったりした高齢者が孤立して孤独にならないためには、どう対処していくのかというように考えておりました。ですが、山崎さんのお話を聞き、楽しいことを念頭に置いてプロジェクトを立ち上げたら自然と人が集まり、そして、このことが高齢社会の貢献に繋がっていくことを知り、考えの幅が広がりました。
- ◆面白い取り組みをされていたので非常に参考になったし、最初の仕掛けが面白いしその後の継続した関りもいい。2人で働かないと成り立たない社会の仕組みがおかしいと話された時はなるほどと思えた。
- ◆山崎さんの非常に素晴らしい講演に非常に刺激を受けました。当自治体でも参考にし、男女共同参画に関するワークショップ等を実施する際には実践していきたいと思いました。

分科会B〔多文化共生〕多様性を活かした地域づくり ～“多文化”を地域の魅力に！～

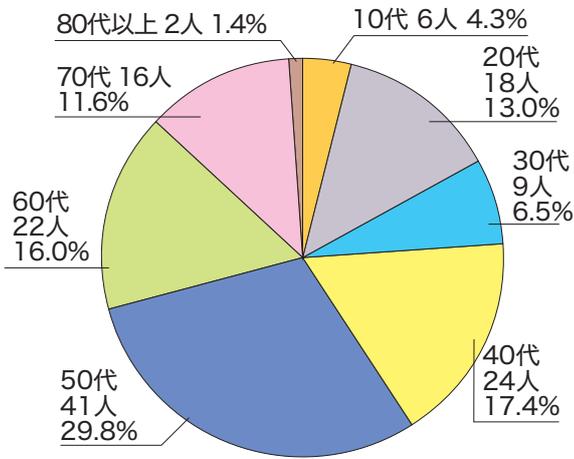
[回答数：138件]

回答者属性

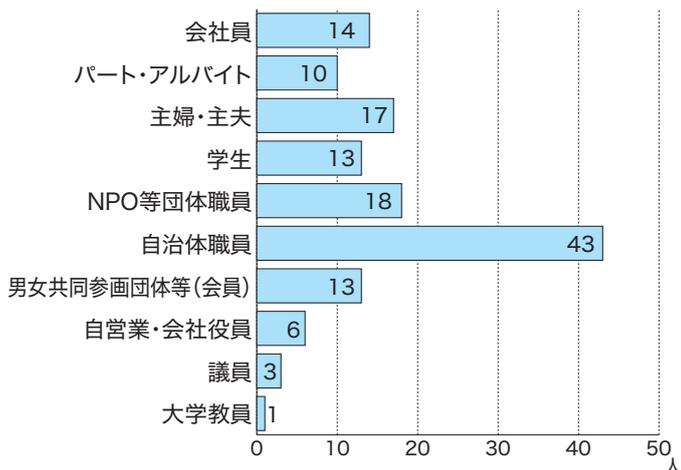
【性別】



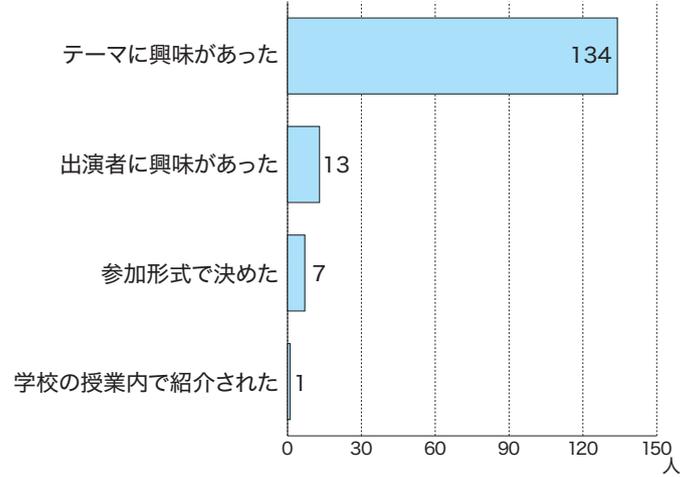
【年代】



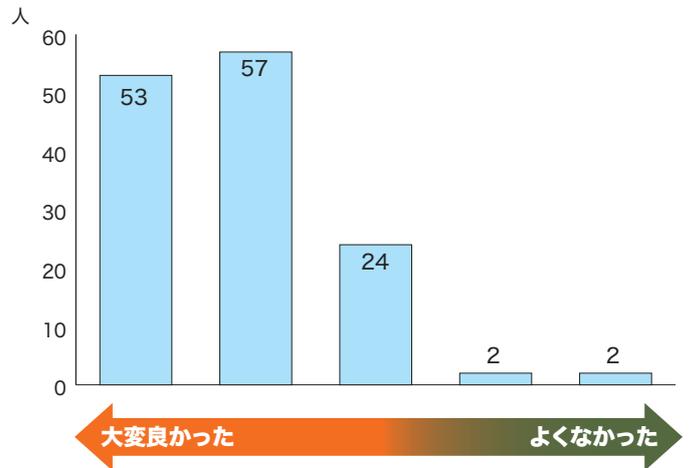
【職業・所属】



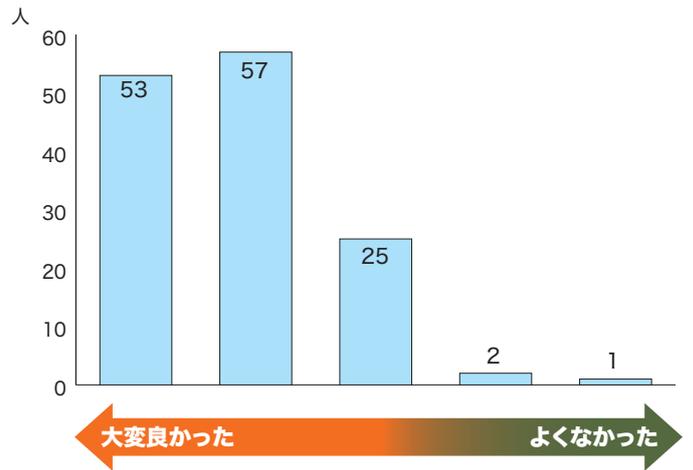
Q. この分科会を選んだ理由についてお答えください。(複数回答可)



Q. 講師はいかがでしたか。



Q. 内容はいかがでしたか。



Q. 分科会全体についてのご感想、お気づきの点がありましたらご記入ください。

- ◆まさに多文化共生のど真ん中で奮闘されている方々の生のお声を聴かせていただき、大変勉強になりました。
- ◆在住外国市民の皆様の生きた声が聞けて参考になりました。
- ◆多様性社会にとけこんでいく上に先ずは挨拶から始まるという言葉が、基本だと思いました。子供に知らない人とは口をきいてはいけないという昨今、こんにちはが言える社会でありたいです。
- ◆多様性のある社会で、みんなが笑顔で暮らすために、多様なサポートが必要と思いました。他人を思いやるため、いろいろな気付きが必要で、良いきっかけになりました。
- ◆それぞれのパネリストが経験を生かしてサポートする側になっていることを知って感心しました。多文化共生と言うことで関心を持ちましたので、男性の方の経験も聞きたかったと思います。
- ◆講演・パネルディスカッションの構成や時間配分のバランスがとても良く、最初から最後まで興味深く受講できた。特に、講演で、実際のデータ等を参照された資料を参照しつつ、社会全体の問題点を説明いただいた後に、パネルディスカッションで現場(身近な環境)の声をコーディネーターやパネリストの方から伺うことで理解が深まったように感じた。
- ◆大学で在日外国人の課題について研究しているのですが、今回、「外国人・外国ルーツ」プラス「女性」という新たな視点から色々知ること・考えることができとても良かったです。こういった視点に気付くことができた一人として、今後、地域の多文化共生を実現できるよう行動していきたいと思えます。
- ◆コミュニケーションや思考することに言語が大きな役割を担っていることに気づかされました。地域に生活されている異なる文化を持った方たちの困難に気づき適切な声かけができるよう心がけたいと思えます。
- ◆外国人の方が苦勞されて日本の社会・地域で生活され、頑張っている仕事をしたり助け合ったりされていることを再認識しました。たくさんの方が大きなフェスティバルをされていることもあまり知りませんでした。日本は少子高齢化が加速し、ますます外国人の方の力を必要とする時代になった今、この分科会は意義があるものだったと思えます。
- ◆皆さんがそれぞれ苦勞された話を知り、日本人として今後何を気をつけて外国の人たちと接していくべきか、とても考えさせられました。苦しんだ時期を経て今は支援する側になる、という言葉がとても印象に残りました。
- ◆自分の住む町にも外国籍の方は格段に増えており、多文化共生への理解は急務と感じる。先進地であるあいち刈谷エリアでのお話が聞きたいへん興味深かった。学校からの通知文や手続き一つとっても外国籍であれば、たいへんな苦勞があるだろうと思った。デジタル化することで、翻訳ソフトが使えるなど気づきが多かった。相手の事を思いやり、寄り添う力が私に必要だと感じた。
- ◆パネルディスカッションは、できれば外国の男性の方も含めて、さらに国も全部違ったパネリストであればまた違った視点での話が聞けたと思うのでちょっと残念です。
- ◆この分科会に参加しないと分からないことが沢山学べました。特に最後の、発言をした方に同意の声を上げる雰囲気づくりが大切、という指摘は刺さりました。良いコミュニティづくりのために、私もできることから始めたいです。
- ◆私自身、結構外国人支援について調べていたつもりでしたが、DiVEの活動など知らないことが多く、勉強になりました。私自身が学生でもあるため、外国人の学生の方の声も聞けたら、もっ

と共感できる話や新しい発見ができたのではないかと思います。

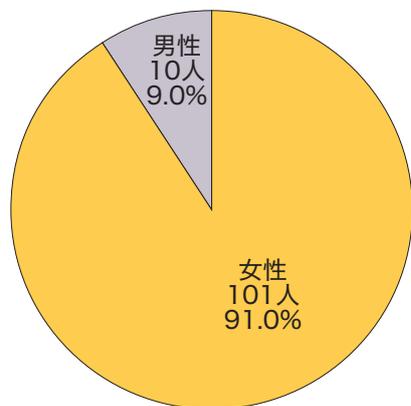
- ◆コロナ禍において外国にルーツを持つ方々も特に女性に大きな負荷がかかっていることが改めてわかりました。
- ◆外国ルーツの人への問題点は女性・弱者への問題点と重なることを再認識した。様々な人が意見を言える環境を作っていくことが大切だと痛感した。
- ◆外国人が抱える二重の壁ということについて、よくわかりました。地域のコミュニティカフェなども増えていますが、日本人でもほんの一部の人しか利用していないのが現状で、なかなか外国人の方が気軽に足を運べるようなものは足を運べるようなものがないようです。外国籍や外国ルーツの方だけでなく、様々な人たちの困りごとに、地域全体で関心を持っていくことが大切だと思いました。
- ◆神田先生が総括されていたように、同質の集団では気づきが出ない、異質なものが混ざり合いそれぞれの視点から率直な意見を引き出し、制度を構築することが大切だということが理解できました。牧野さんのコーディネートがとてもよかったです。
- ◆外国人との交流が増えている時代で、異文化による差別やいじめが起きないようにどうしたらよいか。これは日本人が気づくこともあるけど、実際に経験した方(本日講師としてお話しくださった方中心)にしかならないこともあって、それを今回お話し聞いて良かったです。これをきっかけに異文化交流がより盛んになり、メンタルヘルスによる自殺等が起こらない社会になっていけたらと思えます。
- ◆文化が違えば言語が異なるのはもちろん、教育や生活のルールが大きく異なるため、本日実際にお話を聞いて、日本で生活するうえでマジョリティには気づくことが難しい悩みが多くあるのだと感じました。今まで、留学生をサポートするボランティアを二年以上行ってきましたが、日本人学生から彼らの声を実際に聞くことで、発見できた悩みが多くありました。日本での異文化交流を盛んにするには、日本人の私たちが積極的に交流の機会に参加し、生の声を聞くことが大切だとより実感しました。
- ◆学校のお知らせをデジタル化することや、参加しやすい日本語教室の時間帯など新たな気づきが得られました。このように、外国出身の方も、一人の住民として意見が出せる場が必要だと感じました。
- ◆コーディネーターさんが、柔らかな口調で押しつけがましくなく、パネリストの声を引き出してくださって良かったです。実際に、こどもや家族がウツになったときの話は、かわいそうでしたが、それを乗り越える仕組み作りが大切との、講師さんがまとめて下さり、学びと気づきをいただいた、有意義な内容でした。
- ◆2重の壁(女性+海外出身者)を超えるために、その人の持つ特性を引き出し伸ばすこと、環境・制度を整え、サポートをし、すべての人が参画することの重要性を学ぶことが出来ました。
- ◆ものづくりの町・刈谷ならではの、外国人労働者の問題とか知らないことがたくさんあって学べた。外国人技能実習研修生については、昨今犯罪などの問題も多く、コロナもあって皆さんの生活も心配だ。さらに災害時に、情報が行き届かない言葉の壁、心の壁、法律体制の壁の三つが重なり、これを工業都市愛知・名古屋ならではの変えてほしい。

■分科会C (DV) だまっとれん! コロナ禍でもDVを生み出さない社会へ

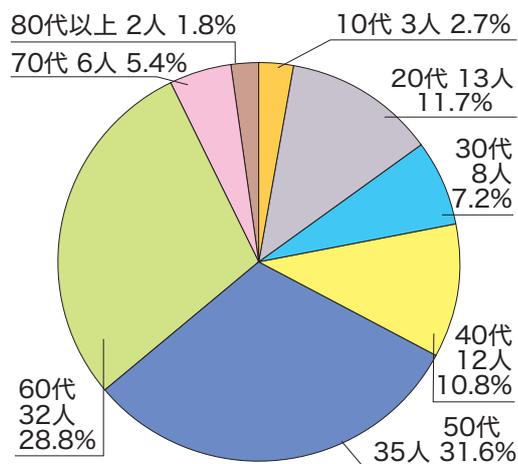
[回答数：111件]

回答者属性

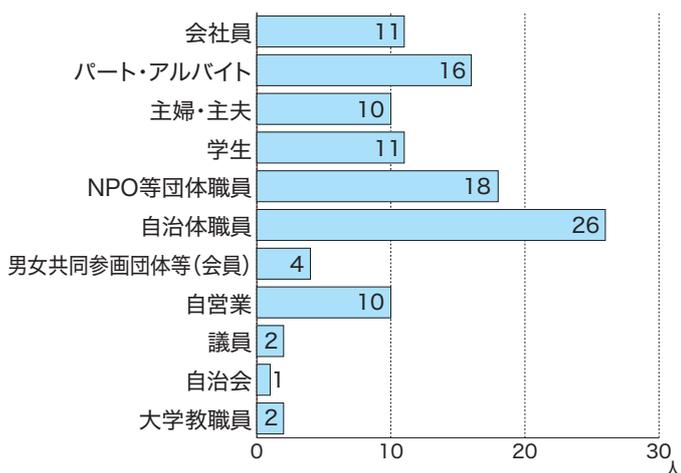
【性別】



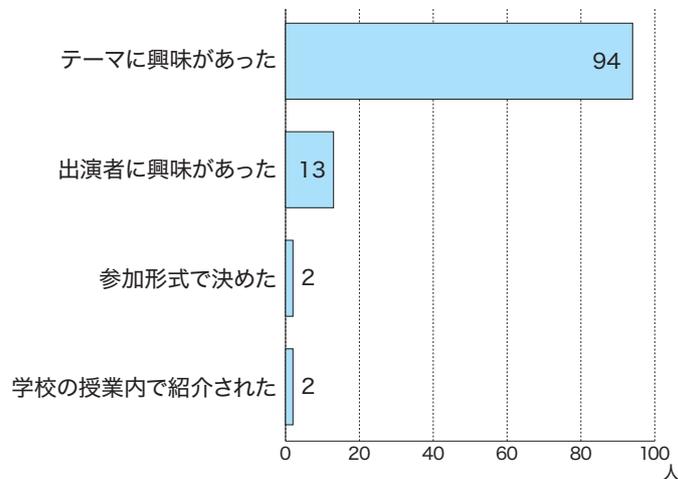
【年代】



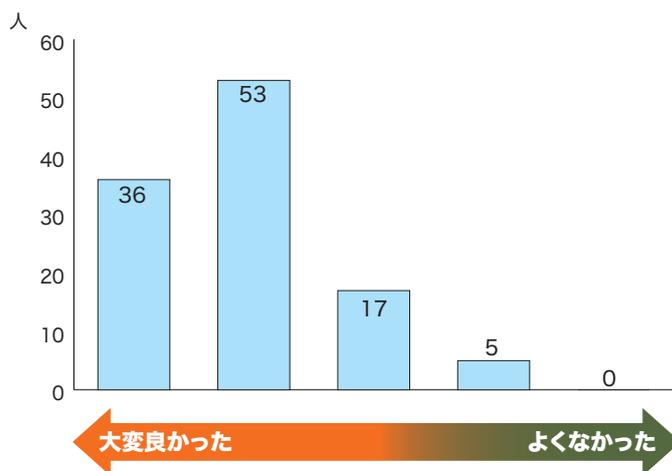
【職業・所属】



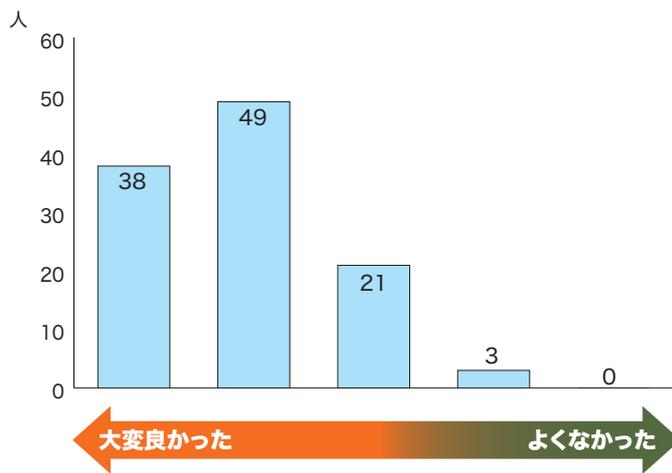
Q. この分科会を選んだ理由についてお答えください。(複数回答可)



Q. 講師はいかがでしたか。



Q. 内容はいかがでしたか。



Q. 分科会全体についてのご感想、お気づきの点がありましたらご記入ください。

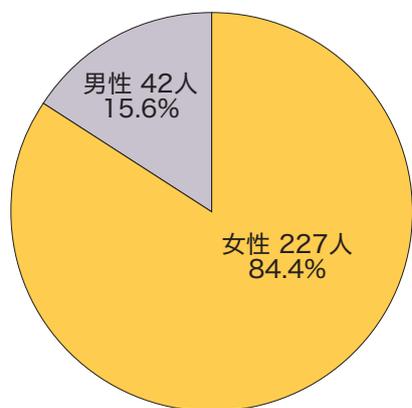
- ◆被害者の保護・支援と同時に、DVの連鎖を止めるためにも若年層（特に中高生）に対するDV防止の意識啓発が大切だと思います。
- ◆手元に資料（データまたは紙）があったほうが、聞き逃しや見逃しを自分でフォローできるのでありがたいです。
- ◆DVは子どもの将来に影響を与えることの認識があまり知られていない現実気づかされました。
- ◆DVについてただ逃げるといだけでなく、その後の自立への力に焦点があり、興味深かった。子どもへの面前DVということについても、親と子は一体ではなくそれぞれであり、その対応もアンテナ高く社会の中で取り組まなければならないと感じた。対等な交渉力ということについて、考えるきっかけとなった。ジェンダー平等のヒントがそこにあるように感じた。
- ◆最初の漫画であるある含めてバリエーションに富みとても良かったと思います。
- ◆様々な立場の方の意見がうかがえて良かったです。DVは、男女問わず年齢問わずという意識が大切だと思います。
- ◆DVは、ネガティブなイメージですが、ポジティブな「成長」につながるというが、印象に残った。
- ◆DV被害者は加害者から逃れてもその後の生活再建や関係性の回復・心理的な回復には幅広い支援が必要だ。その社会資源が追いついていないところが問題と感じた。途切れのない支援をどう実現していくのか。男女共同参画の相談事業にも考えられることがあるのではないかと感じた。
- ◆DVの被害者の支援だけでなく、そもそも加害者を出さないことへの何か手立てはないものか？とっていたのですが、精神的暴力を考えると気づかぬうちに自分も加害者になっているかも？と思うと「知る」ことが大切だと思います。
- ◆男性学に興味がある学生として、「加害者臨床」という言葉をすべてよかったです。なぜなら、男性は痴漢やDVなどで加害者として見られがちですが、加害者になってしまうことには何かしらの原因があるのだということに改めて思ったからです。
- ◆「だまっとれん」がキーワードのDVについての分科会でしたが、まさにそのことばを実感しました。だまっとれんと声をあげられる被害者が一人でも増えるような支援が必要だと思います。
- ◆今回は被害者支援の話題が中心でとても勉強になりました。一方でDVを生み出しにくい社会構造のためにどのようなことが必要か知りたいと考えていく必要があるとも思いました。
- ◆今回の内容を聞いて、被害者を肯定してあげて、相談にのり見放さないようにそばにいてあげることが大切なことだと気づきました。
- ◆もう少し自由な意見交換ができると良かったです。
- ◆被害者の経験談をお聞きする中で、一度受けた被害が長く自身の心や行動に影響を与えることがとても印象的でした。ケアするすべが整っていけば、と強く願います。また、プレゼンの中にあつたPTGによって、次の当事者を支えるきっかけにつながればと思いました。
- ◆座談会の時間がもう少しあっても良かった。被害体験者の参加もあつたらよかったのではないかと。
- ◆リモートによる分科会で難しい点も多かったと思いますが、ありがとうございました。「親と子は別人格」「調停自体が回復のプロセスにもなっている」「相談の取っ掛かりはどこでも良いが、その人が必要とする相談先につながるシステムづくりが大切」「そばにいたことが力になる」などの言葉が心に残っています。
- ◆現在のDV被害者の実像や支援のあり方がよくわかりました。DV加害者更生も被害者支援の一環として行っています。参加できて良かったです。
- ◆増井先生の「PTG」が印象に残りました。人権さんのSOSミニレターの取り組みもよいなと思いました。法律相談が高校生くらいからであれば利用できることを初めて知りました。4名のパネリストそれぞれの立場でお話がされたのはとても有意義でした。
- ◆時間がみじかくても、よくまとまっていました。DV支援も簡潔に進めばいいですが、人間関係は複雑だからコミュニケーションの大切さが問われると思いました。
- ◆多岐に渡ったお話やまたチャットの内容もあり大変だったと思いますが、短い時間の中で濃いお話を聞けて良かったです。人として、相手の背景を含めて理解していく大切さを感じました。
- ◆DV相談に繋がることで、やっぱりDVなんだと気づき、行動へのきっかけになるという講師の話から、DV相談の拡充やDVについての広報の充実が必要だと思いました。漫画とナレーションでDVを説明する方法は親しみやすくていいと思いました。見えにくいDV（人間関係の孤立、セックスの強要など）についても作って、活用していきたいと思いました。
- ◆皆さん、全員真剣に取り組んでいらして、頭が下がる思いですが…ちょっと内容が真面目、堅苦し過ぎた感じがします。実例を出すのは難しいとは思いますが、実例を出してその人がバージョンアップしたまでを解説を交えながらの方が私には理解しやすかったかな…でも聴いて良かったです。
- ◆大変難しい内容を取り上げていただきありがとうございました。身近なところでDV事件があり、興味があつて受講いたしました。この時のDV被害者からは相談されたことがありませんでした。そんなそばりも見せてなかったため、同じ女性として、友人としても衝撃的な事件でした。その人の背景も考えて対応ということに納得しました。子どものいじめっ子、大人のいじめっ子と同じです。加害者対策が重要だと思います。DV対策としては、DV加害者を生まないような優しい社会を望みます。子どもには責任はないと思いますが、DVの連鎖は恐ろしいと思うので、早めの対応で何とかしたいですね。
- ◆研究発表はとても興味深いものでした。DVからの回復はとても大変なことと聞いていたので、回復するチカラがあるのだということが希望につながると思いました。パネルディスカッションは少し準備不足かなと感じました。もう少し深い話を期待していました。
- ◆社会全体のひずみが弱者的存在にかかってくる。男女共同参画社会を進めなくてはと思います。日本はこれからです。

分科会D (防災) 生き抜く防災 with コロナ ～アウトドアから学ぶ新しい知恵～

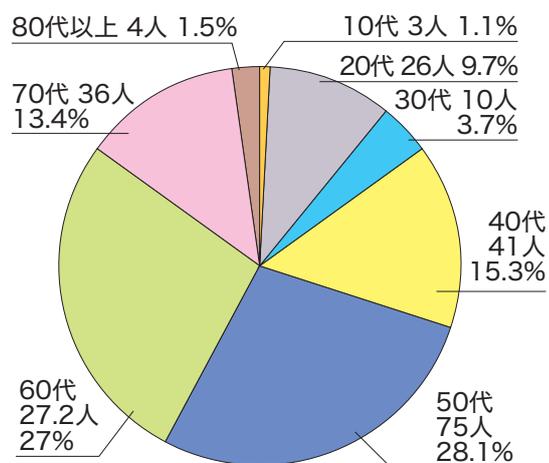
[回答数：269件]

回答者属性

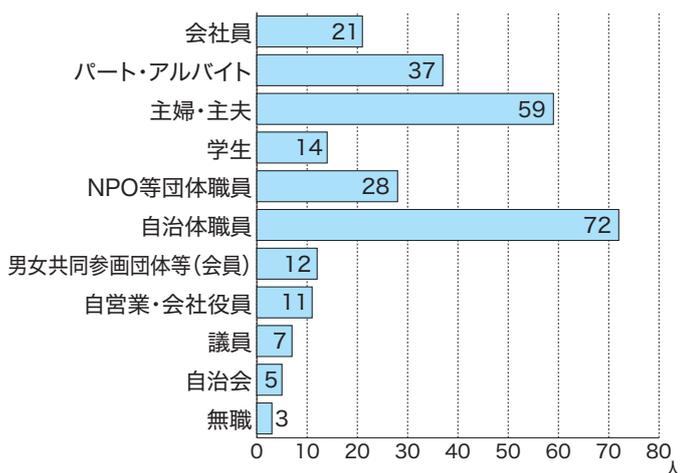
【性別】



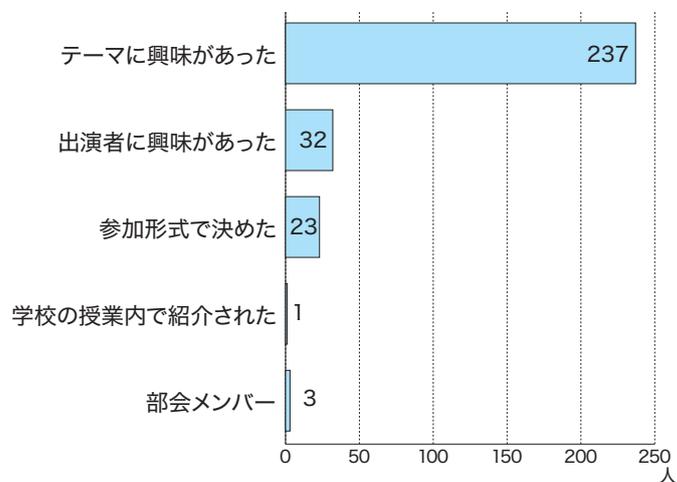
【年代】



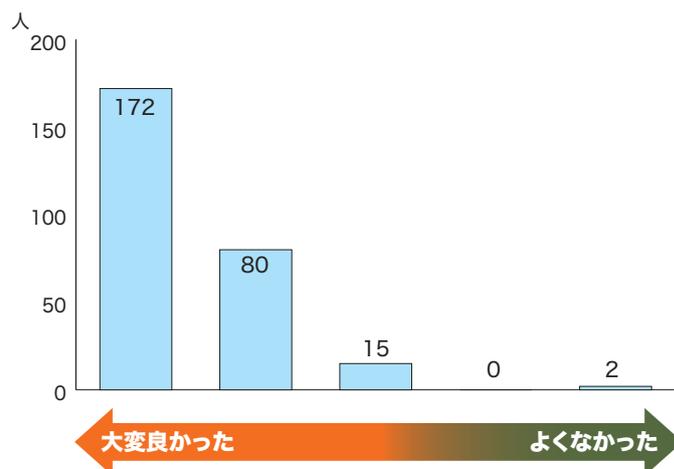
【職業・所属】



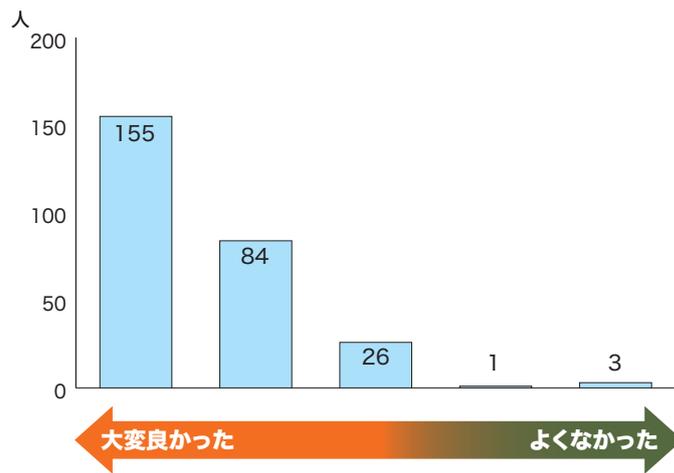
Q. この分科会を選んだ理由についてお答えください。(複数回答可)



Q. 講師はいかがでしたか。



Q. 内容はいかがでしたか。



Q. 分科会全体についてのご感想、お気づきの点がありましたらご記入ください。

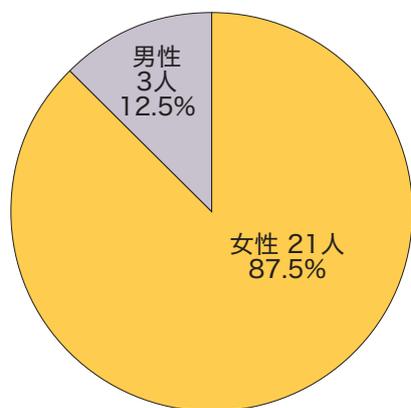
- ◆自分を守るため、またその中で女性がいかに活躍できるか、という難しい課題ではありますが、とても参考になりました。
- ◆佐野市の災害、避難所についてもっと知りたいと思った。
- ◆安藤さんの講話に男女共同参画の、視点がしっかりと盛り込まれていて大変良かったです。
- ◆今回の講演では、あつてると思われているが実は間違っている例をたくさんお話しいただき、正しい方法や知識を知ることが重要であると改めて感じました。
- ◆男性のゲストの意見も聞きたかった。
- ◆防災に男女共同参画の視点が重要であることが分かった。特に具体的な防災の方法や考え方、道具など示して下さり、分かりやすかった。
- ◆アウトドアと関連付けられ有益な内容でした。
- ◆災害時のさまざまな弱者支援について、もう少しお聞きしたかったです。時間的に難しいとは思いますが。
- ◆安藤りすさんの講義がとても良かったです。佐野市からパネリストを防災の分野で招聘したのも会議の意義を深める上で効果的だったとおもいます。
- ◆あんどろりすさんの講演の内容は非常に興味深いコンテンツばかりでしたが、少しスピードが速くついていくのが困難な部分もありました。しかし、もっと勉強したいと思える素晴らしい講演でした。あんどろりすさんの講演の間にも、いろいろなリンクを高木さんがチャットにはってくださったので、今後自分でいろいろ勉強していくことがしやすい良い運営だったと思います。オンラインならではのチャット機能を上手く使用された良い分科会でした。
- ◆安全神話にどっぷり浸かって、よその場所で起こった出来事くらいに思っていたので、すごい衝撃を受けました。女性だからできる事、男性だからできる事、皆で力をあわせて協力する事、備えの大切さが、防災の大切さが理解できました。本当に参加してよかったです。
- ◆押し付けの避難所ではなく いる人の希望が叶う避難所 考えさせられました。
- ◆阪神大震災、東日本大震災、また熊本の地震、豪雨、などそのたびに進化しているものの このコロナ禍ではどうなのかなど考えて望んだ分科会でしたが講師の方の明るさに驚いた ボランティアも気負わないでやれる範囲でやればいいのかと 再発見させられた。
- ◆日本では3密状態の避難所が通常だが、スフィア基準より低いと知ってショックを受けると同時に納得するところがあった。3密、プライバシーもない状態の避難所では避難をしたいとは思えない。避難しやすい環境作りが大事だと思った。
- ◆防災を柱にジェンダー・コロナ・アウトドアさまざまなことが学べました。ゲストの佐野市のお話や、地域の取り組みなど、年代もさまざま、興味深かったです。自分自身はどうなのだろう、なにを行動につなげることができるだろうと考える機会にもなりました。
- ◆日ごろから主体的に女性の声を上げていく事が、大変重要だと思いました。
- ◆刈谷市はまだ災害に遭遇してないせいか、地域の方たちが防災訓練に参加する人が少ない。これからはより多くの方に参加できるよう頑張っていきたいと思います。
- ◆参加者からの質問に答える時間があれば、もっと良かったと思う。
- ◆防災と男女共同参画とアウトドア 共通点は日頃から防災への意識と取り組めることへの参加が大切と感じました。
- ◆男女共同参画の視点から防災を考える重要性を学びました。
- ◆アウトドアが注目されているこの時期に、楽しみながら学ぶということ、多くの人たちと共有していきたいです。
- ◆とても濃い内容の分科会で参加して良かったです。防災の学習は、何回も何回もいろんな人の経験などを学ぶことで身につくと思いました。
- ◆あんどろりすさんのお話は初めてお聞きしました。アウトドアが防災とつながっていること、実例がたくさん挙げられてよくわかりました。アウトドアはちょっと苦手ですが、見方が変わりました。ゲストのみなさんのお話もそれぞれにとっても関心が持てました。高木さんの進行、とてもよかったです。私も自分のできることを考えて、ワンアクションしたいと思いました。男女共同参画も防災意識もすぐには変わらないとは思いますが、大勢の方が地道に努力されていることはとても励みになります。
- ◆これまでも、災害と人権の講演等を聞いてきましたが、実際に私自身が災害に直面していないため、普段、人権や男女共同参画目線での対応を呼びかけたり取組を促すことを進める位置にいますが、今日のお話を聞き、やはり自分事になっていなかったなと反省しました。支援とは？男性・女性・大人・子ども・高齢者そのカテゴリーだけでは全く判断できないこと、義務ではなく権利であること、非難をするときに自分で判断できる人の育成、などなど本当に参考になり自分自身を見直すきっかけになりました。
- ◆アウトドアからの防災のガイドは納得できるものでした。災害がいつ身近に起きるかは本当に他人事でない日々です。配布チラシや資料は今に沿うものが大切であること。自分の知識も新しく詰め替えができたことに感謝します。
- ◆若い女性の防災意識と行動を学ばせて頂き、地元同世代への波及の必要性を強く感じています。
- ◆とても内容の濃い、示唆に富んだお話がたくさん聴けました。男もがんばらなければ。。
- ◆防災と男女共同参画の視点がよくまとめられていてとても良かったです。
- ◆実践的な内容で、あんどろりすさんの「低体温症にならないように、濡れないようにすることが大切」というお話など、初めて得る知識が多くありました。
- ◆コロナ禍で大きな災害が起きたらと、不安でいっぱいでしたがそのおかげで否応なしに避難所の3密を回避する対策が強化されたとすれば怪我の光明なのかもしれません。その上でジェンダーの視点が盛り込まれた避難所運営をするために学びを生かしたいと思います。佐野市から当事者の声を届けてくださった永島さん、どうもありがとうございました。また、りすさんのお話からはアウトドアで自然に楽しみながら楽しく命を守るすべを身に着けておくことはとても大切だとわかりました。
- ◆男女共同参画の視点がしっかりと盛り込まれ、かつその重要性がよく伝わったのではないかと思います。

分科会E（男性にとっての男女共同参画） みんなで語ろう リモート座談会

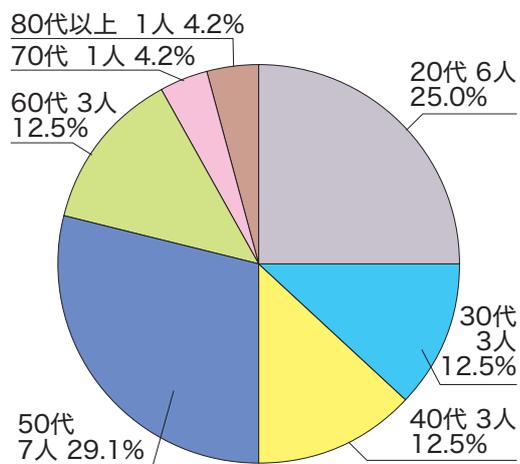
[回答数：24件]

回答者属性

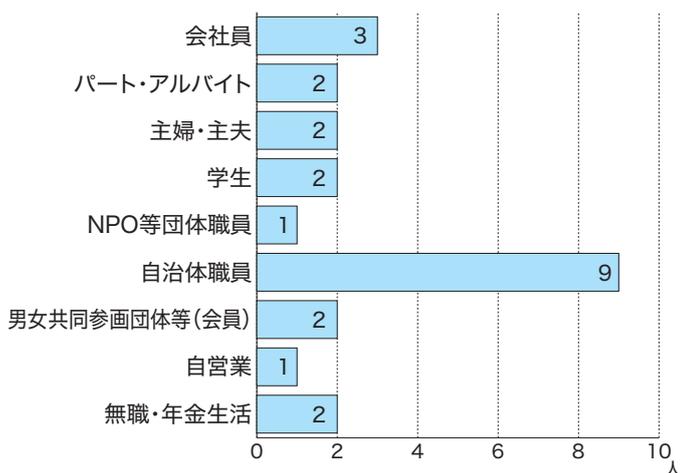
【性別】



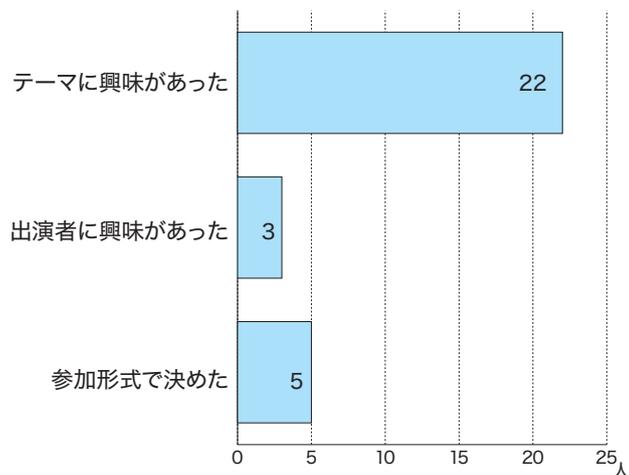
【年代】



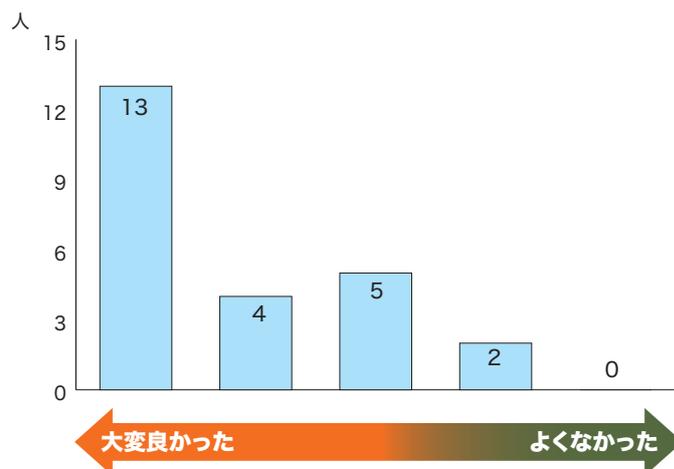
【職業・所属】



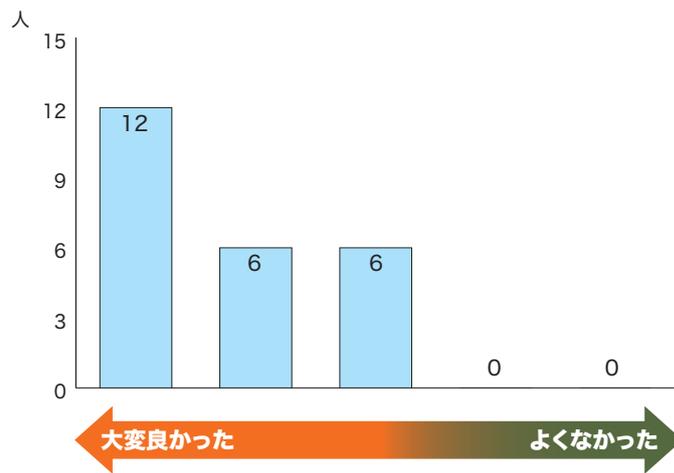
Q. この分科会を選んだ理由についてお答えください。（複数回答可）



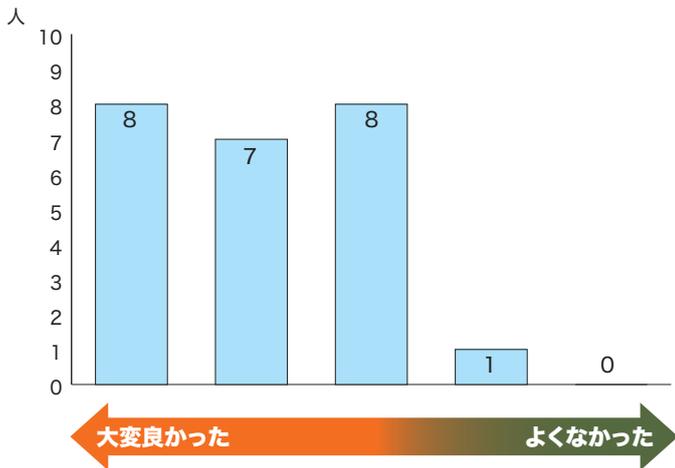
Q. 講師はいかがでしたか。



Q. 内容はいかがでしたか。



Q. グループワークはいかがでしたか。



Q. 分科会全体についてのご感想、お気づきの点がありましたらご記入ください。

- ◆川島先生の話は、先生ご自身の実体験からおっしゃっていたことが多かったため説得力があり、面白かったです！しいて言えば、ビデオは30分ではなく、20分程が適当な長さだと感じました。
- ◆男性にとっての男女共同参画というのに興味がありましたが、「男性ももっと家事や育児に！」という既視感満載かつ結構当たり前になりつつあるテーマで、ちょっと肩透かしをくらった感じがしました。正直、ミレニアル世代以下にはすでに根付いた価値観であり、今更このような内容を大きな会議で発表することにちょっと驚くと同時に、それくらい年配の方の価値観は凝り固まっていると知りました。私のグループは地方自治体から仕事で参加されている方が多く、日本中でこれを問題としていて、公的なところが取り組みをしようと参加されているのを知って、希望になりました。あとは、冒頭のアンケート結果が大変参考になり面白かったです。
- ◆リモート座談会でわたしのグループは全員ビデオがオフでお顔を合わせることができませんでした。ビデオにしてみんなで顔を見ながらできたらよかったです。
- ◆初めてオンラインでのグループワークに参加しました。慣れていないためか、とても疲れました。どのタイミングで発言してよいのか、どう質問してよいのか、慣れてくるともっとスムーズにできるのかもしれませんが。
- ◆核家族、共働きが普通の時代にジェンダーにとらわれた性別役割分担ではなく、職場においてもその考えがもっと浸透すればよいと思った。いくら制度が整っても、結局は人。ジェンダーに捉われた人が多い環境では、育児や介護で仕事を休むのは女であるべきだとされ、働き手が少ない職場の中で女が仕事と家庭を両立することは困難である。男性の育休も同じ。いくら制度が整っても、そんな環境であり働き手も少ない中で、男が「育児のために休みます」と声を上げることが出来る人なんて、社会にどれくらいいるのか疑問である。

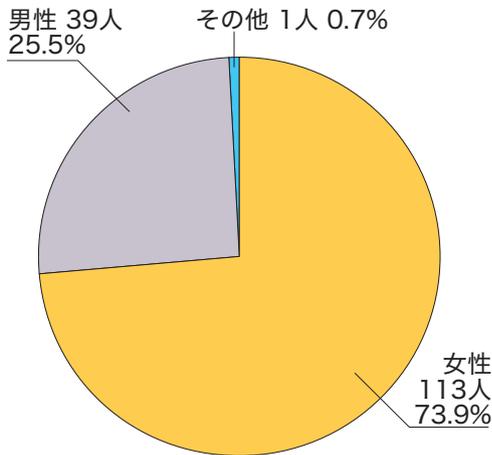
- ◆皆様のご意見を伺い、新しい価値観に触られました。
- ◆オンラインでのグループワークよかったです。
- ◆扱うテーマが古い。女性は家庭男性は仕事という固定役割をどう思うか、という質問を小学生にすることそのものが、そういう固定役割を植え付けかねない。もっと様々な暮らし型のロールモデルを提示するなどの方が良いと思う。
- ◆グループワークのテーマ1つずつについて話をする時間が少なかった。
- ◆雑音が入ったりするハブニングはありましたが、オンラインでの意見交換会、有意義でした。
- ◆男性講師のいつまでもゲタをはいた上から目線の発言にがっかりです。ですが、グループトークではファシリテーターの方の受容力、包容力がよく、楽しいトークになりました。まだまだジェンダー平等社会になるのはこれからですね。がんばりましょう。
- ◆リモートなので、会話への参加タイミングが難しかったです。
- ◆家庭は夫婦で築いていくのが理想。理想はあくまでも理想です。現実には、経済的にはやはり男性に頑張ってもらわないと・・・社会が企業がもっと女性の能力を評価し賃金を引き上げてくれないと・・・知り合いの方でイクメンの方もいますがその方々を見ると公務員の方が多いと感じる。最近 保育園へ子供を送って行くお父さんは非常に多いです。少しずつ子育てにも参加しているお父さんが多いのは共感です。(夫婦で働かないと経済的に大変なのかも?)

●分科会F【ライフ・ワーク・バランス】一人一人が輝く未来～モノづくりの愛知から～ 参加者アンケート

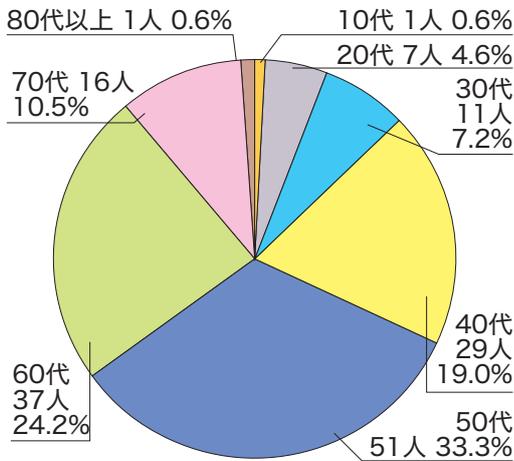
[回答数：153件]

回答者属性

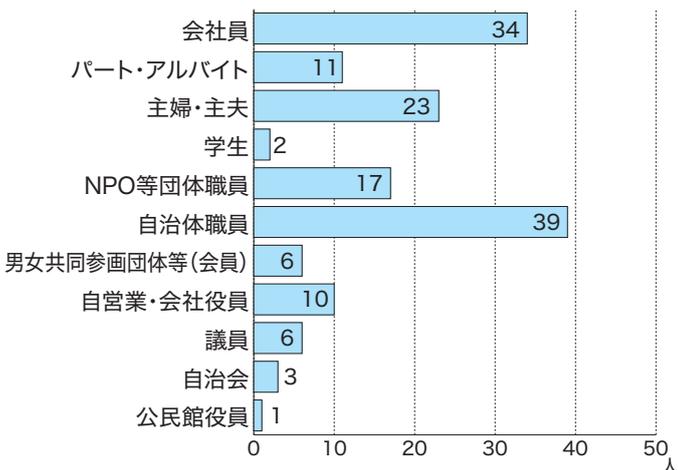
【性別】



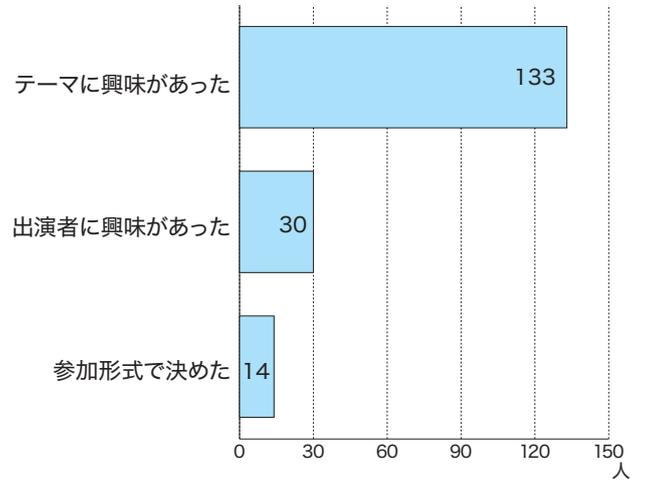
【年代】



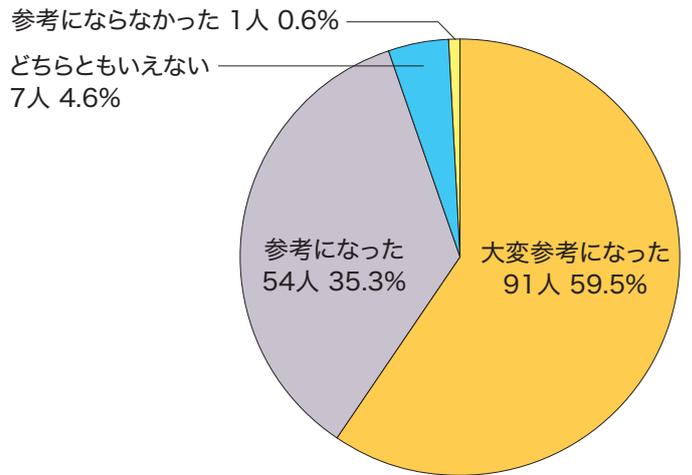
【職業・所属】



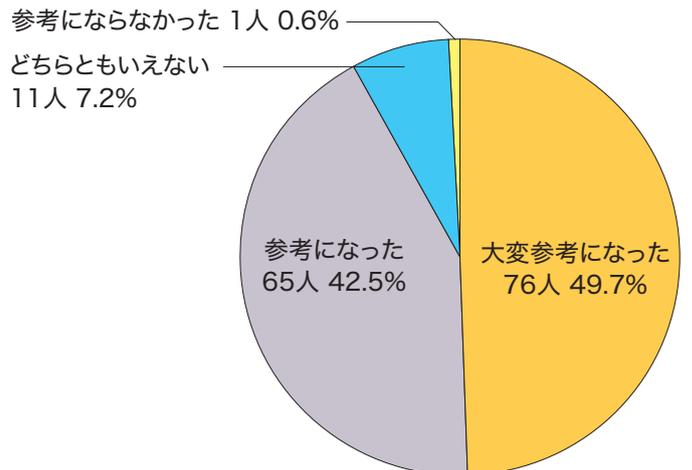
Q. この分科会を選んだ理由についてお答えください。(複数回答可)



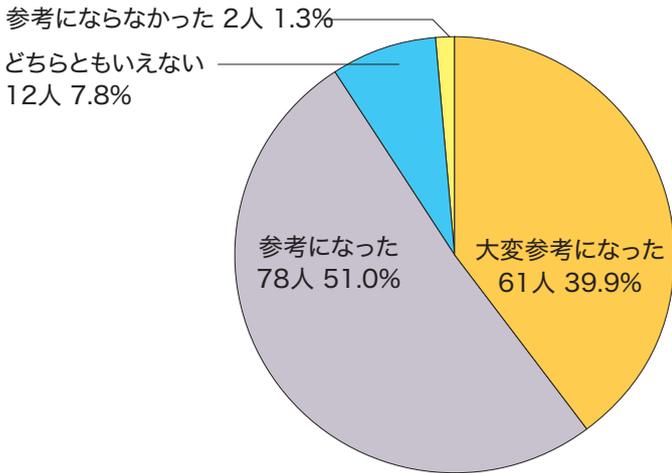
Q. 講演は参考になりましたか。



Q. 企業事例は参考になりましたか。



Q. パネルディスカッションは参考になりましたか。



Q. 分科会全体についてのご感想、お気づきの点がありましたらご記入ください。

- ◆とても上手に運営いただき、飽きることなく見ることができました。ありがとうございました。投票のシステム、とてもいいですね。スマホで見ていたので、コメントがくるとスライドの下の部分が見えなくなることだけ気になりました。
- ◆参加者の職業に偏りが大きいことは、課題と感じた。一方で、行政職員の参加が多いことで、行政改革につながる為の意識改革に繋がることを期待します。
- ◆身近な他社さんの事例も参考になりましたし、サイボウズのフィロソフィを共有頂いて、自分の中でふわっとしていた「みんなもっとわがままにやりたいこと主張すればいいのに」という思いがアリなんだなと気づけて嬉しかったです。我慢・忍耐が美德とされてきた日本で、みんなでわがままに生きていける風土を作りたいです！
- ◆ワークはライフの一部、働き甲斐改革、公正と公平は違うなど、キーワードと共に多くの学びをいただきました。「変えられないのは自分自身の問題」、「自身のありたい姿」目指します。
- ◆今年ならではの内容で、あらためてワーク・ライフ・バランスを考える機会になりました。テレワーク移住など地方も頑張っています。そういう意味ではチャンスですが、まさに、都会にとられてしまう、と言う発想は目から鱗でした！地方も足元をよくみて、我々自治体も考えを改めないとなりませんね。
- ◆働き方改革の一環として、年に1~2回本社よりアンケートがあります。働いているうえで、何がつらいと思うのか、どうしたらいいと思うのか、などの質問がありますが、つらいことは入力できてどうして欲しいというアイデアが今まで浮かばなかったのです。今回で登壇いただいた方の数々の事例を聞き、私はそうして欲しかったんだ！こうしたらみんながもっと活躍できて、離職率がさがるのではないかと、次回のアンケートにはたくさんの事をアイデアとして本社に伝える事ができそうです。
- ◆各企業の働き方改革の可視化された図が参考になりました。コミュニケーションや感動を重視、自主自律、モチベーションの向上等の取り組み事例も参考になりました。
- ◆サイボウズの企業理念は前々からメディアで紹介されていたので、実際に役員の方からそのお話が聞けてとてもよかった。職場の規模は全く異なるが、参考になる部分が多かった。また仕事への向き合い方などにも感銘を受けた。

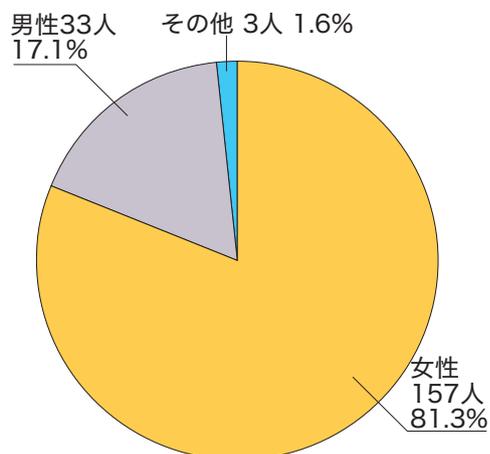
- ◆今回はテレワークができる職種でしたが、医療・福祉職の様にはテレワークができない職場ではどのようにすればいいのかお伺いしたかったです。
- ◆コロナ禍以降報道等で在宅勤務推奨、通勤して出社するのを悪という誤解を招きやすくなっており、話にも出ていたリモートワークができないと人材を集められないということになれば、製造業は人材難→在籍社員の負担増→ライフを削るという悪循環に陥るのではないかと製造現場で働く魅力をどのように出すべきなのかが知りたい。
- ◆有給休暇・働く人の安心安全と生産性は反比例するような考え方を長くしてきた日本社会で、基本的なことでは比例することがあたりまえに感じられる社会に向けて肯定的なことばで経営者と話していくことが、やはり大切であると確信できました。
- ◆中根講師のサイボウズの立ち上げ期発展期事例は大い興味ひかれるものでした。チーム戦で何かを行うためには情報共有⇒見える化がポイントというお話は地域コミュニティづくりにも通じ、今後役立てたいと思います。
- ◆コロナ禍で今まで同じ環境で生活や学習をすることが難しくなり、大学の講義がオンラインになるなど様々な変化がありました。今回は感染症の流行になって状況が変わりましたが、お話いただいたように災害時なども同じような対策が必要になると考えます。在宅で行えるオンラインを使用した業務や学習の活用は、ライフワークバランスにおいて重要であるだけでなく、状況変化に対応するための手段でもあるのだと感じました。
- ◆非正規雇用の立場の人が、個人の働き方を企業に求めることは難しいと感じます。それでも、個人の意識を変えていくことが、別の立場の人により影響を与えようと思うので、今回のお話で参考にさせて頂きたい点がたくさんありました。
- ◆大手の企業のみなさんの職場で考えている方向性が分かりました。コロナ禍でも企業活動が停滞しないように、努力されている様子も分かりました。テレワークで時間ができたことで個人がしたいコトが発揮される、そしてそのコトが企業活動にも生きるようにする・・・未来社会につながるやりがいのあるお仕事と思いました。できれば正規も非正規も関係なくそのようなことができる社会を目指したいものです。現実にはマズローの欲求段階説（6段階までであるとの説あり）で「生命の危機」にある方が増えています。企業活動ではテレワークで地域を超えて活動ができるようになりますが、一方、生活の格差が広がっていることも含めて「地域」を良くすることが企業活動のミッションの一つだということも押さえておきたいことと思いました。
- ◆若い人の、考えが、よくわかった。シニアから、みると、我慢が、足りないのでは、と思うけど、このエゴが、イノベーションに、繋がるんですね！
- ◆コロナ禍において、日本の働き方をアップデートする必要性について学ぶことが出来ました。また、事例発表では既に働き方改革に積極的に取り組み、成果をあげている企業の方が登壇者となっており、パネラーの選定・内容とも素晴らしかったです。
- ◆各企業の取り組みや意見交換が充実しており、女性の方が活躍されている姿を身近に感じることができて、いい分科会だったと思います。
- ◆皆さんの言葉に意味があり、心に響きました。「自分のなりたい姿を描き自身が変化すること」「個人の働き方を変えると会社が変わる」「ものづくりから事づくりに変える」「産業中心から多様な人が中心に」など、なるほどな、とうなづいて聞く事が多かった。

■分科会G（性の多様性）生と性の多様性をみとめあうために～教育・企業・行政の立場から～

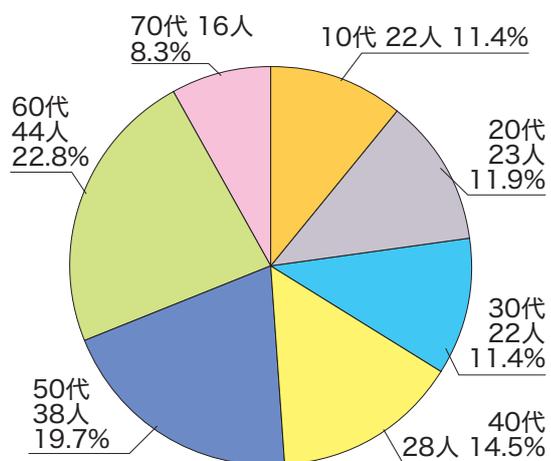
[回答数：193件]

回答者属性

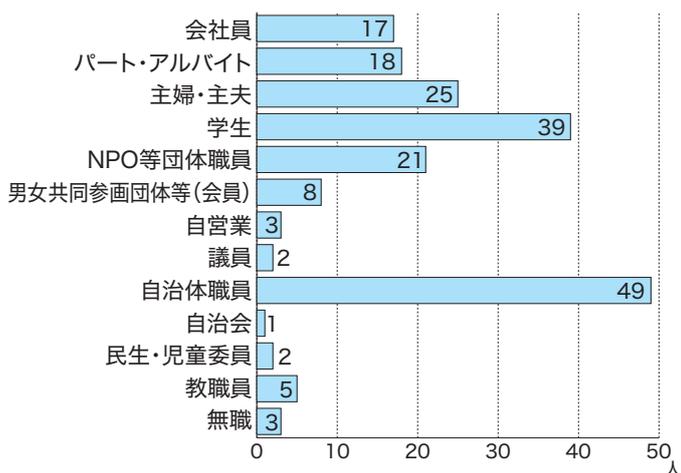
【性別】



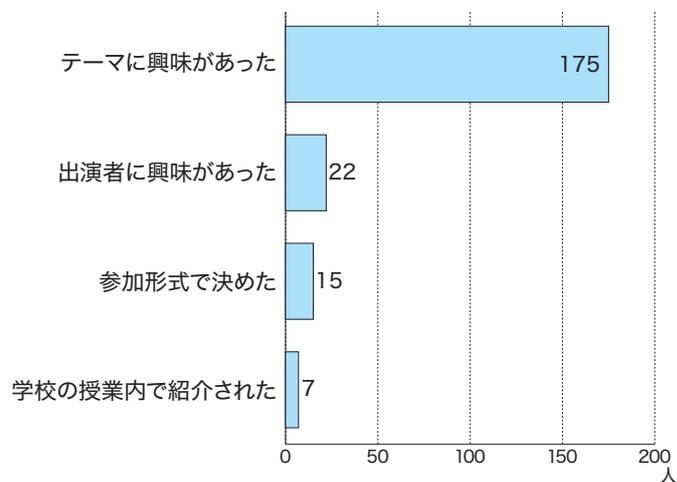
【年代】



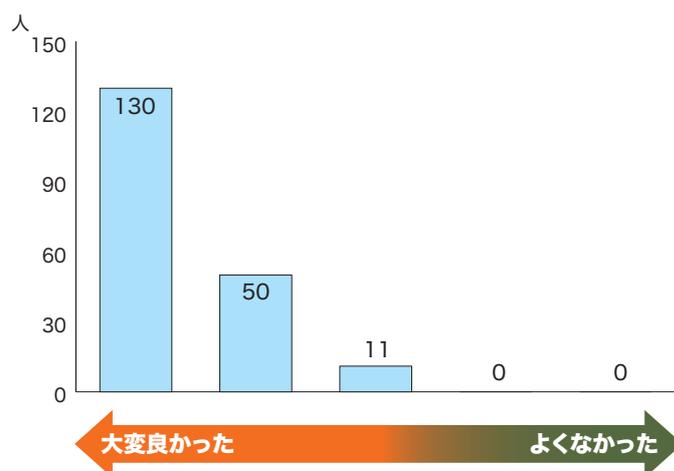
【職業・所属】



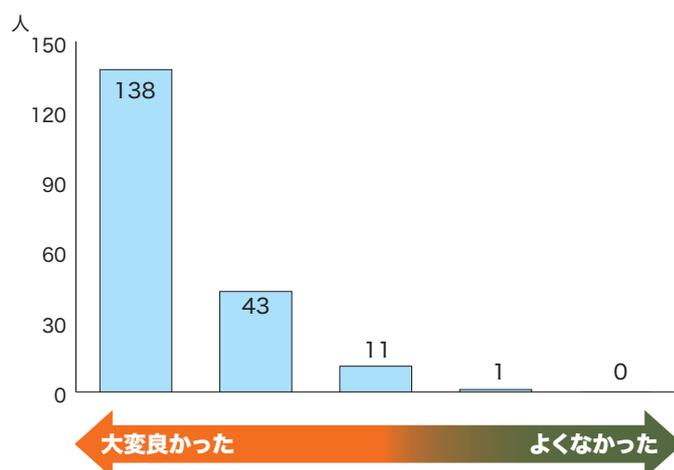
Q. この分科会を選んだ理由についてお答えください。（複数回答可）



Q. 講師はいかがでしたか。



Q. 内容はいかがでしたか。



Q. 分科会全体についてのご感想、お気づきの点がありましたらご記入ください。

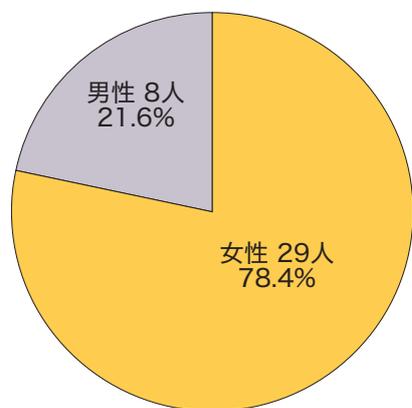
- ◆現場のお話しはとてもリアルで、胸をぐつつかまれるような感覚もありました。私は海外でしばらく過ごしていたときがあり、その国では同性が手をつないで外を歩くこと、男性か女性かわからないこと、また子供の親が同性同士なことは当たり前でした。日本はカムアウトさえも難しく、こうして公の場で実体験を語ることも憚れるからか、生の声があまり普通に暮らしている人に届きません。もっと一般の方のもとに、浦田さんのような実体験ベースのお話しが届くようになるとういなと思います。
- ◆自分でも意識しないうちに差別的な言い方をしていたかもしれないと気づききっかけになりました。ありがとうございました。
- ◆全てに人に安心できる居場所をと思って日々教育にあたられているということで、上野さんの基調講演と通じるものを感じました。こんな先生に教えてもらえたらどんなにいいだろう、と思いました。
- ◆基礎知識を改めておさらいすることができ、また、教育、企業、行政と様々な角度から、多様性について学ぶことができとてもよかったです。
- ◆特別な人に対する特別な対応ではなく、だれにとっても生きやすい学校、企業、まちづくりであるという意識が大切であることを、あらためて感じることができました。
- ◆只今子育て世代です。今日の話が我が子の教育に生かしたいと思います。性はいろいろなこと。LGBTを探しに行くのではなく、当たり前にいるという価値観でいること。
- ◆toiletの問題はとても切実だと思った。LGBTの人にさりげない手助けが出来る社会になってほしい。また、性別でアンケートをくくる危険性を知ることが出来た。不要なアンケートなどには答えずNOと言える社会も我々が作っていくべきだろう。
- ◆大阪では制服もズボンスカートが選べるし、入試の願書にも男女別の記載はありません。いまだに男女混合名簿ではない地域があると聞いて、びっくりです。
- ◆LGBTQのパートナーシップ宣誓制度ではまだ法的に配慮されていないのが残念です。
- ◆浦田先生の「知ることでできることが見える」という言葉に共感しました。市の施策の啓発が仕事ですが、「まずは知っていただきたい」と思っても当事者でないと興味をもっていただけないことが多く、自分が伝える方法が間違っていたことに浦田先生の言葉で気づかせていただけました。「自分にできることが見えるなら知ってみよう」と考える市民の方はたくさんいると思いますので、伝え方を工夫したい。
- ◆日々の生活の中で、差別的になっていないかと意識するだけで、見え方は違ってくるのだなと思いました。
- ◆教師・企業・行政のそれぞれの立場からのお話が聞けて、大変勉強になりました。
- ◆自分と違う人がいると言うことを認識するだけでなく、その人たちが生きやすくなることを考えるために一歩踏み出さなければ世の中は変わらないと感じました。
- ◆40年近く前に教員として、理解不足の対応をしてしまったことを思い出した。とても参考になりました。
- ◆たくさんの方が学べました。浦田先生の話聞いて中学生の対応、先生のご苦労に感動して涙が出ました。
- ◆浦田さんの実体験の話が、いろいろ興味深く勉強になりました。
- ◆当事者や会社の取り組み、市の取り組みの紹介がされてよかった。社会全体に浸透すればよいと思います。
- ◆誰にでも理解しやすい内容であったと思います。このような知識や理解を広める機会がもっと全国的に展開されると世間は変わると思います。
- ◆専門家、当事者、企業、行政とバランスの良い構成で、この問題に関する現状と課題がきれいに浮かび上がった良い分科会だったと思います。浦田さんのような教員が増えることが、特に年少者の困難な状況を変えていくためには必要なことではないか、と感じました。
- ◆当事者の方や、パートナーシップを進めている自治体担当の方の具体的な取組をお聞きできて、とても良かったです。
- ◆知ることで 出来るが見えてくる が 心に響きました。
- ◆静かな積極性を多様な場面で表現していけたらと前向きになれました。
- ◆まずは、私たち自身がLGBTに関する理解を深め、学校現場でできることを検討し、実行していくことが大切だと感じました。ありがとうございました。
- ◆とても良い内容でした。行政・企業・教育に焦点をあて、研修により知識を得て、できることから始めていく。当事者への偏見をやめ、寄り添う。多様性が重要視される社会が来ていることを願うばかりです。私の意識が変わる内容でした。
- ◆まず小さな歯車を動かす力が原動力となって次々に大きな歯車が動き出すのだということが、腑に落ちました。一人ひとりの正しい理解が始まりですね。
- ◆私自身、LGBTQについて知らない事が多く、正しい知識や理解が必要であると思いました。多くの人に正しい知識や理解をしてもらうためには、LGBTQにしても昨日の性教育にしても、学校教育の一環として生徒に教えていく必要があるのではないかと思います。
- ◆性の多様性を理解し受け入れる素地となる分科会であったと思います 企業の方針としての取り組みが興味深かったです また、教育、行政の浸透を図る努力を肩に力を入れず実践されていることに敬服いたしました。
- ◆分科会を通して法整備がとても遅れていることがわかりました。個々の組織の環境整備や制度化を後押しするための法整備が急がれます。特にパネリストの浦田さんの当事者ならではの苦悩や経験談はとても興味深かったです。また視点や問題点指摘も素晴らしかったです。浦田さんのような先生に出会ったことでこどもたちが偏見を持たずに大人になってくれると信じています。性的マイノリティとしての経験をプラスに活かしてこれからも多くの場所で発信して行ってほしいです。最後に、すべての人にとっての「生きやすさ」を追求していくことが社会の発展につながるということを改めて感じました。
- ◆LGBTQを身近な存在、SOGIは誰にでも関係あることと考え、労働組合としてできること、企業としてできることを考えて行きたいと思います。
- ◆今回の日本女性会議の中で、私は一番良いと思いました。風間先生のお話しで知識をつけ、パネリストの方のお話しで実体験がわかるとても良い講演でした。中でも、中学校教員として働く浦田先生の体験がとても面白かったです。とても良い講演でした。

■分科会H（女性が輝けば地域も輝く）わたしが元気に活躍する地域づくり

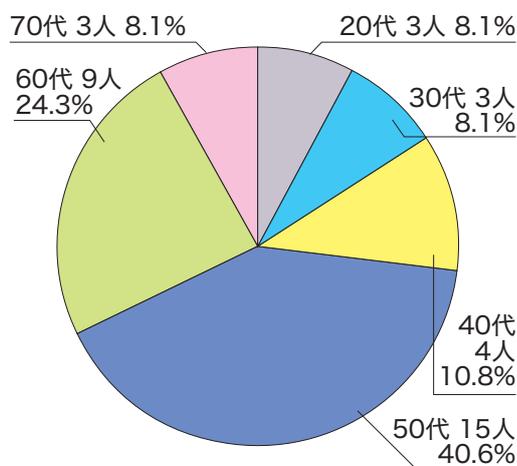
[回答数：37件]

回答者属性

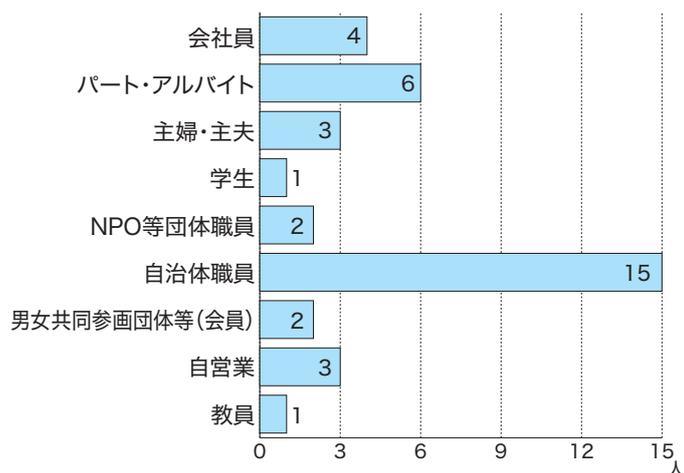
【性別】



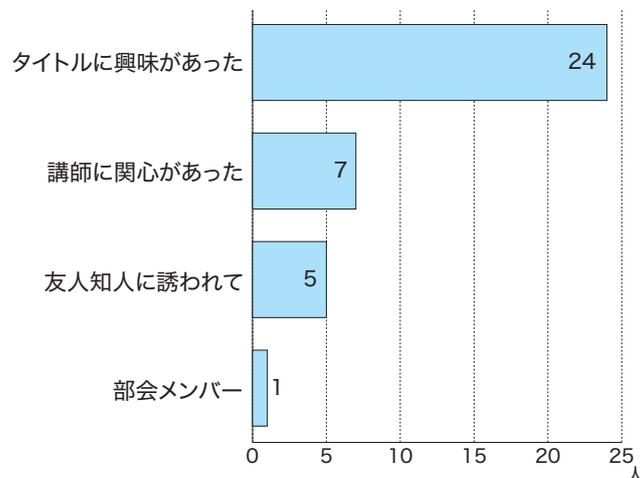
【年代】



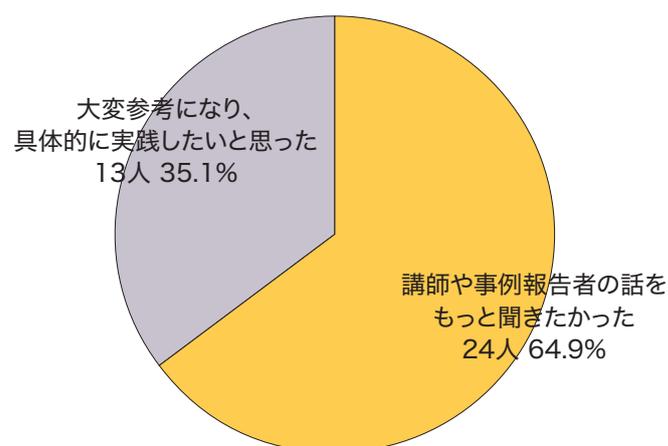
【職業・所属】



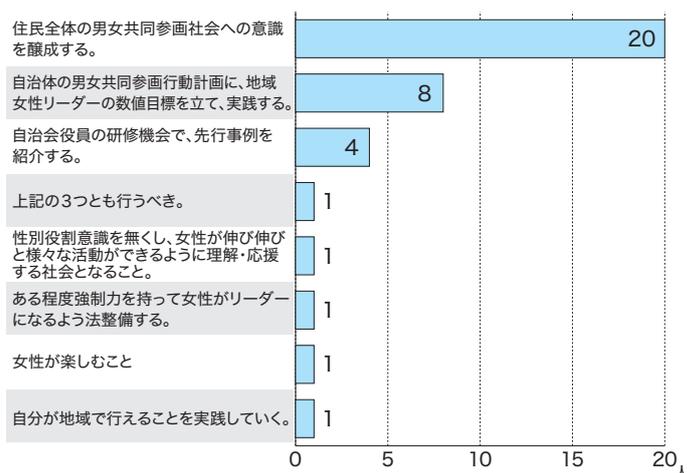
Q. この分科会に参加した動機は何ですか。



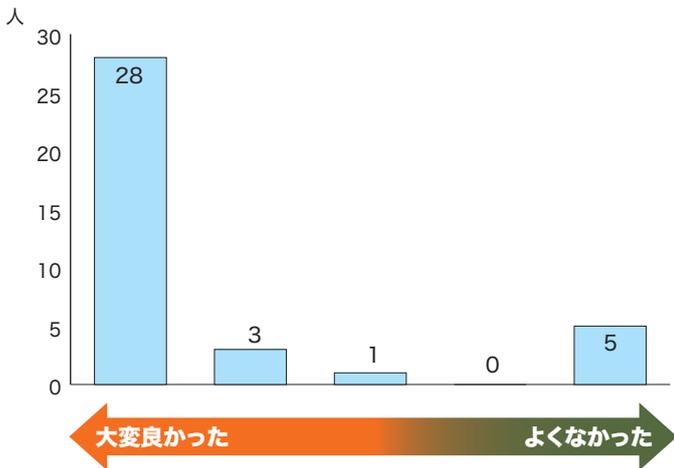
Q. 参加した感想はどうでしたか。



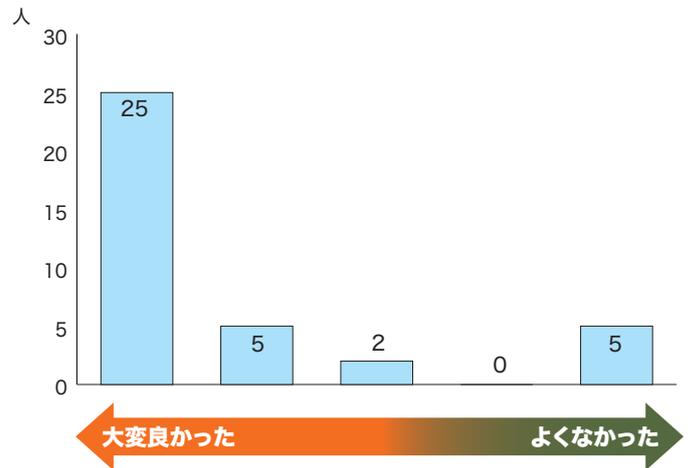
Q. 持続可能な地域づくりに必要な、女性リーダーが活躍するために行うべきことは何だと思いますか。



Q. 講師はいかがでしたか。



Q. 内容はいかがでしたか。



Q. 分科会全体についてのご感想、お気づきの点がありましたらご記入ください。

- ◆「まち」が人と人との関係を豊かにすることであり、自らが創り出していくものであることがよくわかりました。一住民ですが、自分ができることを一つ一つ積み重ねていきたいと思えます。アイデアが浮かびました。
- ◆川北先生の統計を用いてのお話は、日本の地域の現状や、今後なるであろう状況を、よりリアルに理解することができました。また、國見さん、神谷さんの活動のお話は大変参考になりました。
- ◆コロナ禍であっても、オンラインで開催ができてよかったです。ブレイクアウトセッションでは「顔を見て話すことで、交流もできた。来年も会いましょう。」との声が聞かれました。来年以降はオンラインとのハイブリットで開催をしてほしいと思いました。
- ◆地域運営のヒントがいくつもあり、参考になりました。
- ◆講師の川北さんのお話は、具体的な数値を示しての現状・将来への分析が興味深く、もっと聞きたかった。神谷さんの実践例は、積極的な行動が素晴らしく参考にしたいと思ったが、自分の地域では、地域性や住民の関心の程度などを考えるとなかなか難しいと感じた。
- ◆「ババブロック」「粘土層」という素敵な(?) キーワードをいただきました。今後の活動に、使わせていただきます。
- ◆家に居ながらにして、遠く離れた方とオンラインで意見を交わせる事ができました。
- ◆話し合いに参加することができるにより身のあるものになると感じました。
- ◆グループディスカッションで自分の思いを発信でき、大満足でした！もう少し時間が長ければよかったです！
- ◆聞き足りない、話し足りない1時間半でした。
- ◆もっともっとお話が聞きたかったです。
- ◆川北先生のお話は、これからの地域の在り方を考える上で、とても参考になりました。

- ◆グループセッションに参加されている方が終始ミュートでビデオオフだったのはあまりいい気持がしなかった。せめてチャットでもよいのでなにかリアクションしてもらいたかったです。
- ◆もっと川北先生のお話を聞きたかった。全体の時間が短かったのが残念です。
- ◆講師の先生のお話が実例やデータをあげてくれて大変わかりやすく、たくさんの気づきもありました。時間が少ないのが残念で、質問できたらよかったです。
- ◆先生の話をもう少し聞いていたいぐらい興味深い内容でした。安城市の事例も大変参考になりました。
- ◆リモートで、初めての方と話し出来て良かったです。初めは少し緊張もあったけど、話し始めたらみんな同じ事で悩んでる事がわかりました。質問も出来て良かったです。またこの様な会議があったら参加したいです。
- ◆分科会の人数が少なく、話題に厚みがでなかった。
- ◆さすが川北先生ですね。お二人のお話の価値がぐっと上がったように思います。また、グループワークに参加された方々からも良いお話しが伺えよかったです。
- ◆オンライン開催の可能性を感じた。
- ◆時間が短かった。
- ◆自身がZOOM参加に慣れていなくて画面下の云々と突然言われても対応できなかったのが残念でした。分科会Hは素晴らしかったと思います。関係の皆様のご苦勞に本当に感謝申し上げます。今回のパネリストのお二人の報告は自身でも少し似た経験をしていましたので、古い慣習に負け先に進まず中途半端で終わってしまったことが恥ずかしく思いました。これから新しく住みはじめた地域で新しいつながり、以前からのつながりも大切にしながら地域に何か貢献していけたらと思います。

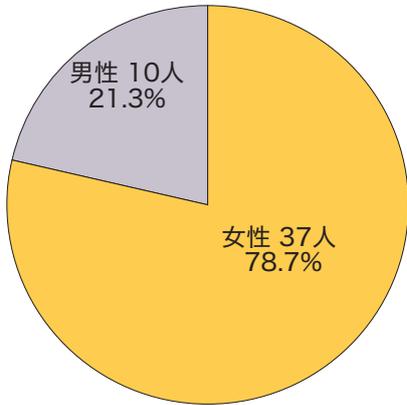
■分科会Ⅰ(子ども・子育て)

子どもたちの未来をプロデュースする ～今やるべきこと、今できることをみんなで考えよう～

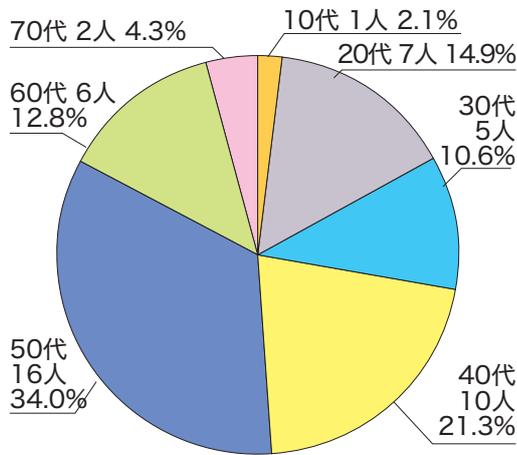
[回答数：47件]

回答者属性

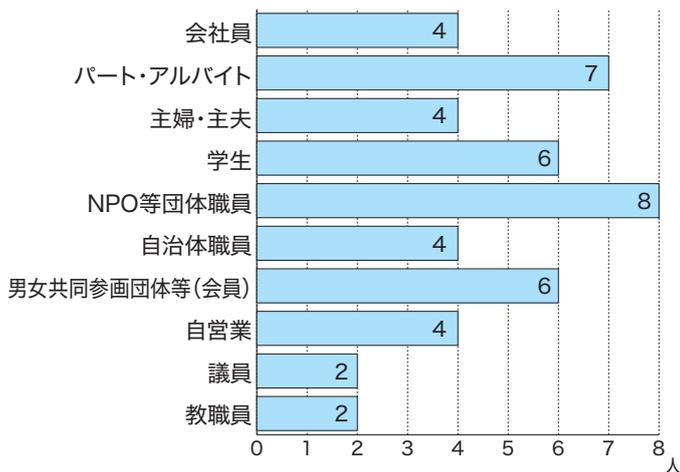
【性別】



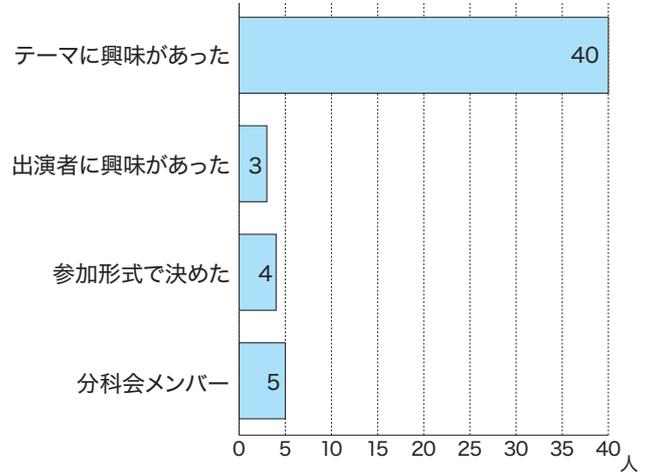
【年代】



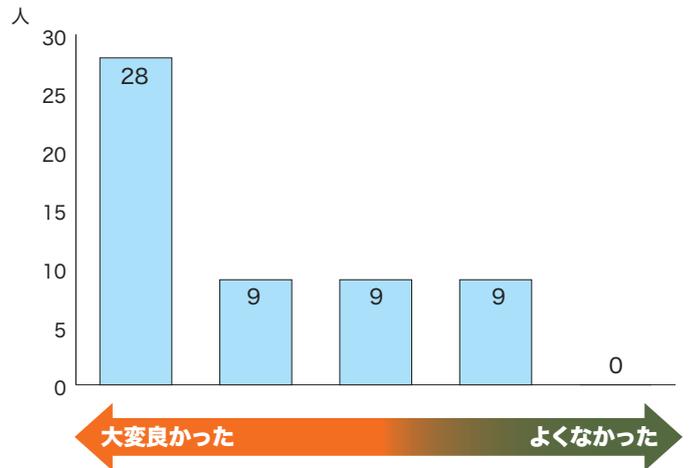
【職業・所属】



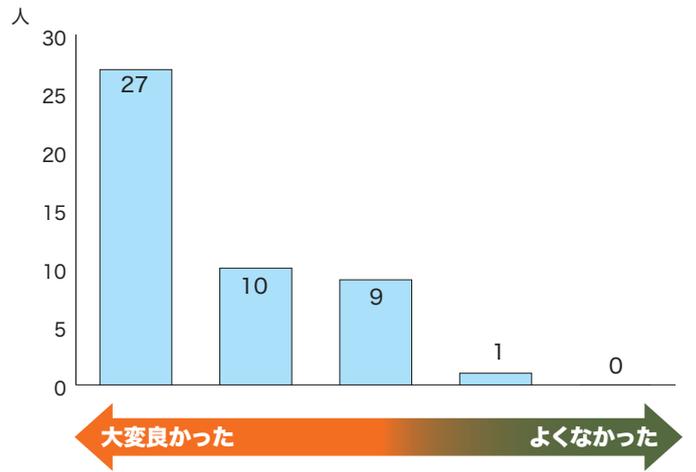
Q. この分科会を選んだ理由についてお答えください。(複数回答可)



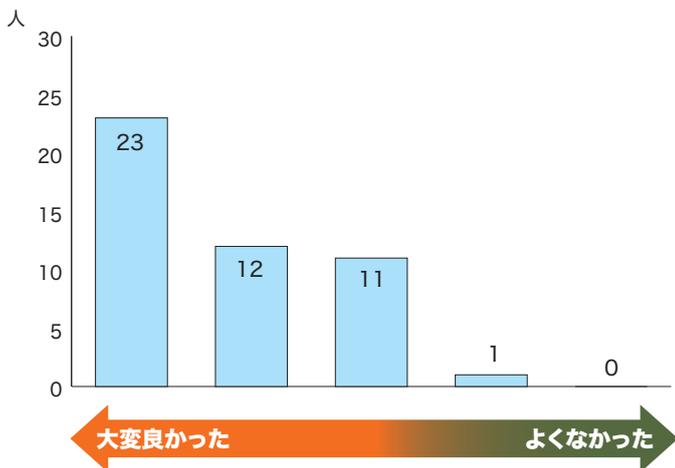
Q. コーディネーターはいかがでしたか。



Q. 内容はいかがでしたか。



Q. グループワークはいかがでしたか。



Q. 分科会全体についてのご感想、お気づきの点がありましたらご記入ください。

- ◆会って話す 語るの大切さを感じます。
- ◆参加化型だったので、自分で考え、いろいろな方の意見を聞け、あつという間でした。
- ◆先生のお話やいろいろな立場の視点でのお話が聞けたことは参考になりました。グループワークのテーマ範囲が広く、話にくい参加者の方がいたかもしれませんがオンラインでも議論できよかったです。
- ◆様々な職種や学生の方、子育て中の母親とディスカッションし、情報交換ができた。コロナ禍で子どもが育つ環境に様々な影響があるが、新しい生活様式を取り入れて安全にかつ、交流がしやすいシステム作りや情報発信の手段を具体的に検討していく必要があることが示唆されました。
- ◆テーマは結論は出しづらいですが地域の子どもと関わりながら、アンテナを立て支援出来る事があれば無理せず支援の方法を共に仲間と考えたいと思いました。
- ◆コロナ禍の中で、色々な影響は受けても、そこからどうしていくか、自分たちが出来ることは何かということなど、あまり考えたことがなかったので皆さんとディスカッションをして話し合えたことが新鮮で嬉しかったです。
- ◆一つの会場で対面していたら強制的に参加しなければならなかったかもしれませんが、オンラインだったからグループワークへの参加、不参加を選ぶことができ、興味があるテーマとしてこの分科会を選ぶことができた方もいたのではないかと思います。
- ◆全員が早口で聞き取りが難しかった 移動中で脆弱なネット環境だったため仕方がないことだが。
- ◆初めての形式で戸惑いや緊張もしたが、後半には慣れてきて、素直な意見を出すことができました。子供のコミュニケーション、明るい将来に闇がかかったような事態になり、何かできることはないか、という思いです。コロナ禍だからこそ、新しく前向きになるような取り組みをどんどん発案できたらいいな、思います。個人的には、少人数制授業の推進、外でできる授業を増やす、野外授業の推進、外で遊ぶ機会を増やすことができたらいいな、と感じました。
- ◆ブレイクアウトルームで、グループワークを進行して下さった宮田さんの進行の仕方は、スムーズであったと同時に元気な雰囲気を作ってくださったため、意味のあるグループワークになったと感じました。
- ◆大変 興味深く参加出来ました。

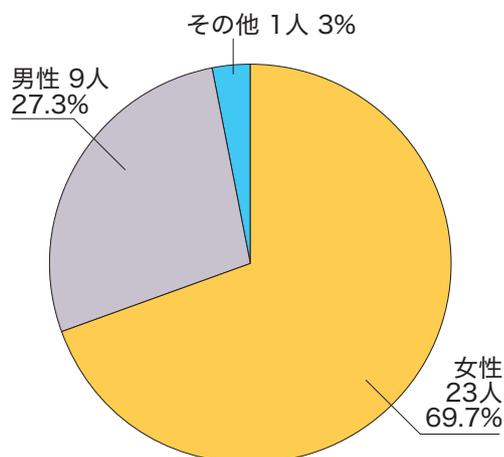
- ◆当日マイクが壊れたので急遽 チャットにしましたが、すぐ気づいてくれて会話にいられてもらったところと、後半で気づかれたりとありました。
- ◆結果的に6名だったので、いい交流となりましたが、予定通り11人いたら難しかったと思いました。
- ◆わかってはいたが、オンラインでのグループワークはなかなか難しいですね。
- ◆永田先生、とてもわかりやすいお話をありがとうございました。様々な活動をされている方々のいろいろなお話を聴くことができ、気づきも多くたくさんの刺激もいただきました。またこういう機会がありましたら、ぜひ参加させていただきたいと思えますし、子どもたちに関わる様々な活動をしている方々との交流の機会の大切さも実感しました。
- ◆グループディスカッションの時間が思ったよりもあつという間でした。
- ◆コロナは若年層の重症化率が低いので、遊びやコミュニケーションを制限していることの方が広く深刻な影響を及ぼす可能性を考えた方がよいと感じました。東日本大震災の様に精神的な問題を抱える子ども達が沢山いることが数年後に判明する事態になってから考える様では遅過ぎます。
- ◆積極的に発言できる雰囲気よかったです。今相手に対し真剣に向き合っているか？という問いかけの通り、地域の課題を共有し解決する手立てをみんなで考え、行動していきたいです。
- ◆時間が短すぎて問題を開示していくことはできたがその解決策までは至らなかったと思う。短時間で自分の意見をいうのは難しい。最初にある程度自分の意見をまとめておく事が必要だった。今回はグループを、いくつも分けて行いましたが、色々な視点からの話が聞けてとてもよかったと思う。肝心なのは、問題を知ってもらい共有して問題を解決に導くことだとおもう。それは、母親1人の力では難しく家族、地域、国が一丸となって取り組まなければならないという事。決してそれは母親のわがままではなく当然の事であるという事。この会議をして満足するのではなく、刈谷市が最初に発信し全国に広めていくようにしなければいつまでも解決する事は不可能に思えてなりません。子ども達がより良い暮らしが出来るようにしていただけると期待しております。
- ◆zoomの使い方に慣れてない方のフォローや使い方の事前説明の時間が必要だったと思います。会議は楽しく参加することができました。

■【エキシビジョン】ミライク若者会議 U-40と考える かけがえのない“わたし”を生きる

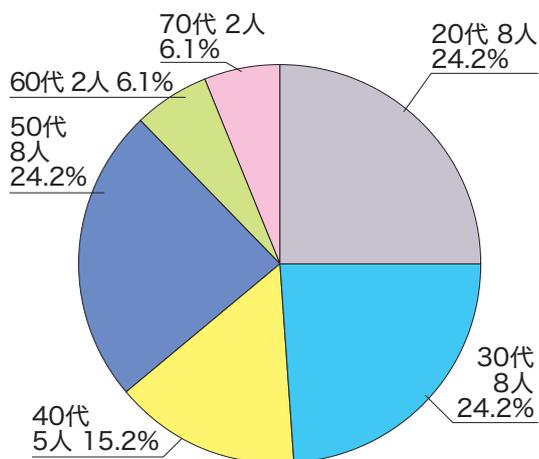
[回答数：33件]

回答者属性

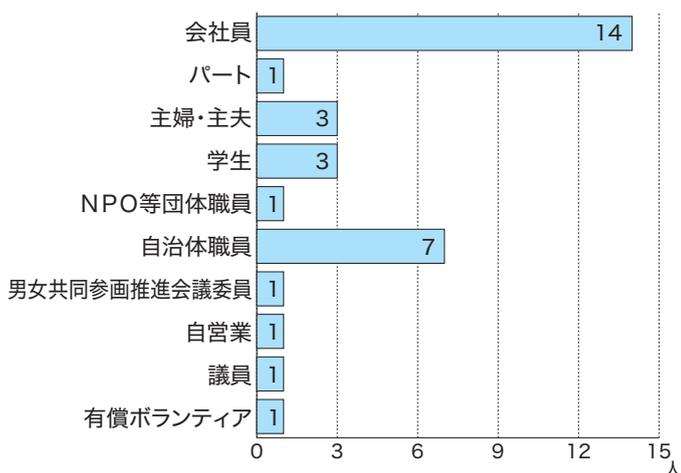
【性別】



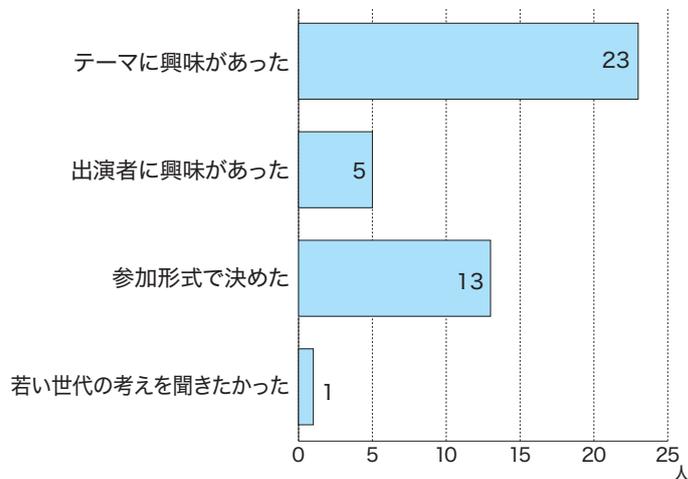
【年代】



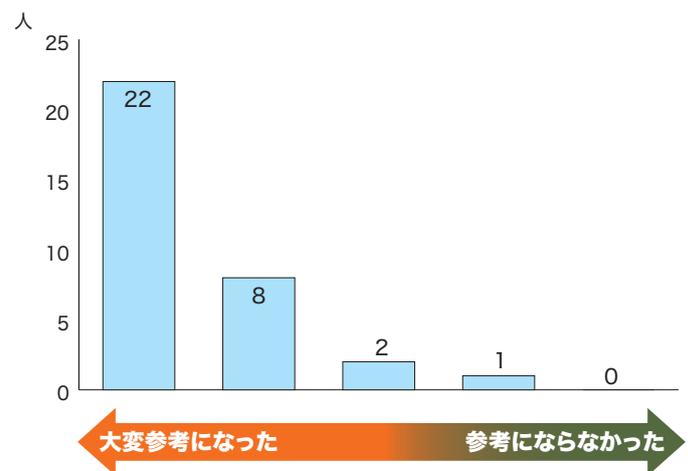
【職業・所属】



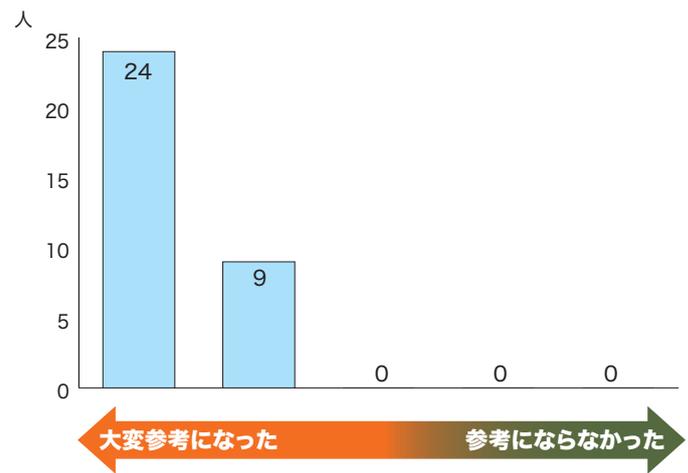
Q. エキシビジョンに参加した理由についてお答えください。(複数回答可)



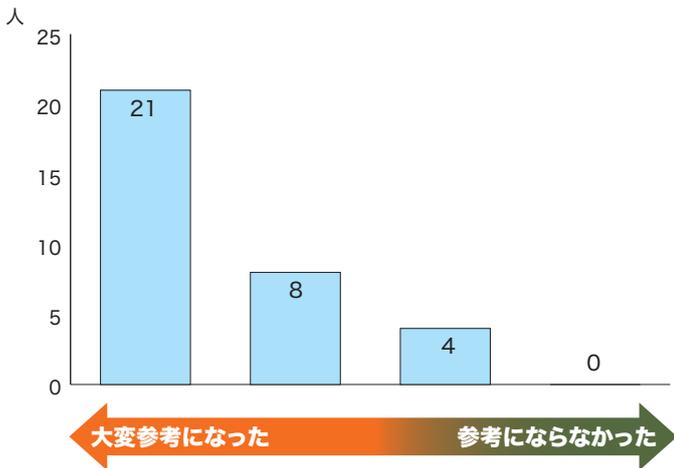
Q. ミニ講演松岡宗嗣氏「男女平等とLGBTは別問題？」は参考になりましたか？



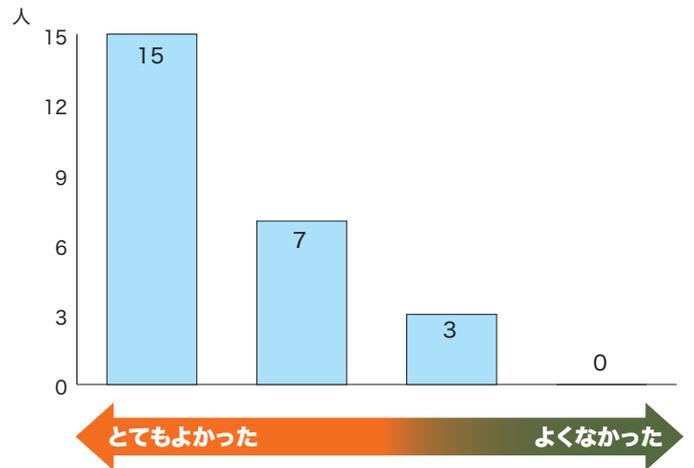
Q. ミニ講演山本恵子氏「ニュースの現場から見たジェンダーバランスの現状と課題」は参考になりましたか？



Q. パネルディスカッションは参考になりましたか？



Q. 放課後タイムはいかがでしたか？



パネルディスカッションで印象に残った事やワードがあればご記入ください

- ◆天動説と地動説の世代交代のはなし
- ◆山本さんがジェンダーの視点で逐一チェックしているという話
- ◆今の当たり前に疑問を持ち、細分化し見直す
- ◆（ジェンダーしぼるようなことは）可能性を狭めている
- ◆女性は半数もいるのに少数派
- ◆日々の意識づけ、見える化すること
- ◆処刑されない程度に声を上げ続ける
- ◆「ゲイの中ではマジョリティ」という言葉が印象に残りました
- ◆無意識の「らしさ」の当てはめの積み重ねの恐ろしさ、意識的に

- 「なぜ？」と問い掛けることの大切さ
- ◆性的少数派は10%にも満たない全ての人が様々な面からアライの立場になれるよう
- ◆「らしさ」の押し付け
- ◆当たり前、らしさを皆で考えること大切。ステレオタイプ再生産するような広告禁止
- ◆自分らしさを大切にすることはみんなできやすくなる考え方
- ◆無意識のジェンダー
- ◆自分らしくいられるコミュニティに結局落ち着く

全体としてご意見ご感想などありましたらご記入ください。

- ◆Vimeoの音声トラブルが残念だった。
- ◆「らしさ」をおしつせずに、日々「なぜ」と疑問に思ったり、強い信念を持って発信していくことで、多くの人と繋がっていくことができるようになると思いました。
- ◆他団体、地域の動向を知ることができてよかった。
- ◆休憩を挟んだことで、考えを整理できて良かった。ブレイクアウトルームでは密な話ができて嬉しかったです。来年も是非オンライン開催いただけたら助かります。
- ◆今日をきっかけに、継続して私も伝える側になり発信していきたいと思います。終わりでは無く始まりです。

- ◆平等な社会を作っていくために、まず自分ができることとしては、いろんな人の意見を聞き、考えの幅を広げることが大切であると感じました。そして、意思決定をする際には、さまざまな人が参加して意見を言い合える雰囲気大切と感じました。
- ◆私もボーッと生きるのではなく、自分に何ができるのかを常に考えながら生活したいと思うようになりました。
- ◆内容構成とてもよかったです。
- ◆遠方からの参加だったので、オンライン開催の良さを味わうことができました。少人数でのトークができる場があったのも良かったです。

放課後タイムのついて何かご意見ご感想などありましたらご記入ください。

- ◆Zoomで参加予定でしたが、URLのメール通知がなかったため参加できず残念でした。
- ◆人が少なかったのもう少しグループは少なくても良かったのかと思う。
- ◆聞くだけではなく、感じたことを人と話し合い共有することの大切さを感じました。
- ◆少人数でいろいろな意見を聞けてよかったです。分科会のグループセッションにも参加したけれど、明らかにジェンダーの価値観は若い世代と上の世代で違うと感じました。若い世代でこれからのことを話し合っている様子を、たくさんの上の世代の方に見てほしいと思いました。
- ◆あまり話を広げられなかったので、もっと時間が欲しかったです。同志に出会えて嬉しかったです！
- ◆様々な立場からのお話を聞くことができ、とても有意義な時間でした。そして、私の中で考えの幅が少し広がった気がします。また、人前で意見を言うことが得意な方ではないのですが、話しやすい雰囲気を作っていたり、話を振っていただいたりしたおかげで自分の意見を言いやすかったです。
- ◆もう少し参加者が居ると盛り上がったと思います。
- ◆ブレイクアウトルームを使用しているグループトークはいい経験になりました。同じテーマで、全く知らない方とお話ができる機会はなかなかないので良かったです。一方、通常の開催だったら名

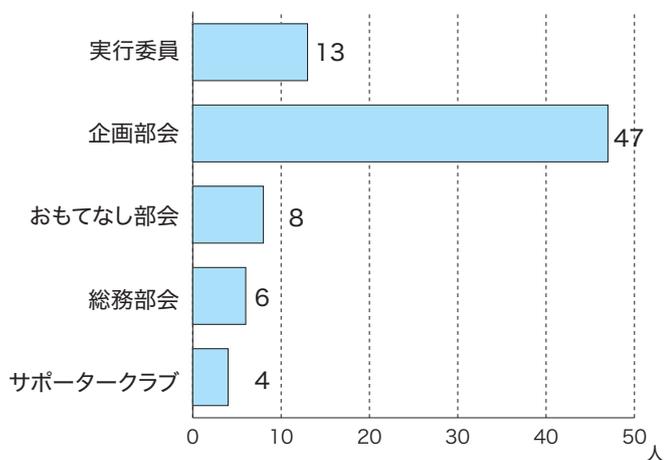
- 刺交換でその先のつながりができるけど…という話もあり、オンラインだと顔出しせずライトに参加する方もいるのでバランスは難しいですが、何かしらつながりづくりの仕掛けがあっても良いかもしれません。
- ◆色々な年齢層の話聞くことができとても勉強になりました。年齢により思想が固まってしまっているのではなく、日本人特有の同調意識によって埋もれているだけで若い人に手助けしてくれる方主張していきたいがマイノリティ故に発信出来ずにいる方さまざまな方がいらっやると思いました。私もマイノリティですが、言わなければ分かりません。そのような方が沢山いらっやると思っています。なのに国の法律には男女としての昔ながらの家庭の基準しかありません。夫婦別姓、結婚をしたい同性愛者の方も居ればしたくない(世間にバレたくない)同性愛者の方もいます。また、出産子育ては両親で背負う物だと思います。産んだのは母親かも知れませんが、紛れもなく父親の子でもあるからです。出産子育てを女性が担わないといけないからペナルティを持つキャリアを絶たれるのは仕方がないという社会ではなくなったらいいと思います。社会に出たい女性は社会に出て、専業主婦(夫)をしたい方はしたらいいいし、結婚したい同性愛者は結婚できる、男性だって弱音を吐いてもいいし、女性だから女性らしく振る舞わなければならないわけでもない。1人の人間として一人一人がさまざまな選択をできるような社会になったらいいと思いました。

●関係者アンケート ※対象：実行委員、各部会員（総務・企画・おもてなし）、サポーター

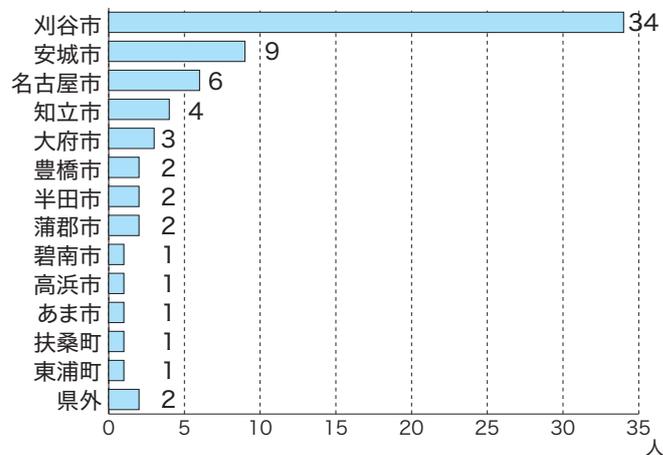
[回答数：69件]

回答者属性

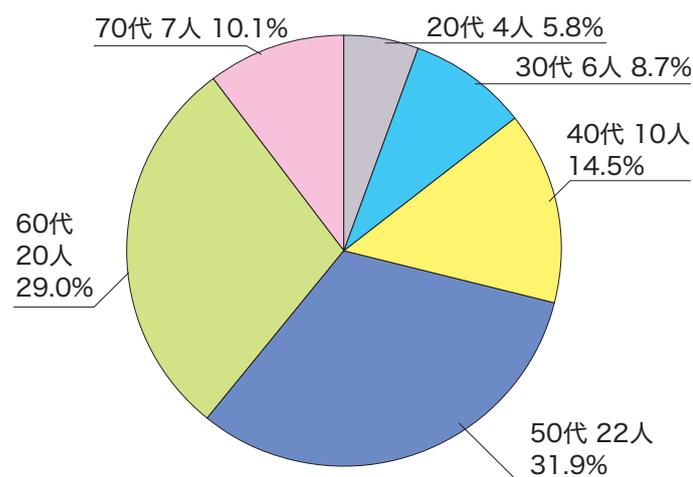
【所属（複数選択可）】



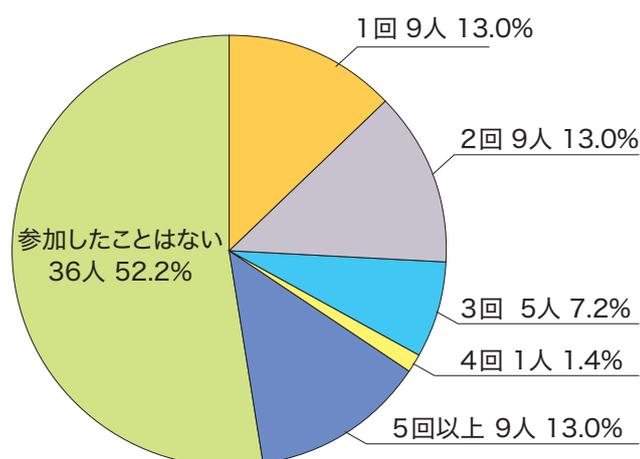
【在住市町村】



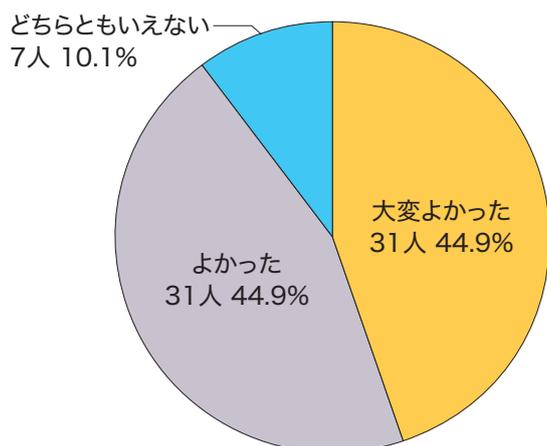
【年代】



【これまでの日本女性会議への参加回数】



Q. 今回、ミライク会議へ関わっていかがでしたか。



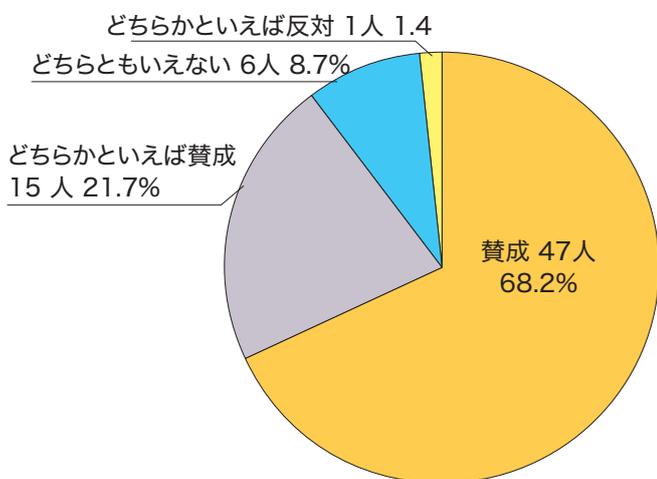
Q. その選択理由を教えてください。（自由回答）

- ◆参加だけではなく多少でも参画できたこと。様々な方との繋がりができたこと。
- ◆市民、ボランティア、大学、行政など、多様な皆様の考え方を知り、皆で作上げる経験ができました。
- ◆イベント含めて、イベント企画や運営を通じ、会社の仕事とは全く違うチャレンジを長期間させていただいたのが非常に有意義だったから。新しい出会いも多く、前向きでアクティブなメンバーと刺激的で楽しい日々を過ごせました。また、自分が次世代に向けて本業以外でどんなことをしていきたいか考えるきっかけになりました。
- ◆おもてなし部会なので、関わったと言えるのかどうか分かりませんが、パンフ発送等で、多少なりともお手伝いできたのかなと思います。

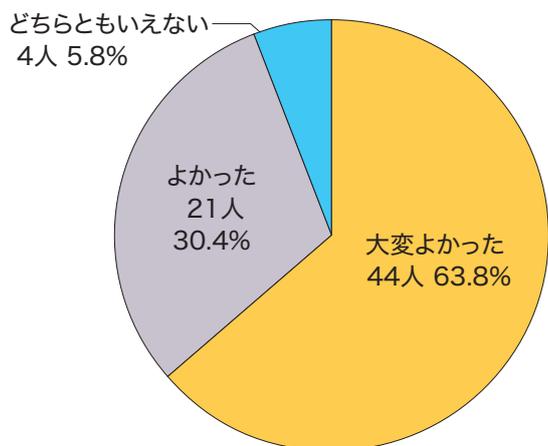
- ◆男女共同参画の視点からの地域おこし、エリアPRの流れを勉強することができました。また、それぞれの地域ならではの取り組みについても、地域性の違いを伺うことができ、大変よかったです。
- ◆様々な活動をされている方々にご縁をいただいたり、勉強になるお話が聞けたり、有意義な時間を過ごせました。
- ◆数えきれないほど日本女性会議に参加してきたが、企画側にもWEB方式も初めての経験を味わうことができた。感謝しています。
- ◆自分の関わっている仕事に深みを感じたし、リモートでzoomという新しいツールを経験できた。分科会メンバーとのチームワークの良さでこの難題を乗り越えた達成感があった。何より日本女性会議に関われた事(もっと役に立ちたかった)が嬉しかった。
- ◆社会課題や肌で感じることができ今後の活動の参考になった。
- ◆歴史的な、大会初のオンライン開催に関わることができたため。
- ◆あまり時間が取れなくて、深く関われなかったのが少し残念だった。

- ◆現代の社会に何が必要なのかを知り考えることができました。
- ◆男女共同参画に関わってきて、日本女性会議の企画に携われることは光栄で、貴重な体験だった。
- ◆最初の企画がコロナにより変更になったため、最初の計画通りにならないことが残念でした。
- ◆コロナ禍で社会活動の全てが止まってしまった様なイメージでしたが、その環境下でもやれる事が有ということが実感できたから。
- ◆残念なことは、コロナ禍、開催が危ぶまれ、おもてなし部会の一員として、その関わり方の方向性が十分理解できず、途中参加への意欲を逸してしまったこと。良かったことは、事務局の皆様の熱意により、最後まで何らかの形で関わられるよう仕向けて頂き、達成感が持てたこと。
- ◆分科会で取り上げたテーマについて、これまで知らずにいた様々な側面を知ることができ、勉強になりました。

Q. ミライク会議実施以前、コロナ禍の中、オンライン開催を検討／決定したことについて、どのように思っていましたか。



Q. ミライク会議が実施された今、オンラインで開催したことをどのように思っていますか。



Q. その選択理由を教えてください。(自由回答)

- ◆女性会議を途絶えさせるのは、良くないと思っていましたが、有料によるオンライン会議では参加人数が少ないのではと思っていました。
- ◆コロナ禍であっても、実施可能の証明になったと思う。さらにオ

- ンライン開催が参画希望者のZOOMの浸透につながったと思っています。
- ◆おもてなし部会としては、直接お客様をお迎えしふれあい場を持ちおもてなしをしたかったです。そして郷土の祭「万燈祭」を皆さまにご覧いただきPRしたかったです。しかし、この「コロナ禍」では仕方がなかったのかなと思います。
- ◆コロナ感染拡大防止策としてのオンライン開催でしたが、結果的に、場所・時間の制約があって今まで参加したくてもできなかった新しい層の人たちへ、参加の可能性を拡げることができたのが、大きな成果であると思います。(私自身も、オンタイムでの都合がつかず、アーカイブ配信で参加しました)上野さんがおっしゃっていたように、会場に座って米粒サイズの講演者を凝視する講演会より、講師の表情までしっかり見ることができる映像配信でしたので、講演内容がよりリアルに伝わってきたと感じました。
- ◆2018年の金沢大会後は、2020年のあいち刈谷大会の開催は漠然としすぎていて、全く実感がなく、本当に出来るのかと不安や恐れさえ感じていました。しかし、2019年の栃木県佐野市の開催が災害で中止となり、刈谷のPR、周知が出来ない状態で、2020年果たしてどれだけの人に参加して貰えるかと心配でした。2020年コロナが拡大し、中止ではなく初のオンライン会議を選択し開催した勇気？決断に感動しました。日本女性会議を中断させてはいけない！どんな形でも継続は大事と思っていたのでオンラインでの実施に賛成、開催出来て本当に良かったと思っています。
- ◆オンラインでなければ開催できなかったため。
- ◆オンラインはこれから先に標準になりそうです。先駆けてやっておくことには意味があったと思います。
- ◆オンライン開催はやむなしと思いますが、広報ができていないと感じました。
- ◆オンライン開催は新しい時代に入ったことを実感した。
- ◆グループワークを予定していたので、不安もあった。対面の方がお互いがより刺激をうけ、話が深まったのだらうとは思いますが、今ある中で可能な形態で実現できたのではないかと思います。欲をいえば、元の予定どおりの時間(2時間)で実施できるとより良かったように思います。
- ◆コロナ禍で他の各行事が中止になり、メンバーや刈谷市民の反対意見を聞いて開催の判断は迷いました。オンライン開催が決定した時は、このメリットを活かす会議ができればと思いました。メンバーも同じ方向に進めるように説明をして共感してもらえたと感じています。

- ◆コロナ禍の中、中止の選択肢もありましたが、昨年の佐野大会が台風で出来なかったので2年連続中止は避けたいと考えました。現状から人が全国から集まる事は不可能と思われオンラインだからこそ実施できました。オンラインなので参加できた方たちもいらっしやるはずです。
- ◆ベストな選択だったと思います。事務局は準備が大変だったでしょうが、大きな会議の、新しい開催の仕方を体得できたという意味でも有意義でしたし、今後は、開催様式の選択肢のひとつになると思います。もちろん、オンライン開催ではなく、リアル開催ができれば、その方が良いかもしれませんが、今回のことのようなことがないと「オンライン開催」は無かったと考えます。また、オンライン開催による可能性、メリットも体験できました。またアーカイブ視聴もできたので再確認もできましたし、見落とした分科会も視聴できました。
- ◆リアル開催だったら、移動時間を考えて参加しなかったかもしれない分科会に参加することができたから。オンラインだとアーカイブ配信ができるので、自分の分科会と同時間にやっていた別分科会の内容も確認することができたから。
- ◆一部、ハイブリッド開催の部分を検討してもよかったかも。ただ

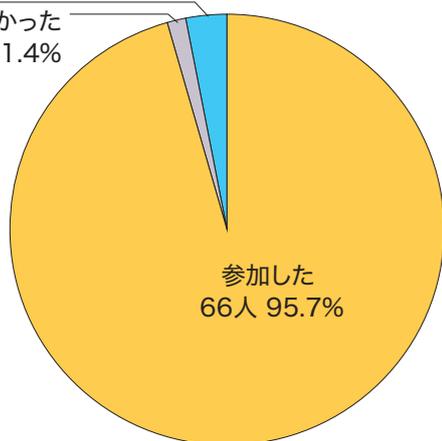
予算の関係上難しいと思います。

- ◆急遽オンラインに変更することは実行する側は大変な苦労があったと推察。コロナ情勢の中自粛が巻き起こる中で、昨年の佐野市に続き、刈谷も中止かと思っただけ、オンラインでと聞いた時は、参加者が激減するのではと思いつつ、困難に打ち勝つ姿勢を示すこともでき、とても良いと思った。年寄りたちは、zoomの学習を始めその日に備えた。申し込みにも悪戦苦闘したと聞いた。何事も学習と年寄りたちが元気です。
- ◆決定当時は縮小型もありかと思っていましたが、コロナ感染が増える中では、オンラインが適した型式であることや1回のみ視聴ではない利点があること。
- ◆初めてのことで心配はあったが、結果的に多方面の状況を鑑みて大正解だったと今、感じます。
- ◆女性を始めとした複合的な困難を抱えやすい人々に対し、パンデミックに負けず取り組む姿勢を示せたこと。
- ◆想定していたよりも多くの人に参加してくれたと推測されるから。
- ◆年齢的にも同じスケジュールをこなす事に自信が無かったので、自分のペースで分科会も複数受講出来たのがよかった。

Q. ミライク会議に参加しましたか。(準備に関わっただけでなく全体会や分科会等に参加したかどうか。アーカイブ視聴も含む。)

まだ視聴できていないが今後する予定 2人 2.9%

参加しなかった
1人 1.4%

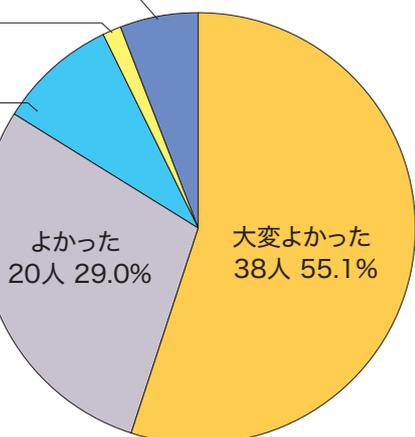


Q. 「参加した」を選択した人にお聞きします。参加していかがでしたか。

無回答 4人 5.8%

あまりよくなかった
1人 1.4%

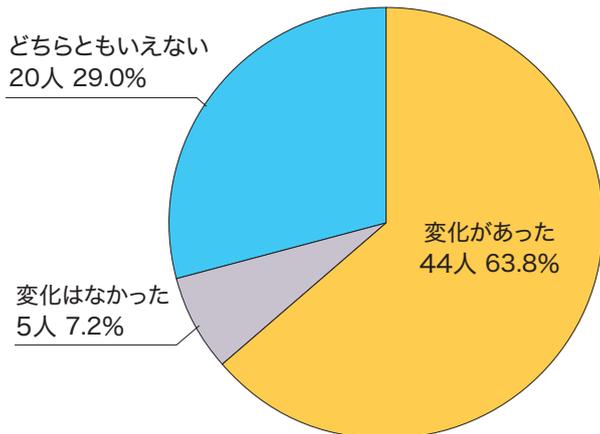
どちらともいえない
6人 8.7%



Q. その選択理由を教えてください。(自由回答)

- ◆分科会に差はあったものの、オンライン会議なりに双方向のコミュニケーションをとるよう工夫されていました。
- ◆これまでの各地へ出向いての会議と違い、初のオンライン開催で、冊子を見ても基調講演や分科会など全てに於ても、私は満足な物であったと思います。後日アーカイブ配信による視聴もあり、視聴出来なかった会の見直しも出来た事も満足でした。オンラインならではの不備も各地でもあったと思いますが、Wi-Fi環境整備などIT化の立ち遅れなど課題が顕著化し、早急な整備や対応が必要である事が見える化しただけでも有意義な「あいち刈谷大会」だったと言えるのではないかと思います。各地での開催の楽しみはエクスカージョンもその1つ。その地の文化や食べ物、観光も楽しみで参加するのですが、残念ながら今回は映像での紹介のみと物販(通販)だけでちょっと残念でした。
- ◆ジェンダーに関して様々な意見が聞けたため。
- ◆初参加でしたが、分科会で全国の多くの方と意見交換し、一緒に学ばせていただいたことが最も心に残りよかったため。
- ◆オンラインの参加では、3日間画面での参加をしてみて、一日中、座っての視聴でちょっと、疲れしました。通常参加に比べて、集中、来ませんでした。
- ◆今まで関心がなかった事も身近に感じる事ができた。
- ◆参加して初めて女性会議の全容が見えました。気負わず、風を切って前を向いて歩いてこられた女性が、しかも大勢おられる事例を知り得てとても有意義でした。
- ◆新しい生き方・色々な考えかた等を真剣に考える機会となった。
- ◆同時間内の他の分科会の内容をアーカイブで閲覧できたことは画期的でした。
- ◆計画不足の点からは大変とは言いにくい良かったと思います
- ◆講演の内容がとてもよかった。周りの声も評価が高い。
- ◆初の形式だったので、報告事項など手薄になったところがあった。来年度の女性会議のパンフレットも紙ベースでもらえたら良かった。
- ◆日頃あまり考えなかったり、身近でなかったりした項目(分科会)もあり、多角的に物事を見る機会を持てたこと。

Q. ミライク会議に関わって、もしくは参加して、あなた自身に変化はありましたか。



Q. その選択理由を教えてください。(自由回答)

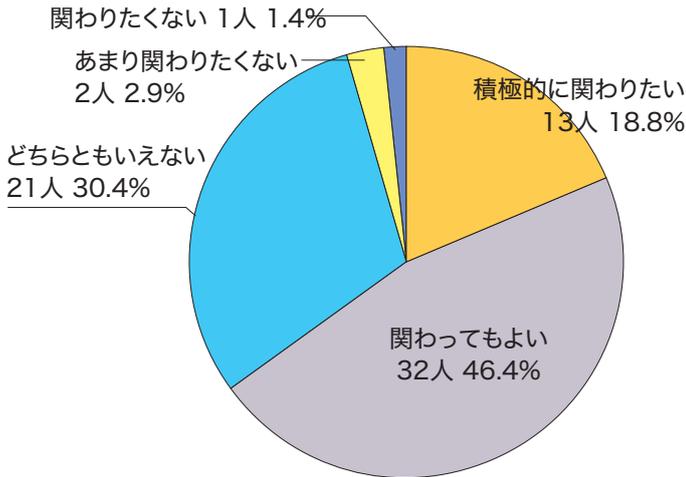
- ◆実力あるメンバーから、活動への刺激と暖かさをもらいました。今後それを活かしていきたいと思います。またZOOMに積極的に取り組めたと思います。
- ◆何事も“やれない”じゃなくて“やらない”だけ、縦の繋がりだけではなく、横の繋がり、斜めの繋がり、性別や年齢、国籍、老若にかかわらず、いろんな人と繋がっていかないとこれからの時代(社会)は「わたし」として生きていけない。閉じこもりや置いてけぼりになってしまうと特に今回は感じました。
- ◆イベントやエキシビションの企画運営を通じて、自分がなんとなく抱えているジェンダーギャップについてのもやもやは、我々世代に共通するものが多いこと、より若者世代も同じ(もしくはもっとシビアな)課題を抱えている人が多いことを知りました。そして、そのギャップを次世代に持ち越さないように、自分のできることはなにかを考え一歩ずつ実行していこうと強く・具体的に思うようになりました。
- ◆ジェンダーや女性論は苦手だったのですが、実際にやっている方と交流したり、話合ったりすることで、これも大事だと気づくことができました。
- ◆もっと自分も成長したいと思った。
- ◆それぞれの場で、多くの方々がぶつかりながらもより良い方策を模索し、現在の立場に立っていらっしゃる。頼もしく思いました。上野先生のお話から『交渉力』サイボウズ中根さんのお話から『情報共有』特にこの2点は、自分の今後の指針にしています。
- ◆男女共同参画、ジェンダー等分科会の各テーマに触れることにより、自身の価値観、考え方が変化しました。とても良い経験になりました。
- ◆自分も地域で何かできるのではないかと考えるきっかけとなったから。
- ◆問題提起はできたが実践するにはコロナが強敵すぎます。
- ◆とても抽象的に考えていた子育てを、これからしていくんだという期待感と不安感が同時に湧いてきましたが、楽しみになりました。
- ◆問題意識はあっても解決するための一歩を踏み出す行動力にかけていると常に思っている。自分の経験してきたことを活かして、地域のために活動していきたいと考えている。

- ◆様々な物事を改めてジェンダー視点で考えるようになりました。
- ◆男女共同参画の取り上げるテーマは多岐に渡っていて捉え所が無いと思っていたが、この様な会議を行う事によって、それぞれがどんな関わり方をして、それぞれがどんなバランスで進んで行く事が大事かが見えてきたから。

Q. 大会実行委員会は今年度末で解散となりますが、ミライク会議の開催に至るまでに培ったネットワークや学びは、今後も引き継いでいきたいと考えています。どのような形が相応しいか、アイデアなどがありましたら自由にお書きください。

- ◆アフターイベントをやってみてはいかがでしょうか。
- ◆あなたとわたしのハーモニーのプログラム拡大(希望する分科会は毎年イベントを立てる等)
- ◆オンライン飲み会や緩い意見交換会の定期的な実施。過去/今後の女性会議開催チームとの交流会(特に今後しばらくはオンライン要素を含む大会が開催されると思うので、ノウハウの共有含めて意見交換したい。個人的には今回のような若者にフォーカスした企画が開催されるのであればぜひ会話してみたいです。)
- ◆公式HPのアーカイブ化、noteやブログによる大会報告書の作成(日本女性会議で検索しても、会議でなにが話されたのか過去大会の履歴や写真がほとんど出てこなかったことに衝撃を受けました。刈谷大会は、今後誰かが検索したときに各分科会でどんな話題が出たのか引っかけられるような形でアーカイブしてもらえるとありがたいです。自分が関わった足跡を残してほしい気持ちもあります。)
- ◆分野を超えた学びの機会を定期的に作っていけると、ネットワークや学びを引き継いでいけるのではないかと思います。
- ◆年1回以上、集まる機会があると、うれしいです。
- ◆部会の垣根なく、有志で継続をお願いします。参加したいです。
- ◆実際に活動している方の話を聞き、西三河でも展開できるか検討する勉強会を開くと良いと思う。
- ◆今回の大会ほど大きくなくて良いので、ちいさなオンライン・イベントや交流会ができると良いですね。
- ◆同窓会的なFBグループを作って繋がる。定期的なズームでのディスカッションの会、ランチ時間を使った会を作る。
- ◆対面でディスカッションの重要性も改めて感じました。遠隔による学びと対面の併用が理想的です。
- ◆たまには集い、自分の変化や地域や市の変化、問題や課題について自由に意見交換できる場が持てないかと考えます。この繋がりが思いを実現するために必要と考えます。(和やかな雰囲気での開催がいいなあ)

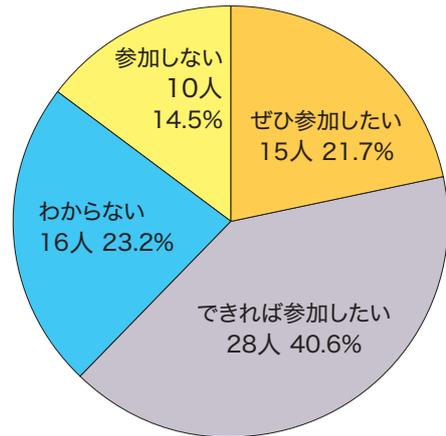
Q. 今後の『アフターミライク』に関する事業等に、あなたご自身はどのような関わりを希望しますか。



Q. その選択理由を教えてください。（自由回答）

- ◆個人ではなく所属する「女性団体」として関わられたらと思う。
- ◆年齢的に体調もあるため、積極的にとはいえない。案内があり興味や体調良ければ関わりたい。
- ◆ヒントは人との関りの中にあると思っているため。
- ◆今回楽しかったから。
- ◆今回培われた繋がりでもって、今後色々な企画をもつことで、社会への働きかけになるような関りがもてたら嬉しいと感じています。
- ◆刈谷のまちを良くしたいので。
- ◆未来の誰もが輝ける社会がテーマの日本女性会議なのだから、会議を成功させることは通過点であり起爆剤であって、今後の活動こそがさらに重要になってくるのであるから。
- ◆市外からの参加ですが、刈谷市の方ともつながってほしいなと思います。男女共同参画は多くの方々を合わせていかなければいけないのではないかなと思います。
- ◆高齢者の仲間入りで、時間が取れるので！
- ◆主体で動けるか、わからないが、関わりは持ちたいです。
- ◆男女共同参画に関しては、男性の理解も重要です。その点、今回の経験を活かせるのではないかと考えました。
- ◆引き続き行動していきたいからです！自分ひとりでは頑張れないので、皆さんと一緒に進めていきたいです。

Q. 来年度は「日本女性会議2021in甲府」が山梨県甲府市で開催されます（2021年10月22日金～24日日）。今時点での参加の予定を教えてください。



その他、ご意見などありましたらこちらをお願いします。

- ◆今後、毎年オンライン開催となる場合、事前のプログラム作成・郵送などは廃止し、その分、多くの方が参加しやすい価格設定となるよう、配慮できるとよいと思います。
- ◆実行委員さんやスタッフ、関係者の皆様大変お世話になりました。そのお陰で充実した会議の場、出会いの場となり、様々な想いや希望を各人がもつことのできる会議になったと思っています。
- ◆今回の会議は、これからの私が活動するうえで、使える知識がたくさん詰まっていました。今回の会議の中で使われた言葉や考え方、発信すべきことなどを学び、自分自身の知識が向上したことで、情報の伝え方や共感性などもあがっていきたくと思っています。すべての人が、かけがえのない私でいられる社会を目指していきたいと思っています。
- ◆今回オンラインのみの参加でしたが、パソコンの画面では伝わりにくいこともあるので、やっぱり、対面で意見交換できる環境が早く戻ってくるといいですね。
- ◆日本女性会議in刈谷にかかわることができてよかったです。皆様お疲れさまでした。そしてありがとう。
- ◆開催して、いや開催出来て本当によかったと感じています。でも今からが実現に向けてのスタートと考えたいですね。行政、企業や地域、市民活動団体の持ち場立場でやるのがいっぱい。その先頭に立って行政は取り組んでほしいと思います。地域は課題がいっぱいです。手をつなぎ力を合わせて頑張りましょう。広いつながりもできました。この繋がりを大切にこれからも一緒にやりましょう。

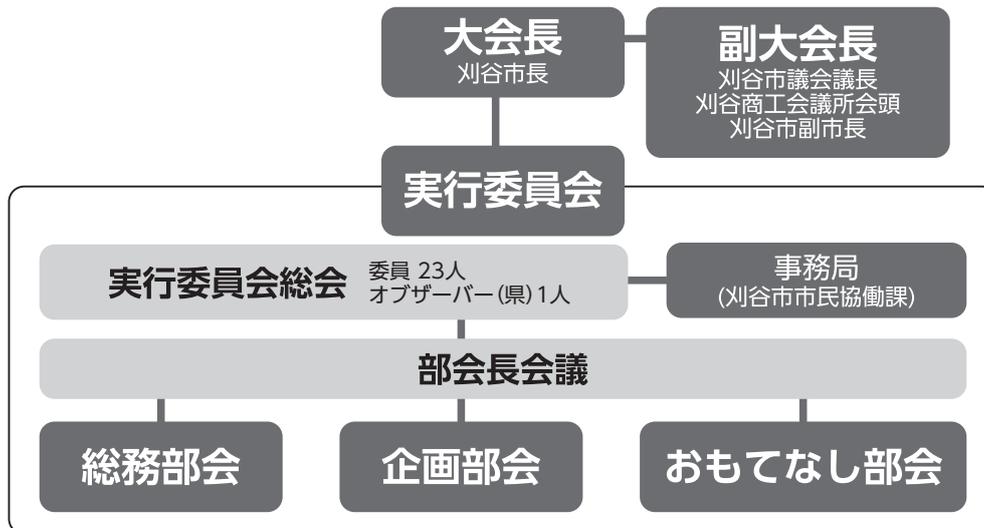
後援・実行委員会等

(順不同・敬称略)

[後援]

内閣府／文部科学省／厚生労働省／愛知県／名古屋市／愛知県教育委員会／刈谷市教育委員会／国立大学法人愛知教育大学／国立大学法人東海国立大学機構名古屋大学／独立行政法人国立女性教育会館／公益財団法人あいち男女共同参画財団／公益財団法人東海ジェンダー研究所／株式会社キャッチネットワーク

[実行委員会組織体制図]



[実行委員会等]

■大会長 刈谷市長 稲垣 武
 ■副大会長 刈谷市議会 議長 外山 鉦一
 刈谷商工会議所 会頭 太田宗一郎
 刈谷市 副市長 鈴木 克幸

■実行委員会

・委員長 山根 真理
 ・副委員長 青木 健治 束村 博子
 ・監事 池 ちひろ 岡田 行永
 ・アドバイザー 細見 純子
 ・委員 浅川久美子 石田 芳加 岩間 千恵 岡部 直樹 各務 元浩
 加藤 愛子 加藤 繁則 小島多重子 米田 正寛 小山ひろみ
 下方 敬子 杉浦登喜子 塚本 秀子 塚本 裕章 早川 宣子
 嶺崎 寛子 横井 寿史
 ・オブザーバー 稲波 智子

■部会員 ◎部会長、○副部会長、●リーダー

・総務部会 ◎岡部 直樹 ○池 ちひろ 青木 健治 小島多重子 下方 敬子
 鈴木万里子 鈴木 庸子 田中 高子 西尾實千恵 長谷川 洋
 村井 弘二



・企画部会	◎嶺崎 寛子	○塚本 裕章				
分科会A	●鈴木 敦史	五十嵐香代	岩間よしゑ	榊原志のぶ	清水 久子	
	戸田 幸子	伴 友子				
分科会B	●河村 楨子	板倉 恵美	加藤 美幸	佐藤 浩二	出口 志穂	
	内藤由美子	阪野 優香	藤中 崇矢	山口 真実		
分科会C	●岩間 千恵	白谷 隆子	鈴木 恵子	外山 淳恵	中根 敬子	
	野久 照美	吉見 久恵				
分科会D	●神谷 能宏	佐藤 和江	鈴木真理子	高木 一恵	田中 淳次	
	塚本 好江	都筑 広子	出口 志穂	長坂 典子	西尾實千恵	
	丹村 恵	松原 美花	山本 幸子			
分科会E	●横井 寿史	岡 由香	白瀧貴美子	杉野 愛	鈴木 昌子	
	高尾 絵美	武田 清美	橋本 淳邦	樋口 大河		
分科会F	●細見 純子	伊藤 仁美	魚住 理沙	小森 麻希	佐野 和子	
	長谷川知沙	藤原なるみ	松本 佳津	光田芽衣子	森安 美月	
	吉安恵美子					
分科会G	●早川 宣子	安藤もも香	石原 春代	稲生 令子	風間 孝	
	杉本 浩子	当麻志津香	長谷川淳子	原田ゆかり	前田 末子	
	山崎嘉代子					
分科会H	●神谷 美砂	石川れい子	岡本 一美	加納多恵子	川本 道子	
	國見佳代子	早川 純子	船尾 恭代	森 紀代美		
分科会I	●杉浦登喜子	赤松 妙子	伊藤 裕佳	太田 泰雅	加古 葉子	
	加藤 愛子	黒木 知子	橋本由希子	樋口 大河		
全体会	●小鹿 登美	石田 芳加	鈴木 直美	瀧澤 知子	久恒 美香	
エキシビジョン	●村井 弘二	安藤もも香	石川 裕高	嬉野 剛士	大倉 昌子	
	太田 泰雄	加藤 裕子	柴田さくら	白松 俊	情家 智也	
	田中 恵一	中島 祥那	南谷 真	長谷川 滉	樋口 大河	
	晝田浩一郎	廣田彩友美	矢上 清乃			

・おもてなし部会	◎浅川久美子	○加藤 繁則			
K・そむりえ	●小山ひろみ	浅川久美子	磯部 洋子	稲垣 梶子	浮邊美砂代
	岸本 浩子	近藤 節子	内藤 教恵	西村 正樹	林 優子
	松浦 章子	和田 和美			
かりやもん	●塚本 秀子	赤松 祥子	浅川久美子	大川千恵子	太田 恵子
	改田 三恵	神谷 浩	鈴木 小枝	野村 裕子	前田 末子
	箕浦ひろみ	安田 輝英			

■学生ボランティア	安達 まり	安藤もも香	板津 美穂	伊藤 優里	稲垣 明里
	太田 泰雅	清水美奈子	鈴木 愛乃	鈴木 香穂	鈴木 麻友
	鈴木 里奈	中島 祥那	中野 賢治	阪野 優香	樋口 大河
	藤田 彩花	星野 梨奈	山本 真帆		

■サポータークラブ

・サポーターの皆さん 161人

■事務局

- ・刈谷市市民活動部市民協働課
- ・刈谷市男女共同参画プラン策定及び日本女性会議2020あいち刈谷推進部会員
(職員プロジェクトチーム) 41人

AICHI STEEL

木と人の家具
karimoku



ママが主役の
インテリア



<https://www.karimoku.co.jp/mama/>



ママ向け
ブログサイト
「カリバナ」



<https://www.karimoku.co.jp/blog2/karibana/>

カリモク家具株式会社 〒470-2191

愛知県知多郡東浦町大字藤江字皆栄町 108 番地

TEL 0562-83-1111 FAX 0562-83-1110

頑張る女性、多忙なママを応援！



企業を育て、地域を伸ばす

刈谷商工会議所 中小企業相談所

会 頭	太田	宗一郎
副会頭	岩井	一浩
副会頭	鈴木	豊
副会頭	鈴木	文三郎
副会頭	加藤	英樹



SANYO

the excellent stamping company

株式会社 三陽製作所

〒448-0001

刈谷市井ヶ谷町庄司50-18

TEL 0566-36-5611

FAX 0566-36-5614

<http://www.sanyo-ss.co.jp>

世界のくらしに 笑顔届けたい

トヨタのミニバン、商用車、SUVを担う完成車両メーカーとして、
人々のくらしに寄り添い、お客様に愛されるクルマづくりへ挑戦してまいります。



 **トヨタ車体**
TOYOTA AUTO BODY



QUALITY OF TIME AND SPACE

すべてのモビリティに“上質な移動空間”を

 **トヨタ紡織**

OKUNO

INDUSTRY
奥野工業株式会社



KAKUBUN

角文株式会社 愛知県刈谷市泉田町古和井1番地
TEL 0566-22-1811 FAX 22-1180



愛知県ファミリー・フレンドリー登録企業



豊かな社会づくりに貢献する

髙梶川土木コンサルタント



民間車検工場

AUTO TECHNO

カリッパのグループ企業です。

刈通オートテクノ株式会社

【軽新車 車検 修理 钣金 保険】整備士
募集中！
車のことならお任せください！

刈谷市大手町2丁目34番地
TEL (0566)21-3270 FAX (0566)22-5517
<http://karitsuauto.co.jp/>



刈谷商工会議所 女性会

Kariya Chamber of Commerce of Industry Business



刈谷商工会議所青年部

Junior Chamber Incorporated KARIYA

KITAYAMA GROUP



株式会社

キタヤマ不動産

日本女性会議2020
あいち刈谷を応援します！



KATCH

株式会社 キャッチネットワーク



愛知県ファミリー・フレンドリー登録企業

こころしん介護タクシー

安心です

介護職員初任者研修
修了者が訪問します

無料です

同乗される付き添いの方

何でも対応

ストレッチャー、
車イスあります

OKです

市のタクシーチケット
利用できます



笑顔がふられます

★病院・空港・駅への送迎
★買い物・墓参り
★観光・旅行のお供

※車いす2台と普通座席2名、ストレッチャー1台と普通座席2名同時運搬可
ご依頼・ご相談は ☎0120-47-1148
(株)弘伸運輸 刈谷市東新町5-209 9時00分~17:00分(応相談) 月~金曜、祝日(土日は応相談)



株式会社 光生

KOUSEI Co., Ltd

試作品・治具部品製作

サンエイ株式会社



三共電業株式会社



豊田自動織機グループ

株式会社サンスタッフ

身近なところから、
すこしずつ。



まずは身の回りの環境を一度チェックしてみましょう。
どんな小さなことでもお気軽にご相談ください。

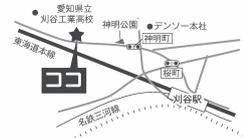
城東電機株式会社

お見積・ご相談無料

☎0566-21-4341

城東電機 刈谷

刈谷市神明町4-515(刈谷工業高校東)



楽しもう。家を、家づくりを、人生を。
注文住宅/各種不動産/エクステリア

●CINCA●

株式会社 シンカ
<http://www.cinca.co.jp>

office Design Labo
高浜市神明町1-1-24 TEL.0566-54-0555
高浜市湯山町2-3-8 TEL.0566-52-0444

環境に優しい自動車部品のリユース
あらゆるニーズに対応する鋼材切断

株式会社 スギテクノ



代表取締役社長 道古 杉江

本社 刈谷市小垣江町下藤26-2

TEL (0566) 27-4040

URL <https://sugitechno01.wixsite.com/sugitechno>

株式会社 スポーツマキージム

総合建設業

白半建設株式会社



代表取締役社長 加藤大志朗

〒448-0834刈谷市司町9丁目45番地 TEL (0566)21-5121(代表)

Hakuhan

だいじなひとの、
まいにちに。



Pasco

地域 No.1 パートナーバンクへ

碧海信用金庫

【本店】安城市御幸本町 15 番 1 号

TEL 0566-76-2131 (代)

高齢、障がい、児童福祉施設を
23施設運営しています。



社会福祉法人

愛知県厚生事業団



Instagram

お庭をリフレッシュ！ 癒しの空間をともに考え、お造りします

(株)浅川信州造園土木

〒448-0847 愛知県刈谷市宝町7丁目24番地 TEL(0566) 21-1907

FAX(0566) 21-1909

ホームページ <http://www.garden-ask.com>

廃棄物処理とビル清掃なら

株式会社アシタ

〒448-0846 愛知県刈谷市寺横町5丁目6

TEL : 0566-23-5000



おもの里 市川呉服店

愛知県刈谷市広小路5-25 ☎0566-21-5050



ご注文・お問い合わせ



市川商事株式会社

TEL 0566-22-2112 FAX 0566-22-3355

<http://www.ichikawa.biz/>

uniserv

株式会社 魚国総本社

つくしをつくる。株式会社ウサミ建工



【鉄筋事業(施工 & 小売)】 【住宅事業(リフォーム & 新築戸建)】

春日井市六軒屋町5丁目86 清須市西枇杷島町古城1丁目13-3

TEL:0568-37-0296 TEL:0120-920-904

<http://usami-kenkou.com/> <http://sumai.usami-hd.com/>



最適なソリューションを創出する

小林クリエイト株式会社

<http://k-cr.jp/>

小舟 Garden Co., Ltd.

<https://kobune.co.jp>

近藤工業株式会社

熱処理の事ならお任せ下さい！

栄熱処理工業株式会社

〒448-0033 刈谷市丸田町2丁目28番地
TEL 0566-21-5161 FAX 0566-23-5579
<http://sakae-netsu.jp>

三基工業株式会社

河川の水門事業を通して社会に貢献しています
あいち女性輝きカンパニー認証取得企業

機械装置・金属表面改質・自動車部品加工

株式会社 CNK

<http://www.cnk.co.jp>

刈谷市野田町場割28番地 TEL:0566-21-1833(代)

TSUKASA

一歩魁る 司開発株式会社

TSUDA
Create new value
津田工業株式会社



Linking the Best.

東陽

たまりしょうゆ 製造・販売



中川醸造株式会社
愛知県刈谷市小垣江町塩浜50番地
TEL:0566-22-3170
URL <https://www.nakagawa-tamari.com>

家を建てるなら



早川建設株式会社

刈谷市井ヶ谷町中ノ嶋22 ☎0566-36-5527

御芳名のみ掲載

東洋衛生株式会社	アイシン開発株式会社	池田工業株式会社
エアー工房有限会社	太田商事株式会社	岡田行政書士事務所
株式会社おたより	キッチンスタジオクック	株式会社 榊原刈谷支店
三京アムコ株式会社	株式会社タイガーサッシュ製作所	知多高圧ガス株式会社
株式会社中京スポーツ施設	株式会社辻村刈谷	株式会社ツルタ製作所
DCMカーマ株式会社	株式会社デック	富川建設株式会社
日本超硬株式会社	プランエイチ株式会社	株式会社三菱UFJ銀行
株式会社ミワテック	やはぎ会	リ・ライフ株式会社

金額順、50音順、敬称略



モビリティテクノロジーで、叶えよう。

どこへ行きたい。誰に会いたい。何をしたい。その想いに応えよう。
Connected, Autonomous, Shared & Service, Electric。
CASEと呼ばれる4つのテクノロジーを磨き、クルマの可能性を切り拓く。
今こそ移動の自由を、その喜びを、世界中すべての人へ。

The next frontier in mobility.



For a Better Tomorrow
AISIN GROUP



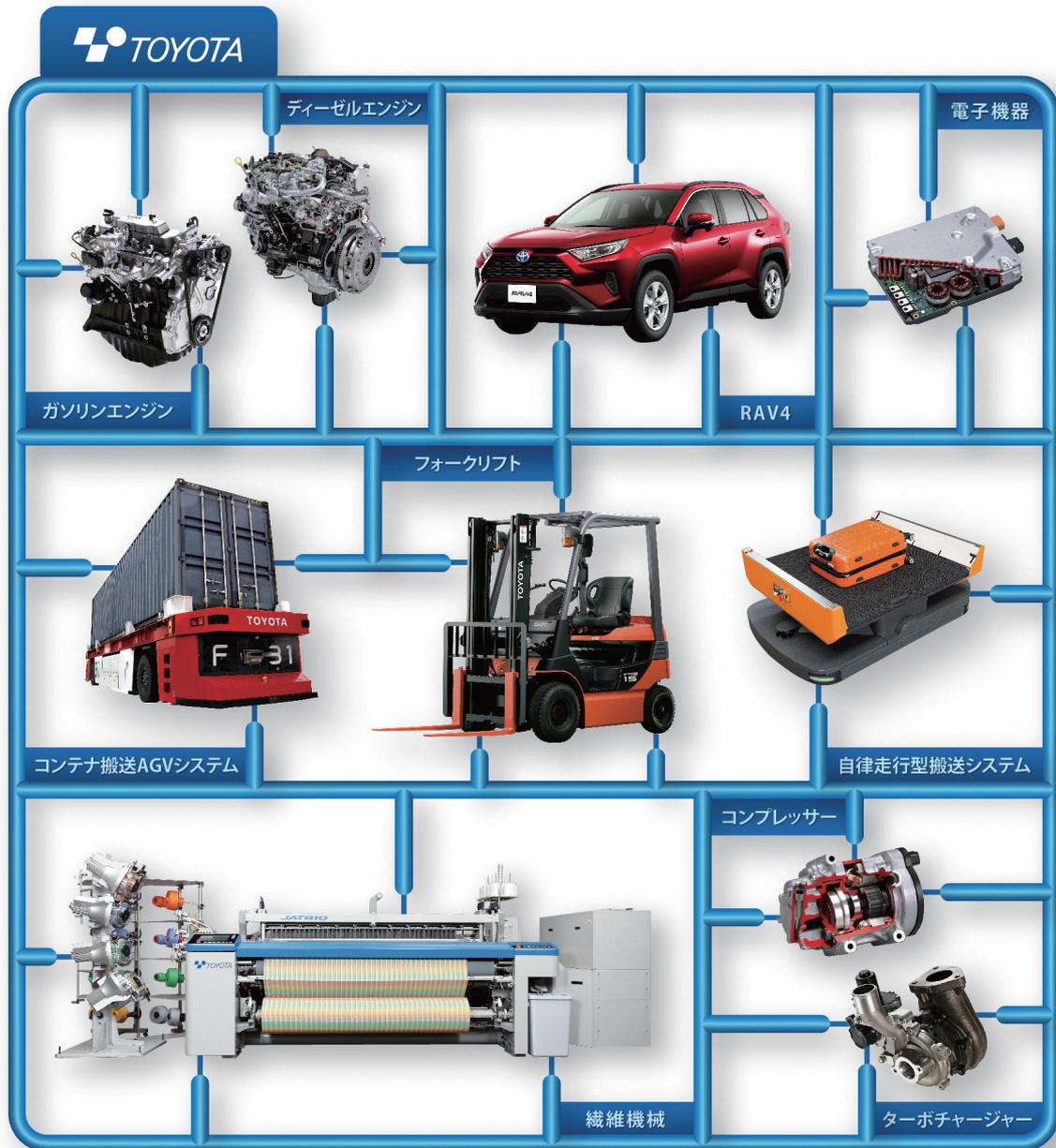
アイシン精機株式会社 | 愛知県刈谷市朝日町2丁目1番地 | <http://www.aisin.co.jp/>

DENSO
Crafting the Core



クルマの中から、みんなを笑顔に。

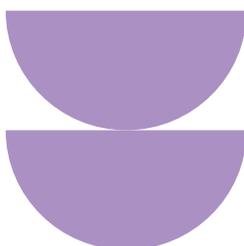
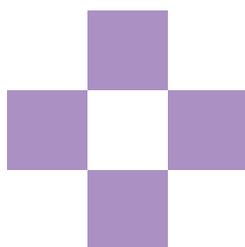
組み立てると未来ができる。



創業から続く繊維機械事業を原点に、
自動車や産業車両、物流ソリューションへと、
人々の暮らしを豊かにする事業に挑戦してきました。
これからも新たな領域に挑み、
温かい社会づくりに貢献する企業であり続けます。

 **豊田自動織機**

www.toyota-shokki.co.jp



事務局：愛知県刈谷市市民活動部市民協働課内
〒448-8501 愛知県刈谷市東陽町1-1 TEL:0566-95-0002 FAX:0566-27-9652
E-mail : kyodo@city.kariya.lg.jp



ホームページはこちら